

ゆゆ刃牙～漢達のきら
めきツツ～

バロックス(駄犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——ここは神樹の作り出した世界、時代を超えた勇者たちの集う世界。

——ある者の願いを叶え、新たな望みを生みだしていく救済の世界。

——しかし、いつしか終わりを迎える夢の世界。

だったら、神樹様の需要を満たさない筋肉モリモリのグラップラー達が好き勝手に暴れまくる・・・そんな世界があってもイイんじゃない？

目次

祝福の章

　　祝福の拳ツ　　結城友奈　　1

幕間檄

　　誤解を解く　　19

　　依頼者・烈海王　　36

　　酒杯とともに　　52

武人と勇者の章

　　第一話　　花結いのきらめき　　62

　　第二話　　胡散臭い神託　　91

　　第三話　　焦燥　　109

　　第四話　　命を賭して　　127

　　第五話　　守護（まも）られて　　

138

第六話　　遠方にいる人を思う　　①

154

第七話　　遠方にいる人を思う　　②

174

第八話　　遠方にいる人を思う　　③

193

第九話　　遠方にいる人を思う　　④

206

第十話　　農業王への試練　　①　　232

第十一話　　農業王への試練　　②

247

第十二話　　農業王への試練　　③

384	第十八話	三好夏凜 (完成)	307
344	第十七話	山本稔 (バランス)	330
362	第十六話	ルール変更のお知らせ	462
384	第十五話	鬼 (オーガ)	444
281	第十四話	公園調査員、樹	418
259	第十三話	農業王への試練 ④	399
		勇者対グラツプラー 全面戦争編	
539	第十九話	加藤清澄 (デンジヤラスラ)	504
		イオン	
		第二十話	秋原雪花 (揺れる心)
		第二十一話	赤嶺友奈 (揺さぶる人)
		第二十二話	烈海王 (リベンジ)
		第二十三話	花山薫 (被害者)
		第二十四話	鷲尾須美 (被害者その2)
		第二十五話	本部以蔵 (公園)

祝福の章

祝福の拳ツ 結城友奈

結城友奈は一人、体育館の扉の前に佇んでいた。

「……………」

扉を見据える少女の表情は日頃の明るい彼女からは想像できないような険しい表情、戦いに行く者の顔である。

「…………ツツ、私が」

胸に拳を当て、呟く言葉は只ならぬ決意を感じさせる。息を吸い、心を落ち着かせた友奈が踏みこみ、扉に手を掛けた。

「私がみんなを……守るから」

全ての始まりは1時間ほど前になる。

○
—— 3月21日。その日の朝、結城友奈の目覚めは途轍もなく遅かった。

「ふ、ふむうふうう！」

どたばたと、家の廊下を走る音が響く。人語を介さない声を発している少女は焦燥に駆られていた。

誰もいないキッチンで食パン一枚を口に含んでモゴモゴと簡単に咀嚼しては少女の行動は身支度をするという限定的なものに集中していく。

顔を洗い、歯を磨き、

制服を着て、カバンを持つ。

「いってきまーすー！」

返す音も無い出発音声、革靴を玄関で打ち鳴らして少女は景氣の良い声とともに外へと駆け出した。

『明日の朝までに学校で勇者部の活動記録を作成しなきゃいけないの。申し訳ないけれど、いつもみたいに迎えに行けないわ』

昨夜、友奈の携帯に届いた美森からのメール。まるでノルマに追われる新卒の社会

人のようなことを言う。と思いがながらも友奈は事情を察して、承諾した。

朝一、常に東郷美森に起こしてもらっている自堕落な生活から脱出する良い機会だ。自分でも美森の助けなくても自立できるようにならう、そう思った友奈だが。

「どうして目覚まし鳴ってるのに気付かないの〜!」

テンプレと言われてしまえばそれまでだが、友奈はものの見事に盛大に音を鳴らす目覚ましの側で盛大に二度寝をかまし、現在絶賛遅刻中。

予測可能回避不可能とはこのことだろうか。

いつもなら友人に起こしてもらって漸く普通に起きられるのだ。その優秀な友人がいなければこうなってしまうのは当たり前である。

軽快に、されど激しく道中を駆ける友奈は何か異様な雰囲気包まれていた。何かを忘れていて、そんな気もするがそれよりも自身の肌に纏わりつく異質なナニか。それは登校際に視界に入ってきて来ていた。

「……あれ」

道を進み、讃州中学に近づいていつている筈なのに、勇者部おろか学生に一人として合わない。そんな光景を誰が信じられるだろうか。

「——樹海化!？」

思い当たる節を挙げるとすれば、自身を含めた勇者のみが自由に動ける結果、樹海化を予想してスマホの端末を確認するがアラームも鳴っていない。

鳥は空を飛んでいるし、風も少なからず吹いている。いつもの日常、の筈なのだ。ただの日常に過ぎないというのに、

「.....」

思わず拳を握る。友奈の胸に去来する孤独という寒気が背筋に走った。

中学の正門までやって来ても、友奈の心が晴れる事は無かった。学校にいたら多少なりとも人の気配くらいはあるものだろう。登校中の生徒とか、談笑する先生とか、教室の窓に映る中学生たちの姿が。

全くない。人影すら感じられないその光景は、まさしくもぬけの殻というべきか。まるでかくれんぼでもしているのか、というその静けさに友奈の胸が一層締め付けられる。

休日に来てしまったか？ スマホのカレンダー機能を使って確認するが平日なのは間違いない。

そもそも休日ならば、昨夜の美森からのメールはなんなのか。美森も同じ状況なのだろうか。そう思い、友奈は電話帳を開き、見つけ出した番号をタッチして応答を待つ。

「東郷さんにもつながらない・・・なんで」

思わず友奈は走り出す。不安を抱く中で、今は一刻も早く誰かに会いたいと思った。人に会えなければ、どうにかなりそうだった。

○
友奈が中学へ登校して十分が経過する。その足取りは重く、表情は暗くなりがちだ。

結局探し続けても誰一人として生徒と遭遇することは無かった。

休日でもないのに教師、勇者部を含めた一般生徒と遭遇しないこの状況、異常だ。

明らかに何かが起きている。そう思わずにはいられない友奈だった。

「・・・もしかしたら」

最後に辿り着いた場所、藁にもすがる想いでやって来たのは勇者部の部室だ。扉を開ければ、友奈の知る勇者部の面々がそれぞれの活動をしているに違いないのだ。

「・・・・・・・・」

扉を開けた先の光景に、友奈が持っていた鞆をその場に落とす。部室には誰も居なかった。

パソコンにてキーボードを打ち鳴らす東郷、

テーブルの上にカードを並べて占いをする樹、

その向かいでふんぞり返る夏凜、

風と談笑する園子の姿が他の時代の勇者の姿がどこにもなかったのだ。

「みんな・・・どこ？」

ふらつく動き、今にも倒れそうな不安定な体の揺れをなんとか抑え込んで、テーブルまでたどり着く。

友奈はテーブルに体重をかけるようにおいて、小さく、聞こえるか聞こえない程度の声で呟いた。

——怖い。

世界に自分しかいない、そんな過酷な状況の映画がどっかにあったはず。閉鎖されたその空間の中にいた物語の主人公はきつとこんな感じの気分を味わっていたのだろうか。

だが、友奈には奇しくも似たような経験がある。それは現実の世界、友奈たちがいる神世紀での最終決戦の最中に自身に起きた現象。

レオ・バーテックスを倒すためにその心臓、御霊に触れた瞬間、友奈の意識はどこか別の場所へと飛ばされていた。そこは人が入る事ができない、まさしく人外の領域。

暗く、どこまで果たしてなく続く虚空、

手を伸ばせども届くことは無い常世の闇、

歩いても歩いても終わりのない灰色の平野。

友の声を聞き、青い鳥に導かれるままに諦めず歩き続けて日常へと戻ってきた。それまでの孤独感と同じような気がすると、友奈は思う。　そ

「・・・あれ」

ふと、机の上に一枚の紙が置かれている事に気付いた。桜の花のようなピンクの一

枚の紙には何か書かれていた。

その内容を見て、友奈は空いている拳を握る。先ほどとは打って変わり、決意を秘

めた険しい表情で友奈は部室を飛び出した。

『体育館で待っています。赤嶺友奈より』

宙を舞い、床へ落ちた紙にはそう書かれていた。



そして今に至る。友奈は体育館の扉の前にいた。よく見れば不自然なことである。体育館はいつもなら用務員が歓喜のために扉を開けて、窓だつて開けているのに、今日に限っては扉は閉められ、窓は中が見えないようにカーテンが掛かっていたのだ。

「……よーし」

顔を両の手で叩くのは気合の表れと、恐怖心に負けないようにするために自身へ喝を入れるためだ。

この状況、罨かも知れない。中に入ったら赤嶺が待ち構えているかもしれないし、バーテックスがいるかもしれない。

それでも一步も引かず、前に踏み込むことが出来るのは自分が勇者だからだ。

扉に手を掛け、一気に力を込める。扉は鍵が掛かっておらず、すんなりと開いた。

中は照明も消されており、窓やカーテンも閉めているからか、中の様子を全く把握することが出来ない程の暗闇である。

悠然とその世界へと足を踏み入れていく友奈。　空気は異様な程に冷たく、肌に纏わりつく感覚に耐えながら進む。

そして入ってから数メートルほどだろうか。　いきなり入ってきた扉が閉まった。金属を打ち鳴らした扉が閉まる音と同時に、友奈の視界が完全に闇に包まれる。

「やっぱり、罨ッ」

突如の事に動じることなく、友奈はポケットからスマホを取り出した。　暗くても、スマホの灯りが最低限あれば、手元の操作が狂うことは無い。

アプリを開き、勇者システムを起動させよう指で画面をタップしようとした、その瞬間だった。

照明が、先ほどまでに完全に沈黙を保っていた照明器具が起動した。

バツン、という音を皮切りに次々と天井から当てられる光が体育館の闇の世界を照らししていく。

「うっ……見えない！」

暗所での活動中、いきなり強烈な光を見ると周囲が眩しすぎて見えなくなるといふ。

暗順応から明順応へ眼の網膜にある視細胞の働きが切り替わるまでには数秒を要する。

不意打ち？だまし討ち？攻め手は？どこから？

視界が閉ざされた友奈の脳内では予想されるあらゆる敵の攻撃手段に対応すべく、冷静に息を吐いて構える。

だが待っているだけの友奈に攻撃が繰り出されることなく、静寂が続き、次第に明るくなってきた周囲の景色を容易に視界に納めるまでに視力が回復した。

「——え？」

回復した視力がとらえた光景に友奈は思わず声を漏らした。そこは本来、闇に染まっていた体育館のハズだった。

周囲を見渡せば、檀上、観客席、つまり友奈を取り囲むようにして埋め尽くさんばか

りの人、人、人。

讃州中学の生徒たちだった。

「やつと来たのかい、オセエぜ友奈ちゃん」

そして、正面には空手部顧問、愚地独歩の姿がある。部活の時間帯ではないのに何

故か道着姿だ。

「え？ え、ええ？ 独歩ちゃん？ なんで？」

当然の事だが、ここに来るまでは完全に赤嶺友奈と戦う気満々だったのだ。今ではその気は完全に何処かへ行ったのだろうかというくらいに友奈は困惑している。

そんな友奈の困惑している様子を面白がっているのか、独歩が小さく笑っていた。

「さくして」

腰に手を当てる、彼は天井にある照明を見上げながら、同時に両の手を広げ始めた。

その両の手が完全に広がった時、独歩の口が開かれる。

「今日は何の日——、だったかな？ 友奈ちゃん」

その両の手が合図だったかのように、友奈の全身に衝撃が走る。

それは比喩ではなく、彼女の頬を、皮膚を、これでもかと叩かんばかりの衝撃。

—— 押忍ッッッッ!!!

友奈を除いた全ての生徒たちが怒号と共に放つ拳、正拳突き。

—— 押忍ッッッッ!!!

虚空に放たれる突きは声量の正体は讃州中学生徒全員——、

—— 押忍ッッッッ!!!

讃州中学、全校生徒総勢300名以上が早朝を物ともせず、この体育館に集結したのである。

目の前で一人で佇む少女の為に。

この学校で一番の太陽の如き笑顔を持つ、誰もが認めるお人好しの為に。たった一つの溜息すらが巨大な衝撃と化す、讃州中学生徒全員という数。

「オリヤア！ もつと腹から声出しなさいッ！ 女子力ッ 女子力ッ 女子力と叫ぶのよッ！」

「風さん、掛け声は決まっているんだが・・・」

特別指導員・犬吠崎風、乃木若葉の号令の下、一糸乱れぬ統率で、腹の底から気合を振り絞る。

——押忍ッッッッ!!!

「銀、なんで拳を突きながら・・・私の胸をじっと見てるの？」

「そりゃあ、鷲尾さん家の須美さんが拳を突きだす毎に・・・」

「揺れてるからだだよぉ」

「~~~~~ッッッ!!!」

目の前には師がいて、

振り返れば友が居る。

「・・・あ」

360度、全身を余すことなく叩く拳の圧の意味を友奈は正面観客席の最上段に広

がっている横に伸びた巨大な幕に書かれた文字を見て、漸く理解した。

「——ツツ!!」

その様子を見て、頃合いかと風が手を振った瞬間、正拳突き雨がピタリと止んだ。

「友奈ちゃん!」

「友奈さん!」

「友奈——!」

「ゆーゆー!」

巨大な幕を広げる一員を担った東郷が、樹が、夏凜が、園子が体育館の中心にいる友奈へ送る、最大の祝福。

3月21日。その意味を今まで忘れていた友奈に生徒たちがしてくれた事に対し、言葉に言い表せない程の感謝の念と、

「みんな……」

「ありがとう……!!」

頬を伝う涙。 勿論それは、嬉し泣き。

「いくぞオメエらッ！ 締めるぜ——ッッ！」
独歩が合図を送り、全員が一呼吸。 続けて独歩が音頭を取り、セーのという言葉の後に、観客席に広がる幕の文字と同じ内容を送る。

——結城友奈ちゃん 誕生日オメデトウッ
!!!!

割れんばかりの歓声。 大気が、体育館全体が震えるのを感じた友奈も自身に贈られた祝福へ、最大限の笑みで返した。

「アリガトオオオオオオオツツツ!!!」

冷めぬ熱気を持った体育館で行われたこのサプライズを結城友奈は絶対に忘れたくないと思った。

たとえば、この世界が終わってしまったとしても。

○

——しかし、その後は酷かった。

今回のサプライズ、考え出したのはどうやら独歩らしい。赤嶺友奈をダシに友奈をおびき寄せるのは些か疑問があったが、それには勇者部全員が賛同し、あまつさえ讃州中学生徒全員を巻き込む形になった。

独歩から先生たちに話を通して、授業に支障が出ない程度で行うことを条件に承諾を得ているとのこと。

それでも尚時間が余ったので勇者部で出し物を即興でやることになった。壇上に立つ樹の手にはマイクが握られている。

姉の風は自慢の妹の歌が聞けると狂喜乱舞していたが、何故か本番、樹の両隣りには

マイクを持った独歩と烈の姿があった。

——空手の真髄を見せてやらア．．．。

——中国の歌にも四千年の歴史がある．．．。

——友奈さんに送ります！ 聞いてください、私の．．．私たちの『Auror

a Days』ツツ!!

妖精の如き歌声に混じって、コブシの効いた渋い男の聞こえる曲を友奈を含めた生徒全員はフルコーラスで聞き続けるという地獄絵図を目の当たりにすることとなった。

直後、“大赦を潰してやるツツ”と血涙を流しながらアプリで変身しようとしていた風を勇者部全員で全力で阻止したのは言うまでもない。

く祝福の拳ッ 結城友奈く

幕間櫛

く誤解を解くく

——空手家、愚地独歩、55歳。

“武神”、“虎殺し”という異名を持つ、百戦錬磨の武人。

勇者部部室で彼は、困惑していた。

空手部の顧問であり、勇者部の指導役も承った独歩は今——、

「愚地……独歩オオオオオオオツツツ!!!」

変身して怒号をかます東郷美森に銃口を突きつけられていた。
全ての始まりは2時間ほど前。

○ 「はあ……」

勇者部部室で漏れるため息は東郷美森のものだ。

自身の得意分野であるパソコンでの資料作りを行っている最中だが、いつもならあらゆる計算式とタイピングを駆使して自分の仕事の半分の時間を終わらせている時間が既に経っている筈なのに、殆ど進んでいなかったのだ。

「どうしたの、わっしー」

「あら、そのうち」

美森を氣遣うように、同じ部員であり、小学時代からの友人でもある乃木園子が美森の顔を覗いていた。

「いつの間にいたの……?」

「え、ずっといたよ? 氣付かないなんてどうしたのわっしー」

間の抜けた声でそう答える園子に美森は申し訳なく思う。今の今まで、部室内に居るのは自分だけだと思っていたからだ。

「何か考えごと?」

「うん……」

「ドツポちやんだね〜?」

彼の呼び名が既に浸透しつつあることに驚きつつ、的を的確に射た園子の言葉に、美森は頷く。やはり彼女はどこか抜けているようではいるが、察しが鋭い。

美森が旧友だということもあるのだが。

「さすがね、そのっち」

「ううん……わっしーが疑問に思うのも当然だよ。多分、勇者部のみんながそう思ってる」

讃州中学勇者部に現れた武人、愚地独歩。その正体をいまだに美森たちは図れずにいた。

勇者以外で、しかも男性で、単騎で星屑を素手で撃破するという知らせは彼女たちをサポートしている大赦にも届いたらしい。

独歩に関する全ての出来事が大赦の想定外であり、前例もない独歩の出現に勇者達に伝えられたメッセージは、

『現在調査中、十分に注意されたし』

というものだった。

「あの時は友奈ちゃんの前もあって、深く問い詰められなかったけど……、

やっぱり私、まだ造反神側の刺客の考え、捨てきれないのよ」

独歩は勇者ではない。まず、この場所が壁に覆われた四国であるということも知らなかった。来た場所は東京だ、と言っていたのだが、この世界の事をどれくらい知っているのかという若葉の質問に

『バーテックス？ ゾウハンシン？ ユウシャ？——なんでエソりやア、

オジサンにそんな良くわからねエ横文字つかうんじやねエや若坊^{わかぼう}』

と、完全に美森たちがいる世界とは違う世界から来たということになっている。ちなみに若葉はその呼び方をされ続けて一回キレた。ち

「バーテックスも勇者も存在しない、そんな世界が……」

「あるんだねえ」

そんな戦いとは無縁で空手家の独歩がどうしてこの世界に来たのかが一番の謎だっ

た。

「でも、悪い人じゃないと思うんだ。ちゃんと、ゆーゆ達が特訓させてもらっているわけだし」

「それが問題なのよツツ」

声色を変えた美森が園子の肩を鷲掴んだ。

華奢な細腕とは思えない握力に園子は身を震わせる。

「友奈ちゃんが最近勇者部の活動に顔を出さなくなっちゃって・・・、

あの男、純粋な友奈ちゃんの気持ちを利用して、

その・・・いい、いいい厭らしい事をしているに違いないわツツ」

「ドツポちゃん、奥さんいるって言ってたからそれはないんじゃないかな、考え過ぎだよ、わっしー」

美森の行き過ぎた愛情故にその目が光を失っていることに園子は苦笑い。空手部の稽古に行き始めては勇者部の活動が始まるまでに美森と友奈は離れっぱなしなのだ。

時間にしてほしい2時間。

たかが1時間、されど2時間。美森にとって体感時間は1日と同義だ。

「ああ・・・友奈ちゃん、どうか無事に帰ってきて・・・！もし何かあったら、私がおもかも撃ち抜いてみせるから！」

「独歩ちゃんを撃つちゃ駄目だよ、わっしー」

「ただいまー！」

そんな美森の心配をよそに、勢いよく開かれる扉。快活な笑顔を浮かべた結城友奈であった。

「友奈ちゃん！戻ってきたのね!?大丈夫!?!」

「え？なにが？」

きよとんとする友奈に美森が慌てて駆け寄ると、友奈の身体を触り始めた。

「あの卑劣漢に何か触られなかった？腕とか、脚とか、顔とか、頭とかツツ」

美森の手が友奈の顔、肩、腕、と順序にして下がるように、ソフトタッチで確認していく。

友人であっても、触ってくる手の感触にもどかしさを感じた友奈は身をよじりながら、

「ちよ、ちよつと東郷さん・・・く、くすぐりたいよ〜」

「ダメよ、私がすみずみまで確認して、傷物にされてないか確信を得るまでは安心できないッ

友奈ちゃん、脱いでツツ」

「うわー、わっしーが壊れたー」

多分、樹か夏凜がこの場にいたら口を揃えて言うだろう”それはもとからだ”、と。

「——ツツツ!! 友奈ちゃん、その手……」

美森が目を見開く、友奈の両手に白い包帯が巻かれていたのに気付いたのだ。

友奈は慌ててその手を後ろに隠し、

「あ、あわわあわー！ ち、違うよコレ！ ぎゅ、牛鬼が噛んできてー」

「あの歯が見当たらない牛鬼に噛まれて、こんな傷だらけの手にはならないわ！

—— やっぱりあの卑劣漢、よくも友奈ちゃんを傷物にツツ」

園子が見た時、美森の目が完全に獲物を狩るソレだったのは言うまでもない。

「ゆーゆ。 言いにくい事なのかもしれないけれど、ちゃんと話して？ 勇者部5か条

一つ、”悩んだら相談”でしょ？」

園子も美森ほど過剰ではないにしろ、友奈の事を仲間として案じていた。 勇者部で

決めた約束事を彼女に思い出させるように聞かせる事で園子は話しやすいように誘導したのだが。

「あ、あのね……！ 東郷さんも、そのちゃんも、ちゃんと聞いてほし——」
友奈がその言葉を言い切る前に、

「おーい、邪魔するぜエ……風ちゃんいるかいー」

全ての元凶とされる男、愚地独歩が部室へと入ってきたのだ。

凍りつく空間。 その場にいた独歩以外の者が思ったことだろう。

——ヤバい。

「……………」

冷気を纏った少女が、友奈の背後から顔を恨めしく出現させる。 それは勿論、美森のもので、

「愚地……独歩オオオオオオツツツ!!!」

即座に勇者のアプリを起動させ、コンマの速度で変身をした美森が独歩の眼前に銃を構え、言い放つ。

「わたしは相手だッ」

「エッ、エエ~~~~~ツツツ!」

鬼の形相で睨まれた独歩、困惑しながらも、しっかりと前羽の構えを取っていた。

○

「ああ!? 束ねた竹に貫手噛ましてたら怪我したア!」

勇者部室内で独歩の怒りにも似た声が木霊する。

理由を説明した友奈は独歩のあまりの声の張に身を震わせ、

「ご、ごめんなさい……でも、この練習すれば、独歩さんみたいにパーテックスをチョップで斬れるかなあつて……」

しどろもどろな返しに、美森が割って入る。もちろん、愛銃である銀しろがねを独歩に向け

たままです。

「先生、やめてください。友奈ちゃんが脅えてしまっていますッッ」
「わっしーも銃おろそうよ〜」

園子が諭すも美森はスタンバイガンを崩すことなく、その銃の照準はまっすぐに独歩の額を捉えている。

このまま引き金を引けば、独歩の顔面が跡形もなく吹き跳ぶだろう。

「お前エらには絶対使わせねエように倉庫に隠しておいたハズだあ、つてことは友奈ちゃん……まさか」

「は、はい……勝手に探して外で練習を……」

「オイオイオイ、勘弁してくれ……、100パーセント怪我するからやらせないようにしてたのによオ」

髪のない頭を掻きながら独歩が嘆く。その様子を見た園子が頭にクエスチョンマークを浮かばせては、独歩に対して質問をぶつける。

「独歩ちゃん、束ねた竹に貫手つて？」

悲壮感溢れる独歩は腕を組み、園子の問いに答える。

「文字通り、紐で束ねた竹に思いつきり“貫手”を繰り出す稽古があんだけだよ……俺が昔やってたヤツでな、コイツがほんとしんどくてしんどくて、

最初は手の皮が剥けるわ、血が出るわ、突き指、脱臼、骨折って当たり前のヒデー練

習なワケ」

想像をしただけでも痛そうだ、と誰もが思う。ちなみに、マジで痛いらしい。

「ソイツを何年も続けてるとよオ——」

3人の前に、独歩の拳が差し出される。

「こうなっちゃうんだワ」

友奈たちの白くて薄い手とまるで違う、足の裏の如き厚い皮で出来た拳。

それは長年の痛みを淘汰し、辿り着いた境地である武人の拳という証。

手にできた無数の傷が物語る、その修行の壮絶さ。

故に会得したのは、星屑をも両断する程の威力を持った手刀だ。

「——俺も今は指導者だ。生徒に無茶な練習はさせられねエ、ましてや今の時代、お前らみたいな可愛い女の子にそんな練習させてみる。」

あとから親とかPTAからウツセー文句がくんだよッ それをお前、人の気も知ら

ねエで!!」

「ご、ごめんなさい・・・そ、その・・・ごめんなさい・・・」

「ほらく、わっしーも。 独歩ちゃん、ちゃんとゆーゆーのこと考えてたんだからさく、銃降ろして〜」

園子の言葉に、先ほどの人を殺める勢いを持った美森はどこへやら。 それまでの自分の行いを恥じるように彼女は頭を下げ、

「とんでもない誤解をしてしまいした先生・・・申し訳ありません・・・」

「俺も配慮が足りなかったからな・・・次からは簡単に持ち出せないようにしておく。

あと友奈ちゃん——」

「は、はいいい!」

「手が治るまで練習禁止!」

「で、ですよね・・・」

あたりまえだ、と独歩は続ける。

「そんな手で練習したら怪我悪くなっちゃうだろお? ——その代わり」

突然、独歩が構えた。

独歩の構え、両の手を広げ、自身の眼前に拳一つ分の空きをつくった構えを、“前羽の構え”という。

「——別の技、教えてやるからよオ。この構えから派生する〃廻し受け〃つてヤツよオ」

「マ・ワ・シ・ウ・ケ．．．？」

ああ、と独歩の構えていた腕がゆつくりと円を描くように動き出す。

「オイラが得意とする技の一つよオ．．．コイツをマスター出来りやア——、矢でも鉄砲でも火炎放射器、なんでも防げるぜ」

「ま、マジですか先生！」

「マジよ」

人の手の身で、そんな芸当ができるのかと信じられない友奈だが、実際に独歩は元の世界でこの廻し受けで火炎放射器による攻撃を防いでいる。

「型の練習くらいなら怪我することはねエからよ．．．。空手の基本の型全てを1日1000本、それを数十年続けることができるバカなら誰でもできる」

これは独歩個人としての弁ではあるが。

「や、やります！ 結城友奈！ 廻し受け、絶対会得して見せます！ 押忍ツツ!!」

「．．．．」

伝授された技を懸命に会得すると意気込む友奈を見て、その一方で一人浮かない顔を

していた美森。

「わっしー、もう独歩ちゃんの事で心配な事はないでしょ」

「そのうち……」

園子が優しく言うが、美森は思わず独歩から視線を外して、

「やっぱり、それでも不安よ……愚地先生の事は信用しているのだけれども——」

仕方ないなあ、と肩を竦め、園子はため息をついている美森に気付かないように友奈を呼び寄せる。

「ゆーゆ、ゆーゆ」

「なあに、そのちゃん」

「あのね、あのね……わっしーに——」

「ごこそ、と友奈に耳打ちをする園子。内容を友奈は理解していなかったが、彼女

は頷いて、

「東郷さんッ！」

「は、はい!? ど、どうしたの友奈ちゃん」

いつも浮かべている朗らかな笑みとは打って変わって凜々しい表情の友奈に見つめられるという突然の事に、「面を食らう美森。

「私、ぜったい強くなるよ！ 強くなって、東郷さんを守護ってみせるからね！」

友奈の手が美森の手を握る。優しい彼女の温もりは例え包帯越しであっても充分な程、美森に伝わる物で、

「~~~~~ツツツ!??!」

瞬時に頬を染めては、友奈の顔を凝視できなくなった美森が視線を外して、

「もうっ、ずるいわ友奈ちゃん・・・そんなこと言われたら、なんでも許したくなっちゃう」

お返しとばかりに、友奈が痛くならない程度に優しく握り返す。

友奈も美森に笑顔が戻って、それを見ていた園子が、

「うんうん、イイネエ。御馳走様でしたア」

「.....」

メモ帳をばたん、としまった園子が感謝するように両手を合わせたのを見て、独歩は言う。

「なかなかあの子の扱いが上手いもんじゃねエかア」

「えへへへ・・・親友ですの〜」

どんな親友だ、と内心で突っ込んだ独歩だが、深くは考えないようにする。しかし、この微笑ましい光景をみていると、胸ヤケしそうになってくるのは何故だろうか。

そう思っていた矢先、友奈が思い出したかのようにこちらを見た。

「そう言えば独歩ちゃん、独歩ちゃんの仲間の達人で……武器を使ってる人はいるの？」

「なんでエ突然」

「あのね！ 勇者部には色んな武器を使ってる人が居て……独歩ちゃんの知ってる人で武器を自在に操るような人っていないのかって思ってる」

たしかに、と相槌を打ったのは美森だ。

「友奈ちゃんたちのように素手で戦う人ばかりが勇者部じゃありませんし……」

美森の言う意見はもつともで、素手戦闘をする友奈たちを除いた勇者はそれぞれ専用の武器を持っている。

刀、槍、弓、大鎌、二刀、斧、ヌンチャク、銃、大剣、盾、ボウガン、何でもぶった切るエグイワイヤーなど。

それぞれが独歩の教えを100パーセント生かせるとは限らない。その武器を多用できる達人がいらないか、その人物から教えて貰えば、勇者部は確実に強くなるだろう、と考えたのだ。

(武器使いねエ・・・)

ほとんどが素手で戦うような連中しかない気がして独歩は再び頭を搔く。どちらかといえ、戦つてきた敵側の方が武器を使うことに長けた者は多かつた。

と、ここで独歩は思い出す。そう言えば、身近に武器を使つたりしてた格闘家がい
た、と。

「——ああ、いるなア、そーいやア・・・ウン、二人ほど」

——中国拳法の使い手と、柔術の使い手の姿を独歩は脳裏に浮かべた。

第三話　誤解を解くツツ

〈依頼者・烈海王〉

——讃州中学勇者部。

世のため、人のためになる事を勇んで行う部活動のことを言う。部員数はいつの間にか15人を超える。

なんかいつの間にか知らない制服の子とかいて部員が増えていく気がするけど多分皆は気にしていない。

主な活動内容としては、

校内清掃、

部活の助っ人、

麻雀の代打ち、

野菜提供、

屋根補修、

フアッション相談、

恋愛相談、

園児、老人へのレクリエーションなどなど。

こうして挙げて行けどもキリが無いわけなのだが、それは秀でた分野に精通した部員が様々な活動に参加することができるようになったためである。そのため、知名度は讚州市では知らない者はいないほどだ。

一時は文化祭の演劇の内容があまりにも素晴らしかったために讚州市の新聞に載ったほどである。それ以降、勇者部への依頼はひっきりなしに寄せられ、その多忙さは部員が分担して依頼にあたる程となった。

「どうぞ、お入りください．．．」

そして今日も椅子に腰を掛け、意味深に手を組んだ勇者部部长、犬吠崎 風の元に、悩みを抱えた依頼人がやって来るのだ。勇者部の活動がまた始まる。

「私は勇者部の者たちから嫌われていないだろうか？」

用意された椅子に座り、モノ憂いげな表情でそう語るのは男。見たら逃げ出しそうな敵つい顔つきとチャイナ服の間から見える筋肉質な褐色の腕は学生と呼ぶにはいささか無理があるか。

依頼者は烈海王だった。

「……えーつと烈さん、嫌われてるといふのは？」

部長である風は物怖じしない。強面の筋肉質な中国人にじつと見つめられて相談を持ちかけられることなど、現実の世界でもないことだが、そこは自身の女子力で対応する。

「勇者部の部員から避けられている気がするのだ」

対して烈海王、悩ましい表情で小さく嘆息をつく。先ほど自身がやっていた手を組んで肘を着き、頭部へ拳を当てるその姿は心底悩んでいるようである。

「あー」

風には思い当たる節がある。それは部長である風と同じくして寄せられていた依頼とは違う、同じ部員たちから持ちかけられたものだった。

その一人一人の告白を、風は思い出す。

『その・・・、いきなり全速力で目の前に走ってきたらそりやあ怖いですよ。ええ、怖いです・・・あと静かになったと思つたらいきなり大声で叫ぶし・・・』

『タマが思うに、ヤツは危険人物だ。タマが杏の側にいるから問題ないが、きつといつても勇者部をのつとるつもりでいるに違いないッ』

え？ マウンテンバイクのことまだ根に持つてるのかつて？・・・んなわけないだろッ!』

これは杏と球子のものだ。ちなみに、球子はいまだに烈に対して破壊したマウンテンバイクの請求を続けているらしい。

『いやあ、あの人なかなかとつつきにくくてね……站^{たんど}椿^{づつ}っていうの？　こう、中腰になつてジツとしてるヤツ……』

あれやつてる最中に目の前にラーメン置いたらどう反応するのかなーって試したらヤバイ睨まれたにや。　怖い怖い』

秋原雪花、それはただ邪魔をしに行っているだけなのでは？　と風は思ったが、のんびりと自由にやるスタイルの雪花にとつて色々と試さずにはいられなかったのだろう。

『烈さん？　ええ、怖いわよ……あの人、私の畑の向かいの土地に中国の薬草を作るとかで同じ規模の畑を作り出したのよ！　一日よ!? たった一日! ……宣戦布告よ!　ウオーよ! この私、農業王・白鳥歌野へのチャレンジよツツ!』

いつしか私の畑を取り込む気である気なんだわツ　そう考えるともうスクアリー!　恐怖よ恐怖!』

農業を志している者のサガなのか、自分の領分に踏み込んでくる敵が現れたと勘違いしている諏訪の勇者がいる。

『え？ 烈さんですか？ あらあら……風先輩ったら、何を言い出すかと思えば……戦争をこそ所望で？』

『東郷さん、私……日の丸の旗を持ってきます……ホシガリマセンカツマデハ』

東郷と須美に関しては言及すれば色々と問題があるので割愛。 歴史の闇とは根深いものだ。

「それで、どうなのだ……やはり、苦情は来ているのかッ」

ぐい、と顔を近づける烈に風が若干引いた。 相当気にしているのかもしれないが、そういう強引な面が原因ではないかとも風は思う。

「……烈さん的には、どうしようと思ってます？」

敢えて直接には言わない風の言葉に察しはついたか、両の手を組んで烈はうなだれる。

「勇者達と無理して仲良くなるうとは考えてはいない、彼女達も勇者だが12〜14歳が中心の少女。 男性と接することを嫌う者もいるはず」

「だが、一個人として——、彼女達を戦いの際は見守るように、いざと言う時は助太刀できるようにと独歩氏から頼まれている」

いうなれば、

「有事の際に信頼関係を築けていない、それは共闘においてはあまりにも致命的……。問題が起きてからでは遅すぎる。何か手を打たねばならないのではないか」

なるほど、と風は身体を背もたれに預けた。

要するに、この人は真面目すぎるのだ。あまりにも。

「だったら、烈さんから話掛けてみるのはどうですか？ お互い、実際に話してみれば、みんないい子たちなんで仲良くなる切っ掛けになるかと」

勇者部は基本、部員同士でも、校内でも人付き合いが良い方だ。友奈ズは聖人君子かと思わせるほど人付き合いのプロフェッショナルで、入部して間もない他の時代の勇者達と言葉を交わす事ですぐ仲良くなれたし、

他の者たちにもそれが伝播したのか、基本は話し合いと言う名の相談を重ねて、色々と部内の問題を解決してきてはいる。千景などの特別な事情を持つ者はどうか分からないが。風だって深くは知らない。

本人にとって知られたくない事情があれば、こちらは無理に知る必要はないと風は考えている。それは部長としての配慮だ。

一方で提案された烈は視線を逸らした。何故？ と首を傾げる風に対し、烈がほ

そつと呟く。

「……いないのだ」

「は？」

「我々のいる世界に……私の周りにはあのような少女達はいなかったのだツツ」

「は？」

「我々の知人は基本は同じく、戦いに身を置く者達だ……独歩氏と同じようなツツ」

「……ちなみに、どんな人たちと普段お過ごしで？」

腕を組んだ烈が数秒程、考え込んでいる。そんなにいるのか、ヤベー奴が。

「隻腕の空手家、バツテン疵モチのプロレスラー、二重人格軍人、顔面凶器喧嘩師、神の子ボクサー、徳川財閥の老人、地上最強を自負する男とその息子……と、その息子の腹違いの兄」

「~~~~~ツツツツ?!?!?!」

「あと、最近は古代の……白亜紀時代の者とも関わりがあった」

想像絶する女気のない環境である。なんで恐竜がいた時代の人間?と関わりがあったのかすごく気になるワードが出たが風はこの際気にしない事にする。

烈はたんつ、と机を叩いては、

「つまり……だ。私は、自分より年下の少女と会話する技術がないのだツ 余りにも

不慣れツツ 中国四千年を持ってしてもツ これはツ これだけはツツ

「烈さんは真面目なんですね」

「~~~~ツツツ!!!」

おい、なんで頬を染めている。お前はアレか、そんな強面な顔を持つておきながら中身にツンデレと言う属性を宿した生物なのか。

恐らくだが、勇者部の中で近い感じで当てはめるなら勇者部に来た頃の夏凜みたいなものなのか。

本心ではどうすればいいか分かっている、だが上手く言葉に表せられない：：あ、これ完全にツンデレですわ。 男版の三好夏凜だ。

「えー、なにコレ」

これはかなり難所だ。もしこれが風の思う三好夏凜という少女の方程式に当てはまるのであれば、相当に時間が掛かる。

今ではだいたい大人しくなった三好夏凜は入部当初、とにかくいろいろと嘯みついてくる、いわばキレルナイフだった。今でもその片鱗をちらつかせることがある。

それでも勇者部奇人、園子ズは『そのツンデレ具合がおいしいんよ』、と良くわからない事を言っていたが。

「対処を・・・ツツ、御教授願いたく・・・ツツ」

ただ、本人は相当考え込んでいる様子である。実際に年下である風を頼つてきているのがその証拠か。こういう一面を部員たちが知る事が出来れば、問題も早く解決できそうなのだが。

「むむ、じゃあ今度部員を呼んで話し合いを——」

風が話を纏めようとした時だ。突如として部室の扉が開かれる。同時に重なる声が部室内に響き渡る。

「ちよつと待ったア—— ツツ!!」

「ちよつと待ったア—— ツツ!!」

「ツツ! ちよつと待ったコー——ール!? どうしたの園子、それに独歩さん」

ほぼ同時に、シンクロかよ、と思う程の勢いで現れたのは凄まじい悪い笑みを浮かべた園子と独歩だった。

「というか仲が良いな二人とも。」

「話は全て聞かせてもらったんよ」

「どこの強キャラだと思わせんばかりの腕組みで現れた園子。」

「どうやら廊下で今までの話を聞いていたらしい。その隣に眼帯の厳ついオッサ

ンがいるという光景はあまり想像したくないが。

「なんでエ烈、俺を頼らずに風ちゃんのところに行くってことは……相当煮詰まってるみたいだなア？」

「独歩ツツツ 貴方と言う人はツツツ」

般若の如く顔に現れるほどの怒りを浮かべた烈が立ち上がる。だがその際も事実を突かれ、羞恥に顔を染め上げては独歩に尚も笑われた。

「なあ園ちゃん、コイツ、こういう所があるんよ〜」

「そうですねア、独歩ちゃん。でもだいたい分かってたんよ〜」

口調を合わせるな、そこ。傍から見ても恐ろしい光景だから。

独歩は元の世界で烈海王を知っている人物である。となれば、彼の性格もある程度知っていたのか、この世界に来て彼がこうなることをある程度察していたのか、完全に趣向は今の烈を面白がっているに違いない。

完全に園子タイプの人間がもう一人増えた、というべきだろうか。風は額に手を置いて今後の勇者部を嘆いた。

「それで？ 解決策があつての発言なのよね園子？ どんな手があるのか聞かせてちょうだい」

問われた園子は小さく笑みを浮かべていた。　　「どうやら本当にあるらしい。それが変なものではない事を祈るばかりだ。」

「だいたいフーミン先輩も思ってる通りなんよ〜」

あ、だいたい分かった。　　多分ロクでもない奴だ。

「ギャップ萌なんよツツ!!」

「ぎゃ……つぷ?」

目を点にしたように、これまでの人生の中で脳内に存在しなかった言語を聞いた烈の眩き。

「そう、ギャップ萌!　　旧世紀から存在する萌要素の一つツ　ふとした時にその人が見せる意外な一面にときめきを感じるものなんよツ　それは男女問わず起こりうるものなんよツ!!」

曰く、クラスでは不良のレッテル貼られた男子生徒、その実、雨の中、捨てられた子猫を見つけては抱きかかえて家に持ち帰って世話をするといい優しさなど。

つまり夏凜もその一部と言う訳か。

「烈さん、一応警告はしておくけど、この人たちのアドバイスで必ず好転するとは思わな

いでね、うん、一応警告はしたから」

決してこれは責任逃れをする言い訳などではない、決して。 と、風は自身に言い聞かせた。

それを聞いた上で烈海王はしばしの沈黙の後、

「このまま私の務めを果たせないのであれば、それは中国武術の敗北だッ」

この人、どこでも中国拳法持ち出すなア・・・そこから一旦離れようよ。

と、諭そうと思つた風だが、恐らく絶対聞く耳を持たないだろう。

烈から中国拳法を取り上げたたら多分自害する。 いつぞやの東郷と同じように刃を持ち出して自害するだろう。 そんな気がした。

「辛い道のりだぜ？ 身を削るかもしれないぜく？ Are You Ready!？」

もうどんなキャラなのか分からなくなった園子の問いに、烈は険しい表情で堂々と言い放つ。

「私は一向に構わんツツツ」

「よし来たッ 園ちゃんツツ」

「フーミン先輩ッ」

その瞬間、園子と独歩の瞳が妖しく光った。即座に烈を挟み込むように二人が座り、部長である風を巻き込んだ会議が始まる。

「まずはこのコミックスの裏表紙の……ご先祖様とちーちゃんを模したキャラで紙相撲するんよ〜」

「……そうか、なるほど。しかし、なぜ紙相撲を？」

「なんだア？テメエ……」

「え、独歩さん……なんでキレたの？」

——こうして今ここに、悩める男の問題を解決すべく、勇者部の活動がごく少数の者たちによつて極秘裏に開始されたのだった。

それが果てしなく険しい道であるということを担当の本人、烈海王は知る由もなかった。

○ 部室の外、廊下の壁に寄り掛かる少女が居る。アンダーフレームの眼鏡とカチューシャが特徴のその少女は、部室内から聞こえる風や烈の会話を聞いていた。

「ふーん、なるほどね……」

たんつ、と勢いをつけて壁を背で蹴った少女は勢いを利用して廊下の中央に立つと、部室に入ることなくその場を後にする。

「難儀な性格してるなーって思ってたけど、話を聞いて納得がいったかな。でも、なんだかこれ……」

すごい、面白そうにや。そう笑みを浮かべた少女、秋原雪花は誰も居ない廊下を鼻歌交じりに歩き出すのだった。

〈 依頼者、烈海王 〉

く酒杯とともにく表

「(ハハ)か——」

讚州中学から少し離れた場所に、小さな居酒屋がある。

暖簾が垂れ、店内の灯りがあることから営業中なのだろうか、

「愚地氏が指定したのはこの店か」

突如として呼ばれた烈は独歩の指定する店へと足を運ぶ。

呼ばれた理由はこうであつた。『大事な話がしたい』とのこと。

まったくもつて理解が出来ない。大赦内での身体検査も終わったばかりだといふのに、
どうにも落ち着かない一日だと烈はやるせない気持ちを抱いて暖簾をくぐる。

店内は貸切なのか、他に客はいなかった。そう、一般人以外は。

「え」

店のモダンチックな雰囲気気を気にするよりも烈の視線の先で驚愕のあまり、彼は目を丸くする。

「よお」

酒瓶を持つ独歩と、

「烈や……遅いぜエ」

渋川剛気の姿に。

「ええ~~~~~~~~ツツツ!!?」

あり得ない事である。

宣戦布告をした。堂々と勇者部の敵となった。

白鳥歌野を打ち負かした達人、またの再戦を誓い、去っていった渋川剛気が愚地独歩とお猪口を手に持ち、酒を飲んでいる光景は。

「なぜここに渋川剛気がツツツ」

「マア座れや、烈」

いうより早く、烈の言葉を遮った独歩が手を招くのは用意された一人分の席。愚地独歩はこの世界で来た中で初めて見せる真剣な瞳は烈を見据え、告げる。

「——話してエエことがある」

○

「では、渋川剛気……貴方はあの後、赤嶺友奈の元へは戻っていない、と？」
「そう」

短く告げた渋川がお猪口に注がれている酒を揺らし、さざ波を立てる。

「ワシの護身が告げたのじゃ……『鬼がくる』、と」

「ツツツ!？」

「護身が告げる……それは渋川センセが最大の危機を察知した際に現れる幻覚のことか
いっ。」

護身を信条とする渋川が、あまりにも研ぎ澄まされた危機に対する察知能力が生み出してしまふ幻覚。

あまりにも強大過ぎる危険に対し現れる幻覚は、

渋川の行く手を阻む炎となり、大洪水となり、絶壁となり、身の丈10倍以上の門に

もなつていく。

それが渋川剛氣が身につけた真の護身——。

「つまり、貴方が言う『鬼』とは——」

「オーガか……」

独歩の一言が烈の顔色を瞬時に変える。

地上最強の雄、範馬勇次郎がこの世界に来ている。

その事実が2人に与えた衝撃は凄まじいものであり、

酒を飲む行為も、食した肉が喉を通すことを許さない程であった。

「流石にヤバいなーって、赤嶺ちゃんの所に戻るのには諦めたんじや。ま、勇者一人ぶつ

倒したし、一宿一飯の恩義は返したしの」

国家を腕力で屈服させる程の戦闘力を持つ範馬勇次郎相手では渋川も分が悪いと踏んだのか。

自身の気性の荒さを持つてしても、その男との勝負は全力で避けたらしい。

「しかし、どうしてこうも我々の世界の人間がこの世界に……」

「それなんだがよお烈——、俺から伝えなきゃならねエことがある」

そう言うのは腕を組み、神妙な顔の愚地独歩だ。

同時に、その視線は烈だけでなく、その隣でししやもを食している渋川にも向けられ

ている。

「ほう、人食いオロチ……何か分かったのかな？ この世界について……」

「まあな」

「ツツツ！ 何が分かったというのですか、愚地氏ツツ」

急かすな、と烈を諫めると独歩は語りだす。

程よく飲み、酒気を帯びた表情で流暢に、

「神樹の元勢力であった造反神を倒し、鎮めるのが勇者達の御役目……この世界は友奈や若坊とかの未来と過去の時代を生きた勇者が集められている……言わばオールスターゲームだ」

「それは私も知っている」

元々勇者の世界で人間側に味方していた神、造反神が神樹の中で反乱を起し、神の力を分裂させてしまった結果、神樹の力が弱まってしまふ。

その事態を重んじた神樹は時代の巫女を通じ、歴代の勇者の力を結集させて造反神を鎮める戦いを始めたのだ。

「各時代の勇者は神樹の力によって召喚されてる訳なんだが、ここで一つ……烈、今日は大赦と呼ばれて何があつたか覚えてるかい？」

「ああ、大赦の病院で身体検査が行われたが……それが？」

独歩と烈が突如として黒塗りの高級車に連れて行かれたのは今朝の事だ。

神樹のマークを付けたその仮面の集団は大赦の職員と名乗り、普段から勇者に力添えを行っている独歩たちの身体検査を行いたいと要望があった。

『ちよつと、独歩ちゃんたちに失礼なことしないでよね』

その時の中学生園子の顔が笑っていたが明らかに圧を掛けていたのを烈は鮮明に覚えていてる。

乃木という家名は、大赦の中でもトップの名家だとか。

「だが行われた身体検査はいたって普通だった……時間にして1時間程度のモノ。大赦の職員が言うには異状なし、と。それとこの世界と、一体どんな関係が？」

烈が首を傾げる。

さきほどからの独歩の語る内容はどれもこの世界と密接に関係したものではない。

独歩の双眸はどこか遠くをみるような目だ。それが意味しているのは一体何なのか、烈は理解できなかつた。

「烈……、勇者つてのは元々神樹から力を貰っている。その力を解析し、長い年月をか

けて発展させて出来たのが『勇者システム』だ。

バーテックスを打ち倒す勇者達の身体には必ず『神樹のエネルギー』が流れている――最後の検査項目……あれはそれを確かめるための検査だった」

「まさか……」

烈の思い浮かべた言葉に、独歩は頷く。

「俺達には『神樹のエネルギー』つつーのが流れていないらしい」

○

「なんとツツツ」

もし、それが本当なのだとしたら、と烈は息を呑む。

神樹というこの世界の神によって勇者が呼ばれているのに、それとはまったく無関係な烈や独歩がこの世界にやってきた理由、

「つまり俺達は……神樹様によつて御呼ばれた存在じゃねエってワケだ」

神樹による力で召喚されている訳でもない、加護を受けている訳でもない。

ならば、明らかにこの世界では異質な存在である烈達は誰が召喚したというのか。

「まさか、造反神……?!」

「さあな。だが最悪、そういう方向で考えた方がイイみたいだけ、検査の後、職員の人から殺気が出てきやがつてよ……いつでもやり合う準備はしたほうが良さそうだ」
独歩は肩を竦めた。

最後の検査が終わった直後、職員が慌ただしく集まり始めていたこともあり、独歩達の診断結果に異常があったと即座に理解できた。

「しかし、……大赦の職員はどうしてその話を愚地氏に？　もし我々が造反神の召喚した者ならば、そう易々と教えることはないと思うのだが」

もし自分だったら、と烈は思う。

今回のように自分たちが敵の可能性があると分かった時点でその者達には情報は一切与えず、機を窺つて不意打ちを仕掛ける。

それが妥当である。

「勿論、俺だつて教えられちやいねえよ。大赦職員は烈と一緒に、俺にも最後まで結果は『異状なし』、つて伝えてきやがつた」

「では、どうやってその情報を……?」

独歩が小さく笑みを浮かべる。

「ま、大赦の職員は頑なに情報を統制しようとしても、医者はそうでもなかったってワケだ」

「まさか主治医が? 姿は見せなかつたが、それでもあの施設は大赦の手が掛かっている……情報統制に徹するならば、医者も例外ではないはずだ」

この世界では大赦という組織が如何に巨大な組織なのか、烈は理解したつもりだ。

神樹を崇拜し、勇者達のサポートを行う組織、大赦は国の政府よりも発言力を持つ組織である。

その影響力は凄まじく、四国の施設に神樹のマークがあるのが何よりの証拠。

「いるんだよなア、ああいうハネツ返りの医者が……持つべき友はなんとやらつてな」

「はあ……」

だからこそ、そこから情報が独歩たちに漏れた理由が理解できない。

そう烈が疑問を抱く一方で、

「医者、医者……あ、ワシ、分かっちゃったかも」

「え?」

渋川が指をパチンと鳴らしている姿に烈が目丸くする。独歩もノリで同じく指を

鳴らしていた。

「あ、センセ分かっちゃった？ 閃いちゃった？」

「うん♡」

「ええ~~~~~ツツ!!？」

その医者者の正体を、烈は意外な形で知る事になるのだが、それはまた別のお話。

武人と勇者の章

第一話く花結いのきらめきく

——もし、この世界に……神樹様も造反神もビツクリするような勇者が現れたら……アナタはどうしますかッ

ふ

「あ、あちい……」

肌を刺すような日差しが部室に刺しこんでいる。外では校舎のグラウンドをそれぞれ部の活動の部員たちが掛け声とともに走り回っていた。

部屋のパイプ椅子に座り、目の前の机にもたれかかった黄色のロングヘアーの少女はため息をつきながら、部屋に蔓延する熱気と、日差しを避ける為に光が当たらない影の部分へと椅子を引きづりながら移動した。

讚州中学勇者部、その部長である犬吠咲風はこの勇者部の部長である。

勇者部とは、世のため、人の為になる事を勇んで行う部活の事だ。具体的に何をしているのかと言えば、学校の行事、部活動の助っ人、奉仕活動、外でのごみ拾い……etc。

一様にボランティア部と言つても差し支えはない。

飼い猫を探すとか、ごみ拾いとか、ほんとに勇者がやることか、と言われ、実際の部員の何人かには、そういう事を言つていた輩もいたのだが。今ではその活動に疑問なく受け入れてくれている。

「あ、風先輩。お疲れさまです……」

扉が開かれ、入ってきたのは黒髪の少女。大和撫子ここにありと言つた容姿をしたその少女は机に突つ伏している風を見て、声を掛ける。彼女も勇者部の部員の一人だ。

「お、東郷。今日は早いだね。友奈は？ 一緒じゃないなんて珍しいわね」

風は普段なら必ずセットと言われるくらいに仲良しの勇者部員である、結城友奈の姿がなかったことに驚きだ。

彼女、東郷美森は、ええ、と呟いて。

「今日は高嶋さんと空手部に行ってるんですよ」

「空手部？」

「は、」

風の疑問に、美森は答える。

「この前の戦い……もう一人の友奈が現れてから、”もつと強くなるんだって”張り切ってます……」

少し残念そうに、美森は肩を落とす。いつもなら、快活な声と共に入ってきているのだから、このテンションの低さは本物だ。

きつと二人の時間が出来ていなくて、美森は寂しいのだろう、と風は思う。

「そう言えば……あれから結構経つけど、あまり敵の動きが無いのよね」

彼女たちの使命、勇者の御役目であるバーテックスとの闘いで現れた友奈に似た少女、赤嶺友奈。

造反神側のバーテックスを操り、まるで嵐のように立ち去った彼女は得体の知れない雰囲気醸し出していた。

「アイサツ程度……まるでどこかの忍者の如き立ち回りだったわ……警戒はしているけど」

赤嶺友奈は今度もバーテックスを引き連れてこちらに襲来するだろう。それまでに、自分たちも準備をするわけなのだが。

「——にしても、暑いわねエ．．．東郷、何か冷たいのつてある？」
「風先輩、ぼた餅ならありますよ」

ずい、といつのまにか手品の如く差し出されたぼた餅を風は一口に放り込む。現在の切迫した状況とは裏腹に、美森の作るぼた餅はやたらと甘かったのだ。

○

勇者たちが通う讃州中学は、この神樹が作り出した結界の中であつても現実世界の彼女たちの世界を模倣して作られたものである。

そのため、校舎の外観は勿論、そこに在学している生徒たちも存在している。

なお、この世界に居る一般人の人々は知らぬ間に魂だけを召喚されているという、はた迷惑な話である。

そして校舎のはずれ、体育館程度の大きさの施設がある。讃州中学空手部だ。

『押ツツツ忍ツツツ!!』

空手部の道場は扉を全部解放している。解放している為、中の生徒たちの覇気ある声が聞こえるのは当然だが、この空手部は少しばかり異常なほど覇気が有り余っていた。

『押ツツツ忍ツツツ!!』

とても中学生とは思えない厳ついガタイをした男たちが怒気を孕んだ正拳突きを虚空へと突き出している光景がそこにあった。

『押ツツツ忍ツツツ!!』

平均身長180センチ、体重は一番下の部員でも80キログラム。マックスなら120キログラムとヘビー級のメンツまでいる総勢50名の讃州中学空手部だ。

その空手部へと足を運んでいる二人の少女の姿がある。

「す、すごい気迫だね・・・高嶋ちゃん！」

「そうだね結城ちゃん、流石はこの学校で一番活発な部活動と言われているだけはあるよね！」

まるで写し鏡の如き同じ容姿をした赤いショートヘアの少女達は、二人揃って道着に身を包み、並ぶようにして正拳突きをかます男たちを一望できるスペースで正座をしていた。

神世紀時代の勇者、結城友奈と300年前の時代から召喚された勇者、高嶋友奈である。

「たしか、新しく顧問になった部外の人のお蔭で毎年所詮敗退の空手部が優勝したんだよね」

て、ごく普通の中学校である讃州中学だが、極めて異名で活動的な勇者部を差し置いて、

この空手部はこの学校で一番と言って良いほど人気があった。

記憶にもまだ新しい、この空手部が優勝したという事実。

「その頃はまだ中学生らしい体格をした少年たちが、空手つぽい」事をしている普通の部活動であった。

故に戦績は下の下の。たまたに勝てればよい方だろう、というくらいの評価が二か月前の空手部だ。

「ここで先ほど評価した“空手つぽい”という表現は今行われている練習風景とはかなりかけ離れている。

たとえば、

「高嶋ちゃん、あの人……」

「うん、あれは目つぶしの練習だね」

正拳突きを繰り返す集団とは別のスペースでは、サンドバッグに二つの射的の如きわっかを描いた部分、その中心部に向けて気合を入れて人差し指を突き刺している男が居た。

サンドバッグを指が貫通することは無い。だが、その指の突き出した位置は、正確にその中心点を射抜いていた。

「あ、あれは・・・ツツ」

「結城ちゃん、あれは人体の急所、正中線を狙った足蹴りだね」

次に見据えたのは木偶人形の三か所にカバーを巻いた場所目がけて、部員の一人が宙を浮いたかと思えば、その三か所に途轍もないスピードで蹴りを繰り出していった。

「——正中線・・・急所である喉、鳩尾、金的を同時に三か所なんて・・・」

高嶋は息を呑む。目つぶしも、今行われている木偶人形への蹴り技も、どれも人体を確実に破壊する手段である。

競技とはかけ離れた、実践を前提に置いた練習風景に、高嶋は驚きを隠せない。

恐らく、この短期間で弱小手部が恐ろしいまでに成長を遂げたのは、この実践を想定した練習があつてこそだと、確信した。

普通の中学生がこんなガチで当てに来る空手など相手取ったら、誰だつてビビる。というか、普通に怪我する。

「うーん、それにしても今日は凄い気迫が……」

「たしかに……いつもより三割増して気合入っているような」

ふと抱いた疑念に、同じ姿をした二人は同時に考え込んだ。

同時に、周囲から声が漏れる。それは友奈たちには聞こえないくらいの小さい物で。

—— オイ、友奈ちゃんたちが来るからってお前ら気合入れすぎじゃねエかツツ
!?

—— 待てよ、お前だつて二人が見学に来るつて分かった時、メチャクチャガツツ
ポーズしてたろうツツ!!

—— いつも元気いっぱいのツイン友奈ちゃんが、俺の正拳突きを凝視してく
るツツ!!

—— というか、マジでそっくりジャン……あと可愛いツツ!!

——俺、今から飲み物あげてこよーかな。 ついでにこれを機に御近づきに
なっちゃつて。

このために空手部入ったんだ。

——オイオイオイ、死んだわアイツ。

——消されるぞ、東郷と郡に。

結城友奈と高嶋友奈は校内でもかなり人気がある。主に男子からだ。

いつも誰とでも気さくに話が出来て、それでいて裏表がないあの笑顔だ。数々の部活動の試合にて助っ人の際に来た友奈たちの笑顔を見た男たちは誰だつて魅了されてしまおうだろう。

だが、生憎彼女達には誰一人として声を掛ける事は許されなかつた。

二人には鉄壁の羅生門のごとき親友がいた。その鉄壁さはまったく隙がなく。

気安く近づこうとする者は五翌朝には指をぼた餅ににされ、ある者は机の上に”ときめも”と書かれたゲームソフトを置かれるという怪現象に遭遇する。

いつしか、友奈に近づくには死を覚悟せよ、と言われるほどになった。

その守護者の存在を二人の友奈たちは知る由もないが。

「でも、()でならう・・・」

高嶋の眩きに友奈も頷く。いつもの抜けた雰囲気を出している2人からは想像もつかない程の緊張した面持ち。

それには理由がある。

もう1人の友奈、赤嶺友奈の出現が原因だ。

西暦の時代に自分と同じ顔の人間がいたというのは驚いたが、それが三人。勇者部各メンバーから三つ子説まで疑われてしまうほどこの話題はまだ新しい。

敵側の造反神が用意した勇者とあつて、その能力は計り知れない。

バーテックスを使役し、木枯らしの如く姿を現しては消えてゆく。その勢いたるや、

まさに竜巻。

その中で、友奈が憤りのような感情を浮かべたのは、その戦闘の最中で友人である東郷美森が狙われたからだった。

バーテックスと星屑が数を良いことに美森へと照準を合わせ、一斉に襲い来る。

あの時は仲間がすぐそばに居たから美森が怪我をする事はなかったものの、友人にもしもの事を考えると友奈は身が震える。

(私は・・・東郷さんを、みんなを守護るッツ)

大切な人が苦しみ、傷付く事は友奈は絶対に良しとしない。

これまで多くの困難も乗り越えてきた勇者部。だが、無傷だったわけではない。

美森は記憶を失い、なおも勇者として戦った。

風は片目を失い、その妹の樹は声を失い、

花凜は心にダメージを受けて動けない友奈の為に四つの身体の機能を失った。

乃木園子は全身の殆どの機能を失って、小さな神様として祀られ、友達に会わされる

ことなく、大赦の操り人形にされそうになった。

バーテックスとの戦いで、失って、そして取り戻した日常がある。

もうそんな苦しい事は、辛い事はさせたくない。もし、そんなことに合うような役回りならば、

(私だけで十分なんだ……)

胸に強い意志を秘め、友奈が立ち上がった。隣の高嶋も同じような、お互いに分かっているように立ち上がる。

準備運動後、ストレッチと適度な運動を済ませた二人は互いに見つめ合い、構え、組手始める。

強くなる為の一步を踏み出すために。

○

「……ん？　なんでえ、道場がヤケにうるせえじゃねえか」

筋骨隆々とした一人の男が道場の前で立ち止まり、普段は耳にしないような道場内の盛り上がりを神妙な顔で見つめる。

「ガキどもが練習しているにしちゃあ、盛り上がりすぎじゃね？」

遠目で見た眼帯の男が道場内を見るに、生徒たちは何かを見ているように、動きを止めていた。中には、その見ているものに対して、声援や驚きの声を上げている者もいる。

普段の練習で声を張り上げるように教えていたのは彼なのだが、と男が中へ足を踏み入れると生徒の一人が慌てふためいた様子で、

「——か、館長、ツツ」

「おう、オメーら。練習そっちのけで何やってんだ。あと館長アやめろ、先生と呼びなさい」

生徒が苦笑いで謝ると、男は道場内の生徒の視線が隅つこで行われている組手をしている者たちへと向けられているのが分かった。

その者たちは男がどう見ても女子のそれであった。赤い髪の少女二人が組手をしているという事実。

だが、その光景を見ては男が目を疑う。なぜなら、

「へえ……面白れえじゃねえの」

—— なかなかレベルが高エ。

口元を歪ませ、眼帯をしていない片目が怪しく光る。

それは格闘家である己自身が抱く、興味というものだ。それは男の足を少女二人の方へと進ませるには十分すぎる理由だったのである。

○

空手の組手というものは、数種類ある。

一つは、決まった手順に従って技を繰り出す“約束組手”。

一つは、自由に技を掛け合う“自由組手”。

一つは、勝敗を目的とした“試合組手”だ。

友奈と高嶋が行っている組手は試合組手。普通にガチの試合である。なお、ルールは簡単に説明すると、

制限時間は男子は三分、女子は二分。ポイント制。

お互いに技を繰り出し、相手に決まる技や部位でポイントが変わる。

技を繰り出すのは良いが、相手の部位に対してそれが寸止めあること。もし、体に直接当ててしまったら、ペナルティとなる。

最終的には8ポイント差をつけるか、試合終了時のポイント差で勝敗が決まる。

いかに相手の攻撃を躲し、こちらの有効な攻撃を相手に与えるかが重要となってくる競技だ。

「——ふッッ」

友奈の小さいステップから繰り出される中段突きが空を切る。高嶋が友奈の初動を見抜き、先読みした結果だ。

最低限のバックステップでいったん距離を置いた高嶋が慎重に技を繰り出す。

「セイツッ」

顔面への上段突き。寸止めを前提にしているとはいえ、同じ仲間繰り出すには勇

気がいる行為だが、相手の友奈もヤル気だ。さっきの中段突きも予測が出来ていたが、一歩タイミングを間違えれば確実に決まっていた。

高嶋の上段突きに反応した友奈の顔が数センチ移動するのを見て、高嶋は伸び切りそうになった右腕を瞬時に止める。

（――上段はフェイントツツ?!）

完全に釣られた、と友奈が気づく時には懐深くまで潜り込んで、次の攻撃の準備を整えていた。

高嶋のねらいが腹部への中段突きであることは明白。

本気で立会い、技を繰り出す二人に迷いというものはなく、むしろ、気遣いをかけることは相手に対して失礼なのだと思っている。

互いに強さを求め、こうして立会い、二人はお互いの強い部分を認識し、そして尊敬している。

技を繰り出し、躲していく中で友奈たちが感じるのは充足感。できればこの最高の時間が、長く続けば・・・と考えるほど。

「——なら、これでツツ」

友奈の意識とは別に、右足が動き出す。狙うは高嶋の顔面を目がけた上段蹴り。出だしのスピードはほぼ同時、となれば技のスピード次第で点が入る。

だが、二人の技が決まる瞬間、

「——それまでツツ」

試合を止める男の声が、道場内に響いた。

○

友奈たちがお互いに繰り出した技はそれぞれが身体の部位の寸前で止められていた。息を切らしていた二人の硬直が解けて、二人はようやく、自分たちへ視線が注がれていることに気づく。

「あ、あれ？ あれれ．．．？」

「なんか、私たち．．．すつごい注目集めてる？」

「しようがねえさ、お互い、自分だけの世界に入り込んでしまったからなア．．．いい試合だったぜ、二人とも」

友奈たちは二人の試合を止めた、男の姿を見て思わず息をのんだ。

男の身長は180前後、といったところだろうか。頭部の髪がまったく存在しないスキンヘッド、試合の影響で変形した耳、顔面の疵、そして右目を覆う眼帯。物を殴り続けたゆえに分厚くなったであろう拳。

「——え、なにこの人．．．どこの世界の人？」

その男から漂う並みならぬ雰囲気は友奈は困惑する。

だが、男はそんなことを思われているとはつゆ知らず、ため息をつきながら、「駄目だぜ、組手やるんだつたらちゃんと言審判つけなきや．．．」

オイラが止めなきや、いったいいつまで続ける気でいたんだか．．．」

「ハハ・・・すいません」

「私たち、ちよつと熱が入りすぎちゃつたみたいで・・・ご迷惑でしたか？」

自身のしでかしたことに對して、友奈たちは苦笑い。

だがそれを見た男の反応は肩をすくめる程度のもので、

「なあに、構いやしねえさ。道場で練習したい奴がいるつてのは聞いてたからなあ・・・にしても」

「？」

「？」

二人の友奈を凝視した男が腕を組んだ。

「お二人は姉妹か何かかー、こんなにソツクリな二人が空手やつてるもんだから驚いちまつたぜ」

なかなか返答に困る質問をしてくれた、と二人は思う。

友奈と高嶋は容姿がほぼ同じだという事もあり、校内でも興味を持った生徒たちから質問されることもある。

当然、お互いが別の時代の人間だという事は隠しつつ、周りには納得できる形で誤魔化してきて来たのだが。

「——その昔」

返答の内容を考えていた時、男が口を開く。

「総合格闘技で元ヘビー級王者にブラジル出身の双子の格闘家がいたな……名前は——」

「ノゲイラ！」

男が言い終わる前にその名前を出したの高嶋の方だった。

「そうそう、それぞれ。おっちゃん、二人がその生まれ変わりがあって思っちゃったわけだ。」

しかし、お嬢ちゃん、良く知ってるね。空手以外もイける口かい？」

「私、いろんな格闘技の試合見るのが好きなんで！」

なるほど、と男は満面の笑みを浮かべる高嶋を見て小さく笑うと、両の手を高らかに叩いた。

「ホレ、さつさと練習に戻んなッ。正拳突き1000本まだ終わってねえだろッ」

生徒一同に絶望の色が顔に宿る。しかし男の言葉に逆らえないのか氣勢を高めては再び、横一列に並んで正拳突きを虚空へ交互に打ち始めた。

「さて——」

蜘蛛の子を散らすようにその場から離れたのを確認した男は、再び友奈たちに向き合
う。

「お二人さん、つかぬ事をお聞きするけどよお・・・誰かを殴ったことはねエかい？」
「ええ？」

唐突な、それはもう、先ほどの穏やかな雰囲気を一変させるくらいの様変わりをした
男の質問に、友奈たちは動きを止める。

「——ないですよ？」

高嶋が先に答えた。何気ない、いつもの笑顔で。

だが、男は小さく笑い、

「嘘言っちゃイケねえや・・・」

男の片目が大きく見開いた。

「さっきの組手——、一見ルールをしつかり守った”試合組手”だったが・・・

お二人さんの技の繰り出しは・・・ただの人間相手に”ブツ放す”にしては動きが
大振りすぎる

——そう、相手は人じゃなくて」

ふむ、と少し考え込んで男は言った。

「別の生きモン相手、みたいなの……?」

「——ツツツ!？」

笑みを守り通していた高嶋も思わず警戒して、その表情を崩してしまった。

(い、いったい何者なの……この人)

友奈は友奈で、この得体の知れない男に背筋に凍るものを感じられずにはいられなかった。

二人がこの世界でお役目として、人外であるバーテックス、造反神と戦っているという事は、友奈たち勇者とその関係者である巫女と大赦の人々だけだ。

一般の、しかも空手の顧問が男が知りうるはずもないのである。

「あ」

(……もしかして、大赦の人?)

二人の中で同時に納得いく答えがそれだ。

だが、まるで探りを入れるかのような男の問に、彼は本当に大赦の人間なのか、と二人は戸惑うばかりである。

「フフ．．． 答えにくい質問しちまったみたいだな．．．」

男は不敵にも笑うと友奈たちに踵を返し、

「まあ、時間がある時はいつでもいいからここで鍛錬するなり、試合するなり、

好きにしてくださいな——。ただ、ケガだけはしないように．．．、これでも一応

指導者なんぞな」

そう言つて、男はどこかへ消えていく。男の不気味さに、友奈たちはしばらくの間、立ち尽くしていたのだが、やがて。

「えーツツ?!」

「あつ！ 警報！ 樹海化警報がなってるよ!?!」

聞き覚えのあるアラーム音。それは二人の持つ端末から発せられる警報音、『樹海化警報』。造反神の率いるバーテックスが侵攻作戦を開始したことを知らせる音だ。

戦いの鐘が鳴ったことに、二人はお互いに見合うと小さく頷いた。時間が経過するとともに、彼女たちのおける世界は神樹によって防御結界の中に取り込まれ、巨大な樹木へと変貌させていく。樹海化現象と呼ばれるものだ。

○

勇者装束へと姿を変え、現場へと急行した友奈たちは、勇者の力によつて得られる身体能力で、自身よりも何十倍もの大きさを持つ樹木を軽々と飛び越えていく。

「風先輩！　結城友奈、ただいま到着しました！」

「同じく高嶋友奈、到着しました！」

友奈たちの声を聴き、最初に現場に到着していた風と美森がこちらへと振り返る。

一番最初に駆け寄ってきたのは美森だ。

「友奈ちゃん、おかえり」

「うん、東郷さん！　ただいま！」

満面の笑みの友奈を見て、まるで永遠の安寧を得たかのような表情の美森だ。それを見た風はやれやれ、といった顔で、

「来て早々見せつけてくれちゃって・・・そういうのは家でやりなさい」

家だつたらいいのか、と隣にいた高嶋は突っ込みたかつた。多分、樹が隣にいたら確実に寸分も狂うことなく突っ込んでいたに違いない。

「それで——、敵は？」

「私たちも、今着いたところなの。他の勇者たちは距離が離れているから遅れているみたいで……」

友奈の問いに答えた風が自身の武器である大剣を担ぐ。現存する戦力である勇者はこの場にいるだけで5人だ。

「でもヒナちゃんの話だと、バーテックスはいないらしいから、

星屑相手なら皆が来るまで持ちこたえるのは多分大丈夫だよ！」

「駄目よ友奈ちゃん。古今東西、簡単な戦も思わぬ伏兵で一気に戦況をひっくり返されることだってあるのだから、

油断は禁物」

大型のバーテックス相手ならまだしも、今の彼女たちにとってそれよりも下の個体である“星屑”の相手はさほど困難なものではない。

だが、バーテックスは現れないとしても、予想外の事は起きるものである。それを気にしていたのは美森だった。

「え、ちよつと……」

驚きの声を突然上げたのは高嶋だった。

「だ、だれか戦ってるよ!」

指さす方向を見ると、すでに星屑を相手に戦っている者がいた。

「ほんとだ、でもあれ・・・素手で戦ってない? 友奈ズ以外に素手で戦う人って、いたかしら・・・?」

風の疑問に答えるものはいなかった。それは、素手を用いての戦闘をしている勇者は友奈たちを除いて勇者部にはいないという事を知っているからである。

——異様な光景だった。

その者が繰り出した素手による手刀は星屑の体をまるでバターのごとく両断していく。

拳を突けば星屑はその身に巨大な穴を開けさせ、蹴りによる一撃は一度に複数の星屑も撃破した。

「——うそ、あの人、男の人よッッ!!」

風が信じられないといった顔で叫んだ。

男は素足に、柔道着をその身に纏っていた。敵を倒しきった後でも星屑が完全に息絶え、消えるまでは目を離さない残心をとりつつ、息を大きく吐いた。

「あッ た、高嶋ちゃんッ」

「あ、あの人・・・なんでッ」

二人の友奈がその男の顔を見て、驚愕する。忘れもしないだろう、つい先ほどまでお互いに会話していた人物を。

「——つとお、もう来ちまったのかい・・・早いもんだぜ」

構えを解いたその眼帯の男が樹木の上でこちらを見つめている友奈たちに視線を送る。

「自己紹介がそう言えばまだだったな・・・オイラの名前は——」

怪しく笑みを浮かべた眼帯の男が、水の如き動きで構え、その名を勇者達に告げる。

「——愚地独歩です・・・」

——勇者達と神樹様と造反神をこれからビックリするくらい、そしてフザケンナと言わせるくらい困らせる者達。

——それは勇者ではなく、グランドファイ格闘家たちだったのです。

第一話く花結いのきらめきツツく

第二話〈胡散臭い神託〉

空手家、おろちどっぼ愚地独歩がこの世界に迷い込む、実に2か月ほど前のことである。

——東京、とある中華料理店にて。

東京都内で有名なその店に、一人の男がいる。

年齢にいささかギャップを感じさせるガラのシャツを着こなし、右目に眼帯となれば、その男の名は愚地独歩という人物に他ならない。

丸型テーブルには中華特有の香辛料をふんだんに使った料理が並べられており、その香りは反射的にも今しばらく鍛錬してきた独歩の体に再び熱を持たせる程。

料理を一瞥する独歩に対し、向き合うようにして座る一人の男がいる。老人だ。

背は明らかに独歩より低く、まるで力士同士の審判、行司の如き装束に身を包んだその男は料理を見て、気を良くしている独歩を見ては小さく頷いている。

徳川家十三代目当主、徳川光成とくがわみつなり。

日本屈指権力と財力を有する老人である。その名は政治界にまで影響を与えるほどで、彼の前では現役の総理大臣すら萎縮する。

その裏の顔。東京ドーム地下に存在する地下闘技場のオーナー。強者同士に戦い、巡り合わせる場所を提供する事が己の役割だと語り、その為ならば、いかなる財力も惜しまない男である。

「ふむ……」

独歩の手が酒の入ったグラスへと伸びる。半透明な液体、紹興酒を少し眺めては、香りを感じ、そして口に含む。

かなりの甘味とまろやかさを感じた。酸味もあまり感じない、全身に染み渡るような旨味に独歩は息を吐く。

「い……………い紹興酒ですなア」

紹興酒は中国の紹興からの出た酒だ。この手の酒は熟成期間が長ければ長いほど、酸味が減り、旨味は深く、まろやかになる。

独歩が飲んできた中でもこれはかなりの老酒であることが分かった。

ふふ、と前で光成が小さく笑みを浮かべ、

「ええじゃろ。 30年モノの逸品じゃ」

齡80となる、実に老人らしい笑みを浮かべる光成を見て、次に独歩が手を伸ばしたのは餃子だ。 大皿に乗せてある餃子は50個くらいだろうか。

一口放り込み、口内の歯で餃子の皮を破り、溢れ出す肉汁を堪能しては肉を咀嚼し、なおかつ内側に広がる甘味に疑問を抱く。

「・・・甘い？」

餃子とは、こんなにも甘いものだっただろうかと思う独歩に、光成が答えた。

「野菜の甘味じゃ。 肉よりキャベツや玉ねぎを多くしてある」

「野菜・・・」

再び、独歩は餃子を口へと運ぶ。 今度はより細かく咀嚼し、玉ねぎ、そしてキャベツという野菜特有の歯ごたえを感じて、

「なるほどたしかに。 甘味がジューシーだ」

納得する。 光成も紹興酒を手を持ちながら、

「行き過ぎた肉食信仰のせいで勘違いされとるが——、餃子とは野菜料理なのじゃ

からな」

ハハ、まるでグルメ博士だ……。と、内心で笑いながら、独歩は切り出す。「それで徳川のジツちゃんよオ、なんだって俺を呼んだんだ……。？　なんか用があるんだろ？」

独歩の問いに、光成は腕を組んだ。すると、急に一人の人物の名を挙げる。

「——
徳川寒子とくがわさぶこ」

「んん？」

「——
儂の姉じゃ」

光成に姉がいたというのは驚きだが、と独歩は内心で思う。光成は続けて、

「職業は霊媒師」

「——
へ？」

「霊媒師じゃ」

「レイバイシ……。？」

うむ、と光成が頷く。

「つまるところの——
霊能者じゃ」

霊能者とは大きな括りがあり、これは霊を扱う人々の総称である。占い師やスピリ

チュアルカウンセラー、ヒーラーがこれに該当するのだが。

霊媒師もその括りの中の一つらしい。

「まあ、なんでも儂の姉は死んだ者もこの世に呼べるそうなんじゃが……この前はJ、Fケネディを呼んだそうで……」

「ちよ、ちよつと待つてくれやジツちゃん！」

真面目に語る光成を遮るように独歩が待ったをかける。なんじゃ、と光成は不服そうにするが、独歩は自身の頭を掻いて、

「——胡散臭すぎやしねえかい？」

「胡散臭いじゃろ？」

間髪入れず、光成は返した。

「除霊術とか降霊術とか、科学者だけじゃなく一般人ですら感じるこの胡散臭さ——」

「——」
だが、と光成は目を見開いて言う。

「儂の姉は、この100倍胡散臭いッツ」

そんな言い切るほどのことかい、と独歩は心の中で呟く。
で、そんな霊媒師の姉がどうしたのかと問えば、

「——夢を見た、という」

「なんの夢？」

うさん臭さ100倍の光成の姉が見る夢、とは。

「——独歩達が戦う夢じゃ」

ぐいつ、と紹興酒を飲んだ光成が顔を真っ赤にしてその夢を語る。

——名だたる格闘家^{グラップラー}達が、異界の地で異形の怪物と戦う姿。

——怪力無双の少女たちが彼らと戦う姿。

そのイメージが、ここ数日の間に霊媒師である徳川寒子の夢で流れ込んでくるのだ。

「——儂が思うに、これは神託。 いずれ独歩達がこの世界とは異なる場所で新しい敵と戦うという暗示なのじゃ」

「イヤイヤイヤイヤイヤ」

手をブンブン、と振って独歩は否定する。

「モーロクがすぎるぜ。 どこぞの安い二次創作小説じゃねえんだからよ……」

「馬鹿モンがツツ」

力強くテーブルをたたき光成は酔いが回っていたのか少しばかりふらついて、

「——オリジナル、オリ主、クロス、転生、介入、救済……果ては18禁、性転換、百合、BL、ふたなり、闇堕ち、快樂堕ち——、

原作で成し得なかったあらゆる要素を持った原作を愛で、己の私利私欲を満たすが為（意味）に執筆する、それこそが——」

彼は言い放つ。

「——二次創作の醍醐味じやろうがツツツ」

何の話をしてんだ。と、内心で突っ込む独歩は、ふと、思うのだ。

（戦いとか、なんか絡むとヤケに豹変するんだよなア）

「花山と勇次郎の件もある……」

「そーいやア、アイツ等も暫くの間、行方を眩ませてやがったなあ」

花山組の喧嘩師、花山薫と地上最強の生物、範馬勇次郎が二日、三日ほど消息を絶つていたのは記憶に新しい。

勇次郎に関しては、全世界から衛星によつて監視されているので突如として姿が消え

た時は、全世界の車両のカーナビがあり得ない動きをして、世界中で勇次郎の搜索網が敷かれたとか。

「まあ、なんにせよ・・・用心することちゃ、独歩よ」

「ふむ・・・ところでよオ、ジツちゃん。聞きてえ事があつたんだア」

気付けば拳を握っていた独歩がいる。小さく、小刻みに震えさせているその拳が意味するものとは。

「——その敵ア、強エのかい？」

恐怖とか、酒に酔ったとかではない。強さを求め、力を付け、技術を磨き、強敵と戦う。

そんな人生を歩んできた者達にとって、この震えはこう呼ばれる。

“武者震い”、と。

「——ああ」

光成は顔全体広がる皺を更に広げるような満面の笑みで言った。

「そりやあもう、べらぼうに、じゃ♡」

○

——その食事の帰路につく途中である。 事件が起きた。

「なんだア．．．．コリヤア」

独歩の歩いていた道路が、歪む。 歩いてきたコンクリで構成された道路はまるで粘土の如きうねりを見せながら、その姿を変質させていく。

「~~~~~ツツツ
!!!????」

歪んだのは地面だけではない、独歩のいるその空間全てが一気に歪み始めていた。

その変質していく世界に、気持ち悪さを覚える独歩だったが、それはすぐに解放されることになる。

——
気が付けば、見知らぬ土地にいた。

「おッ!?!」

先ほどまでいた住宅街とは打って代わり、開けた土地へと移動していたことに驚愕する。

「おッ!?!」

時間帯は夜だったというのにいつの間にか昼。目の前にあるのは「かめや」と書かれた看板の店。

「おッ!?!」

その店がもつ、謎の魔力に引き寄せられるかのように、入店し、その店の一番うまいであろう「うどん」を注文し、

(この腰の入ってる「うどん」・・・ココって、もしかしてツツ)

無我夢中で白く、腰の入っているべらぼうに美味しい「うどん」をすすり上げ、独歩は気付く。

（——四国……香川県ツツツ
!!!????）

○

「——これが、事の顛末……信じてもらえるかい？」

勇者部部屋にて、椅子に座った独歩は語り終え、息を吐く。長話には疲れれるものだ。

「フツーだったら、信じられない、わよね……」

独歩の前に立っている勇者部部长、犬吠埼風は腕を組んだ。

「でも、この世界も特殊な世界なワケで、フツーじゃないのだから……そういうこともありえるのかしら」

「——神樹様の神託では、私たち巫女も、そういう事態になるということは把握していませんし……」

神樹の神託を受信する役を務める上里ひなたを含めた巫女組は怪訝な表情だ。

それもそのはずである。これまでバーテックスと戦ってきたのは勇者と呼ばれる少女ばかり。

そこに現れたムキムキの武術達者のオッサン登場だ。困惑しない方がどうかしてるレベルである。

「一つだけ、確認したいのですが……」

東郷美森は険しい表情で独歩へ尋ねた。

「おう……イイゼエ、なんでも——」

独歩は驚愕する。ずい、と前に出てきた美森ではなく、中学生らしからぬ飛び出た、その二つの双丘に。

（——エッツツツツツ）

この子たちは、中学生のはずだ。と、独歩は思考する。だが、よく見れば勇者部の部員たちはその年相応のあどけなさも備えたものもいれば、美森のような大人びた風貌を持つ者も何人かいる。

もし若い頃の範馬勇次郎がいたら、とんでもないことになっていただろう。

「……恐ろしい部活動だぜココはよオ」

「……?」

続けな、と独歩が言うと、美森は気を取り直して言うのだ。

「——愚地さんは、敵、なんですか……味方、なんですか？」

「……東郷、それって」

風の言葉に、なお険しい表情を崩さない美森が答える。

「もしかしたら、造反神の手先なんてことも——」

「東郷さん、多分それは違うよ」

美森の言葉に割って入ったのは友奈だった。

「友奈ちゃん？」

「もし愚地さんが敵だったんなら、学校にいる私たちに一番近い距離にいるこの人は戦いを仕掛けてくるはずだよ？」

私は、愚地さんは不意打ちとか、卑怯な技とか、そういうのはしない人だと思うんだけどな」

「——」

独歩は無言だった。なぜなら、

(めっちゃ俺に刺さる言葉じゃねえか)

空手を教える指導者としての愚地独歩は友奈の言う通りの人物だろう。だが、格闘

家である愚地独歩は違う。

不意打ち、だまし討ち、負傷している相手に追撃を容赦なく行ったこともある独歩にとつて、友奈の言葉は胸に刺さる。

「————ですよね？」

加えて、悪いことを知らないような無垢なこの笑顔、これを裏切るのはとても忍びなく。

「おうよ」

言つてしまった。あまりにも無責任すぎやしないか、自分。

「んー、疑問は残るけど、友奈ちゃんがそういうなら……」

美森も納得したようで、独歩も安堵の息をつく。

「まあ、俺としても判らねえ事が多すぎてなあ……空手部の顧問の合間、教えてもらおうとするかい」

「あ、だったら私、提案があります！」

快活な声上がる。その人物は高嶋だった。

「おおよ？ どうしたんでい、双子の」

実際に双子ではないのだが、しかし高嶋は気にすることなく、

「愚地さんは、武術の達人なんですよね？」

そらそうよ、と独歩は拳を突きだし、

「こう見えてもオイラ、地元じゃ“武神”だとか、“虎殺し”なんて呼ばれてんだぜ？
自慢じゃねえがな」

おお、と高嶋は両手を握って喜々とした表情を浮かべる。

「だったら、私たちに稽古をつけてほしいんですツツ」

「————ほう」

独歩はそう言うと、高嶋は続け、

「愚地さんは敵と戦うために来たんですよね？ 私たちも、愚地さんの敵について、この時代について、いっぱい教えたいことがあるんです!!」

「————つまり、その見返りに教えを乞うってワケか・・・たしかに」

現段階の独歩にはこの世界の仕組みというものも、敵の名前も勇者についても知識はない。いかなる戦いにおいても“敵を知ることが百戦危うからず”、という言葉もあるくらいだ。

「しかし、他にも勇者つてのはいるんだろ？ 俺が言うのもなんだがア、部外者の男がいきなり来て指導とか、納得する奴がいるとは思えねえが」

現在、空手部の顧問をしていることもあつて、教えることは何も問題はない。だが、考慮するなら、彼女たち勇者の半数が女子中学生だという事だろうか。

いきなり現れたオッサンに指導を受けて多感な年頃の彼女達の中には良く思わない者もいる筈だ。

だが、そんな心配をものともしないような声がある。

「ほかの部員たちへの説得は私もやります」

今度は風が手を挙げた。

「あ、じゃあ私も！」

友奈も手を挙げる。するとその場にいた全員が頷いて、協力するように賛同し始めた。

この少女たちは互いに協力し合い、これまでの戦いの難所を切り抜けてきたのだらう。

別の時代の、赤の他人がここまで協力し合えるなど、とてもできない。それこそ、死線を潜り抜けてきたからこそその絆。

「——イイ子達ばつかじゃねえか」

自身の息子にも学んでもらいたいものだ、と独歩は思う。

「いいぜ。その話、乗ったッ」

独歩のその承諾に、高嶋が笑顔を浮かべる。その笑顔を見て、独歩は考えていた。

（この娘、実は最初からこうなるって分かってたんじゃないの？）

「ありがとう、独歩ちゃんツツ」

「ど、ドツポちゃんツツ!?」

高嶋の自身の覚えのある呼ばれ方に独歩は思わず戸惑う。

「いきなり〝ちゃん〝づけは……まずいのでは」

「いずれはそう呼ぶつもりかい……」

美森が苦笑いに突っ込む風だが、対する独歩は小さく笑って、

「——イヤ、構わねエゼ」

——ドツポちゃん、私のスーパーマンツツ

元の世界、自身の妻である夏江と同じ名前で呼ばれるのは抵抗もなく、むしろ懐かしくも感じた。

(そーいやア、この世界に来ちまうと、夏江と離れ離れ……しばらく会えないか)

一人残してきた妻を思うと寂しくもなるが、ここで己がやるべきことを見定めることが先決だ。

だがそれでも、最愛の妻の事は忘れられないので、

(まあ、ここから無事に帰ったらよオ——)

——
尻でも撫でてやるか。

第二話く胡散臭い神託ツツく

第三話く焦燥く

——酒を飲んでゐる男がいる。

バーのテーブルに腰を掛けた20代ほどの男の体格は日本人の者とは掛け離れていた。

チャイナ服越しても分かる隆起した広背筋、厳しい鍛錬によつて余分な脂肪を極力そぎ落とした無駄のない筋肉によつて構成された上腕。

一言で表すなら、その男の身体は相当鍛え込まれていた。

極めつけ目を惹くのは男の片足が義足という所だろうか。

片足が義足のその男、烈海王れつかいおうと呼ばれる。

彼は中国拳法を極めんとする拳法家だ。

かつては、愚地独歩の息子である愚地克己と戦い、範馬勇次郎の息子、範馬刃牙と戦つたこともある人物。

「……ふう」

飲み下したと同時に感じるアルコールの熱さを喉と腹の部分に感じて、彼は小さく息を吐く。

「この店に上質な茅台酒マオタイがあると聞いていた……」

グラスを静かに置いて、彼は笑う。それは、この酒に対しての彼が得た満足度を表すもので、

「——来てよかった」

遠く離れた中国の味をこの日本という国に来て、味わうことができたことに烈は感謝の意を込めて、その言葉を口にする。

マオタイ酒は中国で生産される白酒と呼ばれる蒸留酒だ。国酒とも呼ばれる。

原料は麦、もち米、もろこしなど等。

熟成期間によって値段が大きく変わり、高値でつくマオタイ酒は数百万するものもあるとか。

近年は飲み易いようにアルコール度数を抑えた物が市場に出ている。が、烈が今飲んでるのは市場のものを軽く凌駕するものだ。

アルコール度数抑え目のマオタイはだいたい38〜53度。だが、本場は60度を遥かに越える。

「くくくッッ」

一口を口の中に運んだ烈が感じたのは痺れた。華やかな味とは裏腹に、アルコール度数60と言う強烈な痺れが烈の舌を唸らせる。

何度も何度も口内で味わう訳にはいかず、喉奥まで押し込んでは一気に食道へ、胃袋の中へと落としていくが、液体が喉から胃袋へと駆け抜けた部分に熱を持つのを烈は感じ、思わずむせ返りそうになる。

「おお・・・」

少しばかり癖になりそうな味。

そして飲み干した後のグラスから漂う芳醇な香りも、マオタイ酒の魅力の一つだ。

——彼はかれこれ数時間、その酒を注文しては飲み、それを繰り返しては、じつとしていく時間を過ごしていた。

傍から見ればアルコール中毒者なのか、と取れる。

だが酒の大量摂取をしている訳ではない、ましてや、酒におぼれるようなタイプでもない。

ただ烈海王は、考えていた。

「……」

自身の右足に目が行く。かつて己の鍛え抜いた上半身を、中国四千年の技術を支えていた右足はひざ下より存在が無く、棒状の義足が彼の右足の代わりだ。

蘇った原始人、古代の戦士、ピクルとの闘いで負った傷。

己の持てる武術、中国四千年の歴史を持つてしても、一億四千年前の古代の力にはまったく歯が立たず、烈は敗北を喫し——、

——その代償として、右足を食い千切られた。

後悔はない。むしろその後で愚地独歩の息子である克己が己の中国武術と空手を合作技で、ピクルに一泡吹かせてやれたから良かったと思っっている。

克己も右腕を失ったが、彼も言っていた。

——後悔はない、と。

（だが私は）

足を失い、以前ほどのアクティブな動きが出来なくなつたのは確かだった。

脚は全ての打撃技の起点となる。拳は足を使って打つ、という言葉があるように、脚を失うことで大幅なパワーダウンが起きていた。

武人・烈海王にとって片足が無くなつたのであれば、“片足が無い戦い”を強いられることになる。

それは、これまで自身が身を置いてきた戦いの世界において圧倒的不利。

義足を付ける際に武闘家としての人生を止めるつもりは無かった。だが、彼の主治医は残酷にも告げる。

——貴方はファイターとして、充分に戦えない。

当然、烈はその声を否定して見せた。リハビリを終え、以前ほどのスピードは無い

が、走れるまでに回復した。日課の鍛錬も怪我をする前よりも量を増やして行い、こなすことが出来ている。

それでも彼が悩んだのは武闘家として自分の未来のビジョンが見えないというものだった。

—— 本当に日々臨戦態勢である武闘家が突如襲われて対応できるのか、

(——この足でツツ)

—— 片足を狙い、地面に倒され、関節技を決められたとして、逃げられるのか、

(——この足でツツ)

—— 義足のベルト、万が一外れたら？ 義足の先端は木製だ。もし折れたら？

(戦えるのかツツ!? ——この足でツツ)

武闘家として戦えるのか、戦えないのかという不安が烈の進む道に影を落とす。そ

の影は心の中に巢食うように纏わりついたのだ。

どんなに鍛錬を積み重ね、払拭しようとしても抗えない——不安。

まるで出口のないトンネルを歩くが如く彷徨う毎日。そんな日々を烈はここ最近、送っていた。

だからなのか、中国の酒を味わえるというこの店を見つけてからは入り浸るようになっていたのである。

(——酒ツ 飲まずにはいられないツツ)

程よいアルコールは気分を高揚させる。一瞬でも烈の不安は解消された。が、それは一時的な物だ。

時間が経てばすぐに暗い闇が烈を引き摺りこもうとするし、そんな酒に頼っている自分にも嫌気がさしていた。

『引退』。その二文字が色濃く烈の脳裏を過ぎって、彼はグラスを割れない程度にテーブルに叩きつけて、我に返る。

店主は気にしないといった顔で作業を一瞬だけ止めて、すぐに元の作業に戻った。懐の良さ、というか寛容なのか、どちらにしろ烈はまた己を恥じた。

「失礼したツツツ」

時間も気にし始め、烈はテーブルに代金を置き、店を後にする。

「——脆くなった……とても……」

武術を極め、肉体的にも精神的にも鋼と昇華させていると自負している筈なのに、今の自分を見てはこれまでの鍛錬が嘘だったかのようだ。

「——どうすればいい……ツツ」

己自身に問う。

「——どう進めばいい……ツツ」

まるで藁にもすがるような想いで、

（どうすればいいのだツツ 中国拳法よツツ）

いくら自分に問いを重ねても、答えは出なかった。

——外に映える夜の月はそんな烈を嗤うかのように光っていた。

○

(・・・少々飲み過ぎたか)

蒸氣した肌を寒空が優しく撫でる。酒によって上昇した体温、視界のぼやけなど、自分でも珍しく深酒してしまったと烈は猛省し、夜道を歩く。

(明日は神心会での合同訓練がある。ホテルに戻り、早く休養を取る為に寝なければ)

そう考えていた時だった。

「・・・むッ？」

烈の視界が歪み始める。空や地面や、壁が空間湾曲をお越し、辺り一面が変貌していくのを烈は目にした、気がした。

何度目をこすつても、それはぼやけ程度にしか感じず、烈は周りが樹木に覆われた世

界に居るということにすら気づいてはいなかった。

「これは・・・幻術？」

だがうつすらと見える現実離れた世界を瞳に納めながら以前、ドリアン海王が用いていた幻覚を引き起こす催眠術を烈は思い出す。

だが、これは全て酒によるものだ、と勝手に決めつけて烈は歩くのを止めない。

異変というものをかすかに感じながらも歩を進めると、樹木の陰から何か、白い生物が漂うように現れたのだ。

烈の中国には“一目五先生”という一つ目と口を持つ妖怪がいる。ちょうど目の前の白い生物同じ大きさなのだが、一目五先生は一つ目で、口があるのに対して、この生物は人間のような歯を持った口だけだ。

空中に浮いているし、なにか尾ひれには触手のようなものまで付いている。

(夢——か)

それでも深酒の影響は大きかったらしく、烈の思考は今の状況が危険な状態だと判断

するには冷静さを欠いていた。

今でもこの空間を夢、幻だと信じ、全て酒のせいにしていたのである。

白い生物たちは歯をカチカチと鳴らし、烈の様子を窺っているようだった。

そんな彼らは殺気のようなものも醸し出して、いつでも襲い掛かる準備は出来ている、ということも烈は理解できていない。

「あー、ちょっとみんな動かないでー」

「・・・？」

烈が耳にしたのは女の声だ。それは白い生物の後ろから何か跳躍するように飛び上がって、烈の前に現れる。

「・・・とつとつとつ！」

勢い余ってつんのめりそうになった身体を制御しながら、身を起したのは少女だった。

緋色の髪に、小麦色に焼けた肌、極めて注意を惹くのは――

(一)、コスプレ・・・ツツ?)

烈のいる日本という国にはコスプレという文化がある。その手の作品のキャラになりきる為に衣装を創り、それを着て催しものに参加することで周囲からの評価を得る者たちを“コスプレイヤー”と呼ぶらしい。

ちなみに、それを教えてくれたのは以外にもあの末堂すえむらう厚あつしだったのは意外だった。目の前の少女は、烈がテレビなどでみたそれと似たような恰好をしていたために、頭の中ではその言葉が浮かんだのだ。

「造反神様が”未解放地域に変なのがいる”って言ってるから来てみれば——」
緋色の髪を掻きあげて、異様な美しさを持つその少女は烈の顔を間近でジロジロと見始める。

「ツツツ!?!」

迫りくる少女の顔に、烈は思わず数歩だけ後ずさった。

「勇者以外の人がこの地域に入れる訳がない——、最近勇者部に力を貸してる人のお仲間さんかな？」

「仲間……誰だ、それは」

んー、と少女は唸っては人差し指を自身の口元にあてて、

「あつ、アレだ。右目に眼帯してて、空手家の」

眼帯に空手、その二つのワードだけで、酒でぼやけた頭でもすぐに浮かび上がる人物がいる。愚地独歩だ。

彼を知る者という事は、神心会の関係者だろうか、と烈は勝手に思考を進める。

そして、彼が口にしたのは、

「その人物は、私のよく知る人物だ。同じく、武の道を志している——」

「へエ……!!」

どの台詞の辺りからだったか分からなかったが、少女が確かに浮かべていたモノ——

——それは邪悪。

烈のその言葉は少女には決して言っではいけない言葉だったのだ。

「——ツツ!?!」

ぼやけた視界が冴えるような寒気を覚えた時、烈の目の前の少女は手甲を携えた右手を振りかざしていた。

両目を妖しく輝かせ、小さくタメを作り、

「——勇者パンチ」

手甲を纏う腕を突きだす。自分の腹部に少女の拳が到達するのを烈は黙って見る

事しかできなかつた。

「——ツツツ?!」

速度は音速^{マッハ}、

拳が烈の溝尾を抉り、

衝撃が全身を裂かんとばかりに駆け巡る。

それはとても、少女の力とは思えないような重みを持った一撃であり、

「が、・・・ごツ!!」

腹部から口元にかけて昇ってくる感覚、吐きはしなかつたものの、膝を曲げ、身体をくの字にするには十分すぎる威力だった。

直後、下がった頭部の後ろで何かがトン、と当たるような感覚とともに、烈の視界が、意識が、完全に奪われる。

後頭部への手刀。漫画だけの世界かも知れないが、実際に出来るらしい。むし

ろ、死ぬこともある気絶技の絶技。

「倒れ、モノを言わなくなつた烈。気絶して動かないのかを確かめるように少女が烈の身体を軽く人差し指で突いてみる。

だが、彼が起きることが無いと確信して、笑みを浮かべた。

「ナアんだ・・・弱いね」

あと酒臭いな、と少女は続け、

「その空手の人の仲間なら・・・って思つただけだ。造反神様も考え過ぎだよね」

だが自身の必殺拳をまともに食らつて生きているだけでも異常な存在なのが分かる。

それでも尚、その程度の強さは今の少女にとって何も障害にはなりえない。

「んー？ なあに？」

少女の側に白い生き物が寄つてきた。

その頭部らしき部分を撫でて、その生き物が、目の前に倒れた男を食べてもいいかと、ねだつてきている事を察する。

「ダメだよ。私ひとりで済んじゃうくらいの人だし、これなら私たちの計画にも支障は起きないから——」

あくまで殺すつもりはない、と言った少女は遠くにいた白い生き物とは少し形状を変えている生き物を見つけて、こちらへと呼び寄せた。

「アタツカくん、この人を解放地域の適当な場所に置いてきてよ。食べちゃダメだからね？」

もとより私に口はない、と言いたげなその生き物は触手で烈を担いではどこかへと飛んで行った。

アタツカと呼ばれる生物の姿が見えなくなつて、少女は一息つく。

「さて、そんなことより次の作戦作戦……いつやろうかな、勇者部襲撃」

完全に悪いことを実践する悪役の顔ソレになつていた少女が歩くのを止める。頭に響いてくるこの感覚は確か、

「ああ、造反神様。変な人は私が退治しておきましたよーっと」

自分の主に快活な声で答え、少女は脳内に響いてくる声に一人で答え始めた。傍から見れば独り事を呟いている光景。

だが、ここにもとより「人間は一人」。気にすることは無い。

「さて、そろそろ戻るかな。——あかみねゆうな赤嶺友奈、ただいま帰還します！ なんちゃつ

て

にかつ、と笑ったその少女——、赤嶺友奈は白の生物の背の部分に乗って、どこかへと去っていくのだった。

○

——
数刻後。

烈の身体は見知らぬ土地の自販機に対して背を預けるようにして、意識を失っていた。

虚ろな瞳は開くことなく、腕は力なく垂れ下がっている。だが時間が経てば、いずれは目覚めるだろう。

そんな時。

「……むむ」

未だ意識が目覚める事のない烈の前に、一人のコートを着た・・・褐色肌の少女が立ち止まった。

第四話く命を賭してく

古波蔵棗は勇者である。

彼女は四国より遙か遠くに位置する南の地方、沖繩の勇者だ。

「……」

外気温がそれほど低くはないというのにコートを着た少女、棗はその双眸で自販機にもたれかかっている男を見つめる。

「これは……酒、の匂い」

自身の鼻を刺激するの独特の香りはアルコールの物だと理解した棗は、この男が酔い倒れて、この場所で寝てしまったのだと予想を立てては納得する。

「ふう……さ、寒い」

風が吹いた瞬間の肌寒さを感じ、棗の身体が震える。この気温でコートを着ている理由、それは彼女が極度の寒がり故の反応である。

沖繩は年中気温が高いこともあり本土、——つまり四国の気温差が生じる為、寒冷地に対応できていない棗はいつも外出時はこのコートを着ていた。

だが棗は思う。

「——この人は・・・もつと寒いのだろうか」

酒に溺れるのは人の勝手だ。自分の故郷である沖縄の道端にも泡盛を大量に飲んだ男の身体が早朝ゴミ収集場でいびきを掻いているのを見たことがある。

だが、元の性格だからなのか、勇者だからなのか棗にはその男の事を放っておくことが出来なかった。

「.....」

震える手つきで棗はコートを脱ぐ。脱いだコートの上は讚州中学の制服だけだ。

元より長い外出にはしないつもりであつたため、これ以上の服は着て来ていない。

コートを男の上半身を覆うように掛ける。これなら寒くは無いだろう。

「.....これで、よし」

満足げに頷いた彼女に風が吹き付ける。コートを着ていた時点でかなり寒いと感じていたのに、それを脱いでしまえば彼女にとってその今の外気は真冬と感じてしまう。

このまま寝ている男を起こすのは忍びない、そう考えた棗がその場を去ろうとした時だ。

『ワンツワンツ!!』

後ろからの声に棗が振り返ると、野犬が男の側にいた。

自販機に背を預けている男に対して、明らかに敵意の唸り声を上げなら犬歯をむき出しにして徐々に男へと近づいていく。

「こ、これは……」

マズイ、と棗が急ぎ野犬近くまで駆け出す。

犬の噛みつきというのはかなり痛い。予防接種を受けていない野犬の噛みつきは狂犬病を発症させる可能性すらあるのだ。

「しっ、しっしっ……」

棗には危害を加えるつもりはなく、手を振ると犬は棗の存在に気付いて一目散にどこかへ駆けていった。

脅威が去ったのを確認して、棗は一息をつく。

「やはり、誰かを呼ぼうか……」

神樹様を作り出した境界内の世界だと言っても普通に犯罪とかは起きているらしく、棗が居るこの近辺では近々、酔っ払いなどを狙った物取りが現れるというのを聞いていた。

勇者部としての活動で、深夜までの飲酒は極力控えるようにと書かれたポスターを作成してほしいと市の方で依頼されたのは記憶に新しい。

野生の動物と物取りという危険がある中で方するというのは、ますます放っておけない。

「しまった・・・」

スマホを使って誰かを呼ぼうとした棗がスマホを確認しようとして眉を潜める。ポケットにスマホは無かった。自室へ置き忘れてきてしまったのだ。

これでは連絡どころか、勇者に変身して男を担ぐことすらも出来ない。

「・・・・・・・・」

一際強く吹く風、今の棗にとっては一刻も早く帰りたいのは確かだ。自室へ戻り、一年間起動している炬燵のスイッチを入れ、犬吠咲風が勧めてくれたホットココアを飲んで、身体を暖めたい。

だが彼女の――、海は言っている。

「うん、そうだ・・・な」

人ならぬ声に耳を澄ませて、それが自分が抱いていた重いと同調した事で棗は覚悟を決めたのだろう。

むしろ、こんな所で人を簡単に見捨てるような者が勇者であるはずがないのだ。

○ 「……む、むう」

意識がはつきりと戻り始めたのは何十秒前だったか、と烈は自分自身に問いながらも小さく瞬きを繰り返す。

『——勇者。パンチ』

「ツツツ」

徐々に覚醒し始めるとともに思い出されるのは、謎の衣服を纏った少女。

そしてその少女に一撃をもらい、気絶させられてしまったという記憶。

（見事な正拳突きだった……）

少女が抉拳で抉った腹の部分を烈は摩る。酒を飲み、不意を突かれたが少女の繰り

出した正拳突きは精錬されたものだったのだ。

そのスピードは愚地克己のマツハ突きにも、パワーは烈が誇る崩拳にも劣らないものだった。

「夢であれば・・・良かった」

しかし、烈の心に刻まれた“年下の少女に負けた”という自身の武術歴史にあるまじき黒星という事実には歯を噛みしめる。

それが現実ではなく、夢であれば良いと思う程に。

“引退”という文字がこれを機に色濃く自身の脳内で浮かび上がっていくのを感じた烈。もういつそのこと、母国である中国に引きこもろうか。そう考えていた時だ。

「コート・・・一体、誰の？」

自身に掛けられていた誰の物とも分からないコートに烈が唸る。コート自体、烈は買った覚えがないし、この季節の気温では無縁の物だ。

「・・・ツツツ?!」

だが、突如として烈の胸にざわめきが去来する。

それは、周囲の状況を確認しようとした烈が徐々に視線を動かし始めた時だった。

烈の視線が徐々に地面から上に向かうにつれて、見える物がある。人の脚だ。

——視線を完全に見上げた先、少女が立っていた。

「え．．．．？」

何者かも分からない者からの攻撃を受け、気絶した自分がいて、目を覚ませば目の前には誰かが居る。

確証は無いのに烈の中では既に“守護られた”という予想が建てられた。そして同時に感じたこの既視感^{デジャヴ}。

死刑囚である暗器使い、ヘクター・ドイルと戦う中で意識を失った烈にトドメを刺すどころか、烈が目を覚ますまでその身を挺して警護していたその状況が烈の中でフラッシュバックした。

「ば、バカな．．．」

烈は息を呑む。

（見ず知らずの他人の為に——）

亀の如き速度で身を起こしながら、

「——一晩中私を警護していたのかツツ この少女はツツ!!!」

目の前に立つ少女を見据えた。

「.....」

虚ろな目を浮かべた少女は身を揺らしながらも、尚その場に倒れることなく立ち続けている。

頭には彼女の髪を自身に都合のいい巣だと勘違いしたカラスが数匹が止まっていた。

「——ツツ」

烈は即座に、群がるカラスを駆け出す挙動で追い払うと少女の首元に手をあてる。

カラスは死骸に、もしくは死にかけの出す生き物の死臭に反応して寄ってくる。ド

イルの時もカラスが群がっていた。

これが同じ状況ならば、彼女は死に体なのではないかと不安に駆られる烈。だが、

それは杞憂に過ぎなかった。

「——脈はあるツツ 生きているツツ」

確かにある反応に烈は安堵する。だが、それも束の間で少女の鼓動はあまりにも弱

弱しい。

「.....き、キミツ」

突如として、少女が烈の身体に凭れるように倒れ込んできた。烈は避けることなく

少女の身体を受け止める。

「ふう……ふう……」

「い、コレは……ッッ」

荒い息、上下する肩。顔は赤く、服越しでも感じる体温。

額に手を当てた烈は確信する。少女が酷い風邪を引いているということに。

「クッ……、すぐに神心会の医務室へ……ッッ!？」

かつて彼がそうしたように、神心会の道場へ連絡をつけようとするが、烈はここであ
る事に気付く。

(い)は……どこだッッ)

周囲は、彼が今までいた東京の街中とは大きくかけ離れた場所だった。

見知らぬ建物、看板、土地、全てに覚えがない烈は今いる自分の現在地が分からない。

それもその筈である。烈が今いるこの場所は、彼が居た東京ではないのだから。

——万事休す。

そんな言葉が脳裏を過ぎる。それはまたしても烈の敗北の歴史に新しい黒星を植

え付けるものだ。

最新の敗北を刻まれ、何もできない烈は自身の無力さに唇を強く噛む。

「——州・・・学」

「なにツツ!？」

弱弱しく、少女が何かを呟いた。か細い声で繰り返している少女の声に烈は耳を澄ます。

「讚・・・州・・・中学——」

「サンシユウチュウガク・・・」

聞き覚えのない学校の名を出され、烈は困惑する。だが、それも一瞬のことだ。学校であれば、そこには必ずと言っていいほど保健室という医療機関が存在する。

見知らぬ土地で土地勘も無く、知らない名の学校。だがその存在に烈は賭けた。

「その場所はツツツ」

小麦色の肌の腕が力を振り絞って示した方向は南東。その直後に少女の腕から力がなくなったのか、ぷらん、と垂れ下がる。

眠るように静かになってしまった少女の体力は限界に近いのかもしれない。

「方角さえ分かればツ」

烈は上半身の服を脱ぎ、上裸の背に少女を乗せては脱いだ衣服で烈ごと固定するよう
にキツく巻きつけては固く結ぶ。

(肝心なのは——)

背負っている少女が最後に示した方角を再度確認する。当然、その方向には途中で道
路や、橋などの障害があるわけだが問題ない。

(数時間もの間、体調不良を冒してまで……見ず知らずの私を……守ったツツ)
この少女によつて守られたというその事実のみが、烈を突き動かす。

「スウ……」

——これから始まる激しい運動に備え、全身の筋肉とうい細胞に酸素を送り込む。
十秒ほど繰り返して、準備が整った烈が構える。

「死なせはせんツツ!!」

目指すはこの少女の通う学校、讃州中学。

少女の命運を賭けた激走が今、始まる。

第五話～守護（まも）られて～

カンフーシューズと義足がコンクリートの地面を蹴る音が交互に街道を駆けていく。烈海王は少女を背負い全速力で疾走していた。

傍から見れば上裸の中国人が少女を背負って走るといふ犯罪と見間違えられても止む無しな状況、だが烈にとってはそんな事をどうでも良いと考えさせられるほどに走る理由がある。

それは命の恩人でもあるこの少女を、守護ること。

（義足の影響・・・なしッツ）

激しいリハビリを乗り越え、尚且つ鍛錬を続けた足腰は衰えることなく、むしろ更に強健なモノとなっていた。

発達し、走ることに抵抗することも無く馴染んだその筋肉は義足によるハンデを感じさせない程に烈の移動速度を支えている。

特注の義足だ。鍛錬をしても壊れないような強固で、軽い素材を使用している。徳川財閥の技術者に感謝をしよう、とその出来栄えに改めて感動した烈だった。

「……ムッ」

少女が示した方角に向かうには、横断歩道を渡らなければならなかった。しかし、都合悪く信号は赤。おまけに、朝一出勤してくる車の多さから、無理に道路を渡ろうとしても危険なだけである。

少し視線を上げれば歩道橋が見える。烈はそれを利用することにした。

常備している縄じょう、錨びょうを伸ばすと、歩道橋の欄干目がけて投擲。縄錨は中国の暗器だ。ロープの先端には重しが付いていて、それを相手にぶつける打撃武器。

真つ直ぐに投擲された縄錨は欄干に巻きつき、綺麗に引つ掛ると烈は腕力と脚力を同時に利用し、跳ぶ。

(最速で……、最短距離をツツ)

欄干をもとび越え、歩道橋を走りながらまたしても、跳ぶ。飛び降りる際には外灯の一部に縄錨を投げつけ、勢いを殺して着地して見せた。

着地の瞬間、周囲からすれば空から急に男が振ってきたという事実にとよめき立つ。「うわああああ!!!、いきなり出てくるなア! どけどけどけくくくツツツ!!!」

着地したその瞬間、烈の約五メートルの距離までに小柄な少女が乗ったマウンテンバイクが迫る。

かなりの速度を出していたからか、急な烈の登場にブレーキを掛けるも間に合わず、

完全に衝突するタイミングである。

判断は一瞬、行動は刹那。迫りくる危機に烈が繰り出したのは、

「——^{フツ}墳ツ」

マウンテンバイクのハンドルバーに向けて掌打。烈がバイクに触れた瞬間、マウンテンバイクの動きはピタリと止まる。

「え？」

バイクの持ち主である少女の後方から破壊音。振り返れば、自身のマウンテンバイクの後方のタイヤ、部品が粉々に砕け散っている。

「う、後ろだけ……？」

浸透勁。力を効率よく相手に与える事に特化した発勁の一種。烈の掌打の威力をマウンテンバイクの後方部分にのみ伝達させた結果だ。

「すまぬツ 讃州中学はあの方角で間違いないかツツ」

「え、ああ……タマもそこに行く途中だ……」

事故を起こしたはずなのに、相手も自分も無事と言う奇怪な状況に判断の追いつかないタマと自称する少女がそう答えたのを聞いた烈は、

「有難ウツ 私の名は烈——、空手道・神心会まで連絡をくれツツ」

丁寧なお辞儀をした後、烈は駆けだした。残された少女は首を傾げ、

「か、空手？ か、カンフー？ ……つていうかなんでアイツの背中に棗が——、つて、ああああああああ!!」

タマという少女は気付く。自身の愛車が粉々になってしまったという事実には。

「タマがこつちの世界で買ったアグレッササーコンプがあああああツツ!!」

吹き飛んだ後輪と部品を手を取つては目に涙を溜め、絶望の叫びが讃州市に木霊した。

○

「見えたツツ」

激走を続けること10分。烈の両目は讃州中学を捉えていた。遠く見積もつて

も、その距離は凡そ3キロくらいか。

いずれにせよ、このスピードを維持できれば、すぐたどり着ける距離である。

「——ツツ!!? あれはツツツ」

だがその烈の前に立ちはだかるものがある。川だ。

一心不乱に走り続けた烈。目測を誤ったか、渡るべき橋より最も遠い川辺へと出て

しまっていた。己の目測の甘さを烈は悔やむ。

（ここを越えれば目的地・・・）

走りながら、烈は状況を整理する。河を越えれば目的地。だが、渡るための橋までは1キロ以上、遠回りする時間は無い。

（やむを得まい。距離——20メートル・・・歩数にして、8000～9000歩踏みツツ。

——問題は無いツ）

問題は無い、だがそれは以前の烈ならばの話だ。この世界に来る前の右足を失う以前の烈ならば、少女一人抱えても、河を渡る事が出来ただろう。

だが、今の烈の義足では川の水を高速で踏むことは出来ない。二人ならば、確実に沈む。

（やれるかツツ この義足でツツ —— 否ツツ）

——やれる。

不思議と自身に帰ってくる答えがあった。同時に列は奮起する。

こんな所で沈むようならば、伊達に中国4000年など背負ってはいない。

（最善を尽くせツツ 烈海王ツツ）

このまま無策で河を渡ろうものなら、確実に沈む。それを考えた烈がズボンから取

り出したのは、何本もの筒にロープを通したものだ。

それを引き延ばすと、筒は一本の棒となる。烈が常備している折りたたみ式の棍だ。

「——投ッ!!」

一瞬の気合の元、棍を川へ槍投げの選手が如く、投擲。

投擲された棍は勢いよく河の底へ投げ込まれると、棍の先端部分だけが水面から現れているのが分かる。即席の足場の完成だ。

水面から見られる足場、僅か数センチ。少しでも目測を誤れば、落下は免れない。

だが烈は全く動揺せず、

「よしッッ」

数センチしかその姿を見せていない直径5センチも無い足場目がけて跳躍する。

義足ではない方の脚で確実に足裏を棍の足場に乘せると、身体の重心と棍が一直線になったのを感じ、そのバランスを維持したまま烈は再度跳躍。

向こう岸まで体操選手の如く見事に着地して見せ、辺りにいた釣り人達に一礼。

「お騒がせしたッッ」

言うが早いが三度猛ダッシュする烈に、釣り人達は呆然としていた。

その一方で、

「あれは・・・・棗？」

「どうしたんですか？ 若葉ちゃん」

「ひなた・・・・棗が河を、渡っていた」

「もう若葉ちゃんったら、棗さんが自由自在に動けるのは海だけですよ？」

橋から一連の流れを見ていた少女達も居た。

河を渡り切った烈が、再度疾走を繰り返すこと10分。 烈は讃州中学に辿り着いて

いた。

「——誰かツツ 誰かおらんかアツツ!!」

○

「・・・ん、んう」

意識を取り戻した棗が見たのは、白い天井だった。 ゆっくりと起き上がると、独特な漂う香りからそこが讃州中学の保健室だという事が分かる。

いつの間にかジャージに着替えさせられていて、額には冷えピタをされているところを見ると、自分は看病されているらしい。

「あら、起きたのね棗」

「風……」

ベッドから起き上がった棗が見たのは犬吠崎風だ。その両手にはトレイに乗せられた料理がある。

「もうお昼だし、熱も下がったみたいだから昼食持ってきたの。朝ごはんも食べてないでしょ?」

「お、おお……」

トレイに乗せられていたのはなんと鍋だった。小さい土鍋だったが、その中には葱、キャベツ、ニンジンと様々な野菜が入っている。

「歌野の野菜で作ったわ。栄養満点よ」

「これを……風が?」

「モチのロンよ。給食はカレーだったから、風邪ひいた人に食べさせるにはキツイと思つて先生に相談したの。そしたら家庭科室使わせてもらったから、作っちゃった」

満天の笑顔で頷く彼女に、棗は鍋の野菜を口へと運んでいく。茹でられても尚、残る甘味は流石は歌野の野菜と言つた所だろう。

そして風のオカン力、もとい女子力が合わさればさらに美味さ倍増。棗にとって、至福の一時だ。

「やはり・・・私が風を娶りたいという考えは間違っていないなかったワケだ」

「ま、またそんなこと言つて・・・そんな事より、ちゃんとここまで運んでくれた人にお礼を言いなさいよね」

若干満更でもなさそうな風の言葉に、棗は首を傾げる。誰かにあの後、運ばれてきたということは理解できたが、風でなければ一体誰が運んだのか分からなかった。

「その人は今どこに」

「今は部室よ。独歩ちゃんの話だと、あの人の世界の仲間なんだって」

——勇者部部室。

部室内、上里ひなたと烈海王が向かい合っていた。

「実はかくかくしかじか・・・」

「なるほど・・・造反神、勇者。分かった・・・協力しよう」

「今の説明で分かったのかよッ!？」

二人のやりとりに疑問を持った土井球子が猛然と突っ込んで見せる。いつもその言

葉で済ませるのはいかがなものかと球子ですら気になっていた所だ。

「問題ない。愚地氏が手を貸しているのであれば、私も喜んで勇者部の力になろう」

「これは頼もしい限りですね。勇者部の皆も喜びますよ」

ひなたは両手を合わせて笑みを浮かべながら烈を迎え入れてくれた。だが、その声に待ったをかける声がある。烈よりも遙かに背の低い少女、球子だ。

「協力するのはいい……だが、タマのマウンテンバイクはどうしてくれるツツ」
「だからそれは……神心会へ連絡をツツ」

「神心会なんてこの世界にはナアい！ タマのマウンテンバイクも既にナアい！」

「む、むう……」

弁償しろよ、と暗に突きつける球子に烈が唸る。烈もこの世界に来る際は突然だったので、お金と言うものを持つてはいない。

しかも烈が破壊したマウンテンバイクはかなり高価なものだったらしく、値段は30万を超えるんだとか超えないだとか。

「へっへっへ……タマちゃんよお、ちいせえコトばつか言つてると大きくなれねえゼエ？」

不意に球子の身体が浮き上がる。それは愚地独歩が球子のジャージの襟を片手で掴んで持ち上げたからだった。

「チャリ一つでグダグダ言っつてんじやねえぜ。新しいの買えばいいじやねエか、ママチャリでも移動するには充分だろう」

「うるせー眼帯ハゲドツポ！ タマにとってアウトドア用品は杏と命の次に大事なんだッ 壊されて黙ってられルカア！」

宙に浮いた状態で手足をブンブンと振り回すが、全てが烈にも独歩にも届かず空を切る。戦いにおいて、身長というハンデはここまで影響するのだ。独歩も“ハゲ”と呼ばれて思う所があつたのか、髪の毛無い頭部に筋を浮かばせては渋い顔になり、

「黙らせるか・・・、ひなたちゃんよお、俺アコイツと鍛錬してくるわ。タマアツ」

「へ？」

「組手、やろうぜエ？」

口角が吊り上る程の笑みを浮かべた独歩に対して瞬間、球子の顔が青ざめる。

「え、い、イヤだぞ！ お前の言う組手って、ただタマの旋刃盤をブン殴るだけだろ!」「防御力上げたいから特訓付き合えって言ったのはお前さんだぜエ？」

盾を扱う球子と独歩の特訓風景は、独歩が繰り出す正拳突きに対して球子が旋刃盤でガードするというものだったのだが、

独歩の正拳突きは威力が桁違いで、特訓時には威力に耐えられなかった球子が数十

メートルぶつ飛ばされる光景が最早名物となつてゐる。

「うわー！ もう空を飛ぶのはイヤだアアアア!!」

「悔しかつたら一発でも耐えられるようになってみやがれつてんだ」

些か騒々しい二人のやり取りはどこか大人げない父と娘を思わせるもので、ひなたと烈も自然に笑みがこぼれる。ちなみに、独歩の正拳突きをガードした後だと一日中腕の痺れが取れなくなるらしい。その都度、お昼休みは伊予島杏によつてお弁当を食べさせてもらうという光景が（以下略）

じたばたと暴れる球子を撮んだまま部室の扉を開ける。独歩がふと、部室を出ずに立ち止まった。

「この世界は病みも怪我もすれど、歳はとらねエらしいぜ烈」

「・・・どういう意味だ」

烈の問いに対して、独歩は片方の空いた手で耳をほじくる。

「さあね・・・ただ色々思う事があるつてンなら、この時間ときを利用してみるのもアリじゃねエかつて」

「——ツツツ」

独歩は察していたのだろう。ピクルとの鬨いの後、自身が武術家を続けるのか続けないのか思い悩んでいたことを。

独歩曰く、戦いが終わらない限り、この世界での時間は無限。

「ま、お前さんの人生だからな。指導者、武術家どつちに転ぼうが知ったこつちやねえが——、それと」

独歩はニヒルな笑みを浮かべて顔だけ振り返った。

「勇者部のメンツはかわいい子揃いだ。それを見て癒されるのもアリつちやアリだぜ？」

「なに!? つてことはタマを見てるだけでも癒されるんだな! そうなんだな独歩!!」

「ああ、ちゃんと癒し感があるぞタマ。見事な動物粹だ」

「おおそうか! 初めて独歩に褒められた気がする! 5タマポイント進呈するぞ!」

（多分、それは褒められていないぞ）

と、烈は宙吊りになりながらも瞳を輝かせている球子に対し、言葉にせずだが突っ込んでいた。

独歩は片手でこちらに手を振り、

「ま、リリアア〜ツクス♡ リリアア〜ツクス♡」

今度こそ、勇者部部屋を後にしたのだった。真面目な時とふざけている時のギャツ

プを見ていると、時々この男が分からなくなる。そう思った烈だった。

○ 愛媛のどこかの地。一人の少女が佇んでいる。

「んー、こんなところかなあ」

造反神の勇者、赤嶺友奈は人差し指をその艶のある唇に当てては何かを納得したような笑みを浮かべていた。

赤嶺友奈の眼前にはこの世界で彼女が使役することが出来る擬似バーテックスが大群で蠢いている。小さい個体から大型の個体まで生み出し、バランスよくこの群れを編成するのは赤嶺自身も骨が折れた。

だが、全ては次の作戦のため。

「そろそろ、私達が本気だつてこと・・・教えてあげないとね」

自身の軍単位を陽動に用いる事で空になった拠点を襲撃し、制圧する勇者部襲撃作戦。勇者個人の能力と連携を組み合されれば、数を用いているだけのこちらに勝ちの目はない。

なにせ、大抵のことは根性で何とかしてくる連中が勇者部だ。火事場の馬鹿力というか、背水の陣なのか、危機的な状況程に勇者はその力を増す。

「ふふ、でもねエ・・・」

勇者部の中にも弱点はある。それは戦う“勇者”ではなく、神樹の神託を聞き、勇者へと伝えている“巫女”だ。

巫女は勇者のように戦う力を持っていない非戦闘員。赤嶺が勇者の力を行使しなくても、擬似バーテックスに襲わせるだけで充分に脅威になる。

（大事な巫女が人質に取られた皆の顔が楽しみだよ）

赤嶺友奈は知っている。人間は人質を取られるだけで、簡単に動けなくなるということを。犯罪者一人が政府の要人一人を人質にするだけで国が、数百人の警官たちが数時間も身動きできなくなるということ。

神世紀の序盤の闇に蠢いていた赤嶺家にとつて、その汚い部分を知らない綺麗なだけで纏まっている彼女達の甘さを狙うのは何も心は痛まない。

彼女たちは思っているだろう。友奈と名を持つ者ならば、正々堂々なのだ。非道な事はしないと。

同じ友奈と付く者と同じような笑顔を浮かべる。その笑みには確かに非道と残忍さを併せ持った邪悪さを孕んでいた。

「これも全て〃御役目のため〃．．．だから、ね」

だが数日後、勇者部の全てを蹂躪出来ると勝ち誇っていた笑みが崩れ去る事を、この時の赤嶺友奈は知る由も無かった。

第六話～遠方にいる人进行思う～①

全ては上里ひなたが発した不意の一言から始まる。

「——皆さん、神託です……」

部室内にいる勇者達が動きを止め、いつもだったら若葉への過剰な愛を語るクレイジーさは鳴りを潜め、その険しい表情を勇者部一同が注視する。

神託の内容は単純明快、激戦が予想されるとのこと。一体、何の激戦なのかと言われれば、それは彼女達にとつての御役目、造反神の敵襲を迎撃することである。

「赤嶺ちゃんか……来るんだよね」

押し黙った雰囲気の中、結城友奈がそう言った。

以前、愛媛の樹海の中で出会った三人目の友奈こと赤嶺友奈。

再戦をいずれば果たすと口にしていた彼女が勇者部の部室に直接現れたのがつい先日。

——戦いのゴングが鳴ったら……、もうなんでもアリだから。

そう奇妙に、耳に残る言葉を残して吹きすさぶ風のように去っていった。だからこ

そ、勇者部も次の神託が下る日、それは赤嶺友奈との起きる事を意味していた。

「へっへっへ……勇者部の皆も気合十分って感じじゃねエか」

16人以上という大所帯の中学女子がいる部室の中で数少ない男。眼帯が目立つ、愚地独歩は腕を組みながら、緊張している部室の中で佇んでいる。

神託通り、予想されるであろう激戦。張りつめた緊張に部内の全員が感じていたのは恐怖とはまた違ったもので。

「そりゃあね、あんだだけ啖呵切られちゃったらコッチとしてもガチでやんなきゃつしよ。

みんな気合はいってるよー」

北海道の勇者、秋原雪花^{あきはらせつか}の言うとおり、勇者部の顔色は恐怖し、青ざめた物ではなく、

どちらかと言えば迎え撃つき満々の戦士の顔だった。

犬吠咲^{いぬほおぎ} 樹^{いつき}ですら両手を握り、いつでも来い、とファイティングポーズ。姉の風から

したら頼もしい限りだろう。

「独歩さんと烈さんの鍛錬のお蔭で、勇者部の皆も自分に自信が出来ているんだ……感謝している」

乃木若葉の凛々しい口調で語られるその言葉は、当の本人からも緊張感を感じさせない。余裕というものを持っている。

空手専門の独歩の指導の下、個々の力が向上してきたのは確かだ。

特に、中国拳法と武器の扱いに長ける烈の参入は大きな意味があり、武器を扱う勇者達の鍛錬に大きく役立っている。

「照れるじゃねエか。 だったらちやんとその赤嶺ちやんとやら、お前さんらの力でぶちのめしてこい」

眼帯の老人が笑みを浮かべる様は悪役のようだ。 ここにいる勇者部の者はそう思わずにはられない。

苦笑いで、けれど言われる通りで、これまでの培ってきた力を実戦で試したいとウズウズしている――、

まさしくそれは若い頃の、鍛錬を積んだ自分の力を試す為に、そこら中の武術家に喧嘩を吹っかけていた自分とよく似ていた。

(だが、腑に落ちねエ……)

意気込む勇者部を応援するその一方で、独歩の胸に去来するものは不安。 それは赤嶺友奈の台詞と、自身の武闘家としての培ってきた人生から得た勘が、独歩に安心と言う二文字を与えない。

果たして、わざわざ大軍を呼び寄せる、戦う日時を指定してまでこちらの準備を整わせる意味があるのだろうか。

（——戦いとは不都合なモノ、思い通りにならないモノ）

独歩自身が50年、空手に生きて戦い、得た経験。全ての戦いは、自身が思い描いた通りになる物ではない。

必ず準備を整え、優位を取っていた相手から、

長身を生かされた関節技を受け、膝を破壊され、

畏であるアラミド繊維のワイヤーで腕を切断され、

妻のいる実家を荒らされた油断から爆薬を顔面に食らい、焼かれた。

そんな苦い体験談を持つ独歩にはこの戦い、裏があるとしか考えられなかったのだ。

（——オイラだったら）

と、思考を巡らせようとした時にふと烈海王の姿をその目に移す。その瞬間、独歩は何か閃いたかのように手を叩く。

(ピツカーンと閃いたゼエ．．．．)

そこには小学生乃木園子の如き瞳を輝かせた50代のオッサンがいた。

○

「なんだ愚地氏」

不気味な笑みを浮かべている独歩に気付いた烈が、睨むような視線を送る。

「——烈」

そのまま烈の肩をポンと叩くようにして置いた。独歩は耳打ちするように、少しだ

け顔を近づけて、

「お前もお嬢ちゃん達に付いてきな」

その一言に烈の眉がピクリ、と動いた。

「愚地氏は？」

「俺ア、ここでお留守番だ」

悪びれる様子も無く独歩は言うど、烈は怪訝そうな表情でこちらを再度見据える。

納得できていない、当然だろう。

普段から中国拳法一筋で、20代で“魔拳”と呼ばれるほどの実力を持つ男だ。そ

の性根は武術家として違わない真面目であるということも、独歩は知っている。

彼が負けず嫌いだということも。

だからこそ、烈を動かす言葉は決まっている。

「——赤嶺とやらに仕返し、しねエのかい？」

「ツツツ」

一瞬だけ表情を曇らせたのを見逃さなかつた独歩がニヤリと口角を上げた。

「もしかしたら樹海で勇者部のメンツが倒しちまうかもしれないエ、オイラがブツ倒しちまうかもしれないエ：：そう言えばお前さん、その赤嶺にボコボコにされたんだっけなア」

「——私が負ける事、それは中国武術の敗北だツツ 負けたのは認める。 だが、次は負けぬツツ」

顔を険しく、声に張りを感じさせるほどの熱気を感じさせながら、烈が順調に怒りのボルテージを上げてきている事を確認する独歩。

「——次があつたら、だがな」

「なにツツ？」

冷や水をかけられたかのような独歩の一言に、烈の目が見開く。

「ここで勇者部が赤嶺とやら、倒しちまうとして——、勇者部は赤嶺という存在をどうすると思うね、烈海王クン」

「……ツツ」

「そうだ、と独歩は続ける。

「——仲間に、するだろうなア。勇者部は皆優しい奴らばつかだ：倒れている相手にトドメなんて、まだやったこともねエだろうし：、同じ勇者だつてンならコツチ側に引き込もうとするだろうよ」

「そうなればどうなる、など考えるまでもない。

赤嶺が仲間に加われば、烈が受けた雪辱を果たせないまま、少女に不意を突かれて敗北したという汚名を晴らせないまま、もしこの世界での御役目が終わってしまったら、

中国四千年の武術が一人の少女に敗北したという事実だけが残る。

それは烈にとって屈辱以外の何物でもないはず。

「ンで、どうするよ烈先生」

「む……」

目を細めた烈。その様子は先ほどまでの熱気を帯びた姿とは見間違えるほど落ちて着いたもので、

「……今回ただけだ愚地氏、貴方の提案に乗ってあげられるのはツツ」

事が成つたのを独歩は嬉しく思い、笑みを浮かべる。そして同時に胸に去来するの

は、

「——悪いなア烈。こうでも言わなきゃ、お前さん動かねエからよ……」

実力を身につけている彼とて、まだ若い。 武術家としてでなく、人間としての若さを利用したことに對する申し訳なさだった。

独歩は烈の肩をバシバシ叩き、

「イヤア、悪いなア！ オイラ今回腰が痛くつてなア！ 樹海での引率は烈に任せませー！」

ワザとらしく勇者部の面々に聞こえるように言うと、結城友奈が手を挙げて、

「あ、じゃあ独歩ちゃん！ 戦いが終わったら私がマッサージしてあげるね！」

「お、楽しみだねエ。 友奈ちゃんのマッサージはスゲエらしいからな」

うんうん、と唸る独歩。 友奈のマッサージの評判は勇者部の中でもかなり有名である。

その何者も傷つけたことのない華奢な五指から繰り出される指圧は、男女問わず、骨抜きになるとか。

「.....」

東郷美森が色調を暗転させた不安定な瞳をこちらに向けているが、気にしないでおう。

「よし！ みんな行くぞ！ 赤嶺友奈に目に物を見せてやる！」

若葉の号令のもと、勇者部一同はそれぞれ出陣していく。すでに学校の窓から見え

る景色は樹海化していた。

「——さて」

乃木園子、巫女組だけが残った部室内を後にして、廊下を歩きながら独歩が呟く。

「準備……するかねエ」

胸が躍るような高鳴りを感じながら、男は闇の中へとその姿を消していった。

○

部室内で椅子に座っていたのは、まるで人形の如き整った顔立ちの少女だった。

讃州中学の制服に身を包み、輝く金の髪は椅子の背もたれに掛かる程の長さで、愁いを帯びたその表情と窓の景色へと向けているその少女はまさしくどこかの令嬢である。

「……はあ」

乃木園子は小さくため息をついて、再度窓からの景色に目を向ける。勇者部たちが

樹海で戦闘を開始してから既に30分以上が経過していた。

「園子さん……戦いたいのに戦えないというのは、もどかしいものがありますね」

巫女の一人、上里ひなたがこちらの様子を気にかけていた。だが巫女である彼女と

て、若葉が戻ってこない事に少なからずとも不安を感じずにはいられないはずだ。

「ねー、皆気にしていない雰囲気を出してるけど、赤嶺ゆーゆの事がひつかかっていると思うんだ」

乃木園子は考える。何故戦う日を指定し、対人戦での不安を取り除かせるような親切を働いたのか。

先日からの赤嶺が発する言動一つ一つが気になり続けていた。

勇者としての経験を生かして、なんとか手助けしたいという気持ちはある。だが、今の園子は勇者ではない。この世界においてまだ勇者システムを宿したアプリがロックされたままなのだ。

「最後の切り札として私が残るのはいいけれど……このままじゃ、秘密兵器だと言いくるめられて最終回まで出番がない予感がしてきたよ……」

「か、考え過ぎだよ園子さん！ 大丈夫、大丈夫……」

「うー、ありがとうミトリん……」

諏訪の巫女、藤森水都ふじもりみとが肩を落としている園子の頭を撫でていた。

気づけば独歩も部室から姿を消している。彼が今いないのは心細いが、体調が悪いのであれば無理して戦わせる必要はない。

そのために、自分が居るのだと園子は気を引き締めた。

「園子さん、どちらへ？」

部室の外へ出ようとする園子に、ひなたが聞く。園子は皆を心配させないように笑顔で、

「ちよつとだけ廊下歩いてくるね、なんだかね、落ち着きたいんだ」
 そう言つて廊下へと出る。

樹海化が始まつて辺りが結界に包まれたこの状況では園子達以外の人々は存在しない。だからこそ、この静寂が痛い程不気味だった。

昼のような明るさなのに、夜の学校のような雰囲気園子は思わず息を呑む。

「皆……大丈夫かな」

今の園子は、戦っている友人たちに力を貸したいのに貸せない、そのもどかしさから部室内に留まり続ける事を望まなかった。廊下へと出たのも、少しだけ熱を持っていた頭を冷やすという目的のものだ。

いざと言う時の勇者部の切り札がこんな精神状態ではなんとも頼りないことか。そんな事を思いながら、通路を半分ほど歩いたところで部室の方へと折り返してみる。

不安なのは自分だけではない、部室に残っている巫女の皆はもつと不安な筈だ。そう思い、早足になる。

「あれ・・・」

部屋まで10メートルと迫った時だ。園子が気付いた異変、それは不用意に開放たれていた窓。外の風が園子の頬を撫でるほどに入り込んできている。

園子が思うに、先ほどここを通った時は窓なんて開いていなかった筈だ。

「なんで窓が開いて——」

持ち前の直感が働く。嫌な予感を表すように全身から冷や汗のようなものが出てきた時、園子は気付けなかった。

「——遅い」

自身の背後に、赤嶺友奈が迫って来ていたことに。

○

「赤嶺・・・ゆーゆ」

「御明察♪」

自身の背に返ってくる聞き覚えのある少女の声。それは赤嶺友奈のものだった。

一瞬の出来事である。

——遅い。

確かにそう聞いた。そして気づけば自分は後ろ手を取られ、身体を壁へと押し付けられている。校舎の壁がこんなに冷たいものだったかと、初めて知る事ができた園子である。

「まさか、本拠地を狙ってくるとはね・・・」

「驚いた？ でも、言ったよね？ 戦いが始まった以上は・・・もう何でもアリでいくからって」

園子の捉えられている腕に圧が掛かった。人体の構造上可動範囲が定められている関節が軋む音を上げ、園子の腕に鈍い痛みが走る。

「——い、いたっ・・・！」

「ふふ・・・、ごめんね。貴方に変身されたら困るからさあ」

赤嶺の残った腕が園子の頭部を壁へと押し込む。園子の正面がぴったりと壁に身体が張り付いたせいで、完全に身動きが取れない状態になっていた。

「そのキミもいいよー。窓開けたから、そろそろ入ってきてー」

彼女の呼ぶ声に窓から何かが姿を覗かせる。手のように見えたそれは植物の蔓の

ようなもので、花卉らしき頭部を持つ物体が窓から廊下へと降りて来ていた。

「人がバーテックスを操れるなんて……」

「できるんだよ……そう、この世界なら——ねツツ」

次の瞬間、園子の身体がふわりと浮く。赤嶺に壁から一旦引き剥がされると窓際で待機しているバーテックスに向けて投げられたのだ。

勇者としての力を持った赤嶺であれば、少女一人を片手で投げつけるなど造作もないのである。

「くっ……こ、この……っ」

態勢を崩された園子の腕と足に絡みつくのは投げられた先で待機していたバーテックスの蔓だ。手首、腕、胴、足首と巻きついては張りつめた糸のように蔓が伸び、それと同時に園子の身体が大の字に広げられる。

バーテックスの力は一般の人間が持つ力とは比にならない。園子も勇者であるが、生身の状態ではたとえ星屑相手でも勝つことは難しい。

よって、拘束された園子に逃げ出す手段などあるわけがなく。

「さて、それじゃ——」

身動きの出来ない、抵抗の出来ない園子を前にして赤嶺友奈が嗤った。

「——嵐のように攻めるよ」

○

開け放たれた窓から、星屑が数体侵入してくる。その光景を園子は見ていた。造反神側の勇者としての特殊能力なのか、赤嶺はこの世界でのバーテックスを役する権利を持っている。

以前、大型バーテックスの背に乗って移動していたのも領ける。

「そうは・・・させないっ!」

星屑を呼んだ理由が予想がついた園子は必死に身体を振り、拘束から解かれようとする。だが、

「くっ、——んうう!」

園子が拘束から逃げようとする程、以前より蔓は締め付ける力を増す。全身が引き裂かれそうな痛みに、園子の口から苦痛の声が漏れた。

赤嶺が行おうとしている事、それは星屑を使つての部室襲撃。

部室には戦闘が出来ない巫女がいる。赤嶺はそれを狙っているのだらう。巫女を人質にされれば、こちらの勇者は手出しすることが出来なくなり、一気に形勢が逆転される。

(巫女の皆に伝えないと……!)

せめて、敵が迫ってきていることを伝えなければ、と大きく息を吸い、口を開く。

「みんな逃げ——んぶつ?!」

だがその先の言葉は突如園子の口の中に入り込んできた異物に遮られた。

「ンン——、ンン——!!」

上下の顎が動かせず、言葉を発することが出来ない。園子の口の中に入り込んだのは赤嶺の手だった。

「そうはさせないよ……アナタはこのまま、部室の巫女たちが傷つけられるのを黙ってみるしかないんだあ」

「ま、って……んにゆつ?!」

にやりと笑みを浮かべて、赤嶺の親指と人差し指が動き始める。痛みを与える訳でもなく、無理な力を加えるわけでもなく、園子の口内を探るような動き。

歯一つ一つの形を確かめるように、歯茎の裏を擦るようになぞり、指の腹で上顎の肉壁を引っ搔かれれば脳内で微細な電流が走り、身体が跳ねるように震える。

「ん、ふ、う……んう」

「ふふふ……じつとしててね」

艶のある声が出てくるのを聞いた赤嶺が摘んだのは舌。人差し指と中指で舌を強弱をつけて挟み込み、園子の舌の肉が形を変えていくのが分かる。

体温が僅かに上がってくるのを感じに戸惑いを隠せない。

(ゆ、ゆーゆ似の人にこんなことされるなんて・・・新鮮ッ)

園子を知る友奈に似た少女から行われる一方的な行為。決して虐める訳でもない、屈辱を与える訳でもないその行動をされるがままの園子は思うことがある。

(これ絶対イイ小説のネタになるよ〜！)

未知の気分に浸りつつも、ネタ作りをしてしまうのは書き手としての性なのか、この世界はネタの宝庫である。それは自分自身とて例外ではないのだと園子は気付いた。

「どれどれ〜」

時間にして数十秒。口の中からゆっくりと赤嶺の指が引き抜かれる。園子の唾

液が生々しく指に絡み、じゅぷりと粘着質な音を立てて口元から離れた。

「・・・ふ、ええ」

園子の口元から赤嶺の指の間に厭らしくも美しさを隠せない銀の吊り橋が出来上がる。

身体は風呂上りの如き熱を帯び、頭の中ではぼうーとしつつも、未だにスパークが小刻みに発生していた園子の口は人語を発することが出来なかった。

(め、も・・・メモを取りたいツツ　だ、誰か私に紙とペンをツ)

脳内が無事なのか壊れているのか分からないが、少なくともこの思考が出来ている自分はまだ無事な部類の筈だ。

「び、びゅ・・・」

そして叫びたい。書き手として、普段体験できないこの刺激的なシチュエーションに遭遇してしまった自分がお決まりのようになってしまっているあのセリフを。

だが、全身から力が抜けるかのような虚脱感と赤嶺の手によって口内の筋肉が弛緩してしまっている為、ちよつとずつしか叫ぶことができない。

しかし、

「びゅおおおおおおおおお!!」

確かに聞こえた。その声だ。

○

「びゅおおおおおおおおおッ!!」

再び聞いたその声色と音量は女性のソレではなかった。だから園子は先ほど聞こえた声が、自分のものでも赤嶺のものではないということが理解できたのである。

二人の視線の先、一人の男が立っている。

廊下のタイルに人の皮膚がペタペタと擦る音が聞こえる。男は素足だ。

着こなしているのは白の道着、そして腰に巻かれた黒の帯。道着の隙間から覗いた

男の筋肉は相当鍛え込まれ、山のように隆起していた。

「オジサン、誰？」

赤嶺友奈の意識が切り替わる。お遊びから、戦闘形態へ。高嶋友奈、結城友奈も

持ち合わせていない非道の瞳が見開かれ、男を見据える。

赤嶺の問いに対して男の方は、

「——つと」

何やらメモ帳に走り書きをしているようだった。サラサラと流暢に動かしていた

ペンの動きを止めた眼帯の男はメモ帳を閉じ、

「失礼……」

だらんと両の手がぶら下がる。それは一般男性の手とかけ離れた疵と皮膚の厚み

があった。明らかに人を、モノを殴り慣れている手。

男の顔から卑しい笑みが零れる。それは闘志の現れであるということ赤嶺は理

解する。

だが感じられる闘志、戦^やル気とは裏腹に男は構える事もせず、

「愚地独歩ってんだア」

「オロ、チ・・・？」

「お嬢ちゃん——」

珍しい苗字を聞いて困惑する赤嶺に対し、独歩は口の端を吊り上げて自身の黒帯に手をかけて眼前の少女に告げた。

「——遊ぼうぜエ♡」

第七話～遠方にいる人进行思う～②

——樹海。

「勇者ア……パーンチ！」

結城友奈の気合を込めた拳が真つ直ぐに突きだされる。目標はこの世界で造反神が作り出した擬似バーテックスだ。目標はこの世界で造反神

数符も狂うことなく敵の顔面を拳が捉え、直撃の瞬間に星屑はまるで風船の如く弾け飛ぶ。

「スウ……ハッ！」

敵が確実に絶命し、消え果てるまで油断することなく残心。一突きして乱れた呼吸を即座に整える動作は最早、友奈にとって一連の流れとなっていた。

友奈の周囲から敵があらかた消え、構えを解くが自身では油断はしていない。警戒レベルは中、だが心の余裕は常に持つ。その一方で、

（……やっぱり拳の威力、上がってる！）

油断も隙も見せる事は自身の危機に繋がるといふ状況で友奈が感じたのは確実な力が身についたといふ実感だ。

友奈の拳は現実世界での御役目では敵バーテックスの御霊を一撃で粉碎するという威力を持っていた。同じ勇者の風や夏凜も、“なんだその威力”と驚いていたのを友奈は覚えている。

だが、その威力もこの神樹が作り出した世界に来てからは鳴りを潜めていた。

敵である擬似バーテックスに友奈が打ち込んだ拳は現実に比べて威力が少しばかり落ちていたのである。

勇者システムの不調などではない。だがこんなことが続くようであれば御役目に支障を来す。そんなパワーダウンを解消すべく編み出した答え。

勇者の力に頼るのではなく、己の力で不足したパワーを補えば良い、と言うものだった。

それから友奈は高嶋と一緒に独歩の指導の下、己の力と技を磨いていった。

確かな努力の成果がこうして実戦で現れている事が、友奈は嬉しかった。

(・・・これなら、皆を守れる！)

拳を握り、自分はまだまだ強くなれるのだと、皆を守れるのだと自覚していると四方からゆらゆらと漂うように星屑が迫ってきていた。友奈が構え、星屑を迎え撃つその手前、

「ゆうきつちー！」

友奈の後ろで声と共に飛来した一閃が四体の星屑を串刺しにした。

一瞬の事で何が起きたのか分からなかった友奈だったが、投げられた得物が槍な
のと、友奈を安心させる声を元にそれが味方からの援護だったのだと確信させる。

「せつちゃん！　ありがとう！」

「もー、超近接タイプが前衛張るのは仕方ないけどさあ、無茶はあんま良くないよん」

アイヌ民族風の衣装に身を包み軽やかに樹木から飛び降りた少女、秋原雪花はやれや
れと言った表情だ。　星屑に刺さっていた槍はまるで意思を持っているかのように雪
花の手元に戻る。

「あはは．．．ごめんね、気を付けるよ、」

．．．せつちゃんの槍って凄いやね！　今度投げ方教えて！」

雪花の槍投げの精度は遠距離組を凌ぐ程であり、友奈としても今度教わりたいと思っ
ていたほどだ。　褒められた雪花は少しだけ恥ずかしくも、嬉しそうに小さく笑い、

「にやはは、嬉しい相談だけど．．．ゆうきつちはフツーに殴ってた方がいいんじゃないや
いかな。　というか、槍投げ身につけてどうするの」

「腕が伸びるようになる．．．はず」

「いや、流石にないっしょ。ゴム人間かって」

流れるように突っ込みを行う雪花。彼女は勇者部の中でも夏凜の1，2を争う突っ込みポジションだ。

巫女組では最近、諏訪の巫女である藤森水都が同じ突っ込み仲間ではないかと樹も感じてきているらしい。

なんにせよ、勇者部が賑やかになるのは良いことだな、と友奈は頷きながら思う。

「……ん？」

ふと、友奈の視線が雪花を見つめる。それは雪花の視線が一定の場所に固定されていたからだ。

ボーっとしている訳でもなく、友奈のように眠そうになっている訳でもない。

「あの人……」

「あ、烈さんが戦ってる……」

雪花の発した言葉と、その視線を追った先には義足の男、烈海王が居たのだ。

「あれ? ……武器使わないんだ」

樹木の上から烈の戦いを見つめる友奈が口にした疑問がある。彼は以前も武器を使う勇者には中国の様々な武器を用いて講座を開いていた。勇者達とまるつきり一致する武器は無いのだが、武器を扱う距離間など初歩的な技術は勇者部全員が食い入るように聞き入るほど評判が良く。

だから友奈は彼が戦う際は、武器を扱うものだと思っていた。しかし、実際に今の戦いを見てみると、

「素手……なんだ、ホントは」

烈海王の前に迫って来ていた4体の星屑。囲まれていたとしても、その立ち回りは見事なもので。

正面から迫る星屑を鍛え抜いた腕力から繰り出す崩拳で撃ち抜き、

左右から挟み込みに対しては、二体を巻き込むように回し蹴りで仕留め、

背後からの敵は空中へ跳躍して躲し、身を屈め高速で回転させた勢いの乗った踵落としにて決着させた。

「うわお……やば」

「そうだね、ヤバいね。四方の敵に同時に攻撃出来れば、敵が100体居ても負ける事はない……それを実践するなんてツツ」

「いや、ゆうきつち？　そういう意味のヤバいじゃないからね？」

隣で雪花が突っ込んでいる事も、友奈は目の前の烈の戦いぶりに気を取られて聞こえていなかった。

○

敵を今しがた撃滅させた烈海王は小さく息を吐き、構えを解く。

（――人外を相手取るのは久々だったが）

この世界での敵、今烈が打倒した星屑と呼ばれるそれは義足となった烈にとって、どれ程の脅威となるか不安ではあったが、杞憂に終わったようだ。

（この世界の敵にも武術は通用するみたいだ）

実際に拳を、蹴りを打ち込んだ感触を確かめて烈は自分の技術がこの異世界においても通用するのだと実感していた。

星屑の表面がかなり柔らかいというのは意外だったが。

この世界に来てからも烈は勇者部との鍛錬とは別に、自分だけの鍛錬を毎日行っている。それが功を奏したか、体力も衰えることなく、身体のキレも以前より増していた。

——中国4000年、魔拳・烈海王、未だ衰えず。

「だが、何故だ……」

口に出すほど感じていたのは予感。それも、悪い方の。樹海と呼ばれるこの場所で戦い始めてからももう30分以上が経過している。他の勇者達も敵を撃破し、大型も相手取っているというのに、

赤嶺友奈が一向に姿を見せてこなかったのだ。

そもそも何かがおかしいと烈は思っていた。勇者達から聞いていた赤嶺友奈のその言動を。

攻める日時を指定し、対人の不安を取り除く言葉。どれも勇者部たちにとっては戦う上で大きなデメリットは感じられない。

甘い話には必ず裏があるというのには良くあるものだ、と烈は思考を巡らせる。敵の勇者が一体、何を狙っているのかを。

「——まさかッッ」

烈は自身が導き出した答えに思わず息を呑んだ。もし烈の考えが正しければ、今ここで悠長にバーテックスと小競り合いを繰り返している場合ではない、と。

即座に反転、巫女達が待機している讃州中学の方向へと駆けだした。

「烈さんッ！ 敵の狙いが分かりました！ 恐らくは大軍を用いての陽動——っ
て、うわああ！」

突如として烈とぶつかりそうになった白い勇者装束の少女が尻餅をつく。勇者の
中でも作戦参謀役を務める伊予島杏も烈と同じ思考に至ったらしい。

「こらあ烈ウ！ 杏が怪我したらどーすんだ！」

杏に駆け寄った土井球子が怒りの形相で烈を睨みながら、尻餅をついている杏を片手
で引つ張って起き上がらせた。

「済まないッ だが勇者達よ、気付いたなら急がねば！」

烈が再度駆け出そうとすれば、行く手を阻むように星屑が出現する。そしてそれは
一点に東郷美森目がけて襲い掛かって来ていた。

「むっ！」

「明らかに東郷さんを狙ってる・・・、カガミブネを使わせない気なんだ」

烈も話には聞いていたカガミブネ。愛媛を解放する際に手に入れたその力は香川
と愛媛を瞬時に行き来することを可能とする神の力である。

だが、それは巫女や勇者でありながら巫女としての力を宿している東郷でしか扱う事

は出来ない。

敵もそれを知った上か、先ほどとは打って変わった美森への集中攻撃を浴びせ、カガミブネを使わせるタイミングを与えない動きを見せていた。その狙いが明らかに時間稼ぎなのは明白。

「だけど・・・私達だって、無策だったわけじゃない！」

杏がクロスボウを構え、突撃する星屑へ矢を射かける。速射に対応したそのクロスボウの矢は瞬く間に星屑たちを射抜いていた。

「切り札つてのは、最後に取っておくべきだからな！ どつかのカードゲームもそうだからなア！」

球子の盾が刃を展開する。敵目がけて投擲する旋刃盤を装着したまま、星屑の顔面目がけて振り下ろす。鋭い刃が滑らかに星屑を縦一文字に切り裂く。それはまるで、独歩の手刀のようだった。

勇者達も、最悪の展開を想定して保険をかけていたようだ。

——俺ア、留守番するぜ。

「・・・ツツツ!!」

(あの男も、それを誰よりも早く見越していたのかッ)

まんまと彼の口車に乗ってしまった事を烈は今更になってから気づき、自身にも、彼にも激怒する。

「おのれ、最初から……気づいていたな……ッッ」

全身の筋肉が紅潮し、緊張し、血管を浮き出させる程に烈は拳を震わせる。ギリギリと歯を鳴らしながら最終的には星屑が漂う天空に向かって叫んでいた。

「~~~~~独歩オオオオオオオオオオオオオオオオッッッ!!!!」

「うわっ！ びつくりした」

「た、タマっち先輩……私この人怖いよ……」

それは隣にいた球子も杏も若干引くくらいの叫びだったという。

○

—— 讃州中学 部室前廊下。

薄暗い廊下を照らすように、窓から差し込んだ光が床のタイルに反射していた。神樹による結界がもたらした時間停止というこの特殊な空間で勇者達以外の生物は存在

していない。

行き過ぎた静寂は時として、不気味な雰囲気演出させる。

その異質とも呼んでも良い空間で、男と少女が対峙していた。

「——しかし、驚いたねエ……」

口を先に開いた男、愚地独歩はひょうきんな顔で少女の顔を不思議そうに見ては、自身で口になっているほど驚いてはいない様子で、顎に手を当てる。

「友奈ちゃん達とソックリさん……あまり見分けが付かねエや。実は3姉妹だったりとか、そんなオチがあつたりするのかな？」

独歩の質問のような呟きに、相對する少女、赤嶺友奈は小さく笑つっていた。

「姉妹じゃないよ……でも、敢えて姉妹関係を挙げるなら、高嶋さんが一番上のお姉さん、つてことになるのかな……？」

「ほう、時代は違うのに？」

「そこはホラ、神世紀の不思議……香川の七不思議みたいな感じで、あまり語りたくはないんだよね。説明は下手だからさ」

「どうやら、性格などには違いはあれど、“友奈”としての根本的なあり方としては同じらしい、と独歩は感じる。

以前、稽古中に友奈たちの空手の会話を聞いていると、とにかく擬音が先行して飛び

交い、途中から宇宙人と会話してるのかと錯覚するくらい説明がへたくそだった。

彼女、赤嶺友奈もその節があるのだろう。そのほかにも、独歩は気付いている事があつた。

「赤嶺」つていやあ、沖繩でよく見るなあ・・・お前さん、ホントは沖繩の出だろう」「フフ・・・そうだよ。よく分かつたね」

「沖繩には何度かバカンスに行った事があつてなあ・・・ま、それは良いとして」

いいんだ、と赤嶺が肩すかしにそう呟く。腰に手を当てた独歩が小さく息を吐いた。少しだけ落胆を現したようなため息の後、独歩の瞳が見開く。

「・・・勇者つてのはア、こういう戦い方もするのかい？」

○

片目を大きく見開きながら、独歩は質問を続ける。

「・・・良い子ぶつて俺達に情報を与え、陽動を用いて陣地を空にさせたら、戦闘能力の無エ巫女を襲う——」

腰の帯の具合を確かめるように手で触れ、締め直す。

「——とても勇者のやる事だとは思えねエんだが」

独歩が見てきた勇者は、今いる勇者部のメンバーのみだ。どの少女達も独歩が見る分には、強い者もいれば心の弱い勇者もいる。

けれど心は真つ直ぐであり、その清廉さには独歩自身も見ていて気持ち良いと思える程だった。

しかし、この少女。赤嶺友奈は独歩が見てきた勇者とはまるで真逆だ。戦いにおいて、勇者部の人間をピンポイントで襲ってきたり、今のように戦闘が出来ない巫女を直接狙うなど、やる事が結構エゲツナイのだ。

勝つため、有利を得るため、負けないための戦いを実践してくる。まるで一人だけ戦争をするかのようなようだ。

「……卑怯、とでも言いたい？」

独歩の言葉に心を痛めるどころか、笑みで返して見せる友奈。その友奈に対して独

歩は、

「イヤ——、間違いじゃねエ」

ふふ、と独歩は続ける。

「戦いつてのは……勝負つてのは、如何に“勝利する”かが大前提——」

人間が遥か太古から繰り返してきた戦いの記録。それを振り返ってみればどうだろう。そこには、赤嶺が今回行った陽動、奇襲なんて可愛いと思えるくらいの非道に

まみれた戦いが存在している。

敵国の補給を断ち、人間同士で共食いを起こさせるほどの兵糧城攻めを行った豊臣秀吉の鳥取の渴え殺し。

毒ガス兵器を用いて、両国で100万を超えるほどの犠牲者を生み出した第一次世界大戦。

ナパーム弾による広範囲を焼き尽くし、破壊したベトナム戦争。

「——全部、結果がすべてだ」

いかに犠牲を出しても、世論に非難されようと、国単位で上げた勝利は揺るがない。それに比べたら、今回行った赤嶺の奇襲など可愛いものなのだ。

「例えば、お嬢ちゃん……」。

腕力じゃ絶対に敵わない相手に対して鉄パイプで後ろからぶん殴る、とか。

寝ている所、寝起きの所を襲って打ん殴る、とか。

足が折れてたり、腕が動かない、どつからどう見ても戦えないような相手に奇襲、とか。

相手が武術の達人だから、ナイフとか拳銃使ってぶつ殺しちゃう、とか……、

「——この中に間違いはあると思うかい？」

勿論、赤嶺友奈もそれは分かり切っている事である。だから赤嶺の答えを独歩が代わりと言うのだ。

「そうさ。間違いなんでねエ、全て正解なんだわ……それが全て勝利へと繋がるのであれば。

“武”の本懐は、“鮮やかに敵を仕留めること”じゃねエ——」

——例えみつともなくとも勝つこと。それが出来なければ、話にもならないのだ。

だから、と独歩は続ける。

「俺は否定しねえぜ、お嬢ちゃん。御役目の為にお嬢ちゃんが非道ソレを武器にするってんなら、迷わず使えばいい」

視線を赤嶺の後ろでバーテックスに拘束されてる園子へと向けると、先ほど吐露した独歩の言葉に何か言いたげな顔だった。

少しばかり申し訳なさそうにだが、それでも独歩は笑う。

「悪いなア園ちゃん。俺もどつちかというところコッチ派でなア——

闘いに関しては、なんでもアリの精神”なんだ」

過去に骨折しているボクサーに対して問答無用のリベンジマッチという名のリンチを行った経歴を、独歩は持っている。彼のこれまでの戦いの詳細を聞いたら多分、勇

者部の皆が苦笑いすることだろう。

「ド突き合いよりも、一方的にド突くのが大好きだし♡」

「独歩ちゃん・・・」

園子の悲壮な眼差しが独歩へと向けられる。それは普段勇者部に見せている顔が偽りで、本性は赤嶺とさほど変わらないと言う事を知ってしまった、裏切られたという感覚だろうか。

少しだけ胸が痛む独歩だが長い間、そういう戦いを仕掛けられ、経験してきた彼だからその考えを否定することは出来ないのである。

「——前置きが長かったなア・・・」

独歩が目を細め、ゆるりと構え始める。

両の手が動き、片手は天にもう片手を地に向けた天地上下の構え。空手家である独歩が長い間愛用している威圧の構えだ。

「そろそろ始めようぜ——ツツ!?!」

「くつくつく・・・」

構えを完成させた独歩が仕掛けようとした時、その動きが中断される。その理由はただ一つ。

「くはっ、あはははははっ!! アハハハハハッ!! アハッ! アハハハハハッ:::
 エフツ エフツ エフツ」

それは眼前の赤嶺友奈が笑っていたからだ。自身でもむせ返るほどに。

「・・・今、言ったよね。私の非道、武器にするなら、迷わず使えばいいって・・・」

赤嶺が笑みを浮かべるのに対して、独歩は冷ややかに無言だ。赤嶺の笑みは、まるでこの勝負が既に決していると言っているかのような気がしたのである。

そして赤嶺は動く。手甲を装着している右手が伸び、拘束されている園子の首元を掴みとる。

「がっ・・・!」

「――」 “攻撃しなくていい” よ、そして “動かなくてもいい”。この意味が分かるかな?」

ぎりっ、と園子の首元を掴んでいる手に力が籠められる。気道が狭まり、呼吸が難しくなった園子が嗚咽交じり顔を歪ませた。

彼女の言う所、抵抗すれば、反撃すれば園子の身は保障しないものだ。

「どっ、ぼ・・・ちや、ん」

息苦しくもなんとか言葉を作る園子の首から赤嶺の手が離れた。同時に呼吸を全

力で行い、園子の顔に正気が戻る。変身していない生身の身体に勇者の力での首締めが行われれば、今度こそ、園子は死ぬだろう。

要するに赤嶺は独歩に何もさせないままブン殴りつづけるつもりである。当然、手を休む事なく一方的にだ。人質を取られることで生じた絶対的な不利、それに対して武人、愚地独歩は、

「まあ、——仕方ねエわな」

やれやれと言った表情で、ふー、と息を大きく天井に向かって吐き、構えを解いた独歩が赤嶺を見据える。

「——園ちゃんに何かあったらよオ、オイラが若坊と東郷に叱られちまうからな」

てつきり、意地でも嫌だと言ってくるものだと思っていたが表情をキョトンとさせていた赤嶺がコンマ数秒で嬉々とした表情へ戻る。

「ああ、もう最高ッ それじゃあ精一杯、耐えて見せてよねッ！」

無造作に構えた右腕、その構えには見覚えがあった。勇者部の結城友奈、高嶋友奈が同じくして持っている必殺パンチのソレであった。

「勇者ア——パンチ」

赤嶺の籠手に力が込められる。

軋むような音を奏でながら局部の緊張を高め、臨海に達した瞬間に赤嶺は独歩へ

と駆け出した。

当然、避ける術も何もない独歩はただ慥然と立ち尽くしているだけ。

「独歩ちゃんツツ！」

園子の叫びも虚しく、次の瞬間には独歩の顔面に赤嶺の拳が轟音と共に叩き込まれ、

同時に舞う独歩の血飛沫は、戦いのゴングが鳴った事を告げていた。

第八話　遠方にいる人を思う　③

「コオ・・・ツッ！」

呼吸を整え、構えた赤嶺友奈の拳が眼前の独歩に向けて打ち込まれる。

人間の顔を金属で打ん殴つたら恐らくこんな音がするのだろう。轟音と共に独歩の身体が大きく揺れた。

「とつと・・・ッ」

常人であれば一撃でノックダウンさせられているであろう上段突きを耐える事が出来たのは、日ごろの訓練の賜だと独歩は己の鍛えた肉体に感謝し、自身の身体と周囲を見直した。

びちやり、と廊下のタイルを濡らしているのは独歩の血だ。鼻からの出血は止まることなく、首を伝い、白の道着を朱に染めていた。鏡で自分の姿を見たならば、どれほど不細工な様を映しているだろうか。

「頑丈だよね・・・」

拳に付着した血を払うように腕を振るい、粘着質な赤い液体は廊下の壁にも点々とした飛沫が飛散していた。

それでも赤嶺は動きを止めることはない。

「・・・シッ!!」

武に精通していない者から見れば、捉える事も難しいであろう神速の打拳。まるでボクサーの如く、顔面に、胸部と腹部に一発ずつ突き刺さる赤嶺の連撃が178センチ、110キロの男の身体を激しく揺らす。

赤嶺友奈の身長は154センチとリーチの差は歴然、拳の発射角度は若干斜め上故、若干の不安定だ。しかし、相手は全く動くことが出来ない筋肉ダルマ、サンドバッグである。

攻撃もさせない、という行動制限が赤嶺のこの戦いで不安要素を消し去っていた。

「——そらッツ!!」

相手が動いてこない、という余裕から繰り出されるの赤嶺の蹴り。軽快なステップから大きく振り上げられる美しい褐色の脚は見事に抉っていた。

独歩の無防備な金的を。

「——ぎゅっっっ!!」

声にならない悲鳴を上げ、独歩の全身が硬直する。本来なら180度まで振り上げられる赤嶺の蹴りは独歩の二の股の間に留まり、勢いを失った後もグリグリと押し付け

られ、独歩の膝が砕けた瞬間に引き抜かれる。

有無を言わず、赤嶺の連撃が炸裂する。

金的により頭が下がった独歩の顔面目がけ膝蹴り、

膝立ちで身体を逸らせ露わになった喉へ右足側頭蹴りが突き刺さる。

一連の動作、わずか3秒に満たない。

その間、独歩の顔面からは更に血が溢れ、打突により気道は狭まれ意識混濁、体中に酸素を送る事もままならず、瞳孔は開き、膝立ちのまま完全に沈黙。

「独歩ちゃん!!」

思わず目を背けたのは乃木園子だ。全身は未だ拘束され、無理に動こうものならばバーテックスから伸びている触手が容赦なく園子の首と胴をキツく締め上げる。勇者システムのアプリのロックが例え解除されていようといまいと、アプリを手にできていない時点で園子は完全に無力化されていた。

「ダメだよ、ちゃんと見なくちゃ」

赤嶺の腕が伸び、園子の頭を掴んでは力任せにその方向を修正させる。窓の方角を向いていた頭が抵抗虚しく前方を向いた時、瞳に映ったのは膝を折り、呆然と口を開けている独歩の姿だった。

片目の瞳孔は開かれ、口元から垂れる液体は唾液と血液を混ぜた物だ。蹴られた股間を抑えるはずの手はぶらん、と腰の辺りを漂い魂が抜けたその表情は、死んでしまっているのではないかと錯覚させる。

「誰のせいであんななっているか、ちゃんと自覚してほしいかな」

妖艶な表情で、園子に笑いかける赤嶺。独歩に肉体的ダメージを与えつつ、園子的心も削る。それが赤嶺の狙いだ。

「不用意に私に捕まった貴方が悪いんだよ？ だからあの人は、今もずっと…殴られつつ放しなんだ。かわいそうに、ね」

見せつけるように、両の手の人差し指、親指を使って園子の両目を開かせる。彼女の身体は冬でもないのにカタカタと震えだし、

「どっば、ちゃん・・・いや」

ものの数秒、眼球が乾燥した訳もなく園子の瞳から伝うものがあつた。己自身の無力さ、利用されてしまう歯がゆさ、それで傷ついている者がいるという事実が普段冷静な園子の思考を破壊する。

園子の脳裏に、瞬時に去来する光景がある。

「あ、ああ・・・っ」

季節は2年前、場所は樹海化した瀬戸大橋。

あの日、自分たちが無力だったが為にその身を犠牲にし、自分たちと世界を救ってくれた紅い勇者の少女を園子は思い出す。

真紅の勇者装束を己の血で尚染め上げ、虚しく吹いたそよ風に揺れる腕の通っていない右袖が今でも園子の臉には焼き付いていた。

「……やめて、よ」

無意識のうちに呼吸が乱れ、尋常ではない汗が額から溢れだす。誰しもがどこかで強烈な体験から忘れることが出来ない、ふとした事で身体に異常を来す、一言で表すならトラウマ。

過去の光景が現在の状況が重なり、身体が石化したかのように動くことを拒否し始める。

「フフ……」

一方で赤嶺は確信していた。自身の勝利を。

独歩はいまだに放心状態でまったく動くことが出来ず、園子は心もズタズタにされ、戦意喪失。その証拠に、生きる力を失ったようなその瞳からは涙しか流れていない。

その光景を目の当たりにした赤嶺は胸に小さく痛みが走るのを感じる。動ける者

が自分しかいないのだから、危害を加える者は誰もいない。何かで殴られた訳でもないのに、赤嶺に対して小さくダメージを残した。

勿論、痛みの正体に赤嶺自身は気付いている。だが、

「これもね……」

御役目なんだ、と心の内で続ける。まるで自分に言い聞かせながら。

ある程度邪魔物はいなくなつたのなら、星屑を部室の中に向かわせて巫女を人質にする事で作戦は終了する。その指示を場にいた星屑に投げようとした時だ。

「みんな、そろそろ部室に行っちゃって——」

「馬鹿言つてんじゃねエや、お嬢ちゃん」

声のする方向、振り返つたその場所に愚地独歩は立つていた。

○

蹴りを繰り出した赤嶺自身も疑問に思っていた。男の急所を蹴り潰した割には、反応が薄かつたものだ。

過去、この世界に召喚される前の赤嶺にとって対人戦は朝飯前。もはやそれが日常

となりつつあり、その日常の中では男性と相対することもあった。その時、積極的に狙ったのは関節技でも脳を揺らす打拳でもない。男の急所、金的だった。

男の股間というのは、簡単に言えば内臓だ。デコピン程度の力で弾かれれば強烈な痛みを発するその器官は、何とも頼りない薄皮によつて吊るされているだけである。

これを狙わない手は無い。

野球のキャッチャーがピッチャーの投げたボールが地面で跳ね、そのまま股間に直撃する光景を見たことはあるだろうか。その惨状たるや、なんとも恐ろしいことか。股間を押さえ、声を上げる事も無く、選手は地面をのたうち回る。強烈な痛みにある者は失神し、泡だつて口から吹くだろう。

実際、実行した金的狙いを見舞われた相手は思った通りの反応を見せ、効果を確認した赤嶺は、男を倒すならまず狙うは金的だと自分の仲間、弥勒蓮華みろくれんげにも教えていたほどである。

「ンン、勇者の拳つてのは……こんなもんかい」

なのに、目の前の男、愚地独歩が勇者の力による蹴りを物ともせず、笑顔を向けてきているという事実に、赤嶺は得体の知れぬ何かを感じた。

独歩が血の滴る鼻を片方を指で塞ぎ、鼻を噛む要領で力を入れると噴水のような勢い

で血が飛び出す。

「オジサン……演技が上手いね」

鼻から噴出した血は地面を濡らし、水溜まりを形成している。それを自身でも気味悪いな、と呟いていた。

「へっへっへ、どうでい……お嬢ちゃんから見ても、イイ線いつてると思うんだが？」
「主演男優賞、あげたいくらいだよ」

赤嶺自身、独歩が金的を物ともしなかつた理由は既に理解できている。

独歩の股間を蹴った瞬間、蹴り慣れた臓器の感触がまったくといつていいほどなかつたのだ。それが意味するところ、

「“コツカケ”……」

「……ほう、良く知ってんじゃねえか」

嬉しそうな声色の独歩の言葉は赤嶺が言い当てた事に対しての賞賛の現れである。彼の言うコツカケとは、沖繩に伝わる武術の一つ。

「腹筋の操作で睾丸を腹へ引き上げちまう、琉球空手に古くから伝わる技法さ……」
故に、金的に打ち込まれた赤嶺の蹴りは無意味。急所突きはほぼ不可能となるのである。

「へんな技編み出したもんだよね、昔の男の人って……」

自身が女であるが為に、知識として身につける程度となつた技に苛立ちを覚えた。

この技法が無ければ、恐らく先ほどの蹴りだけで勝負はついていただろうと。

「それじゃあ、今度はお嬢ちゃんが新しい技生み出しちまいな・・・たとえば、そのおっぱいを綺麗に内側に仕舞いこんじまう、とか」

「なっ・・・!!」

自身の胸を隠す動作で羞恥の色に顔を染める赤嶺に、だつてよオ、と独歩は続ける。

「その中学生にあるまじき胸・・・東郷といい、上里といい、男からしたら揉んでくれて言つてるようなもんだぜ。天性の産物、そう言うべきか。

だがそれを持たずして生まれた奴らが居るつてことを忘れてねエかい？・・・壁の気持ちを考えなッ ついでにうちの球子あたりにでも分けてやれッ」

悪い笑みを浮かべている独歩が両の腰に手を当て言い放つ姿はまさしく悪党のそれだ。赤嶺は思う、コイツただのセクハラじじいなのでは？と。

「・・・独歩ちゃん、大丈夫、なの？」

独歩を心配する声は乃木園子のものだ。彼が立ち上がった事に少なからず希望を見出したか、その瞳にはわずかながら光が戻っていた。

「これくらいでくたばる様なら」武神「なんて呼ばれちやいねえのよ・・・こんなヤツのパンチ、屁でもねエな」

自身も、園子も元気づけるように胸を手で叩き、音を鳴らす。肌と肌がピタリとひつつくほど密着させて奏でた音は気持ちよさを覚えるほどのものであった。

「さつきから・・・さあ」

独歩の眼前、赤嶺が右手を震わせていた。明らかに、怒りという感情が垣間見える。

「好き勝手言ってくれるじゃない・・・ッ」

怒気を孕んだ声色で赤嶺が構える事も無く、ゆらりと動く。危機を察知したのは園子だ。

「独歩ちゃん！ 逃げてッ」

出来れば逃げて欲しい、今度の赤嶺は本気で独歩の事を壊しにかかりかねない。最悪、殺してしまう可能性もある。

自分が原因で戦うことが出来ない以上、彼がこれ以上傷つくということを園子が望むわけが無かった。

「うるせーなア、アイツが今まで以上に殺ル気だつてのは見なくても分かっただよ」
対して独歩は園子の言葉を聞いた上で立ち留まった。

「だが退がりやしねえッ 俺の空手は、後退」のネジを外してあんのよッ」

不敵に笑って見せた独歩は条件付けされている以上、大きく変わった動きを見せる事

はできない。赤嶺はその揺るがない絶対的有利を突いてくる。

「勇者……五連——」

直後、赤嶺の身体が羽毛のように宙に舞った。動きにして、その場から浮き上がったようなそのノーモーションによる跳躍は、かつての地下闘技場で戦ったあまな天内ゆう悠彷彿させる。

「パアアアアンチツツ!!」

直後、突風が吹き荒れる。容赦のない、遠慮のない、拳の嵐が独歩の顔面、胸筋、腹部にかけて拳が突き刺さった。

弾丸の如き威力を持つ拳が見舞われる度に独歩の血が鼻から噴き出し、廊下の周囲を朱に染めていく。

「——ツツ」

必殺の連撃を加えた赤嶺が感じたのはまたしても違和感。自身の渾身の力を込めた拳は確かに男の身体にダメージを与えた。

だが、今まで拳が当たるたびに揺らしてきた上半身、数歩ずつよろめいていた下半身が全く動いていないという事実が歯痒ささえ覚える。

加えて殴った感触は人間のモノとは思えない程の硬さ。まるで鉄。

その正体は、独歩の構えを見る事で答えを容易に得ることが出来た。

呼ッ

「まさか……三戦ッ」
サンチン

脇を締め、膝を柔らかく曲げたその構えは空手の守りの型。

呼吸のコントロールによつて完成されるこの型は完全になされた時にはあらゆる打撃に耐えると言われる。

赤嶺の連撃を耐えきつて見せた独歩が小さく息を吐いて不敵に笑っていた。

「お嬢ちゃんのパンチが凄くてなア、”技”なんてものを使つちまつたぜ……悪いな」
「別に？ 構わないよ」

自身の渾身の力を乗せた拳が、勇者の力が技によつて防がれた現実には赤嶺は息を呑む。だが、その程度でとまる赤嶺ではない。

五発浴びせて駄目ならば、千発浴びせて倒れるまで殴るまで。

「勇者ア……」

今一度構え、拳を繰り出さんとした時、独歩の瞳が見開いた。

「勇者部五箇条オオオオ！ ひーとーっツッ！」

それは独歩の視線の先にある赤嶺ではなく、園子に届くもので、

「なるべく諦めない」 ツツ

聞き覚えのある言葉が耳に届いた瞬間、園子の瞳に生気が戻った。

第九話～遠方にいる人进行思う～④

独歩の激励にも似た言葉は園子の耳に確かに届いていた。それは、勇者部として決めていた大切な決まり事。

部員たちが大事にしてる大切な約束。

(・・・なるべく、諦めないツツ)

自身に言い聞かせるように、再度胸の中で呼称する。園子を奮い立たせる想いは、自分がこんな事でへこたれてはいけないこと、

彼女の大切な友人である紅い勇者も絶望的な状況だつて諦めないということ、自分の事を待つてくれている人がいるということ。

(ピッカーンと、閃いた・・・ツツ)

天から降つて湧いたような、一筋の光明が差したような閃きが園子に宿る。次の瞬間、園子の肉体には劇的な変化が起きていた。

○

黒の生命体
ゴキブリ。

よく台所とか、下水道、湿気のあるところに現れるという生物。

女子は勿論、男子でさえもその黒光りする物体を触ることを出来ず、クラスからは畏の対象だったということは幼いころの園子も理解できていた。小学校の頃は三ノ輪 銀くらいが台所洗剤とガムテープを持って勇敢に戦っていたのを覚えている。

園子は小学生の頃、道端でたまたまゴキブリの死骸を見つけたことがあった。

園子は蟻の行列に見とれる事が良くあり、そのゴキブリも今しがた力尽きたのか、はたまた、人間に不幸にも踏みつぶされたのか分からないが、命を落とし、蟻によつて巣に運ばれている最中だったのだ。

陽気な気分が一気に下がったような気がした。蟻の行列を見るのならばまだ良いが、食物連鎖の決まり事とはいえ、運ばれている餌が誰もが畏れるゴキブリなのだから。

しかし、眼を見開いた園子はその死骸から見出したのは脳内のエンドルフィンを分泌させるほどの関心、発見があった。

ゴキブリの死骸は身体の中身が見えるほどに損傷を受けていた。通常の生物なら、グロテスクにも内蔵や肉の器官が露わになっていてもおかしくないのだが、園子は次の瞬間、衝撃を受ける。

ゴキブリの中から見え、垂れるモノ。

それは筋繊維でも、骨でも、内臓でもない、乳白色の・・・液体。

ゴキブリと言う生物の初速は自然界最強だと聞いたことがある。初速・・・つまり、時速ゼロの状態から一気にハイスピードを生み出すことが出来るらしい。

園子が計算したところ、人間の大きさをゴキブリの動きをしたならば時速は288キロ。それは新幹線の最高速度並となる。

不思議なことである。その超絶スピードを支えている正体が、まさかただの液体だったなんて。

園子は思う。

——もし、私が液体だったら・・・。

——もし、自分の身体があんな液体になれたなら・・・。

きつと、誰も自分を捕まえる事ができなくなるだろう、と。

○

その異様と呼べる雰囲気を真つ先に肌で感じ取った赤嶺は独歩に繰り出す筈の拳を止めていた。

視線の先には乃木園子と、正直に呼んでよいのだろうか。

「これ・・・はッ」

拘束されている園子が飴細工のように溶け始めている。溶けるといっものはあくまで比喩だ。実際に溶けている訳ではない。

「ふにゅあ〜」

見ているこつちも力を抜いてしまいそうになる位に緩まった園子の声。緩まったのは声だけではなく、表情筋、腕、肩、背、腹、脚と五体いたる全ての器官の筋肉を脱力させていた。

脱力は留まる事を知らず、本当に水のような液体になって消えてしまうのではないかと思う程だ。

「おッ、オオッ・・・こいつアッ」

驚愕するのは独歩。それと同時に、園子の脱力は臨界を迎えつつあった。筋肉の

弛緩、脱力の極地に至り、自分の身体が本当に人間のものだったのかと考えられない程に緩みきつたその思考はもはや、感覚すらも虚空の彼方へと置き去りにする。

「ふしゅうくくく」

園子が思ったのはこうだ。 たぶん、これくらいがちょうどいい、と。

そして次の瞬間、弛緩させていた眠っていた肉体を自分のタイミングで起動させた。

「な……ッ」

一瞬の出来事の後、驚愕す光景。 園子が拘束を解かれた状態で、すとつ、と着地を

決めていた。

まるで水の如き流の軌道で、

しかもその動作は音も無く、映ることなく、

物体が液体となり、再び物体へと肉体的変化を遂げたのではないかという錯覚に陥る。 不思議なことに、植物型のバーテックスは未だその場に存在しない園子を拘束し続けている。

園子が見出したのは筋肉の膨張と弛緩。

一般的に縄ぬけのテクニクとして知られているのは縛られた腕を交差させ、縄の形を変えた後に生じた縄の隙間を利用するものである。

それは筋肉に余計な力を籠め、極度の緊張から肉の密度を上げるのと同じだ。

先ほどまで力を込めて必死に抜け出そうとしたその動作は極限まで拘束の限界を拡大させていく。

そして限りなく広がってであろう拘束する蔓の輪。そこから行われたのは全身の筋肉を弛緩。

緊張により膨張していた筋肉が一気に緩む・・・それは肉体の収縮を意味する。そこに生まれた隙間。出来るべくして出来てしまった隙間。

勿論、ただの弛緩では物足りない。園子が行ったのはあのゴキブリと同じ、液体レベルの筋肉の弛緩だ。

バーテックスは錯覚する。同じレベルの力で未だに少女を拘束していると。実際は拘束出来ていないという事にすら気づいていないというのに。

限界まで筋肉を弛緩し、身体を縮小させた園子は、完全に抜け出せるほど蔓と身体の隙間を作ったのを見計らって、一気に抜け出したのだ。

それは悟られない動き。

握るか握らないかくらいで手の上においていたナイロン生地のスカーフが、ふとした事で音も無く抜け落ちるように。

「おおっ・・・できた」

まるで逆上がりがちよつとした事でできたかのような軽さでとんでもないことをやってのけた園子は長い間拘束されていたからか、大きく欠伸をして、身体全体もほぐすように伸ばす。

「・・・オイオイオイ、マジかよ園ちゃん」

独歩の拳が震えている。それは観喜にも似たものだった。

自身を液体レベルまで弛緩させるといふ人間離れした芸当を行う人物を、独歩は一人だけ知っている。

範馬刃牙。

地上最強の生物、力の根源、暴力の化身である範馬勇次郎の息子。

最強の父の血統を刻んだ天性の格闘センスを持ち、父親である勇次郎と繰り広げた地上最強の親子喧嘩が公の場で実況生中継されたのは独歩にとっては記憶にまだ新しい。

そんな彼が行ってきた人外から常軌を逸した技の一つに確かに存在する。それが“肉体の液化”、脱力である。

武術における肉体の液化が生み出すもの、それは破壊力だ。脱力から生み出される瞬時の緊張は他を寄せ付けたい破壊力へと直結している。

独歩の正拳突き、刃牙のダッシュ攻撃も同じことと言える。

しかし、園子がやってのけたのはどちらでもない。似て非なるもの。常に緩く、ほわんとしている彼女だからこそできるオリジナル脱力。

「よーし、久し振りの変身だあ！ ずっがーんと行くよー！」

瞳に菱形のきらめきを映している園子の手握られるのは勇者システムを宿したスマホだ。これまではその機能がロックしていた為に変身することは出来なかった。

園子が嬉々としてその手を掲げ、先ほど発した言葉が意味するところは、

「マックス・大・変・身ツツ」

おかしい、何かが違う、と赤嶺も独歩も思ったのだが既に園子は光に包まれている。突っ込みの余裕をも与えず、マイペースで動き回る少女、それが乃木園子である。光が弾けると同時に現れたのは白と紫の勇者装束を身にまとった少女が顕現した。

勇者装束の色合いは睡蓮を思わせた。長く伸びた金髪が一層美しさを際立たせ、銀の槍を構えたその姿には神々しさも覚えるほどである。

「部屋は皆の大切な拠点なんだよ……その周囲を争うなんて」

睡蓮の少女が槍を掲げ、狙いを定める。

「(ハ)から……出て行けえ——ツッ!!」

普段の園子からは考えられないような高い声と共に、槍が振り下ろされる。狙うは自身を縛っていた植物型のパーテックスと、その周囲の星屑だ。

空間を切り裂くような一閃が瞬く間にパーテックスと星屑を切り裂いた。切り裂かれた対象は自身が切られたという実感すら覚えることなく消滅したことだろう。

爆裂四散したパーテックスたちは光の粒子となつて消え去り、すかさず園子は槍の穂先を赤嶺に向ける。明らかに追撃の構え。

「驚いたね……一人の勇者としての戦力がこれほどとは……」

油断をしていたわけではない。そのために、園子を隔離させたのだと赤嶺は構える。突出した戦闘力の代わりに戦況をひっくり返すような閃き。

確信を得る。彼女、乃木園子もあの乃木若葉の子孫なのだ。

しかしこの時、赤嶺は前方の変身した園子に気を取られて大事なことを忘れていた。

「チヨイチヨイ」

「——え？」

その背後、愚地独歩が接近して肩を軽く小突いていたことに。

「な——」

赤嶺が言葉を言い終えるより早く、疵だらけの厚拳が顔を抉る。

瞬間、赤嶺の右頬にかけて衝撃が走り、空気が破裂する音が遅れて場に響いた。

同時に身体全体が園子を飛び越え、遙か後方まで吹き飛ばされる。

「がは——ツツ」

二転三転して漸く止まり、すぐに身体を起こそうとするが、身体が鉛でも巻きついて
いるかのように重くなり、視界も酩酊状態のように揺らいでいた。

「なんて……正拳突きッ」

見えていた。だが、反応できなかつた。勇者としての動体視力をもつてしても独
歩の拳は躲すことも、防御することも敵わない。

必中にして、脳を揺らすほどの破壊力を持つ武神の一撃を味わった赤嶺である。

「コイツでおアイコだア、そろそろ降参してくれないかねえ」

赤嶺の見上げた先、天地上下の構えを完成させた独歩がこちらを見据えている。彼
の問いには当然として、拒絶の反応を見せて立ち上がった。

「……冗談ッ、こんなことくらいで——」

「いや、お前さんのこと思ってたんだぜエ？」

直後、独歩の真横をすり抜けるようにして赤嶺の前に出てくる人影がある。

「皆！ 無事かツツ」

「みーちゃん！ 大丈夫!?!」

乃木若葉は刀を構え、白鳥歌野は鞭を取り出し、怒気を宿した眼光を赤嶺に向けている。樹海での戦いに向かっていたこの二人が戻ってきたという事は、次第に彼女達以外の勇者もこの場所に戻ってくる事だろう。

「お前さんの負けだ、赤嶺」

独歩は再度、赤嶺に告げる。若葉と歌野という西暦勇者の中で攻めの要を持つ二人がこの場にいるだけで、一人の赤嶺には分が悪い。巫女を人質に取るという奇襲作戦も園子と独歩によって阻まれてしまった。

「まだだよ・・・ツツ」

口元の血を拭い、赤嶺は笑って見せる。ここまで来たら最後まで戦うし、何より情けを与えられたまま敵陣地でおめおめと逃亡する事は赤嶺の言う所、プライドが許されない。

「——ここからは、バーテックスと私プラスの・・・最大戦力でお相手するよ」

外にはいざと言う時に控えさせておいた大型バーテックスがいる。星屑も50体ほど連れてきていた。

不利な状況であつたとしても、赤嶺は突撃思考にならず最善の思考でクールに動くべきなのだ。戻ってくる勇者部の面子を確認しながら赤嶺は気を張って戦いを仕掛ける。

——この戦いは、まだ本番ではない。
自身の心に余裕を持たせるよう言い聞かせながら。

○

「あく、いつつ……」

空中を駆け抜ける一つの巨大な影がある。移動用バーテックスに乗った赤嶺友奈だ。

時間帯は既に夕方だ。樹海化は解かれ、寒空の下で空中を高速移動する最中の外気に傷が良く沁みる。

結果は敗北だった。赤嶺友奈の。

既に勝負はあったというのは事実だ。既にこちらの作戦は失敗に終わっている。加えて独歩の一撃は重く、赤嶺の身体にダメージを残していた。

そして、帰還してきた増援の勇者達の攻撃に少数しかバーテックスを連れてきていなかった赤嶺サイドに勝つ見込みなど無かったのである。

元々、赤嶺としても完全決着まで持つていく必要は無かったので旗色が悪くなった時点で撤退することは考えていた。しかし、せつかく敵陣まで入り込んだのだ。いくつか向こうが知りたがっている情報を伝えたかった。

「こっちも一本取られた訳だし……これくらいは良いよね、造反神サマ」

そしてもう少しだけ部屋に居座りたかった理由を赤嶺は振り返って、勇者部部屋があるその方角を見つめる。

「ああ……お姉さまー！」

顔の筋肉が緩み、先ほど激戦を繰り広げていた少女とは思えないような甘ったるい声で赤嶺が悶える。

かつて赤嶺の祖先が沖繩に在住していた頃、四国へ脱出する手助けをしてくれた沖繩の勇者、古波蔵 棗に出会えたことが赤嶺にとって今日一番の幸福だった。

「お噂通り凜々しい〜！　ほんとに、話せて良かった！」

古波蔵　棗という名前は赤嶺家代々伝えられる英雄の名である。彼女が居なければ、赤嶺家は四国へ脱出することなく滅亡していた可能性があるし、身を賭して命を繋げてくれた棗の事を聞かされていた赤嶺友奈も、時代が違う故に会ったことは無かったが、心の底から尊敬していたのだ。

「間近で見ると背が高いし、勇者服もステキ！　あと、やっぱりクールだけど優しいところもあるなんて・・・ああくんもう！」

両の手で肩を抱き、恐悦至極の表情でパーテックスの上をコロコロと転がる。赤嶺を乗せているパーテックスは思っていた。

この女、余りにもやかましいから振り落としてやろうか、と。

「・・・はあ」

ピタリと動きを止める。確かに赤嶺は心のどこかで望んでいた。棗と会うことを。

だが、同時に棗と敵対することは望んでいなかった。これから戦う中で、もし明確な敵意を彼女から向けられたらと思うと、また赤嶺の胸を締め付けられるような痛みが走る。

「・・・戦いたく、ないなあ」

仰向けになり、神樹が作り出した世界の夜空を眺めながら赤嶺は自身の拠点へと帰っ

ていく。四国の空に瞬く星は赤嶺の内面とは裏腹に綺麗に輝いていた。

○

——戦いが終わり、讃州中学。

「ほらよ」

「おっととっ……！」

独歩が無造作に園子に投げたのは一冊のメモ帳だった。一瞬掴みそこなつた園子が慌てながらもそのメモ帳を手に納め、にへらーと蕩けたような顔で

「ど、どつぽちゃん……いえ、独歩サマツ！　ありがとうござえますだア！　このご恩はッ　ご恩はッ」

まるで神をも崇めるように首を垂れる園子に独歩も戸惑いを隠せない。そこまであのメモ帳は価値のあるものなのか。

だが、小説を書くことを趣味としている園子にとってその疑問は無駄だというものだろう。

暫くの静寂の後、園子が呟いた。

「痛くはなかった？ 独歩ちゃん・・・」

不意にこちらの顔色を窺うように顔を近づける園子。 独歩は近すぎる距離間に右手で制して顔をぐいっと押し返す。

「大丈夫だって。 園ちゃんが考えることじゃねえわな・・・もしかして気にしてんのかい？」

「だって、私のせいでいっぱい怪我させちゃった・・・ごめんね」

申し訳なきそうに言う園子に独歩は頭を掻く。 いつもホンワカしている園子だが過去に勇者達のリーダーをやっていたこともあつてか、責任感が強い。 負い目を感じてしまうのは仕方ない事なのか。

気にしてるのか、など聞くべきではなかった。 と独歩は思う。

「お前らがガキの癖に気張りすぎなんだよツ どいつもこいつも揃いも揃って〃御役目〃だとか〃勇者だから〃とか、御題目掲げて他人ばかり気に掛けやがってツツ」

だからこそ、勇者に選ばれたのではないか、と自問自答する独歩。 だが、この場所にいる勇者という中学生女子たちは自分のことを蔑ろにして他人を気に掛ける傾向が強い。 ほんとに。

「お前らが処理しきれねエ部分は俺や烈が受け持つツ 大人は自分の言葉に責任持つ

し、今は勇者部の副顧問でお前らと一緒に神様とチャンバラする仲間なんだからよ」

「——もうちよい、大人を頼れ」

論しているのか、怒っているのか分からない声量だが、園子は呆然と聞き入っている様子である。園子にとっての大人から出た言葉が“予想外”だった、と言った表情。

だが彼の言葉で少しだけ気が楽になったのか園子は笑みを浮かべ、

「そう、だね……」

「おうよ、ホレ、さっさと行きな。友奈ちゃん達が待つてるぜ」

「うん！」

そうだ、と独歩は今にも駆け出しそうな園子に一言。

「変身した姿——、カッコよかったぜ」

そう言われた園子は少しだけ照れていたようだった。彼女は先ほどよりも調子の

乗った声で、だが表情はにへら、と笑みを浮かべて、

「ありがとう、独歩ちゃん！」

手を振って、友奈たちがいる方へと駆けて行った。合流してからも東郷や友奈たちと笑い合っている所を見て、少しだけ安心した独歩である。

戦いで汚れた廊下は既に掃除済みだ。樹海化も解け、何もすることが無くなった独歩は談笑している少女たちを余所に、歩き出す。

「——つたく、洗濯しなきゃ、な」

闇に消えるように廊下の先を進む独歩。純白の道着は赤嶺との闘いで流した血にまみれている。明日も稽古があるし、早めに洗濯をしなければと思っていた時だ。

「おろ・・・？」

独歩の身体が傾く。まるで老人の如き失態、何も無い所で転ぶなど、これまでの独歩には考えられなかった。

だが、今の独歩は赤嶺との闘いで肉体にダメージを受けている。

戦いの最中はアドレナリンと闘志が痛みを和らげていた。それが今になって切れたのである。

思えば、武の道を志し、気付けば55歳。肉体の最高到達点は既に五年ほど前に過ぎていた。今はただ、技術を磨く事と極端に体力が落ちないように鍛錬するだけ。肉体強化に努めても、それでも体力や筋肉は少しずつ減少する一方だ。

いかなる達人も、衰えは隠せなかった。

「キッツイ、なあ〜」

岩を破壊するであろう拳を全身で何発も受けたのだ。当然である。

これまで上がっていないなかった息が、突如として乱れ始める。なんとか踏みとどまって呼吸を落ち着かせるが、蓄積したダメージはかなりのものなのか、なかなか呼吸が一定にならない。

決して勇者部の面々には見せられない、弱っている部分などを見せる訳にはいかないのだ。武人としてのちよつとしたプライドだ。

無理して歩を進めようとする独歩の眼前に、手が差し出された。それは少女の物ではない、明らかに男の手。

「……………」

烈海王だった。

「烈……………」

無言を貫く烈が強引に道着を掴み、一気に引き上げる。110キロの肉体を片手で持ち上げて見せた烈は一瞬の動きで肩を貸すように独歩を背負った。

二人三脚のようにゆつくりと二人は廊下を進んでいく。事情を知ってか知らずか、彼は今の独歩の状態について詳しく聞いてこない。未だに無言だ。

だが独歩にとって、その烈の無言が有難かった。数分程歩き始めて、初めて烈が口を開く。

「私を騙した罰が当たったんだろうな」

「へへ……、それにしても、優しいのナ」

「フン……」

かなり怒っているのかと思ったが意外に落ち着いている烈を見て、独歩は安心した。

それどころか、独歩に感謝されて頬まで染めてる始末。園子たちに一部始終を見られたら確実に今後のツンデレ枠は烈で決まりだ、とか言い出しかねない。

その後、烈海王が勇者部の三好夏凜と郡千景と果てしないツンデレ枠を争うことになるのは、また別のお話である。

く 未解放地域。

人の住む場所ではない、樹木に覆われた空間を歩く者がいる。

「ふくむ……」

自前の足袋を鳴らすように歩くのは老人だ。和服の袖が、ぷらぷらと揺れながら道なき道を往く老人は顎に手を当て、困っているようである。

「……はどこなのかの」

老人は平たく言えば、見知らぬ土地に突如としてやって来た迷子であった。自身は先程まで、警視庁の逮捕術訓練指導を今しがた終えて帰路に着く途中……だった筈。

歩けども歩けども、コンクリートジャングルの東京とは縁遠い本物のジャングル地帯のような世界。不気味さも感じる静寂。

だが老人はこの静寂が嫌いではなかった。

静寂とは、争いとはかけ離れた要素であり、それが続くのであれば自分は安全だと自負しているからである。

しかし、その静寂は突如として破られた。

「……あん？ 牛？」

……のような角と、教会にありそうな鐘を提げた緑色の巨大な物体が浮遊しながら老人の前にその姿を現わした。

「・・・ホウ、なんとなんと」

自身の塩頭に手を当て、目の当たりにする光景が現実のものなのか真つ先に疑つた。

明らかな異質、

明らかな敵意、

明らかな殺意、

三つの意が混同し、冷気となつて老人へ叩き込まれる。バチバチと、季節的にはまだ寒くないというのに極寒の国に放り込まれた感覚。

「ははっー」

「おもしろェ」

意外にも老人が感じたもの、それは熱気。

今も吹き付ける冷気をもともしない、内なる熱さはソレを凌駕する。

喧嘩つ早くて、どうしても鬨いを好んでしまう自身の性分さと、

どんなヤツが相手だろうとかまわずぶつ倒しちみたい、

武人としての血が騒ぐ。

『—————!!!』

牛の形を模した異形、バーテックス・タウラスは頭上の鐘を打ち鳴らす。

その不協和音は空間に振動を与え、大地を、樹木を震わせる。

仮に生物がこの音を聞いてしまったなら、あまりの不快さに足を止め、思わず耳を塞いでしまうだろう。

「ちい—————！ んナ吠えんでも聞こえてるっつーの！」

あれを吠えてるか捉えるかは別として、耳をつんざくような不協和音を老人は両耳に人差し指で塞いでいた。

だが、それでも聞こえてくる音は老人の頭を容赦なく揺らし、顔は苦虫を噛み潰したかの如く、不快の色を浮かべた。

『—————!!!』

バーテックス・タウラスは船を漕ぐが如きスピードで動き出す。

だが尋常ではない加速を行い、その勢いは周りの樹木も薙ぎ倒す程の威力へと成長する。

脳内で警笛が鳴り、命を潰さんとする突進が両耳を塞ぐ老人へ迫る。

「イイなあ」

「シンプルで助かるわい」

空いている親指でズレていたべつ甲素材のメガネを持ち上げるように直し、老人は思う。

夢だとか、

現実だとか、

「関係ねえわな」

迫り来る危険に怯えるという気持ちよりも、自分を殺す気満々なこの生物に己の持てる技を試したい、という“達人”の欲求がソレを遥かに上回り、自然と口角が上がる。

「夢でもいいからヨオ・・・」

「おいで♡」

まるでペットを招くように、恋人を呼ぶような笑みで飛び込んでくる異形を手招きする。

地面を擦るほどまでに接近した突進。大地を鳴らし、全てを薙ぎ倒してきた破壊の

突進が極小の老人へ直撃し、轢き殺す、または虚空の彼方へ吹き飛ばす——筈だった。

直後、空を舞っていたのは老人ではなく、老人に突進を繰り出したタウラスの巨軀だった。

タウラスからすれば、ぶつかったと思っただけで何か自分が同じ力で衝突してきたのだ。

大地を割り、樹木も破壊する威力をそっくりそのまま返されたことを知る由も無いタウラスは遙か彼方、虚空へと吸い込まれるようその姿を暗ませた。

「ほっほっほっほっ偉く飛んだのお」

まるで投げた紙飛行機が上手いこと飛んだかのように、遠くへ飛んだ異形を眺めた老人は自身の技と敵の突進の威力にご満悦の様子だ。

老人はその場から一步も動いていない。自身の足元、不自然に出来た足首程度の深さのクレーターから抜け出し、着崩れした和服を整える。

「さて、行くかね」

締め眼鏡をくいと持ち上げた達人、しづかわごうき 渋川剛氣は再び人気のない、闇が続く樹海の

中を歩き始めた。

—— 凄く面白い場所に来た、と胸に想いを馳せながら。

第十話～農業王への試練～①

諏訪の大地を駆ける一人の少女が居る。

金糸梅を連想させる黄色と白の勇者装束を身にまとったその少女は小柄なその身に似合わぬ大跳躍から目標を見据え、武器を構える。

「せえやあッ！」

勇者・白鳥歌野が悪しき魂を滅する神威カマイの力を宿した武器、藤蔓を振るう。

宙を漂っている星屑と呼ばれる神の尖兵を一振りの元に弾き、瞬時に滅した。

「はあ．．っ！ はあ．．っ！」

いとも簡単に敵を屠った訳でもない。肩で息をする歌野は全身が傷だらけだ。もう自分でも、星屑を倒した数は数えていない。

「タイム．．．挟みたいところ．．．だけどっ」

眼前に広がる諏訪の大地を埋め尽くさんとする白の軍勢、点々と存在ではなく、白く塗り潰されたその大地の正体は星屑が重なったもの。

敵はこちらの事情とはお構いなく、波状攻撃を仕掛けてくる。

——誦訪、最後の日。

誦訪を完全に滅ぼすための、敵の大規模な侵攻作戦。

既に戦いが始まった朝方から数えて、だいたい六時間ほどだろうか。歌野は戦闘をぶっ続けていた。

土地神からの神託が下ったとき、聞いた内容に絶望したりなどしていなかった。

たとえそれが、これまで耐えた3年間で四国勇者の迎撃準備を整えるための囷役だったと聞かされたとしても。

白鳥歌野にとって誦訪の人々を、大切な友を守るための戦いは常にあった。四国にいる乃木若葉という勇者に負けないくらい、歌野は一人で戦い続けていたのだ。

いままでだって、そしてこれからだって。

「——進化体ツツ!?!」

数十メートル先、星屑と呼ばれる者達が合体を繰り返して今までよりも大きく、禍々しい姿をした敵がその頭角を現した。

進化体の放つ棘がまるでマシンガンの如く連射される。だが歌野は怯まない。

手に持つ藤蔓を振るい、自分の身体に直撃するだけの棘を叩き落としては、回避行動に徹する。

しかし、安心している場合ではなかった。

敵の進化体は一体ではないのだ。諏訪を完全に潰す気マックスなのか、進化体は三方向からその針を飛ばし、雨のように降らせてくる。

敵の星屑を巻き込む程の大地を覆いつくす針の雨が止むと、星屑を盾にしていた歌野が死骸の中からボロボロの身体で這い出てきた。

「ぜえ……っ！……ぐうあっ！」

頭を揺らされ、身体を叩きつけられ、衝撃を受けて地面を二転三転し、命を繋いだ。いつだってそうだ。

やる気と勇気があれば、歌野はどんな時でも戦えた。身体が何度傷つけられても、どんなに血を流しても。

それでも、限界は訪れる。

「まだ——」

歌野が自分の身体の異変に気付いた。

確かにさつきまでであった右腕の感触がないことに違和感を覚え、視線をその腕へと送り、思考が止まった。

藤蔓を握っていた右腕が袖口から先、存在していなかった。先からは血が蛇口をひねった如く垂れ、地面を赤い液面が形成されていく。

(あー……)

他ならぬ歌野自身が悟る。

限界だ。リミットだ。

緊張の糸が切れるように、電池の切れたラジコンのように歌野の膝が砕けるようにして、地面に崩れ落ちる。

まるでその瞬間を待っていたように星屑が距離を詰め、歌野に襲い掛かる。戦う力

も、生きる気力を無くした歌野はもはや避けることをしなかった。

「うたのん！」

全てを諦め、死を受け入れようとした歌野の肩を小さく衝撃が駆けた。何かが肩にぶつかった。星屑ではない。一メートルと満たない距離を歌野が移動する程度の衝撃。

「みー、ちゃ、ん．．．？」

視線の先、歌野の作った血の池の上にぽつぽつ落ちる赤い滴が水面に波紋を作る。

「も、う．．．、うたの、んってば、油断、しすぎだよ．．．っ」

次第にその赤い液は太くなり、地面の池は更に広がり、歌野の姿を映す程までになった。

「お願い．．．生きる、のをっ——諦め、ないで」

自身に掛かるはずだった星屑の巨大な牙を代わりにその身に受けた藤森水都が呆然としている歌野に微笑みかけた。

口からも血を吐いた水都は全て悟ったように、歌野へ向けて最期の言葉を送る。

「うた、の．．．ん。 だい、すき」

次の瞬間、肉を裂き、骨を噛み砕く音と共に鮮血の華が咲く。
それは歌野の頬を、金糸梅の装束を最愛の友の血で染め上げた絶望の開花だった。

○

「……シット」

視界が暗転した歌野が目を覚ますと一番に目に入ったのは自身の部屋のLEDタイ
プの蛍光灯だった。

身体に感じる異様な熱はいつのまにか滝のような汗を形成し、自身の寝巻をびしょび
しょにしてしまっている。

夢だった。あの残酷な光景は全て幻。

「すー……すー……」

隣で静かに寝息を立てている藤森水都の存在を感じ、その事実だけを受け止め、胸を撫で下ろして歌野は大きく息を吐く。

夜、歌野の部屋に遊びに来た水都がそのまま眠ってしまったので自分もその隣で寝ることにしたのだと思いだす。

「絶対に、あんな結末にはさせないわよ……させるもんですか」

自分の見たのは夢であり、確定した事項ではない。たとえ、それを匂わせるような要素がこの世界に来る前にあったとしてもだ。

「……みーちゃん」

水都の髪を梳くように小さな動きで触れるとくすぐったそうにした水都の身体が震えた。

「んー……う、うたによん……くしゅぐつたい……」

寝言レベルの言語で顔を蕩けさせながらそう返した水都を見て自然と歌野に笑みが戻る。

「ふふふ……もう、みーちゃんたら」

愛おしい人の寝顔を確認して、歌野は再度布団に入り直す。

「諏訪の人も、みーちゃんも……私が守るから」

——絶対に、強くなるんだ。そんな未来にしないために。

その寝顔を瞳に焼き付けながら、心の中で密かに歌野は誓うのだった。

○

——未解放地域。

静まり返る樹木のみが羅列を形成する空間に、赤嶺友奈はいた。

「それで……、約束は守ってくれるんだよね？」

座布団を敷いて、その上に正座をした険しい表情で赤嶺は承諾を要求する。

「――しぶかわごうき 渋川剛氣さん？」

目の前で、同じく正座をして静かに茶を啜る一人の老人に対して。

155センチという小柄な身長を持つその渋川という老人に、赤嶺が畏怖する。とても老人に覇気は感じさせないが、

しかしながら、その凜とした佇まい、一介の老人に非ず。

正体は武闘家の道に身を置く、その界隈の達人。

渋川流柔術の開祖、渋川剛氣。

合気道を実戦で活用し、その実力を買われ警視庁にて逮捕術・柔道の客員指導を行っている男である。

「一宿一飯の恩義……」

「果たさねエとあっちゃアお天道様に顔向けできないわな」

物腰柔らかかそうな柔和な表情で渋川は答える。

「それにこんな可愛いお嬢ちゃん頼みとあっちゃねエ……」
「ぱしん、と老人は自身の膝を両の手で叩いて見せた。」

「受けるぜ」

「……シヤア！」

その言葉を聞き、赤嶺はガツツポーズ。味方として招き入れる為に、あの手この手で最善を尽くした甲斐があったというものだ。

勇者部には最近、バーテックスを手刀で両断する謎の空手家、愚地独歩が現れた。

この男も、恐らくは彼の仲間だろうと赤嶺が直感で理解する。

「いやー、あの時はどうなるかと思つたネ。おじちゃん、いきなり知らない土地に飛ばされちゃつたから怖かつたのよー」

かっかっかっ、と軽快に笑つて見せる渋谷に赤嶺は視線を少し逸らして、

(嘘ばっかり……)

昨夜の事だ。勇者部の襲撃作戦が失敗に終わり、拠点へ帰還してきた赤嶺が見たのは未解放地域に横たわつた数多くのバーテックスの姿だつた。

星屑が、タウラスが、スコープオンが紙のように空を舞う光景を誰が予測できただろうか。

それが小柄な老人によつて投げられているという事など、誰が予測できただろうか。

その老人は嬉々として、投げていることに快感を見出したかのような笑みでパーテックスを千切っては投げていた。

だがその老人、渋川が敵がいなくなったのを見て急に、

『ハラが減ったア……この白いのは味気が無くてマズイし、やつとられんわ』

と嘆くのを見て、赤嶺は画策する。一宿一飯の恩義で、この男を仲間に引き込めな
いだらうか、と。

「タコさんウインナー……もうちよい塩控えめで良かったのお……儂、一応老人なもので」

「あはは……ごめんね渋川さん、もし次もご飯に困ってたら、ウチで御馳走用意するけど？」

「ほう、そりゃあ有難い……でも、それは——」

老人らしいゆっくりとした動作で渋川が立ち上がり、赤嶺を見おろす。

「勇者部……とやらを、ブツ倒してからにしてもらうかね」

先ほどの柔和な笑みとは違う、口角をあげたニヒルな笑みを浮かべる渋川を見て、赤嶺は背筋に凍る物を感じる。

似たような感覚がある。愚地独歩と対峙していた時と同じものだ。

これこそがこの男、渋川剛気の本質。

傍から見れば一見、争いごとが嫌いで、どこにでもいそうな平和を好む老人。

だが、誰よりも戦うことが大好きで、護身を目的とした合気道を極める者として相反したその攻撃的な性格こそが彼の正体だと誰が気付けようか。

「・・・ツッ」

赤嶺の身体の節々が痛む。それは、渋川を最初仲間に引き入れる為に最初行っていた交渉手段、赤嶺自らの立ち合った当時の状況を思い出す。

殺意を乗せた拳を何度も何度も放てども、その都度自分が同等の威力で遠くへ投げ飛ばされ、または地面に叩きつけらる。

昨日の出来事を赤嶺は思い出してはそのダメージが蘇るかのようだ。

まるで魔法にかかった感覚。自分が自分を真正面から殴ったような。

最終的に決着させたのは食事を振る舞うということだったのだが、それが一番赤嶺にとつて悔いることだった。

神世紀、大赦の暗部として自分の磨いていた対人を想定した体術が、自分よりも華奢な老人に全く通用しないという事実には。

現状で非の打ちどころがなく、手も足もでないということを赤嶺は認めなければいけなかった。

「神様の作ったこの世界、勇者とやらに試練を与えるその御役目——、この渋川剛気が承った」

まるで刃を研ぎ澄ましたかのような、まさに真剣な顔つきの渋川の足元に着地する。

「……この子が送ってくよ。愛媛から香川まで結構距離があるからね」

「おお、助かる……つと」

星屑の背に跨った渋川の身体が宙に浮きだす。星屑にとって老人程の物量を運ぶことになんら苦労はない。

それでいて速度は並みの自動車と変わらないので移動手段としては赤嶺も良く利用しているほどだ。

「んじゃあ楽しみにい——」

「フンツ」

直後、星屑の尻を赤嶺が蹴り上げる。星屑が驚き、馬が鞭で叩かれた如く跳ね上がったのは猛スピードで空を駆け出した。

「ひえええええええええ!!」

「いつてらー」

昨日散々投げられた仕返しのもりでつい手が出てしまった、と赤嶺は後悔する。これであの老人が普通に帰ってきたら自分はどうなるのだろうか。

渋川を乗せた星屑が見えなくなるのを黙って見送った赤嶺はふと、その場で呟く。

「造反神様……私って、このままでいいのかな」

勇者の力を持ちながら、世界を守ってきた時代の勇者の敵として立ちはだかる。

与えられた神聖な御役目の為に、ありとあらゆるものを利用し、神樹側の勇者に試練を与える……ハズだった。

だが現状はどうだ。どっから湧いて出た武の道を極めた武人たちに翻弄され、あまつさえ、勇者でもない別の世界の人間に代わりに打倒、あわよくば同士討ちを願う始末。

明らかに逃げの思考を顔を振って否定する。

——それが本当に赤嶺友奈の御役目？

当然ながら、主である造反神が答えるはずも無く、赤嶺の問いはただ虚空へと消えていくばかりである。

第十一話　農業王への試練②

「うたのんの様子がおかしい？」

「ああ」

時間帯は昼休み。

部室にて弁当箱を広げ、今まさに卵焼きを食しようとした藤森水都が静かにその箸を置いた。歌野の様子がおかしい、そう言ってきたのは同じ西暦勇者の乃木若葉である。

「最近は鍛錬に対してかなり入れ込んでいるようだ。今朝も遅刻ギリギリまで空き缶相手に藤蔓を振るって、リフティングしていた」

「り、リフティング？」

サッカーで言う、ボールをキープする技術。ボールを宙に浮かせ、如何に地面に落とさないようにするサッカー選手ならば必須のスキルだ。

だが、人並みにスポーツをする歌野だが鞭を使ってリフティングをする歌野のイメージが水都には容易に想像できなかったのである。

「結局は鞭を自由自在に制御する訓練だと、私は思う。空き缶を蔓で当ててからは宙

に浮かせ、何度も当てながら地面に一度たりとも落とさなかった」

「はあ……ま、まあ、うたのんがトレーニングするのって別にいつもと変わらないんじゃない？」

「そう、だろうか……だが私には最近の歌野からは鬼気迫るものを感じる」

汗水を流し、鞭を振るう歌野を見た時、若葉は即座に声を掛ける事が出来なかった。空き缶を落とさず、一心不乱に鞭を繰り出す歌野の技術力に見惚れていたからではない。

その表情からは極度の集中力と、普段見せない怒りの感情が見え隠れしていたのだ。「もしかして……この前の赤嶺友奈の部室襲撃と関係があるんじゃないか？」

若葉の言葉に思うところがある水都だった。

先日、勇者部の部室にいる巫女を狙って讃州中学に侵入してきた赤嶺友奈の非道には若葉たちを含めた勇者達を戦慄させた。戦闘能力を持たない巫女に星屑とバーテックスをけしかけるなど許されることではない。

学校に待機していた愚地独歩のお蔭で襲撃計画は御破算となり、撃退することはできなかったのだが以降は巫女は外で活動する際は単独で行動しないというのが部内での決まりとなった。

「そういえばそうかも・・・たしかにあれから、うたのんからのボディータッチがかなり増えたような」

「お、おお・・・そうか、仲が良いことはいいことだな。うん」

「ごほん、と若葉が咳き込んでいる。少し恥ずかしそうにしているが、若葉とひなただつて似たような事をしている気がするのだが。」

「心配しているのだ」

若葉が不意に言葉を漏らす。

「同じ西暦の勇者、というのもあるが正直、歌野の事はこれまで通信という間接的な手段でしかやり取りがなかった。」

「だけどこの世界に来て、歌野に会うことができて私は嬉しかったんだ」

香川と諏訪。遠く離れたお互いの状況を占びた通信機一つで行うというのが二人の日常だった。通信機越しに『うどん』、『蕎麦』のどちらが優れているのかを競い合つたし、若葉がリーダーとして悩んでいた時はアドバイスだつて貰っていたのだ。

だから諏訪と連絡が途絶えた時、心の底から辛かった。絶望的なほどに。しかしこの神樹が作り出した世界では元気な姿で会う事であつた。若葉にとつてそれは奇跡だったのだ。

「あの時、通信機越しだけで直接歌野に助力をすることが出来なかつた。私は、歌野の

力になってやりたいんだ。水都」

「若葉さん……」

ありがたい話だ、と水都は思う。

諏訪のこれまでの状況では、歌野一人で戦ってきたが日を追う毎に戦況は悪化していく一方。御役目を体に傷を残しながら果たしていく決して心折れず、絶望せずに立ち向かう歌野の姿を見て、水都は何度思ったことだろうか。

——神様でも悪魔でもなんでもいい、だれか……うたのんを助けてよ、と。

だがこの世界は、たくさんの勇者がいる。同じ西暦の勇者、未来の勇者が共に戦っているのだ。歌野はもう一人ではない。信頼できる友が、仲間がちゃんとしているのだ。

「ありがとうね若葉さん。お昼休み中だけど、食べ終わったら一緒にうたのんの所へ行こう。たぶん昼休みも畑にいますと思うから」

頼れる仲間がいるという事は素敵なことだ。水都は心に暖かいものを感じながら笑顔でそう思った。

○ 「……水やりよし、と雑草抜き、よし、と」

昼休み、制服姿で農作業をする女子中学生が居るらしい。

それは誰だ？と問えば、誰もが口を揃えて言うだろう。それは白鳥歌野だと。

「グレイト！ グレイトよ！ 今日も絶好の農作業日和！」

慣れた手つきで畑をいじくる歌野の動きにキレがあるのは程よい風に程よい気温故、野菜が育ちやすいベストコンディションという事実。

諏訪では農作物を作ってはバーテックスに襲われて畑を破壊されるといふ事が多かったのだが、この世界では勇者が一人ではないという事もあって、歌野が育ててきた畑は失われず守られ続けている。

大赦の伝手を頼って歌野に畑が与えられるまでは、全くと言っていいほどこの世界で生きた心地がしなかった。それが先月、ついに念願叶ったので四国に存在する野菜を季節に合わせて育てているのが歌野の日課だ。

ちなみに、育った野菜は収穫して業者の方に卸している。それで歌野に農業関連の仕事が勇者部に舞い込むこともしばしば。

嬉しいことである。こうして実力を認められている事こそが、歌野にとって農業王へと一歩ずつ近づいてきている事の証なのだから。

「ほっほ、こらまた立派なトマトじゃ」

一息休憩を入れようとした歌野がトマトを植えている場所に一人の老人の姿を見た。

身長は160も無いだろう、着物姿が絵になる老人が歌野の作った野菜を感心した様子で眺めていた。用務員にしては装いが作業服でないのが気になる。もしかすると、この讃州中学に間違つて入ってきた一般の人なのかもしれない。

「あら、おじいさん。お目が高いですね、未来の農業王歌野が作った自慢の野菜たちですよ」

部外者が入ってきている事は事実。しかし、そこは心の広い歌野だ。たとえ間違いで入って来ていたとしても相手は老人。人生の年長者ということを配慮においた歌野は優しい口調でその老人に語りかけた。

「ホウ・・・この野菜、というか畑、全部お嬢ちゃんが作ったのかい？」

口を開いた老人はこの敷地にある全ての野菜を歌野が作ったことに驚きを隠せないでいた。

老人にとって畑とは、農業とは中年や高齢の人間がやるイメージしかなかった。ましてや、制服姿の女子中学生などもつてのほかだろう。

「野菜好き・・・よりは、農業が好きって感じかな？」

「そうですとも！ 農業無くして、私の人生はあり得ないですから！ イッツ・ライフワーク！」

好奇心が何よりも自分を動かすのだと、老人の問いに歌野は明白に答えて見せた。すると老人は程なくして、

「かっかっかアッ、スゲエぜ！ お嬢ちゃん！」

高らかに笑ったのだ。

「最近の若いやつらと来たら、農業に関心持たない連中ばかりじゃろ？ 年々、農業の肩身って狭くなってるらしいしなア」

若者の農業離れ。一言に済ましてしまえば簡単だが、現実その問題は深刻である。

「時代の流れ、社会風潮、進学して都中心の生活を送る若者増加、食生活の変化、就職

難、不況・・・ましてや、農業は天候に左右されやすいし、天災、水害なんてあった日にやあ農家にとつては堪ったもんじやない」

時代は変わり自然と触れ合う人間が減った。

台風や干ばつ、梅雨の時期ほど農家を恐れさせるものはないし、それで打撃を受ける農家の収入と言うのは不安定なものである。一概に今挙げた事が農業離れの原因とは言い難いものの、老人の言うことがある程度的を得ているというのは確かだった。

「そんな中でお嬢ちゃんみたいなの農業を志してくれる若いものが居るってこと自体、嬉しいもんじやねえか。この野菜の手入れ具合からするに、適当にやっている訳でもないし、確かに情熱ってヤツを感じる」

瑞々しい輝きを放つトマトは今でも収穫して齧りつきたいくらいだ。歌野の野菜は他人から見たら、それくらいに美味さそうなのだ。歌野の野菜は

「あはは、嬉しいけど・・・照れちゃいますね、そこまで言われちゃうと」

自身の育てた野菜を褒め称えられるという最大級の賛辞を受け取る歌野は目立ちやがりであるにも関わらず、過剰に褒められると一周回って照れてしまう。だが気分は良い物だ。農業に対して理解ある者が増えてくれたことを歌野は嬉しく思う。

「諏訪にいた時は無我夢中で鍬振るってましたからね」

「諏訪……？ お嬢ちゃん、長野県の出身か」

「……？ ええ」

そうか、と老人は小さく頷いて、

「懐かしいねエ、昔は遠征でよく長野に出向いたことがあつたからそんな時食べた蕎麦が忘れられなくてなア」

「へえ……」

歌野に一抹の違和感。何故だろうか、目の前の老人を蕎麦党にしてしまおうと意気揚々としていた気持ちが一瞬にして失せたのは。

歌野は思う。今の老人の会話、何か違和感はなかったか。

「最近はずーっと、東京の警視庁で若者と柔道ばつかなもんでなあく」

何故だろうか、頭の隅ある違和感がこびりついて消えない。このまま老人が言つた事を解さないまま、会話を流してしまうのは酷く、良くないような気がした。

「うたのーん」

直後、思考をする歌野を中断させるように聞き覚えのある声が聞こえた。方角を見れば、水都と若葉の姿がある。水都はいつものことだが、若葉が来るのは珍しく感じた。

「おろ？ お友達かい？」

老人は何故か眼鏡をくいつと上げてゆつくりと歩き出す。掛けていたべつ甲の眼鏡に隠れ、瞳は見えなかったが、歌野は老人の視線が水都へと向けられている気がした。「ちよつと、おじちゃん待つて．．．どうして、東京に行ったことがあるの？」

歌野の問いにぴたりと、その小柄な老人の動きが止まった。

違和感はつい先ほどの会話にあつた。

なぜこの老人は長野の諏訪に行ったことがあるのか、すでに300年前の自分たちが居た西暦の時代の場所なのに。四国が壁で覆われているこの世界で四国以外の場所から来たというジョークは今の歌野に通用しない。何故なら、東京も長野も若葉や歌野などのバーテックスが出現した西暦に生きていた人間しか詳細に知らないはずなのだから。

唐突にこの老人が得体の知れない何かだと理解した歌野の警戒度が引き上げられる。それを余所に老人が歩を進めようとしたので、

「ストツプツツ」

「ドント・ムーブよ、おじいちゃん．．．アナタ、何者？」

声を張り上げたのを聞いた水都と若葉ですら動きを止める音量に、老人は見えない角度から口角を引き上げるほどの笑みを浮かべてた。

「渋川剛氣と申す——、合気を嗜んでるモンなんじゃが今はゾウハンシン側の協力者」

渋川と名乗るは徐に眼鏡を外して、その双眸で歌野を見据えて確かに言った。

「簡単に言うならアンタらにとっての敵、じゃよ」

「ツツツ！ 若葉ツ みーちゃんを安全なところに——」

咄嗟に若葉へ声を投げた歌野が言い切る前に、

「——遅エ」

地を這うように身を低くした渋川が膝元まで迫る。

咄嗟に手を翳し、スマホへと伸ばそうとした歌野の手首が渋川に掴まれる——
次の瞬間。

——廻ッツ!!

歌野の目に見える世界が回った。

大地が、空が、若葉と水都が高速でその場所を入れ替え、捉えられる景色全てが流転する。その流転の果て、歌野の全身に衝撃が駆け抜ける。

「が……はっ」

何が起きたのか、何をされたのか歌野には分からない。

背中から地面に落とされた事だけを理解した時、一瞬だけ呼吸が止まる。地面の柔らかさを感じながら起き上がろうとした歌野の見上げる先には、先ほどの現象を自身に起こさせた張本人、渋川が歌野を見下ろしていた。不気味な笑みを浮かべ愉しむかの如く。

「勝負はもう始まってんだゼエ……勇者さまよ♡」

それはもう唐突に。

前触れ、予兆一切ナシ。

何気ない昼休み、達人と勇者の闘いが人知れず始まったのである。

第十二話 農業王への試練 ③

「な、なんだ・・・一体何が起きたんだッ」

状況把握に自身の脳内での処理が追いつかない。若葉は最初から自身が見てきた光景を脳内でリプレイさせる。

水都と共に歌野が居る畑へ足を運んだのは良かったものの、歌野と一緒にいる老人が突如歌野に向かい、手首を掴んだ瞬間に体格では勝っている歌野が地面へと叩きつけられていた。

「うたのんがあんな風に投げられるなんて・・・」

「ま、まさか敵なのか・・・？　しかし、今の技は一体・・・」

大きな声をトリガーに巨大な力を使った訳でもなく、

腕を掴み、一呼吸の内に捻るという最小の動作、

瞬時にして歌野が宙を舞う、傍から見て思い浮かべるのは柔道という、投げ。

「——合気だ」

「・・・ツツ!? 愚地さんツツ」

混乱する若葉の背後からの声の正体は道着姿の愚地独歩がいた。

「あ、合気って・・・もしかしてあの『合気道』・・・ですか?」

格闘技に詳しくない水都でも合気道という単語くらいは耳にしたことがあった。曰く、相手の力を最大に、自身の力を最小にして敵を制圧するというもの。

「なんか良くわからないけど、『氣』とか使って相手を吹っ飛ばしたりする・・・てつきりアレってテレビとか動画の中の話だけだと・・・」

水都が諏訪にいた頃、動画サイトで合気道の試合の動画が見たのを思い出す。

パフォーマンスつばさ全開で老人が4、5人の男を押し返したり、ぼったんぼったんと投げ飛ばす場面。正直胡散臭かった。動画のコメント欄にも『やらせだろ』と、信じられない、といったものばかり。

「合気道は“護身術”・・・自身を守護る為に女子供が力で劣る相手と戦う際のもの。

しかも、相手の関節や人体の構造を利用した戦い方のハズ。

しかし、あれは・・・人間が宙を舞う程の威力を持つ技を・・・“合気”と呼べるのかツツ!?”

信じられない光景を見た。そして、見た光景が未だに信じられないという若葉の表情。

人間の関節や、骨の構造を逆手に取った投げ技を特色とするもの。武に精通した若葉も、それは理解している。

だからこそ信じられない。人が豪快に宙を舞い、あまつさえ地面を抉る程に叩きつけられるなど。

「——いい機会だ。二人とも、学びなさい」

これは仕方ないことだ、と独歩は思う。

水都は素人、そして若葉も武器を刀に持つという事もあり、勇者部の中では武に対し研鑽を積んでいる彼女も独歩からすればまだまだ“若い”。

「少なくとも、この時代はどうか分からねエが俺たちが居た世界ですら、合気道という武道は実戦で活用されることは稀——、」

柔よく剛を制す、なんて銘を打ちちやいるがよオ、結局技のタイミングやら相手の間合いやら測り兼ねて打ん殴られて終わる・・・それほどに合気つてのは難しい」

「しかし、一人だけ例外が存在する——」

独歩が見据えるのは彼よりも小さく、華奢な体つきの老人。畑の地面を足袋の先で突

いている人物こそが、

「初めて実戦で合気道を持ち込んだ．．．渋川剛氣という男を除いて、な」

達人の中の達人、武の体現者。それが独歩の世界で呼ばれていたその男の渾名。

「だからこそ惜しい——、どうして造反神の側についたよ、渋川先生？」

「そりやアのう人食いオロチや」

土いじりを止めた渋川が顔だけを独歩たちに向けて微笑んでいた。

「一宿一飯の恩義つてヤツ？」

この男が口にするならば、武の体現者・渋川剛氣が口にしたことならば真実なのだろう。

だが本心は違う事を、独歩は知っている。

渋川と戦い、投げられ、死闘を演じた独歩だからこそ分かる。彼の本質。

誰よりも戦うことが好き、

誰よりも危険を承知で戦場へ赴き、

誰よりも相手をブツ倒す事を考えている。

渋川剛氣とはそう言う男だ。

「だったら渋川先生、その恩義とやらしつかりと果たせるように努力しなア」

肩を練める独歩に違和感を感じた渋川が小さく首を傾げる。独歩は一瞬不敵に笑い、

「——後ろで農業王がご立腹だぜ？」

「……ツツ?!」

渋川が気付く時、自身の胴部分に緊迫感。右腕も巻き込むように渋川の動きを封じ

たモノ、それは鞭。

「畑を荒らすのは許さないわよ……ゴウ・アウエイツツ!」

変身した白鳥歌野が手にする藤蔓を振るうと縛られていた渋川の身体が持ち上がる。

勇者服に身を包んだ歌野の能力は引き上げられ、藤蔓はその腕力に耐えうる武器だ。

歌野が振った勇者の力が鞭を撓りながら伝い、持ち上がった渋川の身体が空中で力

場を失い、歌野の頭上で止まる直前。

「——セイツツ」

全身を撓らせた歌野が藤蔓を前方へ振り抜く。空中で鞭の拘束を解いた結果、渋川

は数十メートルの距離を投げ飛ばされることになった。

体感速度60キロ。投げ飛ばされた先、転圧を施された地面に叩きつけられれば齡

70を越える老体の身体は無事では済まされない。そんな危機の中で渋川剛気が笑う。そうだ、これを待っていたのだ、と。

「——よっつと」

畑の敷地から投げ出された渋川の身体が宙を舞う。

確実にと迫る地面に脅えることなく、冷静な顔で渋川は空中で受け身を取り、軸を整え、まるで羽の如き柔らかなさでふわり、と地面へと降り立った。

「な、なんだあの動きは・・・あの老体が空中で受け身を取り、しかもダメージも感じさせないようなしなやかな着地ッ」

まるで奇術を見せられている・・・もはや魔法の域かと若葉が息を呑んでいると歌野が同じく畑の敷地から飛び出てきた。

「ふむ、なるほど」

投げられた直後、身体の埃を払うように着物をばんばんと叩いた渋川が唸る。

「お嬢ちゃんの畑を荒らす気は無かつたんじゃが・・・すまんね」

声色だけは申し訳なさそうに言い、頭を下げないのは今が戦闘態勢が故。それでも渋

川が歌野を投げた場所には地面の土が抉れ、他の野菜に降りかかってしまっている。被害としては極小的なものだが、荒らしたと言われても間違いはない。

渋川の謝罪に対し歌野は、

「本当だったら野菜の事もベリーアングリーな所だけど……一番許せないのは、私の大切な友達を狙ったことよ」

藤蔓を振るって地面に叩きつける。歌野の表情は確かに怒りを持っていた。

つい先日、赤嶺友奈が部室の戦闘能力のない巫女にバーテックスをけしかけるといいう外道技を見舞ってきたのだ。一度ならず二度までも、歌野の大切な友人を危機に晒されて黙っている訳にはいかなかった。

「悪気は無かったんじゃないが……別に襲うつもりも無かったし——」

渋川が困り顔で頭を掻く。

「カワイイ娘がいたらそりやあ声かけるじやろ」

渋川があっけらかんに言い放つ。歌野も数秒程腕を組んで、

「……たしかに、『みーちゃんは』かわいい。ソウキユート……そこは同意見だわ」

「ちよ、ちよっとうたのん!」

「う、歌野! 私は!? 私はその対象に入っていないのかッ!」

赤面する水都があたふたするその隣で若葉が叫んでいた。

「——つたく、緊張感ねエなオイ」

髪のない独歩が頭を掻きながら、その光景を見てため息をつく。若葉は若葉で、歌野からまったたく返答がないことに地面に四つん這いになっていた。ただ単に戦いに集中して聞こえていないだけなのだろうが。

「わ、私は可愛くないのか・・・」

「さて若坊、いつまでもしよげてんじゃねえや」

「ぐすつ——な、なんだ愚地さん・・・」

「——歌野が動くぜ」

○

白鳥歌野が仕掛ける。

直接渋川に近づくことなく、藤蔓を振るう。波のような軌道で撓る鞭が渋川の足元の地面を穿ち、弾けるような甲高い音が響く。

「・・・ッッ」

渋川の足元、まるで小規模の火薬が爆発した後のように抉られた土がある。藤蔓の威力を物語るソレは一瞬だが渋川を怯ませる。

一振りすれば一つ大地を穿ち、

二振りすれば二つ大地を削り、

重なった連撃は砂嵐を起させるほど。

渋川動かない、否、動けない。

大地を抉る程の威力を持つ無数の鞭の軌道が砂嵐に紛れ、見極めるのを阻む。

下手に飛び込めば、刃の嵐の中を無防備に進むかのように、危険であると判断する。

「考えたな、歌野ちゃん」

独歩が言う。

「どんな拳法家だろうが、武道家だろうが、それらが繰り出す一流の技は殆どが相手に『触れる』事を前提としている。だが逆に、触れさせさせしなければ合気を仕掛けるも

クソもあつたもんじゃねエ」

「む、鞭の動きが見えない・・・これじゃあの人も近づけない、凄いや、うたのん！」

藤蔓と言う長いリーチを持った歌野だからこそ出来る『合気封じ』。それは独歩を含めたグラップラー達にとつては天敵とも言える。今この時だけは渋川剛気という達人に対して、歌野は確実に優勢を保っていた。

「だが、相手はあの渋川剛気……そう簡単に上手くいくとは思えない」

「不安な要素があるのか、愚地氏」

若葉の問いに独歩は目を細めた。

「もし、こうなったら……お前らはどうすんだろうな、つてずつと俺や烈は考えてたワケだ——、今にそれが分かる」

渋川が動きだす。

ゆつくりと、一步を踏み出し、一定の速度で近づいては歌野との距離を縮めていく。

不用意に、不気味に近づくと、渋川に歌野が鞭を振るい、近づくと者を拒む鞭の嵐を形成する。この鞭の嵐に飛び込むものは、たとえ舞い込んできた草、花びらも容赦なしに巻き込んで打ち刻むもの。

「——行くぜ、お嬢ちゃん」

だが、渋川はニヤリと笑みを浮かべた直後、たんつ、と跳ねては一気に歌野との距離を消していく。

鞭が抉つていく大地に物怖じすることなく、直線的に、ただ真つ直ぐに。

「・・・ちよツ、ウソツ!? リアライ!？」

歌野の表情に焦りが見える。

一発でも当たれば皮膚が腫れあがる程度では済まされない鞭の嵐の中を突っ切ってくる渋川の行動はどこからどう見ても無謀であった。

渋川を近づけさせまいと歌野の鞭を振るうスピードが上がる。手先だけに振るうのではなく、何千何回と練習していく中で歌野の脳内ではどうすればこの場所に鞭が届くかが瞬時にイメージできている。隙などが出来る筈がない。

一瞬の刹那、渋川剛気が歌野の目の前に姿を現した。

鞭の嵐を物ともせず、

その身に傷一つすら見当たらない、

着物を着崩すことなく、にんまりと笑みを浮かべた渋川の手が歌野に迫り、

「——ッッ」

歌野が鞭で応戦しようとして、動きが止まったのを達人は見逃さない。

無防備な右腕を掴まれた瞬間、

身体が宙を舞うという浮遊感が蘇る。

廻される視界の中で歌野の頭部が地面と垂直になった時、

「まだまだアッッ」

まるで風車を素手で廻す如く、

歌野の頭に手を添え、自身の力を加えて加速させる。

更なる一回転に加速を加えられた歌野が地面へと側頭部から落ちるのに合わせ、上から押し込むように叩き落とす。

どごっ、と地面にめり込む轟音が鳴り響く。

「がはっ……!!」

地面への衝突の際、歌野の脳が激しく揺らされる。

脳が頭蓋内部に何度も衝突する回数は数百回か、または数千回か。

渋川が少しだけ崩れた着物を着直して、

「お嬢ちゃん、ウソばかりだねエ……」

「舐めてんのかい？」

凍りつくような目つきに当てられて身動きできない歌野に、次の瞬間ぐりつと、右足による容赦ない喉蹴りが炸裂した。

「うたのん！」

渋川の喉蹴りを見舞われ、地面をのたうち回る歌野を目の当たりにした水都が叫ぶ。

「愚地さん、今の攻防……貴方が言っていた不安と関係があるんですか!? 今までの歌野には油断もなく、こうして一撃を貰う結果になったが、そこに歌野の慢心はなかった筈だッ」

若葉が問う。

これまでの歌野は確かに一時的なものであったが達人・渋川の動きを確実に封じ込めていた物だった。それが一瞬のうちに形勢が逆転され、歌野に危機が迫っている。それが独歩の言うが、若葉が見てもこれまでの歌野の戦いの中で歌野の戦いに不安要素は見

当たらない。

全ては達人が持つて為せる技故の展開なのではないかと信じて疑わない。

「違うな若坊・・・奴も、渋川も気づいてらア」

独歩の言葉はいとも簡単に若葉の思考を否定の言葉で両断した。

「普段バーテックスに戦う事を前提にしているお前ら勇者だからこそ、むしろ・・・人外から人間を護つてきたお前らだからこそ、この展開は避けられない・・・」

お前たちは——、勇者は対人を想定していない」

「ツツツ!?!」

「たとえば、若坊は西暦の時代では無頼の力を持つて生太刀で何千という星屑を、バーテックスを滅ぼしただろう。だが、その刃をお前は仲間や、同じ同種の人間に対して向けた事があるかい?」

「そんなこと、あるわけが・・・まさかッ」

「そうだ。人々を護つてきた勇者だからこそ、本来護るべき人間だからこそ、武器を持つて、力を振るう事は出来ない。人間を相手取ることに對して勇者は抵抗を感じる・・・」

生身の人間が歌野の鞭に打たれ、若葉の刀で斬られれば命に係わる・・・

十回くらいは若坊に斬られれば、オイラや烈だつて死ぬだろうよ」
「じゆ、十回くらいは耐えるのか・・・」

これまで若葉たちが想定していなかった対バーテックスではなく、対人間の戦い。

バーテックスは勇者達と戦う事でその驚異的な成長速度で新たな力を持つては四国を襲つてきていた。若葉もそれは経験している。対して勇者もその強大な力に対抗するように若葉の後世、300年の間もその力を継承し、育てていった。結城友奈たちの時代のシステムを見れば一目瞭然である。

全ては人類を護る為。

その力の結晶、勇者システムがこの造反神を沈める御役目でこのような弊害を引き起こすとは思つてもいなかった。

「歌野ちゃんも一人で諏訪を護つていたんだ・・・犠牲も一度も出さなかったつて言つたし、誰よりも人を護る心が強い、優しい娘だぜ。」

それで相手が同じ人間となりやあ、そりやあ戸惑うよな」

「というこは、歌野が繰り出してた全ての攻撃に当てる意思が無かつたのを、老人は見抜いていたと？」

「歌野ちゃんに手抜きはねえ・・・だが、護身を信条とする渋川にとつちやあ、どれが自分に危害が加わる攻撃かどうかを見抜くなんて、造作もない事だろうぜ」

渋川が歌野の攻撃を『ウソ』と生じたのはその為だろう。

普段人間を護る事を日常とした者達にとつて、人を傷つけるといふ行為は無縁のもの。だからこそ、そこに隙が生じる。不利と有利が逆転する。

「じゃ、じゃあ・・・うたのんに勝ち目はないって、こと？」

「・・・そんなッ」

若葉の拳に握られる力が強くなる。

人間が相手になる。赤嶺友奈が相手の時は気にも留めていなかったことだ。同じ人を攻撃する、生身の人間を攻撃することに躊躇いのある人間が勇者部にはほとんどだ。若葉だつてそうである。

これから先、渋川剛気のように達人が相手になるようになり、バーテックスよりも人間を相手にすることが多くなれば、今の勇者部たちに勝ち目はあるのか。

現に歌野が苦戦しているのだ。いや、苦戦など生ぬるい、圧倒的技量の差で追い詰められている状況は絶望的に敗北の色を濃くしていた。

「ドント・ウォーリーよ・・・ミーちゃん、若葉ッ」

不意に声が聞こえる。

若葉と水都の視線の先、立ちあがった歌野の姿があつた。

「ほう……アレ食らつて立てるなんてよオ、根性あるじゃねエかお嬢ちゃん」

渋川剛気が笑みを浮かべる。

それは確かに、自身の合気の技を受けた歌野に対する感心と敬意を含めた笑みだつた。

「じゃが、その状態で続けるのは……無理は言わん、やめとけ。

——ドロドロじゃろう？」

「……ええ」

渋川の示す言葉が意味するもの。

歌野の視界は酷く、歪んでいた。

目に映る全ての光景があやふやで、

大地が常に歌野に近づくように隆起するような変動を続け、

人は歪みながら捻じれ、現実とかけ離れた空間。

脳震盪を引き起こした歌野の平衡感覚は失われ、今にも倒れそうになる身体を寸前で踏ん張って見せ、必死に耐える。

「そこまでして、戦う理由はあるかい？ 勇者、だからか」

ふむ、と渋川が唸る。

女子中学生が人類を護る御役目を担うには、少しばかり酷だと、武人としてではなく、人間としての心がそう思わせる。

「タマネギ……」

「ん？」

突拍子もない野菜の単語に、渋川が困惑の反応を見せる。それは若葉たちも同様の物だ。

「アスパラガス……パセリ、ネギ、きのこ、高菜、フキ——」

連ねる名の野菜は、全て歌野が育ててきた野菜たちだ。

「この世界に来る前、そう言えば諏訪でそろそろ収穫に入る野菜があったな——」

元気に成長を遂げた野菜たちの姿を歌野は脳裏に浮かべる。

「私が負けたら……そういう収穫時期にあった野菜とか畑とかも全部、パーテックスに

荒らされちゃうんじゃないかなって・・・向こうの世界で実際にそうならね」

「歌野・・・」

若葉が呟く。

現実世界で通信をしていた時、彼女はいつも農業のことを話していた。バーテックスとの闘いで縮小していく長野の地域で自活を余儀なくされたことなど、その切羽詰った苦しい状況も。

「だから、私がダメになったら、何もかも終わっちゃうんじゃないかなって・・・ずっとそう思ってた——若葉」

小さく笑って、歌野は言った。

「球子さんが言ってたわ。『若葉が後ろにいるのは心強い』って・・・」。

自分たちがこれまで戦ってこれたのも、厳しい戦いするときには前を向いて全力で戦えるのは、後ろで若葉が控えてくれるからだって・・・今なら、その心強さが分かる気がする」

「おい、まて歌野」

若葉は悟った。

死ぬ気なのだ、歌野は。どこか、遠くを見るようにそれでも生気を失っていた歌野は何か差し違えるつもりか、その覚悟で戦うつもりだ。

「後を頼んだわ・・・、でもただでやられたりしないから、この御役目が終わってもし現実の世界に戻ってもあなた達の為に、後から続く人たちの為に何か残してみせるから。」

そうすれば、私じゃなくても・・・別の誰かがいずれゴールを切って——」

「——ふざけるなツツ!!」

歌野が言い切る前、若葉が叫んだ。

「この世界に来て、私はお前の力になってやりたいと思っていたツ！　だが、今のお前のそんな頼みを、素直に聞こうとは思わんツ」

「ちよつ、ホワイ!!　どうしてよ若葉!!」

「どうしてだとツ!!　ならば教えてやるツ」

すう、と息を吸い込み、叫ぶ。

「生きる事を諦めるなツ」

「——ツツ」

「私の知る勇者・白鳥歌野は——、そんな弱音を吐くような勇者ではなかったぞ!!　自分を切り捨てるなんて考えを私は許さんツ　人を護る役目、それはお前自身とて例外

じゃないんだッ」

泣くこともせず、怒気を込めて言い放つ若葉の言葉が耳に響く。

諦めてはいけないと、

自分を擦り減らすなど、

生き残れと、

若葉は確かにそう言っていた。

「やっぱ若葉って、武士みたいな人ね・・・将軍みたい」

心を震わせる友の熱い声。

諦観していた歌野の心が軽くなるのを感じ、呟く。四国の勇者達が、若葉がリーダー

になった理由が分かった気がした。

「戦って、勝て！　そして生還しろッ——行けッ農業王!!」

一喝に対して、歌野が両の頬を叩く。瞳に力が戻った歌野が渋川と相對した。

「覚悟・・・決めちまったか」

渋川がため息をつく。彼は歌野に対してやるせなさを感じていた。

勇者であるが為に、本人が望んだわけでもないのに、

地球、土地、人類、家族、友……。

中学生女子がその肩に背負い込むには、余りにも重く、余りにも酷。

渋川は思う、神様つてのは酷いコトをする、と。

「そうなつちまつたんならコツチも手加減できねエ……来な、お嬢ちゃん——イヤ」
瞳を細め、静かに構えを取った渋川が纏う雰囲気は、それまでの彼とは見間違えるほど。

鞘に納めていた刀のように、精神を研ぎ澄ませる。

「——白鳥歌野」

見据えた渋川の瞳に映る歌野は、達人が全力を出すに足る存在へと変貌を遂げていた。

第十三話 農業王への試練 ④

静寂を打ち破るかの如く、歌野が動いた。

大地を削り取る轟鞭が再び撓り、無限の軌道が生み出される。

渋川が感じ取る、白鳥歌野の変化。

眉を顰め、繰り出される鞭の打ち筋を見極め、身を振る。

鞭が空気を叩く音が響く時、それは鞭の振るわれた速度が音速へと達した証だ。

「……ムッツ」

弾けたような音が確かに、渋川の衣服の袖部分を捉えていた。

当てに来ている。

先ほどまでの他者を傷つけることに脅え、鞭を振るう事を戸惑っていた少女とは思えない。

この袖を穿った一振りも、渋川が回避を行わなければ確実に左腕を叩かれていただろう。

護る物の為に覚悟を決めた、そう言う感じだ。

——ならば、終わらせる。

渋川の全身が溶ける。

固形から液体へ、

水から水へ変化するかのように脱力し、

膝を曲げ、身体を落とし、

その落下による勢いを踵へ伝え、

爆発的な加速を生み出し、歌野との距離を消していく。

渋川が歌野との距離を二間半とした時、

真横から鞭が。

渋川の接近を予測した歌野の鞭が左方向から迫って来ていた。

その軌道は確実に渋川の脇腹を狙うもの。

次の瞬間、音が弾けた。

叩きだした乾いた音は遠巻ききの三人にも聞こえ、初めて耳にすれば背筋が凍る程の快音。

「……ワッツッ!?」

違和感に気付いた歌野が叫ぶ。

歌野の鞭は確実に渋川の脇腹を捉えていた。

だが、歌野が打ち込んだのは渋川が直前に脱ぎ捨てた——、羽織。

渋川の側面を扇情に広がる羽織はまるでパラシユートのように展開され、歌野の鞭と激突する。

ふわり、と広がった羽織は打ち込まれた部分は破けている。だが、渋川の皮膚には届かない。ダメージは発生しない。

羽織の生み出した空気抵抗が歌野の鞭の威力を最大限に達させる事を叶えさせなかった。

渋川はその威力を殺され宙に浮いていた羽織と鞭を同時に、

「……ふんッ」

巻き取る。

己の羽織を鞭の最大攻撃力が生み出すその小さな先端に絡みつけた。

歌野が鞭を振うより早く、渋川が羽織の袖と袖で外れぬように完全に結びつける。

「――鞭の初動、捉えたり……さてどうするね、白鳥歌野とやら」

眼前に歌野を捉えた渋川がそう呟く。二人との距離はもう目と鼻の先。

大きく遠心力を利用することでその威力を發揮する鞭。だが、先端に扇状に羽織を巻きつかせられた鞭の振るう初動は今までよりも格段に遅くなる。

それは例えば、巨大な旗を振るうのと一緒だ。

ただの棒ならば人間はいとも簡単に棒を振るう事が出来る。

だが、先端に布などついた時は力を籠めてもゆっくりとした動きになる程、その動作は遅くなる。

空気抵抗というのは運動する方向とは逆にしようじる。

上に向かえば下向きに、
右に向かえば左向きに、

そして空気抵抗というのは速さに比例する。速ければ速いほど、それは大きくなり、その運動を阻害する。

今の歌野が持つ藤蔓はそういう状況になっていた。

どんなに歌野が全力で、全速で振るっても半分程度の実力しか出せないだろう。そしてこの距離、鞭として歌野が出せる最大の攻撃範囲よりも近すぎるこの距離が絶望的に敗北の色を濃くする。

「流石に諦めねエか」

「当然よ」

歌野の目には絶望など微塵もない。自身の武器である藤蔓の最大の長所を消され、攻撃の手段が皆無となったこの状況でも白鳥歌野は渋川を迎え撃つ気満々であった。

「勇者は簡単に諦めたりしない……人々の希望ですもの！」

「そうかい……それじゃあよオ——」

——締めるぜ。

そう言い切るより前に、覚悟を完了した歌野が羽織を巻かされている藤蔓を振るう。だが藤蔓の動きはやはり遅く、渋川が速い。

鞭を振るうために渋川へと向かっていたその剛力を、剛力が伝っているその腕を掴み、合気が発動する。

——廻ッツ

力の向きが見え、それを利用した渋川による合気。

歌野の身体が真横に回り、一瞬だが宙に浮く。

加速がつき、風車の如く回る歌野の頭部が地面に叩きつけられる直前。

歌野が頭を振った。

自身が廻る方向へ、さらなる加速がついた歌野の身体は頭部は地面を通り過ぎ、綺麗に足先から着地する。

着地を決めた歌野が足が、一本の軸となり独楽のように回転する。

一回転、渋川に投げられた合気の威力をそのまま利用した歌野が繰り出す――、

――裏拳？手刀？突き？　でも、これって……たしかア。

渋川には確かに見覚えのあるモノだと気付く瞬間、右頬を貫く感覚。

自身の合気を利用された一撃、それが渋川の頬を抉る。

その威力は絶大で、打たれた頬だけでなく、浸透するような痛みが頭から足先までを駆け抜ける。

しかし、その刹那。

――見事也ツ　白鳥歌野ツツ。

達人が賞賛を送る歌野の技に意識を刈り取られなかった渋川が見せる達人の意地。

その技を身に受けながらも歌野の腕を顎と肩で挟み、引き寄せ、歌野の態勢を崩し、背に負うようにして――、

投げる。

小さく浮いた歌野の身体、生じた隙間に潜り込み、歌野の顔に手を添えてその顔を地面へと叩きつける。

地面を抉り、後頭部が地面にめり込むほどの轟音。

――

自身の最後の力を振り絞った攻撃も利用され、返され、その威力を身に受けた歌野は立つことも指を一つ動かすことが出来ない。

完全なる沈黙。それは勝負の決着を意味していた。

○

「歌野ッ」

「うたのん!!」

若葉と水都が地面に倒れた歌野へ駆け寄る。あの技を食らい、後頭部を地面へと打ち付けた、それだけでも歌野の安否が気になる。果たして無事なのか、ちゃんと生きているのか。

「みーちゃん、若葉……」

歌野が確かに発したのを聞いて、二人は安堵の息をつく。水都が歌野の身体を抱き起しては、その身体に付着している土を綺麗にはたいた。

「……効いたア」

そう呟くのは、歌野を下した渋川剛氣だった。地面に胡坐をかいている渋川のその姿

は肩で息をし、瞳の焦点がぶれていた。その表情は明らかに疲労の色を見せている。最後に渋川が見舞われた歌野の必殺の一撃がその威力を物語る。

「最後の一発……なかなかどうして」

——『マツハ突き』。

渋川のいる世界で、愚地独歩の息子である愚地克己が持つ必殺拳。それが、歌野の最後の一撃を見た渋川の思い浮かべるものだった。

自身の身体の関節、背骨を含む全身27か所を回転・連結加速させ、瞬間的に音速に達する正拳突き。それが『マツハ突き』だ。

その威力は絶大であり、打撃が通用しない程の強靱力タフネスを誇る極道を一撃のもとに葬つた拳。

白鳥歌野が最後に繰り出した技は、それに限りなく近いもの。

だからこそ不思議に思う。

歌野は鞭だけを扱っていた。独歩から特別に空手を教えて貰っていたわけでもない。

そんな少女がああ土壇場で必殺の空手技を扱えるものなのかと。

「もし、完成されたマツハ突きなら……どうなつてたよ、渋川センセ」

愚地独歩が座り込んでいる渋川を見おろしていた。

「空手の形は本来、波の原理——。鞭の原理で動くものだ……」

——脱力の極地。

腕、脚に余計な力を与えないこと、それは一見力の籠らない一撃となるのか、それは否である。

相手の突きの軌道を相手の威力で逸らし、受けた手で即座に相手の腕を滑らせて反撃が出来るように、

脚を一本で蹴り込むのではなく、ぶらん、と撓らせて蹴り込むことで遠心力を利用してキレのある蹴りへと変わるように。

それこそ、鞭のように。

「鞭を使っていた歌野ちゃんだからこそ、出来たのかもしれないエ……偶然の産物故、威力は克己よりも遥かに劣るが」

「面白いぜ……やっぱ若いってのはいいなア。奇しくもオイラとアンタが地下で闘り合つた時と同じ場面だ……」

地下最大トーナメント。

独歩と渋川、武神と達人の一騎打ち、その最終局面が彼らの脳裏に蘇る。

武の極地に辿り着いた二人が繰り広げた死闘の光景が思い出される毎に、独歩の鼓動は高まっていた。

「そうじゃなオロチよ……でも本当にこの世界は良いのう、とてもとても——」
面白い。そう言おうとした時だ。渋川の前に立つ一人の少女が居る。乃木若葉だ。

「——渋川剛気、次の相手はこの私、乃木が合い仕る……異論はないな」

スマホを翳して、そういう若葉は臨戦態勢へと入っている。

「歌野の仇だ。 四国勇者筆頭が必ず貴様を——」

その手がスマホに触れられる直前、渋川が唸る。

「それもいいがな、ここは学び舎ぞ?」

「何を言っている——ツツ!」

直後、耳に響く聞きなれた音。それは讃州中学の鐘の音。

「昼休み……終わつとろうが。 さっさと戻らんと、授業に遅刻するぜ。——それに、

怪我した仲間を放っておくのもどうかと思うがね」

歌野に一瞬だけ視線を送った渋川が言い放つ。仲間の勇者や学校の生徒に心配されるのは若葉にとつて不都合だった。この戦いは樹海化が発生しない。だからこそ、通常通り時間は流れていく。

「行けよ、センセ」

独歩が言う。

「俺も今は空手部の顧問だ。下手に動けねエし、次に会うまではこいつ等をセンセ並みに強くしといてやるよ」

「そいつア楽しみだ……」

立ち上がった渋川が笑みを浮かべ、独歩たちへ踵を向けた。先ほどまでのダメージを感じさせないような凜とした歩きで渋川はその場を去っていった。

○

白鳥歌野は保健室にいた。頭には包帯が巻かれ、顔の擦りむいた個所には消毒をし、絆創膏を張るなど簡単な処置は済んでいる。

「うたのん、大丈夫？」

保健室のベッド、横たわる歌野が顔の角度を変えればそこには藤森水都の姿があった。若葉はいない、彼女たちの教師に事情を説明に向かっている。歌野が畑の作業中に転んで倒れた、伝えるらしいが大丈夫だろうか。

「平気よ、みーちゃん……。うん、へいきへいき」

「……………」

明らかにその声に力が無いのを水都は分かっていた。いつもなら得意の英語交じりのハイテンションで、戦いが終わった後でも疲れた体に鞭を打ってでも四国通信や畑仕事をしていた歌野。だが、その姿は今は見られない。表情には曇りが見える。

「私ね、みーちゃん……。負けちゃった」

ぼつりと歌野が呟いた。

「長野の……諏訪のこと考えて、みーちゃんとか若葉のために、全力で戦ったけど駄目だった。強いよね、達人って」

「そうだよ、相手が強すぎたんだよ……。しょうがないって」

水都は精一杯励ます。今回の戦いは異常だったと。それでももつと他にかけてやりたい言葉はある。だが、それを言い出せないのは、いつも太陽のように明るい歌野の姿に水都自身も戸惑っていたからだ。

「でも私が負けたら……誹訪が！」

歌野が負けること、それは誹訪が墮ちる事と同義だ。

歌野はいつもそうだった。誰かの為に戦っていた。それは崇高な使命だったかも知れない。しかしそれは、確実に、歌野の知らない所で重荷となり、次第に重圧へと変わっていった。

その重圧が限界を超えて現れたのが、あの夢だ。

圧倒的物量に蹂躪される誹訪、その牙に捉えられ命を落とす住民たちとその友の光景が歌野の脳裏に焼き付いている。

たとえ夢だったとしても、そうならないように心を強く持つて、歌野は強くあろうと、前を向いて戦ってきた。

「私は、みーちゃんや誹訪の人たちが傷つく……そんなのイヤよ。でも、今の私じゃ皆を護れない……そんな私が勇者をやる意味——」

「違うよ、うたのん！」

歌野の肩を掴んだ水都が身体を引き寄せると、その勢いで抱きしめた。力いっぱい、絶対に離さないように。

「うたのんが今まで頑張つて戦ってくれたから、誹訪があつて、ここに私がいるんだよ？ 今日だってそうだよ、うたのんは最後まで逃げずに戦つてた。精一杯頑張つてたその

姿はね、相手の人にも負けてなかったッ」

だからこそ言う、歌野は悪くないと。

「私はね、そうやってぐいぐい引つ張つてくれるうたのんが大好きなんだよ。諏訪の人たちも、農業やるつてなつた時、一緒に手伝つてくれるまで時間が掛かったけど、皆付いてきてくれたでしょ？……うたのんの情熱が、みんなを動かしたんだ」

その行動が人々の心に勇気を与えてくれた。だから何度襲撃で畑を壊されても、生存圏を縮小させても畑を作り、自活を続けてきた。全ては、歌野が見せてくれていたからだ。人は、何度でも立ち上げられると。

「みーちゃん……」

「だからね、うたのん。勇者をやる意味がないとか、そんなこと言わないで……一緒にみんなでがんばろ？ また最初から……イチからッ」

お互いに涙を目尻に浮かべる。歌野はこらえようとしていたが、水都が微笑んできたのが効いたのか我慢できずに涙を流した。

「ありがとう、みーちゃん。わたし、強くなりたい、強くなりたいよ……っ！」

「今は、しっかり休もう？……帰ったらお蕎麦茹でてあげるからね」

泣きじゃくる歌野の背をぽんぽん、と叩く。歌野が泣き止むまで、水都は暫く彼女を抱きしめ続けていたのだった。

○

「……邪魔しちやア悪いよな」

保健室前、独歩は小さく笑ってそのドアを開けようとするのを止めた。今自分がこの空間に入る事は、野暮であると判断してその場を去ろうとする。その間に、横を通り過ぎる若葉が居た。

「むっ、愚地さんか」

「若坊、どこ行く気だよオイ」

「ああ、歌野の様子を見に来た。今日は早退しても良いとのことだ……風さんにも喋ってるし、荷物もこうして持ってきた」

見ればわかる、と独歩はため息をつく。若葉が手にしているのが歌野の鞆や、その他の道具は早退させるために持ってきた物だと誰もが見れば考えが付く。

ただ、それにしてもだ。

「で？ お前さんはどうするんだ……歌野ちゃんは今ミトちゃんと——」

「なんだ、水都もいるなら三人で用意しようか。 そうだ、愚地さんも手伝ってくれ！」

歌野の早退準備を——」

「お前さア——」

若葉が保健室の扉に手を掛けようとした直前。がしつ、と独歩が若葉の襟を掴んで吊るすようにして持ち上げる。

「な、なにをするんだ愚地さんッ！」

「いや、なにをするんだじゃなくてだな——」

やれやれと言った表情で独歩は言う。

「そういうところだぞ若坊様ッ」

「ど、どういふことだ・・・、まるで意味が分からんぞ！」

もういいや、勝手に連れてこい。

そう胸で呟きつつ歩き出す。独歩の言葉の意味を解さないまま、若葉は自分の教室に戻されるのだった。

——その一方で。

「なんじゃあ、これはよオツッ」

達人・渋川の眼前に広がっているのは唸りを上げ、全てを飲み込まんとする大海があった。

昼だったはずなのに、辺りは曇り、荒波が立ち、一步でも踏み込めば一瞬で飲み込まれてしまいそうなもの。

これは現実なのか、答えはノー。全て、渋川が己に見せているイメージ。

護身を極める上で身につけてしまった極意。その身に護身を宿したならば、そもそも護身術と言う技術は不要であり、自ら危険な場所に向かうことが無くなるのである。

渋川の行く手を阻んでいるこの荒波は、それから逃れようとする渋川の防衛本能が見せている幻覚にすぎないのだ。

ある時は鋼鉄の巨大な門が目の前に、

ある時は全てを焼き尽くす溶岩が広がり、

ある時は底なしの谷を渡るための橋が掛かっていない光景が広がる。

「これほどまでの脅威が……あの場所にあるというのかッッッ」

来た道、赤嶺友奈がいる見解放地域へと戻る最中に現れたその幻覚は確実に渋川の脚を止めていた。

「し、しかもこれ……っつて」

自身は、この幻覚に、危険度に対していつか遭遇したことがある気がした。

見てもいないのに、そう察知できるほどの脅威の正体に渋川は心当たりがある。

「——まさかツツツ」

○

——未解放地域。

辺りが薄暗く、人の気配のない愛媛の地を駆け抜ける少女が居る。赤嶺友奈だ。

勇者装束に身を包み、与えられた勇者の力で大地を蹴れば地面が抉れ、莫大な跳躍力を生み出しては宙を飛ぶようにして進む。

その大雑把な力の籠った移動は焦っているようにも見えた。

『なんかヤベー奴がいるんだけど』

赤嶺の主である造反神が唐突に彼女の脳内へ言語化させたメッセージを飛ばしたのが数分前。

神樹側の巫女に与えられる神託というやつなのか、赤嶺は分からなかったが造反神が示すその地域を見て目の色を変えた。

「あの場所って……超大型バーテックスを建造してる場所じゃ」

この愛媛の地を奪還してくるであろう勇者達を迎え撃つバーテックス。

通常の個体とは一線を画した圧倒的サイズを持つこのバーテックスは赤嶺が愛媛での戦いに備えた作戦の重要な要だった。

……まさか勇者達が攻めてきた!?

基本的にはこちらの襲撃を防衛、神樹の神託によってでしか攻撃をしてこないはずの勇者達が攻めてくる。本当に攻める神託が出たのかさっておき、準備が整っていない状態でこちらが攻められる展開は赤嶺も造反神もまったくもって予想外だった。

超大型が破壊されるといふ事態になればこの土地で勇者達を迎え撃つのは困難になる。ただでさえ建造には莫大な数の星屑を合体させている超大型だ。必然と他のバーテックスを建造するのは遅れが出るし、全体的な護りも手薄になっている状態。

それを破壊されたとあってはこれまでの赤嶺の苦勞が水の泡となる。彼女にとってその場所は絶対に護らなければならない場所なのである。

「でも、な……この感じ」

目的地に近づけば近づくほど、赤嶺の肌を突き刺すような殺気が増しているのが分かる。

鼓動が鳴り、

全身の筋肉が硬直し、前へ進む事を拒否している。

赤嶺の持つ生存本能なのか、それが脳内へ告げていた。

——これ以上、近づいてはいけない、と。

「それでも……」

それでも自分は、この世界で造反神に召喚された勇者だ。

過去と未来を繋ぐ、これからの戦いの行く末を決めかねない大事な御役目を持った赤嶺は逃げる事を善しとしなかった。

覚悟は決めている。たとえ敵が得体の知れないナニかであっても、全霊を持って打ち砕くのみだ。そう自分に言い聞かせるようにして造反神によって告げられた目的の地

域に辿り着いた。

——現状は凄惨なものだった。

「
」
絶句。

口を開けない程に目の当たりにしたその凄惨さは赤嶺の脳内で浮かんでいた感情すらも消し飛ばす。

最低限の守備はあった。

星屑300、

サジタリウス、

キャンサー、

スコープオン。

超大型を建造する上でも赤嶺が念を置いて配置した守備。

星屑300は今の勇者達にとって問題にはならないだろうが、特筆すべきは三体のバーテックス。

遠距離特化、防御・反射特化、攻撃特化したこの三体が生み出す連携は西暦、神世紀の時代でも勇者を苦戦させた強者たちである。

神世紀では勇者を一人でも屠っているこの三体がそう簡単にやられるはずはないのである。

そのはずなのに。

「——ツツ!?!」

赤嶺に向かって飛来する何かがある。紫色のその物体は袋のようなもので、赤嶺の手前に落下すると勢いよく弾け、中に蓄えていたであろう液体を激しくぶちまける。

スコーピオンの毒袋だ。

毒袋にある液体は紛れもなく猛毒。それが弾け、赤嶺の顔面に色濃く付着する。咄嗟に口を覆い、服毒を免れた赤嶺は顔の液を拭って飛来してきた方角を見る。

「……………うそ」

赤嶺が目を見開く。

星屑300という兵は既に存在すらなく、

辺りにはキャンサーの盾とサジタリウスの顔面、スコープイオンの尻尾が虚しく転がり、光となる最中で。

赤嶺の見据えるその先で、超大型バーテックスだったであろう生物の塊が地面に伏している。

強固であつた装甲は完全に破壊され、

全身から伸びていた鋭利な触手は根元から折られ、

それでも息があるのか、その生物は地面で残つた触手で蠢いている。

バーテックスとしての浮遊能力を使用できないまでに生命能力は弱りきり、触手も折られていては地面を移動することも出来ない。

「——ツツ!!」

目を背けたくなるほどの光景に赤嶺の舌唇から血が垂れる。

自身の育て上げた我が子が手に懸けられた気分だろうか。今の目の前のバーテックスは人で言えば腕と足を全て切断された状態に等しい。

「——誰だツツ!!」

赤嶺が叫ぶ。

視線の先は丁度大型パーテックスの御霊があるであろう場所にぼつんと、小さな人影が見えた。

——そこに居たのは一人の男。

まるで獅子の鬣の如く荒ぶる髪が風も無いのに靡く。

妖しく赤い光を放つ双眸が赤嶺を捉え、見下ろす。

「クツクツク……」

男が嗤った。

それだけで、赤嶺の全身に悪寒が走る。この男が、赤嶺が感じ取っていた殺気の正体。人を嗤うだけで殺せるのではないかレベルの気を放つ男は尚、赤嶺を見つめてその口を開く。口角が上がると同時に見える男の犬歯はまるで獰猛な猛獣を連想させる。

「……会いたかったぜ——友奈」

赤嶺は見た気がした。

赤黒く焼けた肌、猛獣のような犬歯、逆立つ頭髮から、御伽噺や空想の世界でしか知りえない『鬼』という存在を。

数刻後、赤嶺は後悔し、後に思い知らオウガされることになる。
その場所にいたのは紛れもなく、『鬼』と呼ばれる男だったという事を。

第十四話く公園調査員、樹く

——夜八時、某公園。

犬吠崎樹が公園入口に佇んでいた。

「ええーつと……ここ、だよね」

辺りを見渡して、誰も居ない事を確認した樹が一步步を進める。夜、普通ならば滅多に人が現れる事がないが、それでいてもこの静けさは異常である。

人も動物も、虫も存在しない程に静まり返ったこの公園には、ある噂が流れていた。

樹は今日の夕方の勇者部のミーティングを思い出す。

全ては勇者部の依頼箱に舞い込んできた一件の依頼から始まったのを。

○

「公園の悪魔？」

部室にて腰を下ろす犬吠崎風が首を傾げる。

土井球子が掲げる勇者部の依頼書の内容はその場にいる部員誰もが同じくして首を傾げるものだった。

「どうにも夜、近くの公園に奇妙なうめき声が聞こえるらしいんだ・・・『肉を、肉をくれ』、と」

「——ひう、タマツち先輩……それってただの悪戯じゃないのかな？」

伊予島杏が震えては苦笑いで言う。勇者部には真面目な依頼と、面白半分の内容で書かれた依頼の二つが存在する。この依頼書も恐らくは後者のものだろうと誰もが思った。

誰しもが抱く疑問を、ちっちちち、と球子が指を振って否定する。

「目が光っていた・・・人間じゃない」

どこのプレデターだ、と球子の言葉に一同は笑う。

そして緊急的だが会議が開かれる。果たして、この依頼は勇者部が請け負う事ができる依頼なのかどうか。

数十分経って出た結論は様子見だった。

出回っている情報も少ない為に無理をして事件に巻き込まれる事態は避けたい。安

全の事を考えた結果、保留となったのである。

「あーあとこれなんだけどさ」

会議が終わり、部員たちが部室を後にしようとする前、球子がポケットからあるものが取り出される。

机の上に置かれたのは鉄の塊だった。

「なにコレ」

疑問に思った三好夏凜が珍しい物を見る目でその塊を眺める。

「目撃した生徒がソイツっぽい影に向かって投げたら暗闇からこんな風に帰って来たんだと……元々は釘らしい」

「はっ？これクギなの？」

手に取った夏凜が目を疑う。カチカチに固まっていた鉄の塊は良く見れば元は作業で使われるクギだと分かった。

「これ、歯型があるわ……」

あり得ない、と全員が息を呑む。

つまりこのクギは口内で形を変えられた後のものだということだ。

信じ難い事である。

こんなことが出来る人間がいるだろうか。どう考えても人外、星屑やバーテックスあたりしか思い浮かばない。

「……公園の悪魔、か」

一連の話を聞いた上で犬吠崎樹が得体の知れない存在に少しだけ興味を示していた。

○

「つて、感じで来ちゃったわけなんだけど……」

という、ただの興味本位で来てしまった樹が小さくため息をつく。

少年、少女に限らず未知の生物との遭遇というのは誰もが恐怖し、同時に憧れるものである。

人類より遙か昔に存在していた恐竜、

ネス湖のネツシー、

ツチノコ、

雪男、

地球上で最古で最大のサイズを誇った鮫、メガロドン、

宇宙からの飛来体、UFO。

その手の生物を何年、何十年と追いかけても解明しつくせない謎の塊。ブラックボックス。

触れるだけでも危険だというのに、人は好奇心からか、恐怖と並行してその感情が存在する。手を出さずにはいられない。

樹もその一人だったのだろう。だからこうして、姉の風にも黙って単独で公園にやって来ているのだ。

もしデマかせの情報ならばそれでいい。何も無いことに越したことは無いのだ。

この公園を調べた樹が何も噂のような異状を確認できなければ大人しく家に帰るだけだし、

・・・一人で調査してきたって結果があれば、私も勇者として少しは強くなれるんじゃないかなって思ったり……。

各時代の勇者達は皆が勇ましい人たちだと樹は思う。

一人で土地を護っていた勇者や自分より年下の小学生までもが勇者になって勇敢に

戦っている。そして樹が所属している勇者部も友奈、東郷、夏凜、姉の風などの先陣を切つて戦う者達と比べると、自分は何と頼りない存在なのかと思つてしまう。

姉以外の他人と視線を合わせて話が出来ない、いつもどこか一步引いて、オドオドしている。樹はそんな自分が嫌いだ。

樹が元いた世界での大きな戦いを経て、多少はマシになつたかと思つていたがそれでも姉や他の勇者たちとの格差、自身への劣等感は付いて回り続けている。そう言つた自分にとつてマイナスの部分の部分を払拭するという意味もあり、この公園に纏わる噂を調査しに来たのだつた。

・・・よーし、しつかり調査して噂の正体を突き止めちゃんだから！

両手をぐつと握り意気込む樹が懐中電灯のスイッチを入れる。辺りを見渡すくらい
の広さの公園だ。調査にさほど時間は掛からない。そう考えて軽快に歩き出す。

しかし、樹はこの時の自分の考えが、ここに来たという行動自体が間違つていたと
後に後悔することになる。

「あ……」

調査を開始して数分、脚が不意に止まった。

思えばここは公園。誰もが遊ぶ場所なのだと思つた時、数々の遊具が樹の目に映っている。どれを見ても懐かしい物ばかりだと思つるのは、過去の自分の事を思い出しているからだろうか。

……ブランコって、まだあるんだ。

宙吊りになつている二つだけ席があるブランコ。

これを確か、姉の風と一緒に乗つたのを思い出す。あの時は、樹が乗っているブランコに風も同乗し、凄いい勢いで加速をつけて揺らしてきたのを思い出す。すごい怖かった。

……滑り台、ジャングルジムも。

滑り台は、

『姉の威厳と女子力を見せてやる』

と豪語した風がてっぺんから下に向かつて超速ダツシユで降りていき、そのまま勢い余つて砂場に顔から突つ込んでいた。

ジャングルジムは、

『私に登れない山は無い、女子力がそうさせる』

という迷言をかます風が上で仁王立ちしてそのまま落下したのを樹は覚えている。

傍から見れば大参事な光景なのだが、そんな事故に見舞われながらもケロッとしている風のタフネスさにはホントに樹は驚くばかりであった。父と母もそんな風を良く叱っていたのを樹は思い出す。それと同時に脳裏に蘇るのは、

——風、危ないじゃないか。少しは落ち着きなさい。ほら、もうお昼ご飯の時間だぞ。

——樹、お母さんと一緒にお昼ご飯の準備をしましよ？ お弁当持ってきたから。

この世界にも、元の世界にもいない亡き両親の姿が。

樹にとって公園とは、風と父と母と過ごした数少ない想い出のある場所なのである。

安全を重視する時代となり、公園の遊具は市や町で定める安全の基準を満たせないものは徐々に撤去されるようになっていく。

この公園にあるいくつかの遊具も、今は手が掛かっていないだけでその内ほとんど遊具が撤去されるだろう。時間が経てばここはベンチや噴水、水飲み場程度の小さな遊具しか見られない広場となる。樹はそう思うと、少しだけ寂しい気持ちになった。

そうして周りを探索すること更に十分が経過。特に噂の呻き声などは聞こえてこなかった。妖しい影も何も見当たらない。

「やっぱリデマだったのかな」

そうであるならば、勇者部の依頼に今後おふざけ目的の内容が来ないように工夫をするべきでないだろうか。

樹は考える。

……注意書きにそういう内容の依頼は受け付けないって東郷さんに依頼書の形式を変えてもらうか……でもそんなことしたら逆に面白がられて悪化しないかな。

んー、と唸るが答えが出てこない。そもそも、この手の依頼を完全に潰すこと自体が無理なのかもしれない。半信半疑で対応しておけば、こうして考えずに悩むことも無い

のだ。

「あれ、これって……」

樹の視線がある一点の遊具に止まった。広場の隅っこ、木々と伸びた草のお蔭で上手く隠れていた白のドームがある。

ドームの表面にはいくつか穴があり、ロッククライミングを模した石と足場となるパイプが階段状に設置されているその遊具はプレイドームと呼ばれるものだ。

……これも良く遊んでたなあ。

穴三つほどしかないプレイドームで遊んでいた時は、姉の風と『女子力モグラたたきよ』という意味不明な遊びを思いついて、樹は高速で動き続ける風をピコピコハンマーで狙い続けるという謎の遊びをやっていたのを新たに記憶を蘇らせた。

辺りもすつかり暗く、生い茂った草木によって綺麗に隠れていた為か今までその存在に気づく事が無かった。

だが、数ある遊具の中でも色々と遊んだ記憶が多かったからかその懐かしさに感慨を覚えた樹は調査そつちのので遊具に近づいていく。

「たしか、お姉ちゃんが穴からぐいっと顔を出して——」
そう過去の記憶と重ねて一つの穴に顔を近づけた時、

二つの光る点があった。

「——え？」

薄暗く、様子が分からないドームの内部で等間隔に赤く、輝く点があるのを樹は見た。
ゆらゆらと動くその赤い点は同時に消えたり、現れたりしている。それが人の『目』だと樹が理解する直前、

穴から伸び、瞬時として樹の腕を掴むナニかがあった。

巻きつくでも、挟むでもなく、握られるという感覚は確かに人の手であるということ
は樹も分かった。

その手は異様にデカく、長い。女子中学生の二の腕を鷲掴みしている手の人差し指に
親指が掛かっている。樹は確かに自分でも小柄なサイズであると認めるが、それでもこ
の手はデカすぎる。

「——ひっ」

決して離さないというぐらいに、握っていた手が更に締まる。

樹が身を振って逃げようとしても、その手は離れるどころか徐々にその手を穴へと引き込み、

次の瞬間、ぐいっと。抵抗していた樹の身体がまるで紙のように浮き、吸い込まれるように穴の中へと引き込まれた。

「ぎやつー！ い、いた……」

穴から引き込まれた樹が尻餅をついてその場所を摩る。その行為を行いながらも周囲を見渡すがドーム内は更に暗くて良く見えない。

『Gurrrrr……』

樹の心臓をキュツと、締め付けるもの。それは呻き声。噂の呻き声だ。

その正体が動物なのか、なんなのか、見極めるために目を細めて、呼吸を整える。

しかし、夜目に慣れて視界が定まってきた樹の目の前に現れたのは——口。

「——え」

男だ。

しかもかなりのサイズの。このドーム状の遊具が既に容量オーバーで埋まらんとするくらいの大男が樹の眼前で口を開いていた。

『H a r r r r r ……』

まるで獲物を見つけたハンターのように男の吐息が漏れる。

その吐息は熱く、口の端から垂れた涎が樹の顔を濡らしていく。

「あ、あ……えと……」

ぴちやり、と顔にかかる男の涎はまだ樹も嗅いだことも無い臭いがした。自身の父からはこんなニオイはしなかった。これが雄のニオイだと樹は理解できていないのである。妖しく光る男の瞳は一層輝きを増した気がした。

赤い双眸が静かに樹を見据え、しかし獰猛な気を隠しきれず荒い息と共に肩を上下させながら、

『G y a a a a h!!』

飛び掛かる。

小さく縮こまった樹の両肩を掴み、覆いかぶさるように組み伏せる。

両肩全体を掴んだ二つの手に加えられた力は地面と樹を挟むように、どんなに身体を振ろうとも、身を起こそうとしても、じたばたと足を動かしてもマウントを取っている大男は一ミリたりとも動かすことは叶わない。

尚も垂れ続ける男の涎は顔から首筋に、胸元へと続くように、讃州中学の白の制服を透明に濡らしていく。

「い、いやっ！ やめて、お姉ちゃんたすけ——」

眼前に迫る恐怖に樹が叫ぼうとした時、男の大口が樹の右肩に食らいついた。

「——ッツ!?!」

確かに感じる男の歯が自身の肩肉を捉える感覚。同時に男のは歯が動く。

右肩全体を覆う制服の生地を歯で撫でるように、擦るように、その下にある肉を強弱をつけて沈み込ませ、吟味する。

「あつ、やめ………ひう………ん」

鎖骨まで届く下顎の歯が軽くその部分にかりつ、と掛かると樹の身体が震える。顔を

くりくりと捻つてきても未だに服も破れず、肌を突き刺して血が出ないのは男の『嘯む』という技術が洗練されているからだろうか。

しかしどんなに相手を傷つけることがない行為であつても、恐怖心というものは拭い切れない。

「……こ、こわい、こわいよっ！　ま、まだ私、死にたくないッ!!」

暗く、狭いドームの中で巨大な男に12歳の少女が抵抗できず組み伏せられ、肩を噛みつかれているという事実。

樹の視界が涙で歪む。これまでお世話になった人々の顔が、樹がこれまで体験してきた光景が脳裏を駆け抜けていく。コレが走馬灯というやつなのか。

「——え？」

走馬灯を眺める行為に我を忘れようとした時だ。男の口が樹の型から離れたのだ。ゆつくりと口を離し、腕も脱力するくらいに力を抜いて樹が拘束を逃れる。

ドームの壁際まで下がった樹を追おうとせず、男は静かにその場に腰をおろし、樹を見据える。その瞳は元々赤かったが、少なくとも先ほどまでの獯猛さはそこには無かつた。

「すまねエ……」

訛りのある日本語を口にした男が申し訳なきように言う。先ほどまでに人を食おうとした勢いはそこにはない。

ある程度暗闇への耐性がついた樹は目の前にいる男の身体を凝視した。

ジャージの上からでもはち切れんばかりに隆起したその筋肉が身体を絞り、鍛え込まれていることを窺わせる。

「ウサギの肉かと思っちまつタ……」

そして身長。

座っているだけでもドームの天井に頭が届きそうなのか、若干首を垂らすように前かがみになった男はかなりの高身長だ。立ち上がれば、恐らく2メートルをゆうに超えるだろう。

しかし、それよりも。

……この人、いっぱい怪我してる……。

男が着ているジャージは所々が破けていた。小さく裂けた場所もあれば大きく裂け

た所もあり、そこから見える皮膚は痣が出来ており、出血をしている箇所もある。何かしらワケありなのか。

人間離れた骨格とその風貌から、容易に日本人ではないという事が理解できたが、筋肉質な外人でありながら樹が違和感を覚えたのは顔が若干痩せこけている事が気になる。

「もしかして……お腹、空いてるんですか？」

「……」

樹の言葉に無言を貫く男。しかし程なくして、小さく唸るような音が男の腹から響く。

「あ……やっぱりお腹——」

「訊くなツツ」

初めて怒号を飛ばし男に対して樹は頭を悩ませる。ドーム内部は閉塞的で音が響きやすい。今の腹の音を聞かなかつたことにしろ、というのが無理な話である。

男は深淵から吐くような溜息の後、

「さつさと帰んなツ 失せろツ」

「ひッ！ ぐ、ぐめんなさい……！」

吐き捨てるように言い放つ男の剣幕に樹は慌ててドームから飛び出す。急いで走り出し、公園の出口で振り返るが男は追ってこなかった。

「……」

脳裏に蘇るのは痩せこけた男の顔と全身に残っている無数の傷。痛々しいその姿に胸が締め付けられ、気付けば樹は猛然と自宅のある方角へと走り出していった。

そして経過した時間、僅か30分。

「あ、あの……、これ、良かったらー！」

樹は男の居るプレイドームへと戻ってきていた。さらには、男に対して『樹手製のうどん』を差し出している。

「何考えてんだテメエ……」

男の当然のような反応。それもそのはずである。数刻前、男は樹を襲い、組み伏せ、肩を噛むという端から見れば強姦に近い行為を行ってしまった。

言わば、樹は被害者。その相手から食事を与えられるとは全くもって予想外だったのだらう。

樹が男の視線に睨まれながら僅かに身じろぎをして、

「そ、その……困ってそう、だったの……私、勇者部っていうのに所属してて、困ってる人がいたら見過ごせなくて」

「……」

無言の男を前にして、樹は思う。

我ながら何を言っているのだろうか、と。

「き、傷もいっぱいしてるから、て、手当もしないと……」

そう言っただけで持ってきたのは家にあつた救急箱だ。中には消毒液と絆創膏、包帯と簡単な医療品しか入っていないが。

「いらねエ」

男は頭を掻き、言う。だが、樹は下がらない。例え強く脅されたとしても。

「びよ、病気になるっちゃいますよー」

「いらんツツ!!」

「あう……」

男の2回目の拒否の声は最初より強く、相手を寄せ付けないものだった。遂にその力の強さにビビった樹が涙目で子犬のように身を震わせていると。

「チッー」

吐き捨てるような舌打ちをした後、しよがない、と言った表情で、

「メシと道具は置いてけ、治療くらいは自分でやる……今日だけだ、それ以降は二度と来るんじゃない」

そう言いつつ、タツパを受けた男は口の端から一筋の涎を垂らしている事に気付いてはいない。

男がタツパの蓋を開けて、一瞬だが動きが止まる。

「……ステロイドか？」

「す、すてろい、ど？」

男が見つめているのは赤黒いツユに浸っている紫色の麺、うどんだ。香川県民なら一目見れば分かるその料理を男は別の料理と勘違いしているらしい。

もう一度言おう。これは『樹手製のうどん』である。

「ンガア~~~~~ツツ」

姉がよく持ち歩く大容量のタツパを用意したつもりだったが男は口を大きく開けるとタツパを掲げ、

まるでポテトチップスの残りを余すことなく食すような勢いで熱々のうどんをその口へと流し込む。

「……ひ、一口ツ!? あのを一口でツツ!？」

一瞬にして消えたうどんに驚愕する樹。

男は口に留めたうどんを先ほど樹したように歯で咀嚼している。

モニユ、モニユ……、そんな擬音が聴こえてきそうな男の顔は無表情だ。

一気に口に入れすぎて苦しいとか、そんな感情とは皆無のようである。

元々柔らかいうどんを胃袋へ納めて、ぶはっ、と息を吐いた男は言う。

「やっぱステロイドじゃねエかッ」

……だからステロイドってなに……ツツツ!!?

○

「そ、その……」

「あア？」

物の数秒で終わってしまった食事の後、胡坐をかいて完全にリラックスしている男に恐る恐る口を開く。

「お、お名前は……」

「ハ？」

直後、ぼかんとした表情の男。続く言葉を考えるなら“お前は何を言っているんだ”

だろうか。

正直、発言をした樹ですらそれはもつともだと思ふことで、本当なら今すぐにでもこの場から逃げ出してしまいたいという気持ちの方がずっと強い。

それでも逃げ出そうとしなかったのは、男の瞳が何かを訴えていたからだ。無機質に樹を捉えるその瞳は“寂しい”というものを感じさせたのである。

だから放っておけなかったのだろうか。この男と関わるのは危険だと分かっているのに、しかし幼い頃に両親を亡くして寂しいと言う感情を樹は知っている。

「わ、私……い、犬吠崎樹って言います！」

先手を打つ。戸惑っているのはこの男が強引に話を終わらせかねないと思つた樹の奇策。だが樹が行つた強引な自己紹介と言う行為は男の氣に障つたのか眉間に皺を寄せ、「ナニ勝手に自己紹介始めてんだ……ブチ殺すぞ？」

獣の如き眼光で樹を捉え、歯茎を剥きだす程に露わになつた歯をガチガチと噛み鳴らす。

「ひい！！」

明確な殺意にまたしても腰を引いた樹だが、男の視線がふと別方向へと向けられていた。それは先ほど男が食べつくした樹手製のうどんが入っていたタツパ。

横に置かれた救急箱も一瞥して、

「チツ……」

イライラを噛みしめ、内に堪っている不毛の怒りをため息とともに吐き捨てる。先ほどの怒気をもった表情から打って変わって、冷静さを取り戻した顔つきである。

「ジャック・ハンマーだ」

「じゃ、じゃつく……さん」

これが勇者、犬吠崎樹と怪物、ジャック・ハンマーの奇妙な関係の始まりだった。

勇者対グラップラー全面戦争編

第十五話く鬼（オーガ）く

——讚州中学部室。

静かな部室内、上里ひなたが椅子に腰を掛けている。

「♪～♪」

部活動が始まるまでの間、部員たちがすぐにお茶を飲めるようにポットのスイッチを入れたのが数分前。鼻歌交じりにポット内の水分が沸騰するのを待つ。

沸騰した際はそれを知らせるアラームが鳴ってくれる代物なのだが。

「え……？」

代わりになったのは携帯からの警報音。樹海化警報にも似たそれは日常気分であったひなたの度肝を抜く。スマホの画面を即座に確認すると強制的に開かれたのはこの世界のマップだ。

造反神によって奪われた領土と、勇者部が取り返した領土が赤と青で色分けされている。何事かとその画面を凝視した時だ。

ふっと、ランプが消えるように、敵側である造反神側として赤く色分けされている地域が色を失ったのだ。まるで墨汁を垂らされたように、黒く塗りつぶされている。

勇者が出撃し、敵を倒したことでしか今のようには未解放地域は解放されない。

しかし樹海化が起きているわけでも無く、勇者が出撃していないこの状況で地域が解放されるということはありえないのだ。

赤色の未解放地域が色を失う現象は連続して起こる。

まるで現在進行形でその行動が行われているように、しかも絶大なスピードで、圧倒的力で駆けるそれはまるで旧世紀のゲームというパツクマンのように敵側の赤色の陣地を虫食い状態にしていく。

「——ツツ!? こ、これは……」

上里ひなたが気付く。その虫食い状態に解放された造反神側の領地を全体的に眺めた時だ。それらすべてが、なにかしらの一つの形になっていた事に気付く。

湾曲状に駆け抜けた黒い線はまるで顔の輪郭のようで、

虫食いにされた中央の部分は奇しくも上に二つと下に一つと、眼と口の位置で、

残りの虫食いは怒気を孕んだ皺へと姿を変え、

敵陣地に映し出された黒の陣地はまさしく『鬼の貌』であつた。

○

——愛媛、未解放地域。

「会いたかつたぜ……友奈ア」

大赦の暗部組織を生きてきた赤嶺だからこそ、その突如として目の前に現れた男にフツウではない日常を思わせた。

獯猛……、

凶悪……、

高圧的……、

その男を表現するならば、そんな言葉ばかりが赤嶺の脳内で羅列される。

獣の如き眼光は例えサングラスをかけていたとしても、見る者すべてを射すくめるだ

ろう。

漆黒のシャツからはみ出ている腕は毛細血管のエッジが立ち、尋常ならざる男の新陳代謝を窺わせる。

190センチを超えるであろう身長は、体重が100キロを超えていることを外見の筋肉量と骨格で判断してもなお、ネコ科の動物のように滑らかで、軽い足取り。

瞬時に分かる、只者ではないというソレ。

「……フム」

男が赤嶺を見据え、呟く。

「高嶋、ではないな。 貴様……何者だ」

赤嶺は息を呑む。意識を強く持つていないと気を持って行かれそうだ。それほどまでに、男の威圧感は常軌を逸している。

吐き気すらも催すその圧倒的威圧感に負けられないようにした赤嶺がそれに応えて見せる。

「私は……赤嶺友奈」

「赤嶺友奈だア？ ……高嶋友奈じゃねエのか」

超大型バーテックスから飛び降りた男がポケットに手を突っ込んだまま、地へと降り

立つ。10メートルはあろう高さから飛び降りても、男はそれこそ猫のように、最小限の音で着地を決めていた。

その軽やかさはまるで背に羽があるかのようで、見る者すべてを魅了するかのようである。

それは赤嶺も例外ではなかった。

「さつきからッ」

それでも、頭を振って我を呼び戻した赤嶺が叫んだ。

「なんなのッ アナタッ！」

怒る理由も確かなものだ。赤嶺はそう思う。

いきなり現れた男は突如として友奈であつても、自分ではないほうの友奈、高嶋友奈の名を口にかけている。

容姿、名は似ていてもそれぞれ人格があり、個人が存在している以上、別人に何度も勘違いされるのは気分がいいものではない。

「——喚くなッッ」

男は赤嶺の怒気を切り裂くように、言葉を発する。

ぴしやりと、その空間の生物が動きを制止するような強制力に赤嶺の動きが止まる。

「つてことは、やはり……神樹め、余計な事をしてくれたようだな……ツツ」
高嶋友奈を知っている。それが思い浮かべるものとすれば、

「西暦時代の……人？」

「チゲエな。半分は当たりだが……まあいい」

ニヤリと笑うと、男の纏う雰囲気が一変した。ポケットから手を出し、その流れで五指を広げ、両の腕を広げるように構える男の姿はヒトと言うよりも、獣と言った方がしっくりくる。

「赤嶺とやら——」

その獣の眼光が赤嶺を見据えている。

まるで餌を見つけたチーターのように、はては空腹時の狼のように歯茎をむき出しにするほどに口の角度を開かせる。

「——ちよいと、試させてもらうぜツツ」

「——ツツ?!」

対人特化の赤嶺友奈の脳内に刻まれた信号、それは“危機”という二文字。確実に来る、構える隙も与えず、堂々と、真正面から。

男が動く。その初動は片足で大地を蹴る、それだけの動作が男と赤嶺の距離を瞬時に消し飛ばす。

男の腕が鉤状に形を変え、初動の一蹴りで生み出した加速と共に、その腕を振り上げる。次の瞬間、

——邪ツツ!!

勢いをそのまま殺さず、100%力へと加えた大ぶりの一撃が黒の烈風となり赤嶺を捉える。

手甲を前に、腕をクロスするように構えた赤嶺の防御の布陣に男の剛腕が食い込む。

食い込むどころではない、力任せに、赤嶺の身体を防御している両腕の上からブツ叩く。

空気が弾け、

振動が腕を伝い、

衝撃に耐えられなかった赤嶺の身体がくの字に曲がる。

赤嶺の身体が吹き飛ばされる。

後方への運動エネルギーは失われず、直線的に宙を駆ける身体がそこらの樹木を何本も押し折り、一際大きい樹木にぶち当たって漸く赤嶺は地面へずるり、と落下した。

「くっ、か・・・がッ」

防御はしていた。それでも尚、真上から突き抜け、全身を破壊せんと赤嶺の身体から激痛の信号発している。もしもともに食らっていたらと考えると、赤嶺は背筋が凍る。

「ほう、まだ立てるか」

息も絶え絶えな赤嶺に対し、邪悪な笑みを浮かべる男。それは自身の力に耐えきった事に対しての笑みなのか、男は意外と言った表情であった。

「……………そッ」

だが赤嶺の身体は限界だ。さっきの一撃で、たったの一撃で全身が激痛を発し、足元が地についていない感覚と、目の前の視界が歪む光景がずっと続いている。

次同じモノを食らえば、間違いなく自分は死ぬ。赤嶺は悔しくともそれがハッキリと分かっていた。

「さて——」

男が口を開く。それが再度の攻撃の合図なのか定かではない、それを判断する意識もあやふやな赤嶺が苦し紛れに構える。

防御ではなく、迎撃の構え。防御をしてもダメならば、いつそのこと余分な分をそぎ落とし、命を賭す覚悟で攻めに転じる。その意識の表れだった。

だが、次なる一手に備えた赤嶺に反して、男が構えを解いた。

全身の筋肉を緩めたかのようにその手を再度ポケットの中に戻す。そこに攻撃の意志は感じられない。

「次はお前の番だ」
デメエ

来いよ、と言わんばかりに顔面を前に差し出す。それは身長が低い赤嶺の打点に合わせているのだと気付いた。

この男は、次の赤嶺の一撃を無防備に、躲すことなく受け切るつもりである。

「殺す気で来いッッ 命を獲りに来いッッ」

それは攻撃を受ける側の人間が醸し出す攻めの圧力のもので、攻め手の赤嶺すらも腕を振るわせるほどに畏怖させる。

赤嶺は悟った。この一撃で男を葬らなければ、次は確実に自分が殺されると。

「――勇者アッッ」

混濁する意識を無理やり覚醒させる赤嶺の叫び。

右腕に力を籠め、自分が乗せられる思いつきりを拳に宿し、決意を固める。

この男は危険だ。だからこそ、ここで絶対に仕留めて見せる。

全力で大地を蹴り、地面が抉れ、爆発的な加速。

赤の軌道は一直線に男へ向かい、明確な殺意は赤嶺の慎重に合わせた顔面へと注がれる。

大地の勢いを利用し、腰を使い力を腕まで伝え、全身のバネを利用した赤嶺の必殺拳
「パアアアンチツツツ!!」

岩をも砕く拳が男の顔面にぶち当たる。

衝撃はが男の顔面からその後方まで駆け抜け、空気と大地を震動させては激しく揺らす。

赤嶺の全力と、決意、全てを乗せてブチ当てた拳が男にもたらした被害は。

「……ニイ」

「——ツツツ?!」

邪悪で強烈な笑みが返って来るのみだった。

並みの人間ならば、即死であつただろう。勇者であつても戦闘不能までに追い込むことが出来る、それを自負していた程の全力のパンチ。

それがまさか、男の鼻から一筋の赤い液を小さく垂らす程度の被害ダメージだったという事に赤嶺は放心する。

勝てない、

打倒^{たお}せない、

差し違え^{ちが}れない、

通用^{つうよう}しない、

自分はこの男に対して、あまりにも無力。

それは、挑むにしても雲がかかった頂上の見えない絶壁を見上げるが如く、高い。

男が鼻から垂れていた血滴を親指で拭う。

「この俺に血を流させるとは……進化したな、勇者システム」

放心する赤嶺を余所に、男が口を開いた。

「力、敏捷、跳躍、強靱……全てにおいて、あらゆる点で西暦世代を上回るモノとなっている……想像以上の出来だぜ——だが」

足りん。そう付け加えて、男が首を起す。

「何十、何百年経ったかは知らんが、進化し改善されたシステムだとしても俺が喰らうに足る強さとは程遠い……」

ギラリと瞳が輝き、その腕が振り上げられる。五指を平らに、そして密着させたその形は手刀と呼ばれる形。

赤嶺には黒のカンフー服から飛び出た褐色の腕が、研ぎ澄まされた日本刀に見え、恐

怖する。バターの如く肉が両断されるイメージが頭の中で出来上がる。

「貴様も」友奈と名を持つ者ならば、その力……引き出して——」

あの手刀にかかったら、絶対に命を落とす。そんな気がした。

確実に迫る死の恐怖に赤嶺は、

「……い、いやだ」

震えるような声で呟く。咄嗟にガードの構えをしているように見えるが、赤嶺の視

線は目を瞑り、両腕は小さく小刻みに震え、ガードの形になっていない。

「来ないで……死にたく、ない」

戦意喪失。

圧倒的な暴力を、死の恐怖を前に、赤嶺の心が折れた。その瞬間、

「貴様ア……」

男の額のみならず、首、両の腕、拳に至るところまで毛細血管が浮き出るほどの力みが入る。

眼光が妖しく光り、怒りを露わにしたように肩がわなわなと震え、

「友奈」と名を持つ者がツ　敵を前に命乞いなど……」

手刀が解かれた掌で赤嶺の頭部を鷲掴みした。頭が握られる瞬間、犬のような震え方をする赤嶺に苛立ちを覚えながらその双眸で見据え、

「恥を知れイイツツツツ!!」

怒号とともに、掴んでいた赤嶺の頭ごとその地面に叩きつける。

時速100キロにも及ぶ落下速度が人力によって引き起こされ、その威力で顔面が地面へと衝突し、轟音とともに身体全体が沈み込む。

不思議と、痛みというものは感じなかった。

落下から地面に叩きつけられてから痛みの信号が脳へと届く前に赤嶺は既に意識を手放していた。

「――」

それは1秒にも満たない、コンマ0.5秒を遥かに凌駕する神速の世界。痛みを知らず、気絶できたことが赤嶺にとつての不幸中の幸いだったに違いない。

「さて、と……そこにいるんだろう。出てきな、造反神とやら」

一仕事を終えたかのように口を開く男の頭上、空に変化が起きる。

突如として、暗雲が立ち込めたその中心、光の柱が顕現し男を照らしている。男はその光の正体が目的の存在だと理解したのか、口の端を上げてその光の柱を見据える。

「自分から名乗るのは好きじゃねエが……俺の名は、範馬勇次郎」

元いた世界では鬼オウガと呼ばれ、地上最強と呼ばれる男、範馬勇次郎は光の柱へと語りかける。

「イイ話があんだけだよオ……ちよつと乗つてみねえか——その前に、だ」

本題へと移る前、勇次郎の腕が地面へと延びた。無造作に地面で気を失っていた赤嶺のからだを一挙の動作で引き上げる。

地面から引き抜かれる衝撃に晒されても赤嶺は未だに意識を戻さない。ダメージを与えすぎたようだ。

勇次郎はやれやれ、と言った表情でため息をつく。

「どうして“友奈”って名前を持つ奴は、こう……世話の掛かる奴らばっかなんだか……あん？」

脳内に響いてくる聞きなれない声に戸惑うことなく、勇次郎が小さく苦笑する。

「へっ……お前さんも……そう思うのかい、造反神さんよ」

借りにも神という存在が自身と同じ思考に至っていたことに、勇次郎は邪悪な貌から一瞬だけ砕けたような笑みを浮かべせたのだった。

第十六話くルール変更のお知らせく

— 神様よ。

— つて、俺たちはそんなに神様なんて信じてないんだがなあ……

— 勝手に人間ヒトの力をお前テメエらの匙加減で量って貰っちゃ困るぜ？

— 試練を与えるのは大いに結構、だが一つだけ言わせてもらうぜ神様よ……

— 人を上から目線で試せるほど……神様つてのは、そんなに偉えれエのかい？

—

—

— 未解放地域・愛媛。

樹海化した世界を歩く少女たちが居る。残された愛媛の土地を攻略する為にやって来た勇者達だ。

「よーしー！ 今日も我が古郷愛媛を解放してやるぞー！」

先頭を往く土井球子の快活な声が響く。他の勇者達もその声に続くように声を上げた。御役目に対する気合は十分である。

「タマア、随分と張り切ってンじゃねえか」

後方、勇者を全員が見渡せる位置には独歩と烈を含めたグラップラー達も一緒だ。

「あつたりまえだア！ 今回はタマ達が攻め込む番なんだからな！」

旋刃盤を持つ腕を掲げて、球子は言う。

今回の戦いは勇者部側から造反神の領土へと攻め込む戦い。いつもなら神樹の神託

が無い限りは堅守に徹する勇者達だったが、未解放地域に超大型のバーテックスが建造されているという情報があった。

これまでのバーテックスより遥かに大きい個体が二体。激戦は避けられまいと誰もが思う。その中で土井球子が言い出した事だ。

『神様が守護れない部分は人間が頑張って守護るんだ！』

神託が出ていない時点で、勝手に敵へと攻め込むのはリスクであったものの、今回は勇者部一同が攻め込むという案に賛成した。

「勇ましい限りですね、愚地氏」

「そうだなア、烈よ。オイラ、嬉し泣きしちゃいそう」

勇者達の攻めるといふ判断に二人のグラップラーは、球子の存在を頼もしく思い、笑みを浮かべた。

「いつか、神の力に頼らずに生きていかなければならない……それは彼女たちの世界で問題が解決されたらいずれば訪れること、考えるべき課題——」

異形の存在、バーテックスを倒す戦いが始まって300年、勇者達の世界が神樹によ

る恵という施しで生きながらえている事情は既に知っている。

だが、と烈は思う。果たしてそれは、本来あるべき人としての生き方なのだろうか、と。

今はまだいい。バーテックスと戦っているのだから。

だが、バーテックスとの戦いが終わり、平穏を取り戻した後も神樹という神にすがって生きていくことを烈は好ましく思わなかった。

人はそんなに弱い生き物だろうか。

嵐が来て、田畑が荒らされても人々は新しく苗を植えては耕した。

道路や橋が壊れても、次に建造時はもつと頑強なるように技術を生み出した。

大津波や大地震という大災害に見舞われても、地域が、国が、世界が手を取り合つては再建の誓いを立てて復興させてきた。

何時だって、どんな時だって……人間は苦難を乗り越えてきた。それこそ、神様の力

とやらを抜きで。

知恵を絞り、得体の知れない力に頼ることなく努力し、窮地を脱してきたのだ。

「『神託が無い限りは攻め込むべきにあらず』。これまでの神樹による導きだけでなく、人間としての考えで攻める事を選んだ今回の勇者達の行動……果たして『吉』と出るか、『凶』と出るのか」

「なあに、駄目だったんならオイラ達が手エ貸してやるのさ。早く暴れたいんだがねエ」

「フフ……そう言つて愚地氏は、土井が危険な目に遭うのがイヤなだけなのでは？」

「フン」

鼻を鳴らして、独歩はそっぽを向く。

勇者部の副顧問として鍛錬の手伝いをする独歩だが、球子の特訓に付き合っていることもあつてか時折、球子と居る時は息子・愚地克己と共にいるような安らいだ顔をしているのだ。

それは傍から見ればまるで、父と娘を見るような。

「それに、伊予島の事も——」

「烈テメエ……アホなこと言つてねエでブツ壊したタマのマウンテンバイク代、早く出しときなよ」

「ツツツ あれはツ 神心会持ちということには出来ないのですかツツ」
「できる訳ねエだろバアカツツ」

それに、と独歩が先頭を歩く球子の、更に奥を見据えて思うのだ。

どうにもイヤな予感がする、と。

そして独歩のイヤな予感は、即座に的中することとなる。
数十メートル先の場所で、

「——待つてたぜ……勇者達よ」

勇者達の前方、一人の男が立つ。

地上最強の男・範馬勇次郎が。

○

目の前に現れた黒服の男にタマは首を傾げる。

「ん？ 誰だこのオッサン」

「球子ッ 下がれッッ」

後方から飛んで、球子の前へと現れた若葉が警戒度マックスで既に生太刀を抜刀している。

「ッ、この男は……一体……ッッ」

常在戦場、常に武器を持ち歩いて武を研鑽を告げている若葉の目には男の姿が一体どんな姿に見えたのだろうか。

星屑なんて目じゃない……、

ヴアルゴ……でもない、

スコープオン……でも、

レオ・バーテックス……なんて、まだ優しいか？

これまで若葉見てきたバーテックスよりも遙かに強大で強力なモノ。それは鬼。

「……お、鬼だとッッッ」

たった一人の男の戦闘力は神の尖兵を遥かに凌駕する鬼だったというのが若葉の脳内にイメージされたものである。

これまで戦ったことのない得体の知れない生物を相手にするかのように額に汗が浮かび、動揺を隠しきれない。

「クツクツク……流石、初代勇者というべきか。　なア……若葉よ」

勇次郎が嗤っている。

「相棒は——、上里ひなたも達者でやってんのかイ？」

「——貴様、私だけでなく、ひなたまで……何故知っている」

放たれる圧に押されながらも気丈に振る舞うのが精いっぱいなのが若葉の現状だ。若葉だけではない、恐らく、勇者部全員が、勘の良い夏凜や棗、雪花は気付いているだろう。

ピリピリと電気が帯電しているように肌を刺すような感覚が告げている。この男は危険だと。

「やはり、来ていたのかツツ……」

「勇次郎……」

その邪気にも似た圧力を物ともせず、勇次郎の前へと出る者がいる。烈と独歩だ。

「独歩さん、烈さん……と言う事は、二人の世界の人なのか」

ああ、と独歩が頷く。

「この男は範馬勇次郎、俺達の世界で『鬼』^{オーガ}なんて呼ばれてるヤベエ奴だ」

「だがッ 何故この男がここにッ まさかッ」

「その通りだぜ」

烈の言葉に勇次郎がまたしても嗤う。

「お前さんらとの前に立つ——、その意味即ち、俺が造反神側の協力者としてお前たちと敵対してるってことよ」

「オーガだかハンマーだか知らないけどさア」

球子が口を開く。

「どんな奴らが出てきたってタマ達がブツ倒せばいい事だろう！」

馬鹿な、と烈が歯軋りをした。

先ほどまで勇ましい発言が、勇次郎の登場だけで無謀の言葉に変換される。

「ホウ……」

球子は知らないのだ。

範馬勇次郎を前にブツ倒す、とか喧嘩を売るといのがどういう意味なのか。

「デカイ事を言うようになったなあ土井……、相変わらず何もかも小せエが」

「ち、小さいとはなんだ小さいとはツツ　　といつかなんてタマのこと知ってたア！
説明しろコラア！」

そう言つて、啖呵を切る球子を前に勇次郎は微動だにせず、むしろ嘲笑っていた。

「まあ、いい。俺も今日は別に闘りたくてきたわけじゃねエ……聞けツ　勇者一
同ツツ」

勇次郎が叫ぶ。

その言葉はまるで魔法の如く、そうせざるを得ないような強制力を持ち、勇者達の動きがぴたりと止まる。

そして口の端を上げ、勇次郎は言うのだ。

「この神々の戦い……ルール変更のお知らせだぜ」

「雑魚ども相手にチマチマと領土の奪い合い……それが貴様ら勇者がこの世界で受け持った〴〵御役目〴〵、だったな」

勇次郎が両の手を広げ、それはこの樹海、未解放の地域を示しながら、

「造反神の領土内にある愛媛・徳島・高知の一部が既に俺の領土となっている……樹海が終わったら巫女どもにも確認でもすればいい……赤い領土は、黒く変色されている筈だ」

「……オーガツ まさかッ」

烈が察したのか眉を顰める。

勇次郎のこれから言うべきことが、どれほど恐ろしい事なのかそれが理解できたのだ。

「——この戦い、俺も混ぜさせてもらおうぜ」

「~~~~~ツツツツ!!?!」

「……マジ？」

冗談かよ、と独歩が問うがそれは無駄な事だろうと、独歩自身もそれは理解している。武の道を往く者にとつて、範馬勇次郎という生物が敵に回るといふことがどういふ事なのかは身を持って知っている。

「まさか……オーガ自ら——」

「阿呆あほうが」

独歩の言葉を勇次郎が断ち切った。

「俺が手エ出したらスグ終わつちまうからなア……、貴様ら勇者にはそれなりに相応しい相手と戦つてもらおう」

「私達に相応しい相手、だと?」

不審に思う若葉。

今の勇者にとつて戦うのに相応しい相手、それが何なのか、見当がつかない。息を呑んで、勇者達はその言葉を待つ。

「——俺達の世界の戦士ファイターだ」

その静寂を引き裂くようにして、勇次郎の口が開かれる。

「俺達の世界……」

「まさか、お前さんが召喚するつてのかい……? オイラたちの世界から」
 そうだ、と勇次郎は言葉を紡ぐ。

独歩と烈の世界、それはバーテックスのいないだけの普通の世界だ。

「俺がこの世界に呼び出す奴らと戦い、勝利して陣地を奪う……これまで戦いと違うのは、バーテックスは使わねエつてところだけだ。それ以外はいつも通りだ」

だがその世界には確かにいる。常軌を逸した者が、格闘者グラップラーたちが。

世界最高の筋力を持つ男が、

血上最強の男の血を引く男が、

我流の柔術にて実践家の男が、

生まれながらにして強者の男が。

各々が一番に磨いてきた力を持つ者が勇者の前に立ち塞がる。

それがこの男、範馬勇次郎という存在によって成されようとしている。

「戦争だ……」

「神対勇者……ではないッッ」

「ましてや人対勇者でもねエッッ」

「^{グラップラー}格闘者対勇者」の全面戦争……異世界別異種格闘技戦の始まりだッッ」

——場所、自由。

——時間、自由。

——武器使用、自由。

——ルール無用の喧嘩祭り。

「飽きる事のない戦いの世界、
 “^ヤ闘りたいヤツは好きにだけ^ヤ闘れッッッ”
 “それがこの戦いのルール。”
 「

しかしルールがあるようでないような、告げられたその内容に一同が息を呑んだのも

束の間、

「どうだっついていいんだよそんな事ア！」

土井球子が叫ぶ。

「グラップラーだろうが、なんだろうがッ それがタマ達の前に立つってんならッ
全員、問答無用で倒すまでなんだよッッ こっちはさあッッ！」

「やだ……タマッち先輩、かつこいい」

その威勢の良さに改めて杏が見惚れている一方で、他の勇者達にも伝播したのか、

「歌野の件もあるし、厳しい戦いになりそうね……若葉ッ」

「風さん、これまでの鍛錬は無駄ではなかったということを見せてやろうッ」

風と若葉が共に見合う。

対人の戦闘訓練は独歩や烈と共に積んでいて適応力が出来ていたのか、怖気づいたと
いう印象は勇者達には無かった。

「クク……その意気やよし——悪かねエ、ならばこの地域を賭けての初戦、さっそく始
めるとするかい……？」

勇次郎が頃合いか、と手を挙げた瞬間、その横を通るようにして悠々と歩いてくる男
がいる。

男の背丈は180センチ、くらいだろうか。勇次郎と比べると見劣りしてしまうが、それでも勇者達より大きいことは変わりない。

上裸から窺えるのは鍛え込まれた肉体、

太すぎず、

細すぎず、

シャープ寄りの“バランス”の取れた体つき。

「——勇者が例え少女であつても、俺は容赦はしないツツ」

黒のレスリングパンツ、ロングのボブヘア、額の赤いバンダナはその声量に見合う闘志の表れか。男の出立ちは確実にプロレスラーのそれだ。

「山本稔……コイツが貴様らの最初の相手だ」

勇次郎が紹介すると同時に、山本が両脇を固める構えを取る。

「さあ来いッ 『完成』された格闘技を見せてやるツツ」

「……『完成』？」

それが条件反射だったのか定かではないが、

勇者の中でその単語に人一倍敏感な少女がいるのを、山本は知らなかった。

「私の目の前で……完成型勇者を前にして『完成』を名乗るとは、いい度胸ねツツ」

勇者の集団から飛ぶようにして山本の前に姿を現す少女が居る。

燃える炎の如き赤の装束、

機動力重視の双剣、

敵を射すくめるであろう吊り上った眼光と、

——勇者部随一の“にぼし好き”。

「アンタの相手はこの私ッ 完成型勇者、三好夏凜が相手だッッッ」

その双剣を手に取り、夏凜が構えたのを見た勇次郎がこれから戦う二人の間に入るようにして立つ。

「——これは俺からのサービスだ……一発目だけは俺が仕切つてやらア……始まつたら最後、相手を心の芯から屈服させるまで叩けッッ

——では双方、」

黒の眼光が妖しく光る。

勇次郎の腕が空へと延び、手刀の形を取る。だがそれは攻撃するのではなく、始まりを告げるモノ。

「〃〃〃開^は始^じツツ^めツ^い〃〃〃!!!」

次の瞬間、不戦の鎖を断ち切るかのように、戦いの合図を告げる勇次郎の腕が振り下ろされた。

第十七話～山本稔（バランス）～

『白虎^{びゃつこ}の方角——、

今の自分に死角はないツツ!! バランス命ツツ! シュートレスラー山本 稔!!!』

『対する青龍の方角——、

にぼし食つときやあなんとかなるツツ!!

“自称”完成型勇者、三好夏凜!!!』

「ちよつと銀! 変なナレーション入れるのやめなさい! とうか、アンタ今”自称”
“つて言ったわよね!!” 後で覚えておきなさいよツツ」

「銀とは? 私はこの戦いをお送りするものツ 実況者ア ミノ・ワーギンでえす!!」

妙なテンションの銀が黒縁サングラスを掛けてそう言っている。「他のやつらもなんか盛り上がってるし……」

闘いが始まったばかりだというのに、勇者達のテンションが全体的に高かった。

応援してくれることは有難いとは言え、いささか緊張感に欠けると感じた夏凜である。

「——三好夏凜、と言ったか」

前方の格闘者、山本稔がそう呟く。

「……キミがこれから味わうのは、『プロレス』の全てだ」

ゆつくりと、足を入れ替えて山本が動き出す。

夏凜を中心に円を描くような動作から変わらず仕掛けることは無い。その鋭い男

の眼光は夏凜の隙を探るためなのか。

「先ほど言った通りだ。俺は例え、敵が少女であっても容赦はしない……どんなに痛がり、泣き叫んだとしても、降伏を宣言したとしても、俺のプロレスはキミを完膚なきまで打ちのめすツツツ」

「お、こわっ。随分な自信よね、そのプロレスとやらに」

対して夏凜は自身の周囲を動く山本に微動だにしない。

目で追うことをせず、両の手に持つ双剣を構えもしない。

一見無防備に見える夏凜の佇まいだが、それは夏凜が仕掛けた一つの罠であった。

敢えて隙を作り、迎撃の瞬間を自身で作り出すための罠^{フエイク}。

視覚に頼らず、音で判断する。

夏凜は耳を澄ませ、山本のすり足ののような地面を擦る音を元に、その立ち位置を予測する。

自身の真後ろで、足音が突然聞こえなくなったのを夏凜は見逃さない。

仕掛けるならここだ、と夏凜はそう思う。直後、革製のブーツが力強く地面を蹴る音が聞こえた。

「——シツツツ!!!」

先制攻撃は山本だった。

夏凜の死角から迫り、直線的に繰り出される右ストレート。狙いはその後頭部。

しかし、夏凜には気配だけで山本の動作が見なくても手に取るように分かる。反撃は自身の双剣で行い、山本の繰り出されたストレートに狙いを定め、

「フンッ!!」

夏凜が身体を反転させ、右手の剣で弾き返す。

ガキン、と骨と鉄がぶつかる鈍い音を発し、山本の顔が苦痛に歪む。

「——チィッ!!!」

鈍痛に歯軋りで堪えた山本がツーステップで距離を取る。しかし、夏凜の追撃は止まらない。

一歩大地を蹴って山本の距離を消す程に近づけば、

「逃げんなッツツ」

右横腹、左肩を狙って夏凜の双剣が迫る。

バーテックスや星屑をナマスの如く切り裂いてきた剣、捉えられれば無事では済まない。

それを知ってか知らずか、山本の本能が回避に徹しろと叫ぶ。

大げさなバックステップ、剣先が山本の皮膚に引つ掻き傷を残しながらも夏凜の攻撃は本命に届かず。

人が4、5人ほどの距離を空いて静寂が訪れる。

「どうしたのかしら……逃げてばつかじやない」

夏凜が腰に手を当てて呟く。

「あんだけ威勢のイイ事ほざいておきながら、私の双剣、ビビってひたすら回避行動に徹してる様子を見るに……アンタ、武器を持った相手に慣れてないわね？」

「そりゃあ真剣だからな。無暗に近づいて切り落とされるのは御免だ」

山本の台詞とは裏腹に、頬を伝う汗は焦りを表していた。

素手で主体となるプロレスでも実際に刃物を用いた試合は山本のキャリアにもプロレスの歴史にも無い。単純に恐怖心がある。

山本の焦りを感じ取ったか、夏凜が、

「所詮はプロレス……技の見せ合い、演出は客を盛り上げるただの“見世物”よ。いざ

戦闘になつたら何の役にも立たない」

そう言いながら夏凜は思う。そんな紛い物の格闘技に、勇者で血にまみれるような訓練をした自分が負けるはずはない、と。

「ま、真剣でぶつた斬る事はしないから安心しなさい。アンタの身体全箇所、峰打ちでぶつ叩いてやるから……骨は折らせてもらうけど」

笑みを隠さない夏凜が双剣を構え、山本に狙いを定めて駆け出した。

だが、夏凜は気付いていない。

「——フツ」

山本もまた、薄気味悪い笑みを浮かべていたのを。

○

『おおつとお！ 激しい攻防ツ 夏凜選手の双剣が山本選手に迫りますツツ 戦況は、

夏凜選手が優勢かあ——!!』

「三ノ輪さん、とても楽しそうね……」

仲間が優勢なことであつてか、マイク片手に実況者じみた事を行っている三ノ輪銀を郡千景が微笑ましく思う。

事実、勇者部というギャラリーも応援を欠かさず、その声援を夏凜に惜しむことなく届けている。

だがその一方で、

「これは、あまり良くない……」

「え？」

郡千景の隣で高嶋友奈が怪訝な表情とともに、そう呟く。

「高嶋さん、三好さんの今の戦いに、何か不安があるの？」

千景の疑問はもつともで、現在の勝負は夏凜が山本を追撃し、山本は防御に徹するの
で精いっぱいである。

誰がどう見ても、夏凜の優勢だと捉えるだろうに何を不安に思うのだろうか。

「不安な点はね、ぐんちゃん、夏凜ちゃんがプロレスをナメてるってことだよ」

彼女からは珍しく夏凜に対しての発言だ。しかも辛口の。

「そう言えば、高嶋さんは色々な格闘技を見るのが好きだったわね」

彼女の魅力の一つだと、千景は思う。

未来の勇者、結城友奈と違い、様々な格闘技を見たりして、楽しみに千景に語ってい

る友奈を見るのがとても好きだった。

だから夏凜が優勢でも関わず、不安要素を感じるのだろうか。それは拳を握って、自身の胸に置いているほど。

その無類の格闘技好きな高嶋が言っている、〃夏凜はプロレスをナメている〃と。

「その……高嶋さん、私もプロレスっていうのはテレビだけのイメージだと過剰な演出？ 〃どことなくやりすぎて、どうしてもシヨミみたいな感じがするのだけど」

「確かに、プロレスってお互いにガンガン技を繰り出したり、悪役のレスラーがバンバンパイプ椅子で叩いたり、鉄柵のロープにバリバリ電流走らせて、ビシヤビシヤと血が出るまで戦ったりするか、皆がプロレスを見世物シヨウモノなんて言っちゃうのも分かる気がするんだけど……」

相変わらず擬音が多いな、と千景は思う。が、それも高嶋の魅力の一つだと気にも留めない。

その上で高嶋は言う。

「私は思うよ、〃〃こと格闘技に関してはプロレスの右に出る競技はないって〃」

過去の世界、自分たちにとっての現在である西暦の時代で高嶋は今の千景と同じ疑問にぶち当たった。

——『プロレスってただの見世物で格闘技ではないのでは？』

そう思い、様々な試合を見た。実際に会場に行ったし、世界で名を馳せたレスラーの試合を動画で見たこともある。

その中で高嶋が感じたのはレスリングに熱き情熱を掛けるレスラーたちの身体が普通の競技者とは違うということだった。

プロレスはその競技の内容上、エゲツナイ光景が見られるのが日常風景だ。

相手を脳天からマットに叩きつけるブレーンバスター、

自身の腕と相手の胸が真っ赤になる水平、逆水平チョップの応酬、

セコンドポールから高く飛び立ち、観客の度肝を抜く空中技、

骨や腱を痛めるほどに強力で、禁止もされているものもある関節技サブミッションの数々。

派手な演出に目が行きがちだが、その技の多くは精巧で、実践的である。

苦痛とは切っても切れない関係、一番その苦痛いたみに耐えなければならぬのは他でもな

い、レスラーたちだ。

故にタフガイ、レスラーとは強靱な肉体を持った男達の集まりなのだ。

互いに技を繰り出し、ダメージを与え、血を流し、骨を折り、靱帯を裂き、関節を極め、怪我無しではいられないこの世界。時には死亡事故もあるレスリングの世界。

だからこそ、映える。

試合中の全ての技の掛け合い、弾け飛ぶ汗と血。

それは見ている観客の胸を熱くする。

試合が終わった後のマイクパフォーマンス、気付けば観客、自分を含めてレスリングの虜だった。

高まった会場の熱気は勝利者による掛け声を待つ。

3・2・1、サン・ニー・イチダア————ツツツ、その瞬間、会場が割れんばかりの歓声に包まれる。

いたみ苦痛に耐えて、耐えて、耐えて……そうして生み出された爆発的な歓声を高嶋は演出から生まれたものではないと断言できるのである。それは本物の感動なのだ。

「つまり、三好さんはそのレスリングの怖さを知らないまま戦っている、と?」
「うん」

千景の言葉に高嶋が頷いた。

「いつも勝気な夏凜ちゃんだからこそ、その恐怖を知らないっていうのはあまりにも危険。もしかしたら、足元掬われちゃうかも……」

次の瞬間、勇者達がどよめいたのを聞いて、高嶋と千景は視線をその方へ向ける。

どよめきの正体は、夏凜の双剣の一振りが山本へ直撃したのを知らせる歓声だった。

○

山本が回避を行っていても、攻める夏凜の前では時間と共に逃げ場を失い、次第には追いつかれていった。

ましてや、機動力は夏凜よりは下だ。いずれ追いつかれることは目に見えている。

「——っそッおッ!!」

夏凜の剣の一振りが足を止めた山本目がけて振り出される。剣の腹を山本の正面に合わせたその一振りが山本の脳天を捉える。

ゴン、と鈍い音。いかに真剣で斬らないとはいえ、素材は鋼鉄である。鈍器で殴られることに変わりはない。

「ぐおっ……い！」

バランスを取り柄としている山本の身体が大きく揺れる。同時に、外野の勇者達が目よめきを放つ。

山本は未だに足をふらつかせていた。

今が好機、そう踏んだ夏凜が一気に踏み込む。今度は両の剣で狙いを定め、

「せいッ!!!」

右腰に、

両膝へ、

右上腕部へ、

左肩へ、

右側頭部へ、

「せいッ!!!」

その鈍器による打ん殴り、左右合わせて、夏凜の全霊を込めた六連撃がほぼほぼ無防備な山本へ直撃する。

肉を叩き、骨まで響く鈍い音とともに痛みが知らせるのは、それが折れた音なのか、ひびが入った音なのか。

「……………これまでね」

激痛によるめき、膝をついた山本を見おろした夏凜がそう呟いた。視線を山本からの試合を見ている範馬勇次郎へと向け、

「おっさんッ！ もう勝負は着いたわよ！ 私の勝ちでいいわよね!？」

勝利宣言を行う夏凜に勇次郎は、

「あ?」

さも侮蔑するような視線を送るとともに、その一言を返す。勇次郎は続けて、

「何言つてんだオメエ……………」

「なにつて……………これ以上戦わせる必要なんてないでしょ!?! 今のでこの人はもう——」

「——」

「戦い続ける事はできねエ……………そういいてエのかい?」

そんなことか、と勇次郎は吐き捨てる。

「甘エんだよ」

最初に言った通りだ。

「試合が始まった以上、相手の心を屈服させるまで叩け……俺はそう言ったな」

口の端を上げ、勇次郎は言う。

「たかだか六発程度のナマクラ鈍器で叩かれたくらいで、レスラーが屈服するつてのかい？」

「アンタ、何を言つて——」

その言葉の意味を、夏凜は身を持って知る事となる。

夏凜は許してしまっていた。そして、与えてしまったのだ。

シユートレスラー、山本稔に反撃の機会を。

「夏凜ちゃんツツ　まだ終わつていないツツツ!!!」

「ツツツ!!!」

高嶋の渾身の叫びも束の間、それに気付いた時には夏凜の無防備な側面に山本の姿があつた。山本は夏凜よりも低い姿勢のまま、

夏凜の脇下へ血を流している頭を通しては組みつき、

片腕を首の付け根へ、もう片方で腰を抱える。

幾度となく練習し、精錬されたその動作は夏凜に防御も、脱出させる隙も与えない。

「まよ……」

言い切る前に、夏凜の全身が山本によって持ち上げられる。

大地から完全に足が着かなくなれば、その後に山本がどうするかなんて考えなくても分かる。

夏凜のその小さな身体が山本の腕にガツチリとホールドされたまま、二人諸共、真後ろへ倒れ込むようにと――、

叩きつける。

「――がはッッ」

夏凜の後頭部から、背面にかけて凄まじい衝撃が駆け、呼吸が一瞬だけ止まる。地面にめり込むほどに抉ったその一撃が夏凜へ与えたダメージの深刻さを物語る。

炸裂したのは柔道で使われる投げ技の一つ。『裏投げ』だ。

「俺達レスラーは技を掛けられても、耐えられる肉体を作らなければならない」

昏倒する意識の中で夏凜の耳に山本の声が響く。

「時にはトンの衝撃に、パイプ椅子の殴打に、たとえば傷ついて、血を流したとしても俺たちレスラーは」

痛みをこらえ、それすらも演出へと変え、戦わなければならない。

「三好夏凜、キミは警戒すべきだったんだ。プロレスラーのタフさに、その演技力に」
全ては山本の台本通りだった。

夏凜の攻撃を目の当たりにしては焦り、逃げ回り、渾身の連撃が炸裂するまでが。

「キミの頸椎と肩、には甚大なダメージだ。といっても、今の君にはこの声も届いていないかもしれないが」

不敵な笑みを山本が浮かべた。

「シユートレスリングってのは、投げ技だけじゃあない」

倒れている夏凜に対し、山本が素早く手に取ったのは右腕。

夏凜の上腕部を山本の両足へと挟み込み、固定。

同時に山本の両足は夏凜の顔へと下し、起き上がりを阻止。

膝を絞り、寝そべる山本の方へと伸ばされた夏凜の右腕。

「絞め技、ホールド 関節技こそが、シユートの真骨頂だツツ」

この体制はマズイ、そう夏凜が気付いた時には完全に山本の技は逃げられない程に決

まっていた。

そして次の瞬間、

「ぐあああああああツツ!!」

樹海に響くのは夏凜の絶叫。

山本の背筋力に任せて右肘が引き延ばされたことによる激痛が、夏凜を襲った。

肘が逆方向へと展開されては、更にその腕を引き絞るように山本が力を込める。

極まった関節がミシミシと音を立て、逃げようと身を振ろうとも、顔まで伸びた山本の両足が夏凜が逃げられないようにロックしてきている。

それはあまりにも有名、そして格闘技で多く使用される関節技――、

柔道で使われる関節技、『腕拉十字固め』。関節技九本の一つ。

「パンクラス時代からの俺の得意技でね。一度極まってしまうば、脱出は不可能だ……」

容赦なく、夏凜の右腕が引き延ばされる。

可動域の限界を超え、圧倒的な体格差と背筋力は夏凜の上腕の靭帯をメリメリと引き剥がしていく。

「ぐ、ぐうううううううッッ」

激痛から涙目を浮かべても夏凜は叫ばない。それは動けない故の些細な抵抗なのか。

「そろそろ、幕を下ろそう」

不意に夏凜の腕から拘束力が無くなる。山本が関節技を自ら解いたのだ。

自由になったの夏凜が手放していた双剣を拾おうと手に取るも、

「つう……ッ」

鈍く、電気が走るような痛みに剣を掴むことも、拾い上げる事も出来ない。

腕が折れている訳ではない、韌帯が伸ばされてしまっているだけなのか、少しだけ手は動かせる。

「奴は——」

山本の姿を探すも、夏凜の視界には映らない。それもその筈だ。

全くの死角、夏凜のその真後ろに、山本は立っていたのだから。

○

山本を見失った夏凜の無防備な肉体に、太い男の腕がまるで蛇のように絡みつく。

肘が夏凜の喉前に、首を挟むようにし、確実に固定^{ロック}。

夏凜の身体が沈み込む。

100キロの全体重が夏凜の小柄な体躯、その真下に向けて掛けられ、膝から崩れ落ちる。

山本は唯一まともに動く夏凜の左手をその丸太の如き左足で、右足で胴を抱え込むようにして固定^{ロツク}。

強引な長座の姿勢で、100キロの体重を掛けられ、頭^{ヘッド}と腕^{アーム}を抑えられた夏凜は逃げる術を持たない。

それはプロセスで使用される技。

過度な締め付けは相手の命を奪う危険もあるとされている必^{フイニツシユ}殺^{ホールド}技。

それは俗に、『スリーパーホールド』と言われる。

万力の如き締め付けが、夏凜の首、頸動脈部分を圧迫する。

「ぐっ……！ かつ……ああ……っ！」

徐々に狭まる気管の苦痛に夏凜は言葉を発することが出来ない。

必死に脱出するべく抵抗を試みるが山本の足が腕と胴をしつかり締め上げている為に、全く持つて身動きが出来ないのだ。

夏凜の視界が酩酊したかのように薄暗くなっていく。

スリーパーホールドは相手を窒息させる技ではない。

頸動脈部分を締め付ける事で脳に充分に血液が送られなくなることによって起きる気絶である。」

首の血管には適切な血圧で血を送るセンサーがある。そこを圧迫することでセンサーが大量の血が脳へ送られてしまうと誤認してしまう。

そのため、急速に血圧を落とし、気絶するほどの低血圧に陥るのだ。

良く聞かれる『落ちる』という言葉はこの現象を意味している。

スリーパーホールドとは人体の防衛システムを逆手にとった技と言えよう。

「……あ、……ああ」

一言を発する力が失われていくのを夏凜は感じた。

視界が霞がかかったようにぼやけ始め、抵抗する力も次第に弱くなっていく。

薄れゆく意識の中、夏凜は思う。自分は負けるのか、と。

先陣を切り、勝利し、勇者部を勢いづける為に自ら進んで望んだこの一戦、負けるわけにはいかなかった。

プロレスを舐めていた故に生じた油断、勇者として鍛錬してきたという自負が夏凜に隙を生じさせたのだ。

完全に自分のミス。気付いた時にはもう遅かった。

夏凜の視線の先、仲間の勇者達がこちらを見ている。

意気揚々と実況していた銀は口に紐でもくくられたかのように、一言も発さず、静まり返っていた。同じように、他の勇者達も。

山本の戦いはこれまで対人戦に耐性が付き始めていたであろう勇者達の表情に影を落とすものだった。

対人戦、これがリアルな戦い。その恐怖を、勇者達は目の当たりにする。

結城友奈が泣いている。口を開いて、何か喋っているが、恐らく自分の名前なのだろう。

また、自分は友奈を泣かせてしまった、と夏凜は後悔の念を強める。このままではまた、美森に叱られてしまうだろう。

「ぐ……め、——」

意識を手放す前、謝罪の言葉を口にしようとした瞬間。

——ほら、やっぱり三好さんは甘いじゃない。

それは、過去に夏凜が聞いたことがある少女の声だった。

第十八話～三好夏凜（完成）～

——人と馴れ合っていたら……自分の訓練の時間を他人の為に使うとか、正直甘い、と思う。

——見ていなさい三好夏凜。その甘さがある限り、勇者になるのは私よ。

——

——

——

「……フィニッシュ
決着だ」

山本の声と共に、首からの拘束が弱まった。

スリーパーホールドが解かれると、夏凜の腕がだらんと力を失い、宙ぶらりんになる。

「
」
その瞳からは生気が失われ、ただ一点、地面だけを見つめている。

長座の態勢を維持できているのが不思議なくらいでだが、指で身体を突けば、風に吹かれれば簡単に倒れてしまうだろう。

「夏凜……ちよつと、ウソでしょ……起きなさいよ、ねえっ！」

その戦いを見守っていた風から震えるような声が漏れる。

仲間が言葉を発さず、まったく動かないという光景が幻なのだと、信じて疑わないのだ。

あの夏凜なら、まだ必勝の策がある。

あの夏凜なら、まだ逆転できるのだと。

だが、そんな風の願いも虚しく、夏凜はその呼びかけに応えないままだ。

「オーガよ」

「……」

勝者を自負してやまない山本がその背を勇者達に見せつけ、勇次郎へ宣言する。

「俺の勝ちだ」

自らの勝利を。

山本自身、楽な戦いだったわけではなかった。

実際、夏凜の二刀をまともに受けてのダメージは未だに回復していない。もし夏凜が油断も隙もない相手であったならば、その攻撃力に屈して地面に倒れていたのは山本の

方だった。

だが、プロレスと言うのはこういう展開だからこそ燃える。

絶対的劣勢からの大逆転劇。それが最終的に会場にいる全ての客を盛り上げるのだ。

「フフフ……」

勝利の余韻に浸っている山本を余所に、勇次郎が嗤っていた。

「なにが可笑しい……オーガツ」

「いやあ、こうも二人揃って『甘ちゃん』ってのはアよ、お笑いモンだなあって思ってたなア
コントか何かか？って思っちゃもうくらいだぜ？」

山本は疑問に思う。オーガのその言葉の意味を。

自身のファイトに何も隙は無かった筈だ。かりにも、戦いに関しては勇次郎に及ばずとも、こうして勇者を一人仕留め、戦いの勝利したのは自分である。

それを嗤う権利は勇次郎にあったとしても、勝利した事実を否定することは出来ないのだ。

「つまるところ、この時代にも根性のある勇者はいたって事だ——なア」

そう付け加えた勇次郎が見ていたのは山本ではなかった。

その視線が、自身の遙か後ろに向けられていると山本は全てが遅かったのだと悟る。

「三好夏凜よ」

山本の背後から、三好夏凜が猫のように飛び上がった。

「~~~~ツツツ!?!」

山本の背に飛び乗った三好夏凜がその片腕を山本の首へと回す。

全体重を後ろへと掛け、地面へと引き寄せられるような強烈な力に山本の身体が背中から地面に落下する。

「がッッ」

背中から地面に打ち付けられ、山本の肺から息が強制的吐き出される。

だが、それは背中側に張り付いていた夏凜とて例外ではない。100キロクラスの山本の体重が全身にのしかかり、地面へと叩きつけられたのだ。ダメージは相当の物である。

その痛みをものともしない、否、関係ないと言わんばかりに、

「私は…勝つう! 絶対に、絶対にイイ——!!」

片腕で山本の首を締め上げるが、勇者としての力を持ってしても、プロレスラーの強靱な首を締め上げるには力が足りない。

夏凜の片腕は機能していない。このままでは腕力の差で技から抜け出された山本にトドメを貫うのは目に見えている。

だから夏凜は右腕の勇者服の袖を噛んだ。

強引に顎と首の力で締めている腕を引つ張り、さながら一本の輪のようになった夏凜の腕はこれまで以上に山本の首を絞めつける。

即席のチョークスリーパーが山本に炸裂した。

「……ぐツ、がア……」

「ふうふうふう!!」

三好夏凜は思う。自分は負けられないのだと。

かつて勇者になることを競い合った者たちが居た。

勇者になれるのはたった一人、その中で夏凜は同じ訓練を受けていた少女達とその座を争っていた。

ある者は傷つき、自分の無力さを知り、勇者になることを諦めた。

消えゆく仲間たちを見ながらも、夏凜は走り続けた。もう無価値な自分には戻らないと決めていたから。

結果的に、夏凜が勇者に選ばれたが、ある一人の少女は勇者になれない事に納得できず、暴走したのだという。

夏凜は気付いた。

自分が今手にしている力は同じ想いを胸に集った者達の上に成り立っている力なのだ。

時間にして数十秒、夏凜のスリーパーホールドは山本の首を絞め続けた。

山本の腕が次第に力を失い、地面へと垂れても夏凜は油断せず、抵抗がないことを確認して拘束を外して立ち上がる。

十秒か、一分に満たないくらいか山本は起き上がって来ない。

山本は完全に意識を手放し、『堕ちて』いた。

「勝負アリッツツツ!!」

ニイ、と笑みを浮かべた後で勇次郎の樹海に響いた声が戦いの終幕を表していた。

その瞬間、夏凜の片腕が伸びると同時、勇者たちから割れんばかりの歓声が上がった。

○

「ちよ、ちよつと風！ 私片腕でもちやんと食べられるからあゝ!!」

「いいじゃないの、こういう時は遠慮せずに甘えるもんでしょ！ 部長の気遣いを受け取りなさい！」

ここは大赦系列の病院。

右腕にギプスを巻いた夏凜がベッドの上で風と格闘していた。

闘いは勇者部の勝利に終わった。

直後、夏凜は大赦系列の病院に搬送されて検査の後、暫く入院が決定したのである。

「た、大赦の医者も大げさなのよ！ なんでもかんでもベッドに寝せてればいいってもんじゃないんだし——」

「隙ありッ」

「ふむっ!？」

口の空いたのを見逃さなかった夏凜の口に切り分けられたリンゴが放り込まれた。くそう、と恥ずかしそうにそう呟く夏凜はリンゴの味だけでなく、ある意味では敗北を味わうこととなった。

「でも、向こうの人たちって負けたら消えちゃうのは驚いたわ」

「そうね。まあ、役目を終えて元の時代に帰るだけってあの鬼のオッサンは言ってたけど」

グラップラー達は鬨に負けると自動的に元の時代に帰されるらしい。

夏凜との戦いの後、山本の身体は徐々に透けていったのだ。

ちなみに、そんな山本の最後の言葉だが、

『三好夏凜、キミのあふれ出るガッツに俺は敗北した……どうだ、キミにはセンスがある。一緒にレスリングをやらないか!？』

消える間際に山本にヘッドハンティングをされた夏凜だった。もちろん、丁重にお断

りした。

勇次郎はと言うと、

『山本程度に苦戦するとはまだまだアメエな……今日はこれで終いだ』

勇次郎は樹海化が解ける間際、何故か不敵に笑みを作っては高嶋と千景へと視線を送りつつ、

『次の戦いを待つ。また来るがいい、勇者達よ』

そんな魔王みたいな捨て台詞とともに去っていったのだった。

「まあ、そんなこんなで私が甲斐甲斐しく病院に運ばれた夏凜を看病してやってるんだから感謝しなさいよね？」

「……………あ、ありがとう」

風のリングゴを持っていた手が止まる。

あの夏凜が、珍しく素直に礼を言った事に。

「か、夏凜がお礼を言いおった！ あの夏凜が!!」

「…ツ!! ど、どういう意味よそれ！」

羞恥で顔を染めた夏凜は思う。この場に園子達が居なくて心底良かったと。

○

時刻は既に夕刻である。

夏凜の無事を見届けた勇者部一同はそれぞれが帰路に付いていた。

ある者は真つ直ぐ家へと帰り、

ある者は今日の夕ご飯の食材を買いに商店街へ、

高嶋友奈も、その帰路についていた一人である。

いつもなら、その隣には同じ西暦の勇者である郡千景がいるのだが、今はいない。一緒に帰ろうと千景から誘われたが、高嶋が用事があるから、と断ったのだ。

それには理由がある。

「♪♪♪」

鼻歌を混じらせながら、高嶋は思考を巡らせた。そして思うのである、誰かに見られている、と。

背中を刺すような感覚。まるで刃を突きつけられているような、弓を持って射殺してくるかのような、それはまるで殺気。

5メートル、いや、10メートルくらいだろうか。

それくらい距離を保ちながら、高嶋の背後を付けてくる者がいる。

後ろを見れば、すぐにでもその正体を視認できるだろうが、高嶋はそれをしない。

明らかに気づいていない風に装っておくことを決めた高嶋は歩調を早めることなく、一定のスピードで角を曲がった。

暫くその道を進むと辺りがビルの壁に囲まれて狭まり、周囲は薄暗くなつてきてさえた。

その路地は真つ直ぐ進んだ先は行き止まりである。高嶋の足は自然と止まった。

「行き止まりだぜ？ お嬢ちゃんよ」

足を止めた高嶋の背後から聞こえるのは男の声。高嶋がその声を聞いて踵を返す。

身長は180くらいだろうか。

オールバックの髪型、ラフにジャージを着こなした青年がそこにはいたのである。

「逃げてても無駄だつてことを悟つた感じか……それとも、もともとこの場所に来る予定だったのかイ？」

サバンナに生息する豹のような眼光が高嶋を見つめる。

男の身体は一般男性の体つきではなかった。

ジャージの上からでは分かりにくいかも知れないが、袖口から見える拳の皮膚の厚み、

首回りの太さ、

腕と脚周りの筋肉の大きさは格闘術を嗜んでいることを窺わせる。

男が纏う異質な雰囲気はまさしく『グラップラー』のそれだと、高嶋は本能的に察した。

そして理解する。この男は敵なのだ。

「お兄さん……グラップラーなんだね？」

「おうよ……空手道神心会所属——」

高嶋の問いに男は余裕綽々の笑みを浮かべて軽快に答えて見せた。

「——加藤清澄かとうきよすみってんだ」

勇者、高嶋友奈に空手界のデンジャラスライオンが迫る。

第十九話く加藤清澄（デンジヤラスライオン）く

”勇者対グラップラー全面戦争”

くルールその1く戦う日時は指定しない。

くルールその2く出会ったら樹海だろうが、街のど真ん中だろうが、女を抱いている時だろうが問答無用で対決しなければならぬ。

「神心会……」

「オウよ」

路地裏にて対峙した男と女。

加藤清澄の言葉に思い当たる事があったのか、高嶋友奈が呟く。

「もしかして独歩ちゃんの居た道場の……じゃあお兄さんは独歩ちゃんの門下生なんだ？」

「その通り……ずっとと館長の背中を追いかけてた一途な男の子ってヤツなのよ、オレ」
加藤は冗談めいた、それでいて本気の想いを語る。

喧嘩空手を信条とした彼のファイティングスタイルは並の武道家では歯が立たない。

しかし神心会のデンジャラスライオンと呼ばれ、腕に磨きを掛けたとしても神心会館長、愚知独歩の足元にも及ばない。

強き者を敬い、慕い、追いかける。

男として惹かれる魅力をもつ独歩を目標にするのは加藤にとって当然なのだろう。

「そうなんだ……ふーん」

高嶋がそう頷いたのを見て、加藤がニヤリと笑う。

右手にポケットを突っ込んだまま、彼は立ち尽くしたまま少女との距離を測る。

「まあ、つまり何が言いてエかつてな？」

5メートルか6メートルか、少女との間合いを推測した彼は――、ポケットの中に隠し持っていたモノを高嶋へと投げつけた。

「ツツツ!? 砂ツツ!」

掌に乗せられ投げたのは一握りの砂だった。

乾燥し、細かく砕かれていた砂は高嶋の前方を覆つてはその視界を塞がせる。

「――俺がイチバン、師匠想いツツツ」

一瞬だが目暗ましの役割を果たした砂煙の中から加藤清澄が飛び出した。

まるでロケットかのような助走で速度を上げた加藤が、

飛び上がり、前方への運動エネルギーを消費しないまま、

高嶋と空いていた距離を一瞬にして縮めている。

「キャオラアアアツツ!!!」

全体重を乗せた加藤の飛び蹴り。

狙いは少女の顔面。

槍の如き鋭利さを持つ、右足側頭部による蹴りが高嶋の顔面に放たれる。

次の瞬間どつ、と。

まるでサンドバッグを金属バットで殴ったかのような鈍い音。

高嶋の一瞬だが身体が浮き、その後は地面を引きずるように加藤との距離を強引に開かせた。

高嶋が蹴られ、その体が移動した距離約5メートル。

単純な男と女の体重ウェイトの差。

武闘家として洗練された加藤の蹴りの威力を語るには十分な距離だ。

だが不思議と、加藤の表情は晴れなかった。

不意打ちに加え、全力の飛び蹴りを見まわせたのにも関わらず確かな“手ごたえ”を感じることが出来なかったからである。

「……いったいなあ、もう〜」

少女、高嶋のケロッツとした声。

まるで加藤の蹴りをモノともしないような声は快活そのものである。彼女の顔面、通学用のカバンが盾の如く展開されていた。

「うわ、ちよつとまだ腕がびりびりする……湿布張れば治るかな」

加藤の蹴りは片手とカバンによる防御によつて完全に防がれていた。

「……やるねエ、お嬢ちゃん」

声色を崩さずに呟いた加藤。

しかしその実、彼の表情には小さく驚きがあった。

常人であれば片腕を使用不可能にするレベルのダメージを負っていてもおかしく無い加藤の蹴り。

それをカバン越しとはいえ、”片手で”防いだ高嶋に驚愕を隠せない。

「一番弟子かア……それは聞き捨てならないよ、お兄さん」

加藤の蹴りを防いだカバンを下し、高嶋が呟く。

「この世界での独歩ちゃんが一番弟子は……私だよ」

高嶋がスカートのポケットからスマホを取り出す。

それを見て加藤は思うのだ。

あれが勇者達が持っているスマホ。

勇者はアレを用いて誰もが変身する。

あの少女もこれから変身するのだろう。

だがアレが無ければ変身できない。

結論を脳内で直感的に導き出した加藤の動きは速かった。変身などさせるものか。

その意志の表れのように顔には余裕はなく、コンクリートの地面を蹴り一気に距離を詰める。

自分よりも年下の、ひ弱そうな少女を痛めつけることに躊躇いを持たない。すべて加藤は聞いていた。

この世界に連れてこられた際に目の前で佇んでいた男から。
オレが鬼こと範馬勇次郎から勇者に関連した情報の全てを聞いていた。

バーテックスという異形の存在と戦う少女、勇者。

その拳は地を容易く叩き割り、
その脚は空を駆けるということも、
どうやって勇者が力を得るのかも。

勇次郎はいつものように嗤っていた。

まるで自慢の娘を紹介するように嬉々とした表情で。

加藤の師である独歩を、

中国の頂点の郭海王を、

彼の息子である刃牙を、

武の道を行くものならば耳にする強者たちを上回るほどの実力を持つ鬼、範馬勇次郎が興味津々。

一体、何が起きているのかと加藤自身疑ったほどだ。

……アイツ、時々キャラおかしくなつてワケわかんねえ時があるけどよ。

それを確かめるための不意を突いての初撃。

勇者としての力量を図るための堂々とした奇襲を用いた。

加藤は期待する。

あの勇次郎が一目置く奴なら、これくらいの攻撃を躲してくれるのだろう。

そして高嶋の反応は加藤の期待に應えるものだった。

同時に、加藤の表情から笑みが消えた。

確かだ。

目の前の高嶋友奈という少女は、自身が全力を出すに足りる戦士ウオリアーなのだ。

「チィィィイツツ!!」

自身の太い筋肉の幹をナイフと見立て、加藤の手刀が振り下ろされる。

右手にスマホ、左手で操作しようとする友奈へと。

友奈の姿はまだ制服姿のままだ。

変身は完了していない。

友奈が勇者へと変身する前に、加藤の手刀の方が僅かに早い。

勝った。そう思った加藤は脳裏に勝利の二文字を浮かべる。

勝った、勝利。

それは全て、加藤だけが思っていただけであった。

加藤の目前、高嶋の手の中にあるのは、既に受け止められた加藤の手刀だった。

……オイオイ、女が出していい腕力じゃねえって、コレ。

握られる加藤の右腕。

それが高嶋が腕を引き絞るように力籠めると骨が軋む音が聞こえる。

そして加藤は気づく。

自身の腕を握る高嶋の手に、先ほどまでなかった『手甲』が装着されていた事に。

……まだまだッ　まだッ!!

繰り出す手は連撃。

右膝による蹴りを高嶋の腹部目掛けて。

しかし、その膝は狙い通りに届くことなく高嶋の左手によって止められてた。

「~~~~ツツツ!!？」

「……」

呆気に取られる加藤とは対照的に高嶋は無言であつた。

高嶋の手は加藤の膝蹴りを予測していたかのように膝の出鼻、初動を抑えている。動き出しを止められていては威力も半減する。

……し、しかもコレって館長の……

手刀を右手で、下方から迫る膝蹴りを左手で抑えた友奈の姿にある男の姿を幻視した。

天地上下の構え。

相手の攻撃を誘い受け、攻めにも転じられる攻守を備えた型。

武神・愚知独歩の構えであつた。

まるで本人がその場にいるかのような完璧な現身。

だからだろうか、加藤は高嶋の次の行動への対処が遅れてしまった。

瞬間、ごりツと。

加藤の顔を高嶋の拳が抉った。

右ストレートが加藤の右頬を駆け抜け、80キロ強あるであろう男の身体が後方へと吹っ飛ばされる。

まるでダンプカーに撥ねられたかのような衝撃が駆け抜ける。

地面を二転三転し、打たれた顔を擦りながら加藤は激痛に耐えて身を起こす。

「でたらめ、すぎ、ネエか……ッ？」

湧き上がる闘志とは別に肉体にはダメージが残っていた。

高嶋の打拳が引き起こす脳震盪。

まるで脳味噌を直接鷲掴みされてシェイクされたかのように脳へ与えたダメージは加藤の現在の視界が証明する。

地面が起き、

空間が歪み、

高嶋の等身が変化する。

「……ひゅう!!」

絶望的な状況であっても加藤は思わず笑みを零す。

目の前で佇む高嶋の視線が満身創痍の加藤を逃さないかのように見つめている。

「お兄さん、私ね……大切な人を守りたいんだ」

眩い光と共に勇者服への変身を完了させ、

天地上下の構えのまま、高嶋は眩く。

「この世界で出会った大切な、大切な友達を……私の手で。

独歩ちゃん達の世界の人がそれを邪魔するっていうなら————絶対に私は容赦は

しない」

熱血の塊のような熱い高鳴の視線。

加藤の胸を叩く何かがあつた。

尊敬なのか、畏怖なのか：どちらか分からない。

だが加藤は不思議と圧倒的不利な状況であるにも関わらず不敵な笑みを浮かべていた。

それどころか、ますます闘志が蘇ってきたではないか。

……報いたい。この女の強さに。

ドリアン海王と戦った時とは違う『強さ』。

真つ向から挑んでも打ち返される圧倒的な『力』。

その強さに、全身全霊を持って応えたいと思う。

構え、肩で息をしながらも加藤は山桜の勇者を見据える。

見据えた先に加藤清澄は少女にある男の姿を浮かばせた。
愚知独歩ではなく、浮かび上がってきたその姿は――、

「お、^{オーガ}鬼だ、とツツツ!!?」

幼き少女の醸し出す闘気はまさしく地上最強の生物が纏うソレ。
暴力の化身、範馬勇次郎のものであった。

「オオ…オオオオオツツ!!」

生気を取り戻した獣の如き雄たけびが路地裏内に木霊する。
まるで死刑囚シコルスキーが地下闘技場でやったような、
自らを奮い立たせるような叫び。

加藤は真つすぐ高嶋へと駆けだした。

身体は歓喜しているのだ。

偽物かもしれない、けどオーガのような、若しくは同等の存在と相対出来ることが。

圧倒的『武』に対して己の『武』をぶつけられることが。

「オーガッツツ 貴様をツツ 出し抜くツツ」

「私は高嶋だよ……?」

極度な緊張感とアドレナリンが引き起こした幻覚。

もう高嶋の姿は範馬勇次郎にしか見えていなかった。

「ラアツツ」

地面を飛び、気迫の籠った二本の指を高嶋へ繰り出す。

相手の目玉を抉り出すことを前提とした『目つぶし』だ。

「勇者ア…ヘーツドツツ!!」

しかし、ぱきつと。

何かがへし折れる音がする。

加藤の指の骨が折れた音だ。

加藤の目潰しは、高嶋が突き出した頭突きの際によって防がれていた。頭蓋と指二本ならば、衝突した際どちらが先に碎けるなど知れている。骨折の痛みなど気に留めることなく加藤の空中回し蹴りが炸裂する。

「勇者ア……キーツクツツ!!」

大鎌の如き加藤の蹴りが右側面から迫ると同時に、高嶋の右足が飛んできた。

加藤の攻撃を予測したかのような反応速度。

左足を軸に地面に立ち、宙を飛ぶ加藤の顔面目掛けて繰り出される高嶋の回し蹴り。カウンターキック

刹那、加藤は思うのである。

……なんて綺麗な回し蹴りだよ。

打点は高く、

地面の力を100%自身の力へと変換する、
美しい弧を描く、理想的な蹴り。

何百万回と繰り返されたかのような、
美と強さが集約されたかのような回し蹴りに思わず見惚れていた。

だからだろうか。

高嶋の蹴りが加藤の顔面を抉った時、感じた痛みなどは一瞬の事で、
白濁とした無の世界に意識が落ちるのを感じながら、こんな事を思うのである。

……あれえ、なんでかなあ……最ツ高にい、気持ちがいイヤ……。

小細工、力押し、

あらゆる技を用いて挑んだ自身の力を跳ね除ける高嶋友奈の真つすぐさ。

その真つすぐな心に全力を以って応えれた満足感が、加藤に敗北という言葉を受け入れさせていた。

・ ・ ・ ・ 次は、負けねえ。絶対に。

ホワイトアウトする意識とともに、二度と巡ってこないであろう再戦への熱意を胸に抱きながら。

加藤の身体は神樹が作り出したこの世界から消えていったのだった。

ちなみに高嶋はその後、何事もなかったかのように仲間たちが待つ寮へと帰宅した。

第二十話く秋原雪花（揺れる心）く

讚州中学勇者部は今日も今日とて造反神から奪われた領地を取り返すという御役目に勤しんでいる。

グラップラーというイレギュラーと戦うことになっても本来のお役目である造反神との戦いは続いているのだ。

今勇者たちがいるのは造反神の赤い領地。

ほとんどの敵が星屑と小型中型のバーテックスに溢れているその樹海を勇者たちは駆け、連携を取り各個撃破していく。

そんなある日、勇者たちに事件が起きる。

——樹海の中で、秋原雪花が消息を絶つたのだ。

巫女たちの神託によって襲撃のある場所へ向かった勇者たちは一人で纏まらず、他の勇者たちと連携して敵の対処を行っていた。

バーテックスも大型個体も少なく、日ごろの訓練の成果もあつてか順調に敵を撃破していく勇者たち。

このまま敵の殲滅が完了し、戦闘が終了するだろうと誰もが思ったその矢先、宙を浮く巨大バーテックスが小型爆弾のようなモノを落としてきたのだ。

連携をとっていた、お互いの距離を把握していた勇者たちが全力で回避行動に徹し、爆風によって舞い上がった砂塵が樹海の広域を覆いつくしたのだ。

「勇者ア……パァーンチ!!」

直後、誰もが自分の居場所すら分からないほどに視界を塞ぐ砂煙の中から飛び出した高嶋友奈が必殺パンチで空中の敵を一撃のもとに打ち抜いた事により窮地は凌いだか

に見えたのだが。

そこには雪花の姿はなく、彼女の変身用の端末だけが地面に落ちていたのだった。

「どうだ!? 雪花はいたか!?!」

「だめです……若葉さんのほうですか?」

乃木若葉と伊予島杏が互いに見やるが雪花発見の報を知らせることが出来ずに肩を落とす。

二人は前衛組みと後衛組みで勇者たちを別けて、居なくなった雪花の探索を行っていた。

「失念していた……よもや巫女ではなく、勇者一人を狙ってくるとは……!」

「まだ誰かに攫われた……と断定は出来ませんが、あの不自然な端末の置かれ方はその方向で考えてもいいかもしれません」

以前は巫女を襲われたことで集団行動の際は巫女の近場には勇者を護衛につけると

して対策を行っていた若葉たちだったが、

まさか勇者を個人で狙われるとは思っていなかった。

完全に裏をかかれた。

そしてこのような手口を使うものとなると、若葉の知る中では一人しかいない。

「やはり、赤嶺友奈の仕業か？」

「おそらくは……でも、カガミブネを使える東郷さんを狙うならともかく、雪花さんを狙う理由は一体……」

「わからない……だが何かしら意図があるはずだ。しかし、悠長に探索を続けるのも難しそうだな……樹海化が解けていない」

敵が殲滅されなければ樹海化現象は解除されない。

今も樹海化が続いているということ……つまり、これからもまだまだ敵は現れてくるということだ。

戦闘が再開されれば、雪花を探すということは困難になってくるだろう。

「……」

若葉に一抹の不安がよぎる。

雪花は今、勇者も把握できない場所において、携帯を所持していない。それはつまり、現在の雪花は変身も出来ない『生身』の状態だということだ。

勇者服を纏っていない状態は戦闘能力はガタ落ちになる。

むしろ、皆無だと言っている。

精霊バリアも機能しないため、下手をすれば星屑相手に命を落とす可能性だつてあるのだ。

若葉は自身の西暦の時代で、無抵抗で星屑に食い殺された人々を思い出した。最悪の展開を予想してしまった若葉は頭を振って否定する。

「若葉さん、杏さん！敵の第二陣が来ます！迎撃準備を！」

二人の様子を見に来た鷲尾須美が敵の増援を告げる。

空の向こうには星屑だけでなく、バーテックスの姿も確認できた。

数も先ほどとはけた違いである。こちらが本命なのだろう。

「雪花の探索はいったん中止だ。まずは目の前の敵を叩く！」

若葉も思考を切り替えて、目の前に迫りつつある敵を迎撃すると決めた。

杏も須美も頷き、それぞれの陣地へと戻っていくのであった。

「そんなーじゃあ雪花は放っておいて迎撃に専念しろってことなの!？」

若葉は自分の陣地に戻って次の戦いが迫っていることと雪花の探索を一時中止することを告げる。

当然、納得できない者がいる。それは三好夏凜であった。

「夏凜、気持ちは分かるが……敵も本腰だ。さつきよりも数が多いし、雪花の探索のためには人員を割くことは難しい」

先ほどのように不意を突かれての大型バーテックスの強襲があれば人数を割いた際

に戦いが不利になる。

勇者全員を取り仕切る若葉も苦渋の決断だった。

「だが、戦いながらも探すことは出来るはずだ。もし雪花が見つければ、その時は救出を優先して動く。」

私たちは仲間を見捨てたりはしない」

「……そうね、若葉の言うとおりよ。」

ちゃんとバーテックスを蹴散らして、雪花を見つけ出しましょう!!」

夏凜は理解してくれたのを見て、若葉は安堵する。

秋原雪花は同じ西暦の時代を生き、この世界で出会うことができた大切な仲間だ。

仲間を見捨てることはできない。勝利のために切り捨てるとか、見捨てるとかという考えを若葉は持ち得ていないのだ。

「ところで夏凜……友奈はどこに?」

「友奈? ああ……高嶋のほうね、……あそこよ」

若葉が高嶋友奈を気にかけたのは、先ほどの大型バーテックスを倒した彼女の様子を
知りたかったのだ。

夏凜が指を向けると、そこには確かに高嶋の姿があった。

あつたのだが――、

「もぐもぐもぐもぐ……」

地面に座り込んだ高嶋の眼前にはおじやを入れた特大タツパと一本のバナナ、それを
食している最中だった。

「ゆ、友奈……お前、一体なにを……？」

これから戦い起きる。

そう伝えたはずなのに、その直前で高嶋は堂々と食事をとり始めたのだった。

凄まじい速さで特大タツパに入れられたおじやと丸一本のバナナを胃に収めた高嶋
はいつから持ち込んだのか、黒色の液体を取り出す。

それは老若男女が好む清涼飲料水のコーラだ。

炭酸水であるコーラを上下に振った高嶋が一度栓をきる。

当然の如く、栓からは泡が溢れてきた。

泡が収まったのを見て、高嶋はその炭酸が抜けきったコーラを口に含むと、

「い〜い〜い〜い〜い……ぷはっ」

一瞬で飲み干したのだった。

（正気か!?友奈ツ これから戦うというのに炭酸飲料など身体のなかに入れるなんて……ツツ）

通常であれば腹が炭酸で膨れ運動能力に影響を与えるコーラを戦闘開始する直前に飲むこと、それは若葉にとって理解に苦しむものであった。

「ほう……炭酸抜きコーラか高嶋ちゃん……大したもんだぜ」

「愚知さん!?!」

若葉の疑問に答える者がいた。

武神・愚知独歩である。

「なぜ友奈は戦闘前にコーラを？」

「炭酸を抜いたコーラはエネルギーの効率が極めて高いらしい……

レース直前に愛飲するマラソンランナーもいるくらいだ」

それに、と独歩は続ける。

「あの特大タツパのおじやとバナナ……。これも即効性のエネルギー食だ。

しかも梅干しもそろえて栄養バランスもいい……

それにしても戦闘直前でこれだけ補給できるっていうのも超人的な消化力があつてこそなんだがな」

いかにエネルギー効率の良い食べ物を補給しても、

それら多くのものを最終的に胃で溶かして身体にエネルギーを行き渡らせるには相当の消化能力が必要である。

独歩は少女一人が摂取する平均カロリーを軽く超える補給を行う、高嶋の尋常ではない消化力に素直に感心していたようだった。

「なにをー!? 私だって一人でうどん10杯までは余裕で溶かせるわ!」
「風さん……どうして友奈と張り合っているんだ?」

その一方で、隣では犬吠埼 風が瞳の中に炎を宿しながら高嶋に対抗心を燃やしていたのだった。

「ん……っ、ふ……くっ……！」

秋原雪花が苦悶の表情をと共に、疲弊した息を漏らす。

勇者服ではなく、制服姿の雪花は身体に白い触手のようなものに拘束されていた。

身体に巻き付いた触手の先には星屑と呼ばれる白の異形が雪花の眼前に一匹。

両腕、両足、腰、首と五体の動きに必要な部位に巻き付いた触手の拘束はキツめだ。

どんなに力を籠めても、触手は少しも動くことがなかった。

「だ、だめかあ……にやあ……」

まさか、端末落つことしちやうなんて……っついてないにやー」

はあ、という嘆息を自分流に置き換えて雪花は息をつく。

勇者服を纏っている状態ならばどうにかなったかもしれないが今の自分は生身のものだ。

普段から鍛えていても、所詮は女子中学生である。

星屑という雑魚一匹に苦戦するどころか、手も足も出ないという有様だ。

「んふふ……無駄だよ」

必死に逃げようとする雪花を見つめては薄く微笑む少女がいる。

赤嶺友奈だ。

「こんなにもまくいくとは思ってもなかったんだけど……まさか自分が狙われるとは思ってなかったって感じかな？」

「……そうだよ、確かに私なんかより東郷とかの方を狙ってくると思ってたけど」

敵に捕らわれているという危機的状況でも雪花の声色は意外にも冷静なものであった。

雪花はつい先ほどまで仲間の勇者と共に戦闘行動中、突如上空に現れた巨大バーテックスの爆弾投下攻撃に見舞われた。

東郷美森の『総員退避』の号令のもと勇者たちは回避行動に努める。

雪花もそれに漏れることなく爆塵の中を駆け抜けていったのだが。

途中、その混乱に乗じて近づいて聞いた赤嶺に気付かず隙を突かれ捕えられてしまっ

た。

気づけば雪花はいつの間にか変身が解除された制服姿でバーテックスに拘束されていたのである。

はつきり言つて、完全に油断していた。

勇者にとつての長距離移動が可能な転移装置、カガミブネを起動するために必要な存在、東郷美森を狙ってくるものだと思つていたためだ。

「もちろん、あなたに用があつただけだよ秋原雪花」

赤嶺は朗らかに微笑みかけ、ゆっくりと近づき雪花の顔が目と鼻の先の距離まで接近する。

「聞きたいことがあつてね……あなたの心と身体に、ね」

「——え、まさかのソツチ系……？それつてどういう——」

「そりゃあもう、こんな感じで……」

赤嶺が雪花の言葉を遮るように顎を人差し指と親指でくいつ、と持ち上げる。

吐息と花のような甘い香りが漂ってくるほどの距離で、赤嶺の深紅の瞳と雪花の翡翠の瞳が交錯した。

「そういえばこの前部室を襲われたときは私を逃がさないように抱きついてたんだっけ……こうやって」

「んな……っ！」

すつと視線を外すと、赤嶺は雪花の身体を両の手を背に回して抱きしめた。

「敵からの熱いハグなんて願ひ下げだよ！　っていうか、そのハグやったの私じゃなくて東郷!!」

ある日の、部室で巫女を襲ってきた赤嶺を捉えるべく行われた東郷の珍事を再現されて雪花の顔に恥ずかしさからか僅かに朱が浮かんできている。

赤嶺の身体の肉はとても柔らかく、それで程よく鍛えられているような硬さがあった。

それでいて、女性特有の香りが雪花の鼻腔をつつき、その香りに充てられた雪花の頭

がふらつと揺れる。

そして何より、

(友奈ズとは遥かに違うこの胸の部分ツ 東郷程じゃないにしても、こうして私の胸にぐりぐり押し付けるのはなんなの!? ただの嫌がらせ!?)

容姿が酷似している結城友奈や高嶋友奈とは明らかに実り豊かに成長している胸を雪花の胸へと押し当てられる。

雪花の小ぶりで茶碗程度の大きさの、それでいて形の良い胸が赤嶺の豊満な胸の圧に押し負け、ぐにぐにと形が変化する光景を雪花はただただ呆然と見つめていた。

男であつたら確実に悶絶するであろう光景。

だが如何せん、秋原雪花は女である。

故に女の部分で自身のモノとは比べ物にならないほど誇張する部分を見せられては、ただただ圧倒的敗北感を得るだけであつた。

そして先ほどの雪花の問いに赤嶺が答えると同時、抱きしめていた腕の片方を外す。

「でも……あなたも確か私の足の部分にしがみついていたよね……確か、ここらへんとか……さ」

「ひああっ……!? こ、ここらあ……そこ太ももだつて……! た、タイトの上からさわん、にや……あ!」

赤嶺の手が雪花の足まで延びる。

褐色の手はゆつくりとタイト越しに膝裏から太もも付近を舐めるように這った。

嫌悪感よりも羞恥とこそばゆさから雪花は身体を思わず振る。

「ちよっ——んふっ、……ふあっ!?」

その反応を面白がった赤嶺の手が変化する。

雪花の太ももを下から上へと這わせていた動きから、円を描くような撫でまわす動きへ。

先ほどとは違う刺激を加えられたことに対応しきれなかった雪花の身体が驚愕からか、びくつと跳ねた。

「あはは……かわいい反応するじゃない。意外だなー、てつきり冷静沈着で慌てないイメージがあつただけ……もしかして意外と——」

その先を口にすることなく、赤嶺はくすりと笑みを浮かべる。

彼女の言葉の意味を問いたただす暇などなく、雪花の顔は既に茹で上がったように赤く、身体は熱を帯びている。

「はあ……はあ……し、信じらんない……ノギーが被害に遭ったって聞いてはいたけどまさか」

少女に触れられたただけだというのに息切れを誘うほどの謎の疲労感が雪花は感じながら確信したのである。

赤嶺は間違いなくレズだと。

当の本人はけらけらと笑いながら、

「手先が器用なのは昔っからだけど、感度に関しては多分あなたの素質もあるんじゃない……？ もっとしてほしい？」

そう言つて手をわきやわきやと蠢くのを見せつける赤嶺に、雪花は先ほどの自身の答えに付け加えるように訂正する。

彼女、赤嶺友奈はDSでレズだと。

続けて蠢く彼女の腕が雪花の胸に向かうのを見て危機を感じ取ったのか、

雪花は小さな抵抗を試みる。

「あーいやだいやだ。こんな変態が勇者だなんて、世も末だね……棗さんがどう思うか」
「……」

雪花の胸へと向かう手がぴたりと止まると一瞬の間を置いて、赤嶺は腕を引っ込めた。

「そろそろ本題に入ろうか」

「引き下がるのはやくない？」

「まさかお姉様の名前を出すなんて思わなかったよ……さすが、勇者部きつての頭脳派……」

（いやー、あのデレデレっぷりを見せつけられて棗さんの名前が有効なのって誰でもわかると思うんだけど）

勇者・古波蔵 棗を乙女オーラ全開にして甘ったるい声で「お姉様」と呼ぶ姿を見てこの発想に至らないものはいない。

多分いたとしても土井球子ぐらいだろうか。

そんな雪花の心中を気に留めることなく、赤嶺は続けるのである。

「疑似精霊——、以前やった勇者への問いかけて覚えてるかな？」

「疑似精霊……」

その言葉に、雪花が記憶を遡る。

以前、造反神の領地を奪う際に赤嶺が作り出した勇者たちそつくりの姿をした人工精霊。

本体の精神の中に入り込み、論戦を仕掛けられるとその論戦を制さないと解放されない。

精霊の問いは勇者によって異なり、その者の心情、過去などを的確に突いてくる。

そして精霊の問いに答えられなくなると、恐ろしいことにその代償として精霊が憑りつき二度と勇者に変身する事が出来なくなるといふ。

あくまで神樹が作り出したこの世界限定の制約で、お役目が終われば元に戻るといふものではあつたが。

結果、勇者たちは誰一人問いかけに動揺することなく、自分自身との戦いに勝利した。

あの時は自分が選ばれなくて心底良かったと思つていた雪花であつたが、赤嶺がここでその話題を振るといふことは。

「じゃあん」

「……やつぱり、そういう展開ですかにや」

掌をひらひらと、さながらショーでキャストを紹介するかのような振る舞いをする赤嶺の隣には一人の少女がいる。

「……にやあ」

そこには見間違えるはずのない、もう一人の秋原雪花の姿がそこにあった。

「……なるほどねえ、今度は私にその疑似精霊とお話しさせようってワケ？」

「そうだよ、縛られて動けない私。もちろん、質問に答えられなかったら憑りつかれるっていうルールはそのままだかんね」

疑似精霊の雪花が本体とそんな色ない声色で説明する一方、赤嶺は大きく伸びをしてい

る。
「いや、急ごしらえだからちやんと機能するかなって心配だったけど問題なかったみたいだね、ふあ……徹夜した甲斐があったよ」

「へっへっ、私のためにわざわざ睡眠時間削ってまで用意してくれたんだ……でもいいの？」

私、他の勇者がクリアしてるところ見てるから大体勝ち方分かってるし、あんま意味ないと思うけど？」

自信満々に言い放つ雪花を赤嶺はまた薄く笑った。

「……そうかなあ」

意味ありげに間を取りながら。

「なんなのさ、今の間は……」

「別に？　ただ、おもしろくなりそうだな～って」

赤嶺側の意図を探らせないためなのか、必要以上の事を彼女は語らなかつた。

だが、環境的にも人間関係的にも極寒の地である旋律の北海道を生きた秋原雪花は本能的に察知する。

これには何か、ウラがある、と。

「それじゃあそろそろ始めるとするかな……あまり時間掛けて他の勇者に見つかったら元も子もないからね」

（そんなこと言ったら最初のセクハラ行為、絶対時間の無駄だったって突っ込んでもいいかによ？）

心の中で雪花が眩いたとき、赤嶺の合図で雪花の疑似精霊が動き出した。

自分と同じ服と、若干光の失われた翡翠の瞳が本物の雪花を見据え、人差し指を突き出す。

「それじゃあ行きますよ……ドーン！」

どこの喪黒福造だよ。

雪花が頭の中で思考するのと自分の瞼が重くなり、精神の世界に引きずりこまれるのはほぼ同時であった。

「……ここが精神世界？ 夏凜たちから聞いてた通り、真つ白でなにもない空間だねえ」
意識を覚醒させた雪花の視界に広がるのはどこまでも白く、上下も右も左もない世界。

赤嶺友奈と自身を縛っていた星屑も存在しなかった。
いるのは秋原雪花とその姿と同じ疑似精霊のみ。

「ん、この世界なら身体も縛られてないし……はー、自由って最高にやあ」

現実とは違い、星屑の拘束から解放された雪花が大きく背伸びをしてみせる。
前方ではその様子を精霊である雪花が立ち尽くした様子で眺めている。

準備運動をしている雪花に何も仕掛けてこないあたり、その異様さが際立っていた。

「……わざわざ待っててくれるの？」

「そうだね、あなたにとって大事なお話になりそうだし」

自分と同じ声と顔のものが浮かべる冷ややかな笑み。
それに少し寒気のようなものを感じる。

「それじゃあ、とりあえず質問させてもらうかにやー、いくよ?」

精霊は陽気な声色とは別に、口の形を悪魔のような三日月の形に変えては問う。

「私こと、秋原雪花は——元の世界には絶対に戻りたくないと思っている」

第二十一話（赤嶺友奈（揺さぶる人））

「くツ……うう……」

微睡の中、秋原雪花が目を覚ます。

中途半端な熱を持ったような寝苦しきから、額から流れる汗を気持ち悪いと感じながらも彼女は周囲を見回して状況を把握する。

「お目覚めー?」

目の前には、赤嶺友奈が砕けた笑みをこちらに向けながら手を振っている。

加えて雪花の身体には自身を拘束するバーテックスの触手だ。

雪花は確信する。

自分は赤嶺が差し向けた自身の疑似精霊との対話を制してきたのだと。

「いやー、早かったねえ。急造の疑似精霊だからきつと中途半端な対話で終わっちゃ

うのかと思っただけど——」

「あんた……ほんと最悪」

「ふふ……その様子を見ると、色々と、聞いてきたみたいだね」

ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべて見せた赤嶺に対して、雪花は苦虫を噛み潰したような顔をした。

たしかに、雪花は赤嶺の疑似精霊との対話に勝利した。

雪花の疑似精霊は当然、彼女自身が心に思っていることをストレートに聞いてきたのである。

自身の変に疑り深く、計算に走りがちな性格の事を、

北の大地に相応しく冷えに冷え切った人間関係の事も、

そんな心も冷え切る故郷に帰りたくない自身の心境も、

この世界から帰りたくないと思っている事も。

しかし、雪花はその問いに対して正直に答えて見せた。

自分の性格がたまに嫌になる時があるというのは分かっていたし、

今まで感じたことのない心の温かさを失いたくないと思つたし、

この異世界での生活で出会つた仲間たちとはまだ離れたくないし、

正直、この御役目がずっと終わらなければいいと思つている事も明かした。

こうして疑似精霊にの対話に勝利した仲間の話を参考に雪花は対話に臨んだこともあつてか、言い負かされることもなく、現実の世界に戻つてこれた。

仲間と一緒に居たいとか、心の温かさとか、まだ帰りたくないとか。

そんな心中を声を大にして曝け出すのはたとえ相手が自分の姿をした偽物であつても顔から火が吹く思いであつたが。

対話を終えた瞬間、疑似精霊が光となつて消えていく。

形成された偽の空間が崩れ雪花の意識が現実へと帰つていくその最中、雪花の疑似精霊は不敵に笑うのである。

——もしこの世界に帰らなくてもいい方法があつたとしたら、どうする？

そんな言葉を、今一番雪花がぶち当たっている問題を疑似精霊が口にしたと同時に意識は光のなかへと吸い込まれていった。

そして今に至るのである。

「まさかとは思うけど……私が易々と対話を終わらしてくるって考えて、あの仕掛けを？」

「さあ？ なんのことかなー？」

白々しいほどの笑みを向けてくる赤嶺に思わず槍をぶつけたくなる思いである。

もつとも、槍も持っていないし身体は触手で縛られてるからどうしようもないのだが。

「……赤嶺、知ってるんでしょ。この世界から帰った私たちがどうなるのか……」

「さあ、どうだか……でも、自分自身でも察しはついてるんじゃないかな？ 聡明な秋原

雪花さんなら、ね」

石のような沈黙を押し通すかと思いきや、意味深に問いを投げかける赤嶺に雪花は息を呑む。

この世界から消える時、それは造反神を沈めて御役目が終わる時だ。

聞けば、神樹が作り出した世界での出来事は一時的なもので、元の世界に戻ればそれ

までの記憶は失われるという。

記憶だけではない。

その時に得た強さも、雪花が救われ、ずっと居たいと思えたこの世界の出来事は、泡となって消えていく。

泡沫の夢のように。

記憶を失い、元の世界に戻ることに、それは雪花にとつてどういうことなのか。

またあの寒い大地で戦いが始まる。

人々を敵から守らなければならない日々が、

人と人同士が醜さを隠しながらも平然を装う集会が、
文字通り、心をすり減らしていく日々が始まるのだ。

あの寒く、凍えるような大地でたった一人の戦いが。

かつて得たような強さに縋ることも出来ず、

仲間たちとの出会いも無かったことにされ、

一人で戦うことを強制されていく。

孤軍奮闘、気前のいい言葉を言えばそうなるかもしれない。だが、雪花を取り巻く状況は真実を言々と四面楚歌である。

次第に増えていき、学習して強化されていく敵。

限りある物資の中の長期戦。

敵が敵を呼び、助けに来る仲間が誰一人としていない。

終いには人間同士がお互いに利益と欲を優先しての足の引つ張り合い。

そんな中で雪花が戦いを続けていたとしても見えてくるのは破滅である。

その破滅を確証付けるのはやはり、同じ西暦勇者の反応を見れば一目瞭然だ。

諏訪の勇者、白鳥歌野。沖繩の勇者、古波蔵 棗。

長野県と沖繩の勇者も雪花と同じ一人で地域を守っていた。

たった一人で人々を守護する彼女達の強さは戦闘面でも、逆境に晒された時の精神面を見れば納得することが出来る。

だが、どんなに心と身体が強い歌野と棗であってもバーテックスの圧倒的物量にはい
ずれ押しつぶされるのは目に見えている。

特に諏訪の後方に構えていた乃木若葉の四国で戦いが始まったということは、最前線
で戦っていた諏訪は崩壊したということではないか。

仲間の対応も不自然ではあった。例えば、四国の勇者。

若葉にも事の次第を聞こうとしたときは何故かはぐらかされた。

つまりは、そういうことなのだろう。

諏訪は既に滅んでしまっている可能性が高い。

掘り返せば、まだまだ疑問に思うことが出てくるのが勇者部だ。

自分たちの時代より300年後の、神世紀の勇者たち。

もちろん、三ノ輪 銀という一人の少女についてだ。

この世界には東郷美森と鷲尾須美、乃木園子（中）と乃木園子（小）は同一人物だ。同じ年齢の彼女たちのは同じ時間を歩み、この世界にやってきている。なのに、三ノ輪銀という少女は小学生の姿しか見当たらない。中学生の三ノ輪 銀がいないという疑問には雪花は当然気が付いた。

活発で、元気に動き回る銀の姿はまるで火の玉である。

そんな小学生の銀を見守る中学生の乃木園子と東郷美森。

彼女たちの銀に接する際の態度は、どこかよそよそしかった。

まるで腫物を扱うかのような、

だけど、銀と過ごして満面の笑みを浮かべる二人は、もう二度と会うことなんて出来なかつた人と再会できたかのような、充足に満ちた幸せの中にいた。

その理由は、恐らく勇者部部員の全ては知らないだろう。

知っているのは東郷美森と乃木園子のみ。

彼女たちの関係を一概に表せないが、傍観者であつた雪花は感じ取つたのだ。きつと、何かがあつたに違いない、と。

雪花はそこから不安だけが募っていった。

愛媛の地域を奪い取った時だったくらいか、

誰かがふと言ったのだ。『この戦いも終わりが見えてきたみたいですね』と。

雪花はその言葉に半笑いで言った。『まだまだ焦んなくてもいい、ゆっくりいこう』と。

雪花の言葉に誰も反発するものはいなかった。

みんながまだその話は早いと言わんばかりに、話を切り上げていった。

解決策を模索しようにも、全員が一丸とならなければどうしようもない。

問題を先送りすること、それは悪いことだと雪花は思わない。本当に答えが見つからないのなら、致し方ないことだろう。

だが、もし……お役目が完了する時まで何も解決策も見つからなかった場合、

その切迫した中で仲間と遂に異世界から現実へと戻るとなった時に素直に受け入れられるものはいのだろうか。

きつと、受け入れるものと受け入れられないもので大きく分かれるだろう。

そうなれば、言い争いは免れられない。

いつも和気あいあいとした勇者たちが険悪になる光景を想像して、雪花の胸が酷く痛んだ。

だから、疑似精霊が最後に残したように元の世界に戻らなくてもいい方法があるのならば。

危険な罫だと分かっていたとしても雪花にとっては藁にも縋る想いだ。

なぜなら雪花は絶対に生き残りたいから。

援軍の来ない雪に埋もれながら無残に死にたくはない。

起きて半畳、寝て一畳、飯を食っても二合半。　そんな質素な生き方でもいい。

せめて死ぬならば畳の上で、

願わくば誰かに見守られ、

贅沢を言うなら人の温もり感じて死んでいきたい。

それが人生の終幕にて秋原雪花が望むものだ。

故に雪花は生きるために問うのである。

「あんたが何を見ているかは分からないよ……でもあんたは神世紀序盤の人間。

世界が火の海になった当初の世界情勢を少なからずとも知っているはずだよね？」

「モチのロン♪」

「教えなよ、赤嶺。この世界から戻らなくていい、そんな都合のいい方法をさ……」

赤嶺を睨み付ける様に、されど悲痛な表情で雪花は言う。

誰もが求めている、優しく居心地のいい世界を続ける方法を問うのだ。

そんな雪花に対して赤嶺はにっこりと、彼女の知る『友奈』のような笑みで、

「本当だったらあ、勇者部が強くなつて私を打ち負かしたときに話そうと思つてたんだけど、雪花さんには特別なかな？ その代わり……」

意味ありげに手をこちらに差し出してきて赤嶺は言う。

「勇者部をさ、裏切つてよ」

「……ツツ!!」

驚愕、困惑とそれらを織り交ぜたような表情の雪花に赤嶺は提示した条件は『仲間を裏切れ』というものだった。

「簡単に言えば情報の提供かな？ 私たちが攻め込む際はそちの陣地と勇者の配置とか巫女の場所とかを教えてほしいんだよね。」

神託で常に万全な状態で守られるからさー、裏をかってやりたいんだよ」
執拗なまでの巫女潰しはこれからも継続するらしい。

確かに巫女の神託の裏を突けるなら、勇者たちは困惑するし脆弱な防衛網を一点に攻め込むことで一気に形勢を逆転させることが出来るだろう。

「あ、縛られた状態じゃ握手できないよね。 なんだったら言葉にしてほしいかな、『仲間になります』。 それだけでいいから」

「ば、馬鹿ッ そんなことッ 出来る訳ッッ」

「でもさでもさ！ 死にたくないんだよね！」

嬉々とした表情で赤嶺は言う。

まるで雪花の心の隙間に入り込むように、内に秘めていた激情を掻き立てる様に。生に報着する雪花の本能を引きずり出すように。

「寒かったから握ってもらったあの子の手……暖かかったんだよね？ あれがもう二度と感じ取れない寒い大地になって戻りたくないよね？」

いつぞや、海岸で自身の手を寒くないように握ってくれた友奈との一部始終を口にされる。

隠れて見ていたとは、悪趣味な勇者も居たものだ。

（ちくしょう……こんなの、絶対罠だって分かってるのに！なんで……なんで!!）

雪花は気づいている。

赤嶺の提示するこの条件が罠だということを。

実際は真実を教える気などさらさらない、使えるだけ使って、そしてここぞというときに赤嶺と雪花が内通しているということを勇者部にリークして不和を起こさせるのが狙いなのだ。

単調な作戦、それを受けてしまいうリスクは余りにもデカい。

しかし、その罨に雪花は敢えて飛び込もうとしている。余りにも甘美な響きに、頷こうとしてしまっている自分がある。

生きたい。

死にたくない。

この世界から戻りたくない。

ずっとここにいたい。

でも皆を裏切りたくない。

様々な思考が交錯する中、赤嶺が迫る。

「そろそろ……答えを聞いちゃおうかなあ……どうするの？」

「わ、わたしは……」

どろりとした黒い感情が見え隠れする笑みを向けて首を傾げる彼女に雪花は目尻に涙を溜めながら、引き絞るような声で言葉を作り始める。

「あな、た、の……な、か……まに——」

その先の言葉を遮るように、雪花の眼前を風が舞った。

黒の物体が赤嶺と雪花の丁度間へと高速で落ちてきたのである。

「——ちイツツ!!」

それを危険と察知した赤嶺がひと蹴りでその場から飛び退くと、次の瞬間。

どうツ、と。

赤嶺が先ほどまで居た場所を何か突き刺さる音がする。

小さく地面を沈ませ、砂煙を起こした正体は黒のカンフーシューズだった。

「単身で搜索し続けた甲斐があったというものだ——」

空から降り立ったのは男だった。

赤嶺と同じく褐色の肌を持ち、目を引くチャイナ服でゴツイ肉体となればそれは雪花の知る中で一人しかいない。

「烈さん——!!」

「待たせたな雪花よ。そして赤嶺、私は貴様を探していた」

中国武術の達人、烈海王が矢のような鋭い視線を前方の赤嶺へと向ける。

「誰かと思ったら、忘れてたよ……私にイツパツもらって負けた、弱い人じゃん」

赤嶺は警戒しながらも、余裕を宿したような小さな笑みで呟いた。

樹海で出会って自身の一撃に沈んだ男の顔をあろうことか忘れかけていたらしい。

そして自然と発せられる挑発の言葉に烈の激情を誘う、抜け目のないことである。

しかし烈は一瞬足りとも表情を変えることなく、毅然としたままだった。

「わざわざ貴様を名指した理由……ある程度分かっているだろう?」

「リベンジ、したいんだ……できるのかな?」

一段と妖美な笑みを浮かべる赤嶺に烈は小さく笑って見せる。

「試してみよう」

一切挑発を受け付けない烈の姿勢に赤嶺は違和感を覚える。

あの時の樹海で出会った男と同じものとは思えない闘気。

片足義足という身体的ハンデをもものもしないその佇まい。

下手に手を出したら一瞬にしてその剛拳の連打を食らうという映像が浮かぶ。

気づけば赤嶺は烈に対してファイティングポーズをとっていた。

しかもそれは、少しだけ距離をとるような防御よりの構え。

「このまま逃げるもよし。仲間を呼んで私を数で圧倒する、それもいいだろう。

だが、一対一で戦うことを望むなら……貴様は我が魔拳、身を以って味わうこととなる」

鍛錬に鍛錬を重ねた褐色の拳の厚みから察するに、その威力は絶大だろうと赤嶺は予想する。

「いいじゃん、やってみなよ。またイッパツで終わらせてあげるからさ」

だが、樹海での不意打ちにてこの男からもぎ取った勝利という事実が赤嶺から烈への恐怖心をなくさせていた。

構えから力を抜き、普段通りの戦闘スタイルへと移行する。

「……なら、私も同じように” イッパツ ” だ」

「……？」

すつ、と烈は数字にして“ 1 ” を表わすように人差し指を赤嶺へ見せつける。

それが何の意味を持つのか、と脳内で思考する赤嶺より先に烈は宣言するのである。

「私が貴様に与える打撃は一撃のみ……その一撃を以つて貴様を倒す」

余裕綽綽の赤嶺友奈に、中国の“ 魔拳 ” が牙を剥く。

第二十二話～烈海王（リベンジ）～

当たる。

当たる。

当たる。

拳が面白いくらいに当たる。

握力によって作られた拳がマシンガンの如き速さで打ち込まれる。

一打一打が岩をも破壊する威力を秘めている拳が確かに、肉を叩く音を奏でる。

「だあアツ!!」

赤嶺友奈の拳が眼前の敵、烈海王を容赦なくたたき上げる。

まるでボクサーが練習でサンドバッグを叩くように、

怒声を上げるとともに、烈の身体がまるで宙を舞う風船のように浮き上がるが――

、

すんと、と。

まるで一流の体操選手がフィニッシュで着地を決めるかの如く柔らかな着地を決め

て、

「どうした赤嶺」

毅然と、そして油断も許さない鋭い眼光で烈が睨み付けてくる。

先ほどの連打の影響など全くと言っていいほどないというように。

「イッパツ……既に宣言した回数を超えているが」

1 2 発。赤嶺が烈に叩き込んだ拳の数である。

頬に。

顎に。

腹に。

胸に。

岩をも砕くとされる威力を持つ勇者の拳を、的確にクリーンヒットさせた。手ごたえは確かだった。

だが、目の前の烈海王がノーダメージで相対しているという事実が残る。

「はは……どうなってんのこれ」

その事実には思わず、赤嶺から乾いた笑みが漏れた。

精霊による加護も無ければ、特別肉体が強化されているわけでもない。

本来なら、立っているのが不思議と言っても過言ではないほどのダメージを与えている筈。

何度叩いても立ち上がってくる。

まるでゾンビ。

もしくは、怪しげな薬使って痛覚を遮断しているとかしか考えられない。

そう非現実的な思考を以って対処するほどに赤嶺は動揺していた。

「足りないな」

烈海王が嗤う。

「まだ隠しているだろう……奥の手を」

「……え？」

きよとんと。

思わず口にしていた赤嶺に対して、烈は言う。

酷く、性の悪そうな口ぶりで、

「それでもなければ、永遠に私は倒せないからだ……全力で来るがいいッ」

それは間違いなく挑発だった。

普段口足らずな烈が行った珍しい挑発行為だった。

先ほどから全力で打ち込んできてる赤嶺に対して、

『お前の力はそのなもんか？ そうじゃないだろう？』という意味。

「~~~~ツツツ!!」

屈辱である。

対人戦特化の勇者である赤嶺にとって、今の烈のセリフは非常に癪に障るものであった。

凶に乗るな。

粹がるな。

舐めるな。

こんなもんじゃない。

次は絶対、ぶっ倒す。

明確な殺意という物が沸き上がり、自然と拳に力が籠められてその硬さは鋼鉄と化す。

怒りのボルテージが赤嶺自身に力を与えていた。

アドレナリンが迸る。

インパルスが加速する。

視界に。

脳内に。

研ぎ澄まされた烈の姿が映し出され、ジャストにリンクした脳と身体が叫んだ。

——“行け”と。

まるで獰猛なイノシシが突き進むように、赤嶺は烈へと肉薄した。

——当時の光景を秋原雪花は後にこう語っている。

いやあ、なんでアレで死んでないのか。こつちが疑問に思ってるくらいだよ。今でもさ。

ドスツ、とかじゃなくてドンツ。なんかハンマーとか鈍器が肉撃ったような音出してる。同時に衝撃はもボツて広がってこつちにまで届いてきたよ。

勇者の力……、特に結城つちとか、高嶋のパンチつてけた違いの威力なんだよね。赤嶺と結城つちがタイマンで拳ぶつてあつたらそりやあもう凄かったよ。

拳と拳が衝突して衝撃波生まれるとか、まるでマンガじゃん。どこのドラゴンボールだつて、どこのスクライドだつて。

烈さん？ああ、あの人ね。もちろんピンピンしてたよ。

赤嶺の猛ラツシユをまた食らっちゃうワケ。腕とか、腹と顔にさ。

でもあれ、多分ワザとじゃないかなあ、って思ったわけよ。

“完全に受け切れる自信があった”、そんな感じかな。

「ダアオツツ!!」

赤嶺も叫んでたね。これでもか! って感じで、宙に浮いた烈さんの腹目掛けて蹴り入れてたんだ。

綺麗に入ったね。前に高嶋が練習してた格闘技でいうミドルキックってやつ?

多分普通の人間が食らったらアレは死ぬるね、確かに。

「……!!?」

でも不思議とね、ダメーじなんて入ってなかったって、私は思ったんだ。多分、赤嶺もそう思ったんだよね。

また烈さんが平然と構えてくるんだ。

「まだやるか?」

つて、セリフを吐いてね。

後から調べただけで、中国拳法には相手の攻撃を受けた時にその力を吸収する“
シャオリ消力” ってのがあるらしいんだよ。

人間つてパンチとか食らったり、何か衝撃が身体に来た時に思わず身を固めちゃうで
 しょ？

力んだりしたりさ。あれは人体の反射なんだつて。

“シャオリ消力”はその逆で、あえて力を抜くことで打撃の威力を吸収して無力化しちゃう
 技っていうワケ。

笑っちゃうよね、そんな技使えたら車に撥ねられたつて死なないじゃん。

「くそ……っ！」

流石に赤嶺も苛ついてたね。そりや自慢のパンチを何発も当てても効果なしつてな
 れば、頭にも来るでしょ。

立て続けに攻め込んだから息が上がってたね。

「——では、幕を下ろそう」

「なッッ!?!」

その疲労した瞬間を狙ったのかな。烈さんが動いたんだ。

義足じゃない生身の足で地面を蹴って、そのひと蹴りで一気に間合いを詰めたんだ。4，5メートルくらいかな。それくらいはあつたと思う。人間の脚力じゃないって。だけど、赤嶺もちゃんと反応してた。

腕を出してたんだよ。

間合いを詰めてくる烈さんに対して、拳と顔を合わせる様にさ。

直線的に向かってくるならその勢いを利用して、カウンターノックアウトを狙ったんだらうね。

多分、それで合ってると思う。 “シャオリ消力” を打ち破るには状況的に威力を殺せない態勢を作るしかないんだ。

赤嶺は間違ったことをしていない。

でもそれさえ、烈さんは読んでいたんだ。

「は、はや……っ」

「中国四千年の歴史……背負うのは容易ではなかった。その重責故に、海王を名乗る

ものとしてツ 中国武術を背負う者としてツ 二度の敗北は許されないツ
ぴたっ、てき。

こう壁に手を添えるみたいに拳を赤嶺の腹の部分に置いたんだ。殴ってないよ、ほん
と。

蚊も殺せないんじゃないかってくらいスロウな動きだったんだ。

一体なにさ？って思うじゃん？でも不思議だよね、

「墳ツツツ!!!」

次の瞬間には、赤嶺が吹っ飛ばされてたんだから。

目の前で大砲でも打ったんじゃないのってくらいの音が聞こえてき、気づいたら赤嶺
が5メートルくらい飛ばされてた。

なんとか受け身をとって起き上がった赤嶺だったけどね、

「!!?」

もう何がなんだか分かんないって顔してた。あと口から涎みたいなのが垂れてたけ
ど、あれ多分胃液吐いてたんだわ。

胃の中を直接シエイクされて、胃液を吐き出しちゃうくらいのイッパツ、貰っちゃつ

たんだね。

ノーインチパンチ、またの名を無寸勁むすんけいともいうのかな。一般人からしたら、後者の方が聞きなれてるかもね。発勁、寸頸とか。

ゼロ距離で相手に頸を作用させる打突技。

僅かな身体の動きで高い威力を出すトンデモな技らしいんだけど。達人クラスだと、空手の寸勁ですら、瓦30枚とか割れちゃうらしいよ。

それを仮に敵であつても女の子の腹にぶち込むとか、鬼畜かつて思ったね。

そこで烈さんも判断したんだらうね。拳を開いて、構えを解いたんだよ。

「充分だな……」

多分烈さんのにも、察しはついてたんじやないかな。

これが決着なんだって。

ちよつと残念そうな顔してたけど。

○

「充分って、なにさ!!」

ごほっ、と胃の中と喉への不快感から赤嶺の口から空気が漏れる。

実質、イツパツだけの、宣言通りの一撃をもらっただけ。

それだけの筈なのに、赤嶺の身体は悲鳴を上げていた。

「一撃だけを与える……私が宣言した通り、それは実行された、ただそれだけの事。それ……もう貴様の身体は立っているのがやつとだろう」

「な、なめないでよ、ね……ッ」

胃の中にある腸壁、臓器のいくつかがダメージを負っている。

臓器とは人体で痛みが効果的に出やすい箇所だ。ボクサーがボディブローの応酬で

倒れるのはこの臓器であるレバーを攻撃されているためである。

赤嶺の身体に走る鈍い痛みが全身に冷や汗を流させることで証明した、烈海王の戦闘力。

（見誤ったか……）

樹海の時とは偉く違った烈の力に差を感じる。

後悔と同時に、自身の未熟さを思い知る。

何が造反神の勇者だ。

何が対人戦特化だ。

何が勇者に試練を与えるだ。

不意打ちでもぎ取った勝利など、なんの価値もないというのに。

それを誇らしげにしていた自分自身に、赤嶺は思わず唇を噛みしめる。

知らずうちに口の端から赤い液体を胃液と共に流していた。

（一応逃げられるほどの余力は残しているけれど、ここで自陣に戻ったらあのオッサンになんていわれるか……）

赤嶺の脳内で葛藤が生まれる。

いつもなら、ここで風のように退散するのが彼女の逃亡のパターンだ。彼女にとって

の特殊技なのだが、

それを行って拠点に帰った時、最近住み着いたあの黒服の男に言われる言葉を想像してしまおう。

『ハハハハハハ!! おまつ、逃げろって言われて素直に逃してもらって…ハッハッハ！
尻尾捲いて帰ってきたツテのかよオツツ ハハッハハ!! ダッセエなア! …… エフツ
エフツ エフツ』

(うわー、簡単に想像出来ちゃった……私もう末期かな)

遠くの拠点で居座っている鬼が嗤う光景に赤嶺の眉が潜まる。

ならば、逃げるわけにはいかない、と珍しく戦闘続行しようとする赤嶺だったが、

「——え、ちよっ! なにつ!？」

赤嶺の身体を数匹の星屑が。

その触手を伸ばして拘束して、烈達との距離を急速に離していく。

指揮官である赤嶺を強引に帰還させるように、それは仕組まれたものなのか定かでは

ないが、

ダメージによつて、星屑の拘束も今の赤嶺では解くことも出来ない。

「は、はなせー！くそー！覚えてないさいよ、そのアンタ——!!」

「烈海王だ」

子悪党が最後に放つような捨て台詞を口にする赤嶺は遠ざかつていく烈の姿が小さくなっていくのを眺めることしか出来なかつた。

○

「あのさ……流石に恥ずかしいんだけど」

「ん？」

雪花の眩きに烈は一言だけ顔をこちらに向ける。

赤嶺という敵を追い払った後、雪花の身体は思うように動かなかつた。

気づかなかったが、拘束している間に星屑の触手に仕込まれた毒をもらっていたらしい。

そんな雪花を烈が背負い、仲間の元へ移動しているというのが今の現状だった。最初は仲間を呼んでくると、その場を離れようとした烈だったが、

「動けない、変身できない一般人を気にかけてくれないんですか」と言ってきたのはさて、誰だったか」

「まあそうなんですケドー、身体痺れてあんま感覚ないんから私の身体……触ったりしてないですか？」

「私をあゝの赤嶺と同類と捉えるのは止めてもらおう、地面に降ろすぞ？」

「ああつすいません！ 冗談です冗談です！ 今置いていくのは勘弁して！ 変身も出来ないし、身体も動かないから星屑相手に襲われたらシャレにならないんだってば！」

そんなことを言われて、なんやかんやで助けてアピールする雪花を放っておくことが出来なかつた。

というよりは、自身の性格故か。

生真面目な自身の性格を烈は恨んだ。

「にしても、男の人の背中ってこんなになってるんだ。へえ……」

僅かながらに手の感覚が戻ってきた雪花はぎこちない動きで烈の肩の部分に触れる。

チャイナ服越しでも確かに分かる鍛えられた僧帽筋の太さに驚いた。

首回りも、相当鍛錬を積んだのだろうか、太い。

これならいかなる打撃が顔に直撃してもこらえきることが出来るだろう。そんなことを思いながら。

「お、オイこら！ 私の髪の毛を勝手に引つ張るなツツ」

「いいじゃないですか、減るもんじゃあるまいし。それにちゃんと大義名分を掲げて女子中学生を背負うっていうラッキーな目に遭ってんですから、お相子ですよ」

「屁理屈を……」

「烈さん」

不意に、雪花の間落ちしたトーンが背後から聞こえてきた。

「私と赤嶺の間に何があったか、聞かないんですか？」



雪花の脳内で一抹の不安がよぎる。

果たしてこの男に打ち明けてしまってもいいのだろうか、と。

敵と内通することを持ち掛けられ、それに応じようとしてしまったなど、簡単に言えば裏切り行為だ。

もしかしたら、この場で制裁されるという可能性だつてある。

「私……勇者部を裏切れて提案に、応じようとしてたんです……」

「……」

意を決して話すことを決めた雪花は少しだけ気を張り詰めたように聞いてくる。

ここまでできたらもうどうにでもなれと、雪花はその思いで口を開いた。

「私、怖くなっちゃって……この御役目が終わって、元の世界に戻ったらまた一人になるんじゃないかって思ってた」

あの北海道の大地で、寒い人間関係の中で生きる辛さ。

この異世界で出会えた仲間たちのお陰で、思い出すことが出来た人の温かさを雪花は

忘れたくないと思ったのだ。

「だから赤嶺にこの世界から帰らなくていい方法があるって言われた時に、すごく、揺れちゃった。へへ……勇者失格だにゃ」

言ってしまった。

正直、精霊との対話以上に緊張している。敵と内通することは今までの信頼関係を全て破壊する行為だ。

敵の罠であったとしても、雪花は一時は揺らいだのだ。目の前にいる烈から厳しい言葉を浴びせられても仕方がないだろう。

最悪この場で粛清されても、

「雪花よ、私にも怖いものはあるのだ」

「えっ？」

辞さない。と覚悟した雪花の意とは裏腹に烈の言葉に思わずそんな声を出していた。

雪花は驚きを隠せない。

今しがた赤嶺を余裕でぶちのめした、圧倒的強者である烈海王に怖いものがあるという事が。

「この右脚……ある強者との一戦で負った名誉の負傷だ」

そう言つて雪花は烈の、樹海の地面をいとも容易く踏破する義足の足を見た。

彼の右足、アキレス腱より少し上の脛辺りの部分は義足だ。

聞いたところによると、とある白亜紀最強の古代人との戦いで食いちぎられたとか。

「後悔はない。中国四千年を余すことなく発揮し、古代人に本気を出させることが出来たのだから……その上での敗北ならば、是非も無いッ」

だが、

「試合が終わり、義足を以つて鍛錬を可能となつたとしても医者から告げられた……キミはもうファイターとして終わっている」と。

出口のない暗いトンネルをただ走るかのような毎日だった。そのせいで、一時は酒に逃げたこともある」

とてもそういう風には見えない。

あんなに力が強いのに、

あんなに意志があるのに、

あんなに技が使えるのに、

心技体を鍛え上げた超人とも呼べるこの男が酒に溺れ、墮落したことがあるなど。意外、というのが雪花が抱いた印象だった。

こほん、と烈は咳払いをして、

「誰にでも怖いモノがある……私にだって、独歩にだって。まあ、一人くらい例外はいるのだがな」

それは恐らく、彼らの世界にいる地上最強の男・範馬勇次郎なのだ。雪花は察するこ
とが出来た。

「怖い、と思うことは悪いことではない。人間ならば、それが当たり前なのだ。

私だって、もしこの脚が元に戻る方法があるなんて言われたら思わず応じてしまうか
もしれない。

誰だって失ったものが取り戻せたり出来るのであれば、その方法を必死になって模索
するだろう」

けれども、

「この世界に来て、キミたち勇者と出会った。

年端もいかない少女たちが、本来ならば楽しく学校生活や友人、家族と楽しいひと時を送っていてもおかしくない者たちが、

世界を滅ぼそうとしているパーテックスから人類を守っている、命を賭して……私はそれを見て思ったのだよ、”負けてられない”、と」

「でもさ……！　一元の世界に戻ったら、ここで得た強さとか、記憶とか全部無くなっちゃうんだよ？」

少しだけ口調を強めたのは、まるで反論するかのようだった。

どんなに体の良い言葉を並べても、結局は覆せないものがある。

綺麗ごとだけ語るのも、不貞腐れて何もしないのも嫌だ。

それに対して、烈は言うのだ。

「勇者部五箇条一つ——」なるべく諦めない……勇者部が掲げる五箇条でイチバン気に入っている言葉だ」

なぜだろうか、

「どんなに絶望的でも、この言葉を口にしていただけで何度でもたちが上がることが出来る……そんな気がするのだ。

私も武術家だ……武を極める為に”挑み”、”戦う者”……挑戦者として、この苦境を乗り切つて見せる」

強く言い切つた烈の表情はその意志を表わしていた。

この男なら、どんな事があつてもやり遂げてしまふかもしれない、そう思わせる鉄の意志のようなものを感じた。

自分とは違う。

圧倒的に気持ちの部分で差があつた。それは雪花にとつて、とても悔しいもので現状覆せないことであつた。

「すごいよ、烈さん……私はそんな風に強くないから——」

「ならば雪花よ、共に中国拳法をやってみないか？」

「……なんでここで勧誘する流れになつてゐるんですか」

抑揚のある声で烈は言う。

話の方向性というか、論点というか、色々と無視して突拍子もない烈からの中国拳法

への勧誘に雪花は困惑するばかりだ。

「もしかしたらバイクを片手で止めることが出来るかもしれない、

もしかしたら生身で水の上10メートルほど走れるようになるかもしれない、

もしかしたら刀で斬られても薄皮一枚で済む……かもしれない」

「いやいやっ！　そこは自信持つてくださいよ、一応勧誘してるんですから！」

そんなに『かもしれない』と連呼されては、信じるもの信じられなくなるというか。

「いや、でも……ぷぷぷ」

困惑する雪花は何故か笑っていた。

おかしくて、真剣に水の上を走れるとか、片手でバイクを止めるとか、刀で切られても無事とか。

そんな荒唐無稽なことを真面目に語っている烈がおかしくて、面白くて。

「くく……っ！　あはは……！　ちよ、くふっ……待つてつて、烈さんったらやめてよ……おかしいって、ぷははっ!!」

気づけば堪え切れなくなった雪花が大爆笑を起こしていた。

「笑われるようなことを言った覚えはないのだが……」

「ふふ…はは、でもツボに入っちゃって…くくっ!!」

この世界で勇者部に所属しているこう笑うことが増えた雪花だったが、今日の爆笑具合は彼女のトップスリーに入るレベルであろう。

今まで悩んでいた事すら馬鹿馬鹿しいと思うくらいに、忘れてしまいうくらいに笑ったのだ。

最後に二人は語り合う。

勇者たちが最後に向かい合わなければならぬ現実について。

「いざれ話す時が来るだろう…その時は雪花、キミの想いをちゃんと勇者たちにぶつけるんだ」

「でもさ、もし…勇者部で言い争いになったりしたら?」

「言い争いか…それもいいだろう。むしろキミたち勇者は熱意を持った者たちが多い…」

漫画のように、川辺で殴りあったほうが案外丸く収まるかもしれないぞ?」

「何だろう…すごくそんな展開になりそうな気がする…納得いかないけど。」

ちなみに烈さんは元の世界には戻りたい派? 残りたい派?」

「私は戻る派だ」

「ですよね……なんとなくそんな気がしましたにや」

——後日、勇者部の鍛錬場には烈海王とともに站樁を行う秋原雪花の姿が見られるようになった。

しかし、始めて30分くらいでへばってしまふのは言うまでもなく。

——そして、自身の拠点に逃げかえった赤嶺友奈はというと。

〈未開放地域〉

「ハハハハハハ!! おまつ、逃げろって言われて素直に逃してもらって……ハッハッハ!
尻尾捲いて、帰ってきたツテのかよオツツ ハハッハハ!! ダッセエなア!……エフツ

エフツ エフツ

「~~~~~ツツ!!!
うーるーさーいー!!」

星屑の触手に雁字搦めで身動きの出来ないまま帰還した赤嶺は予想通り、星屑をソファにしてふんぞり返る範馬勇次郎にド派手に爆笑され、馬鹿にされたのだった。

敵味方問わず、それぞれの勇者達の苦難はまだまだ続きそうである。

第二十三話く花山薫（被害者）く

——とあるコンビニにて。

「い、いらつしやいませ……」

レジにて業務を行っていた一人の主婦・37歳の女性は目の前の光景に一瞬だけ言い淀み、思わず息を呑んだ。

女性の視線は上へと向けられている。自身の身長が158センチと小柄な方なのは理解していた。

だからこのパートで少しでも170センチ後半の者がやってきたら視線が上へと移るのは仕方がないことだと思っていた。

その前提条件を無視するほどの出来事が店員の目の前で起きていた。

目の前に現れたのは男だ。それも大柄の。

2メートルまで届くまではないかという白スーツの巨軀は店内で一際存在感を漂させていた。

ただ長身という訳ではない。

その男はデカく、太い。

顔も。

肩も。

手も。

腕も。

銅も。

脚も。

とにかく全てが。

恐らく脂肪ではない、デブではないことは明白である。

明らかに発達した筋肉の塊。

幸か不幸か、店内には店員を除いて他の客というの存在しない。

故に異質な雰囲気纏う男の動きを店員は目で追わざるを得なかった。

男は向かった酒のコーナーで動きを止め、

扉を開けると、もともとこれを買いに来ていたように淀みの無い動きで腕を伸ばして

目当ての物を手に取る。

「……」

時間にして十数秒程のペースで歩いた男は無言でレジに差し出されたソレを店員はマジマジと見つめる。

『WILDERKY』と銘が打たれた酒瓶は500mlほどの容量だが、

(この人の手…デカッ　っーか、なにこのキズツツ!!?)

酒瓶と男の手を比較すると大の大人が握ってもその掌で覆い貸せない瓶をいとも簡単に隠すことができるその手は余りにもデカい。

そして自然と、男の手全体に広がっている疵きずにも目が行く。

ナイフとかで誤って切ったにしては余りにも多すぎる。

果物ナイフなんて目じやない太さと、それでいて長い切創が目立つ。

明らかに長物で斬られた、ような。

それこそ、日本刀のような鋭利なもので。

極めつけは顔だろう。

額から顎に掛けて一際目立つ切創、そして静かにこちらを見つめる細く開かれている瞳は見るモノ全てを射竦める。

それは女性として例外ではなかった。

（や、ヤクザ……ッ この人ゼツタイにヤクザだッッッ）

生命の危機を感じた女性は歯を数度打ち鳴らした。

明らかかな人外観を有したその人物にこれからナニをされるかなど、そんな被害妄想をしながら女性は恐怖に怯える。

しかし、

（……えッ!? 金!? しかも万札!?!）

直後、店員の目の前に置かれた一枚の万札に思わず呆然とする。

万札を手を取っては、それが偽札ではないかと確認までして。

「……ほ、ホンモノだ、よね？」

「……」

本人を前にしてなるべく小声で呟く女性が他所に、男は店員が金を受け取ったのを確認して酒瓶を手にとると静かに歩き出した。

「あ……っ！お、お客さん、おつり！ おつり忘れてますよー！」

身をレジ席から晒して、男に呼び掛ける頃には男は既に店の外だった。
偶然、男とすれ違つていく者たちはその際に、

「うっわスゲエ顔!! 地図みてエツツ!!」

「バカツツ!! タカヒロやめなさいツツ」

「でもだつてホラ——」

親子だろうか。

大男の顔を堂々と指さして見せた息子の口を母親が焦燥に駆られた顔で慌てて塞いでいた。

いずれは店の自動ドアで否応なしに見れなくなる白スーツの、その大きな背中を見て店員は思うのである。

——この香川県讃州市のコンビニで、スゴイモノを見た、と。

○

男の名を、はなやまかおる花山薫という。

東京の夜の街にて知らぬ者のいない、漢の中の漢の名だ。

五代目藤木組系暴力団花山組二代目組長。

一つの組を預かるヤクザの長である。

恐れ多くも戦いを挑もうという物は少なく、彼の縄張りで御法渡な売りは許されないと言われるほどだ。

藤木組の中で確実にその勢力を伸ばし、頭角を現した花山組の名は全国に知れ渡っている。

——だが、それも少し前までの話。

彼、花山薫を含めた『花山組』が事務所ごと、この良くわからない世界に連れてこられたのはつい先日のことだ。

欠伸が出るほどのどかで、夜のネオン街とは無縁のような街の雰囲気の花山は知らない。

構成員の一人、田中KENが偵察に出ていったところ、

『た、大将ツツツ この近辺に他の組の名前なんて一つもありませんぜツツツ』

『しかもここ東京じゃねえツス！ 四国の香川県ですツツ！』

『うどん、うどん食いましょうぜツツ』

などという驚愕の事実が。

過去に売上を競っていた他勢力がこぞつて存在しない。

それだけではない、この世界はあまりにも安定している。

街でクスリを売りさばく者や、

売春をしようとする業者や、

明らかに違法なキャッチをする者が見当たらない。

夜の歌舞伎町のような、危険を孕んだ夜の街独特の雰囲気という物が感じられない世界だった。

それが花山がこの世界は自分たちの知る世界ではないと気づくことが出来た理由だろう。

当然、自分たちが知らない土地へ突然と飛ばされたという事実には花山組構成員達も動揺を隠せなかった。

家族を置いてきた者もいる。

今日、家のカギを開けたままの馬鹿もいる。

パチンコ屋の景品交換時間に間に合わない騒ぐ阿呆もいる。

誰もが焦燥に駆られる中、花山はこれに動じず木崎に指示を飛ばしすぐさま組員を再統制。

一時間程で花山組は冷静さを取り戻したのである。

異世界に飛ばされても、この凶太さ。

花山はどこに行っても花山だ。

いち組を任されるものとして、これほど適任なものはいないだろう。

花山組の現状はさておき、一本の酒瓶を買った花山は部下を近くに置かず一人の探索を継続するのである。

その最中、

「……………またか」

辺りを見渡して、そう呟く花山の周囲は止まっていた。

先ほど感じていた風、

通り過ぎていく人と車、

空を移動する雲が。

ありとあらゆる事象が停止していたのだ。

そして、聞きなれた地鳴りとともに景色が光に飲み込まれ、世界がその姿を変えていく。

一瞬にして街の風景は大小の樹木が生え広がる異界へと姿を変えていた。

広大な景色と、昼夜を逆転させたような星の無い空。

静かで、風も感じられない、明らかに隔離世の世界。

「……………」

その世界を花山は慣れたように歩き出す。

もうすでに、この樹木が生え広がる世界を歩くのも3回目なのだ。

1 回目は東京のネオン街で歩いていた見知らぬ女子中学生を追いかけて。

2 回目はこの世界に飛ばされてから3日目の昼頃。

驚きはしたものの、そこが見覚えのあつた世界だからすぐに花山は順応することが出来た。

今でこそ散歩するように悠々と歩いているものの、

最初は花山の周囲は慌ただしい限りだった。

白いマシユマロみたいな奴が嘯みつこうとしてきたり、

見たことのある巨大な化け物が襲ってきたりと。

その全てを、花山は自力で粉碎した。

身に降りかかる火の粉は払わねばならぬ故に。

そして三回目。

この回数となると、白の生物と巨大な生物も、誰も花山を襲ってくる事は無くなった。異界の地にて唯一静かであることが気に入っていた花山はその平穩を自らの手で取り戻したのであった。

「……」

散歩をしながら、ふと思い出す記憶がある。この樹木に覆われた世界の記憶についてだ。

——アタシ、アタシは——強くなりたいたツツ

ここのように違う、別の世界で出会った一人の少女の事を。

——友達をツ みんなを守るくらいにツ ・ ・ ・ オジサンみたいに強くなり

たいツ

まるで烈火の如き赤い装束に身を包み、丈に合わない巨大な斧を振り回す少女と出会ったことを思い出していた。

血を流すほど傷ついても友の為に、

絶対的に覆せそうにない敗北濃厚な敵を前に、一瞬も怯むことなく前へ進む少女はとても勇敢で。

自分の傷よりも他人が怪我したことに心を痛めるほどに優しくて。

別れの際に自身を慕い、目指したいと言ってくれた少女は元気にしているだろうか。

「……三ノ輪 銀だったか」

柄ではない、と花山は思った。

その少女の事を脳内で浮かべて笑みを浮かべるなど。

この場所を歩いていたらあの熱い魂を持った少女に出会えるような気がしてならな

くて――、

「止まりなさい!!」

花山の足を止めさせる声が、異界の地に響いた。

それは確かに少女の声。

偶然か、運命なのか、数奇的な何かを感じた花山はその声の主の方へと身体を向ける。

数十メートルほどの距離の先に一人の少女が居た。

しかしそれは赤の服でも、大斧を携えた花山の知る少女ではない。

白菊をイメージさせる白と青の服を身に纏い、こちらに弓を向けている少女だ。

弦を引き絞り、視線をこちらから離さないまま花山を狙い続けている。

「あなた……、ぐらっつぷらー、ですね？」

「……………あ？」

微妙に言いにくそうに問う少女に花山は眉を潜めた。

ばりばりの敵意を向けられている花山だが、不思議と全力で殺意を向けようとは思わなかった。

弓矢を構える少女の姿に、思わず大斧の少女と同じ雰囲気を感じたからである。

「勇者部所属、鷲尾須美……………押して参ります！」

黒髪の少女は有無を言わず続ける鷲尾須美と名乗る少女は引き絞っていた弦を引き離す。

びんつ、という弦の弾けた音と同時に空気を切り裂き進むような音速にも達する光の矢が今、花山に向けて放たれたのだった。

第二十四話（鷺尾須美（被害者その2））

鷺尾須美とは国防に命を燃やす一人の少女である。

その正体は国防仮面番号……もとい、中学生である東郷美森の幼少期の姿だ。

そんな須美が樹海化警報を聞き、偶々今回は離れていた仲間の元へと駆け付ける途中の事である。

須美の翡翠の瞳が、一人の人物を映した。

大柄で、とても太い、そんな男を。

白スーツが様になっていると言えいいのか、男の歩く姿は悠々と、かつ毅然としており須美から見ても男の姿は一つの絵になるのである。

しかし、勇者とパーテックスしか存在できない樹海にて男がいるという事実が、須美に警笛を脳内で鳴らさせた。

そして須美は思うのである。

あの大男は、グラップラーの一人に違いない、と。

グラップラー。

須美たちのいる世界とは別の世界からやってきた格闘士達。

範馬勇次郎という地上最強の生物が率いるグラップラー軍団はこの造反神を鎮める勇者との戦いにも乱入してきたのだ。

その実力は、あの夏凜を一時期でも戦闘不能まで追い込むほどである。

須美はこのグラップラーがあまり好きではなかった。

理由は明白、その文字列が横文字だからである。須美はあまり、オブラートに包むが外国というものに抵抗があった。

バーテックス、という横文字にも未だに抵抗があるというのに。

最近では、部室内でもグラップラーという単語が流行りだしている。

独歩や烈の影響もあるのだろうか。

このままでは部室どころか、御国の未来が危うい。

健全な日本の未来を、自身が守護まもらなければならぬ。

己が愛する国を守護まもするという重大な使命に、須美は燃えた。

「勇者部所属、鷺尾須美……押し参りますッッ!!」

彼女の取り柄とも言えるロングレンジによる戦闘を仕掛ける。

もはや使い慣れたであろう自身の武器である弓を構え、狙いを定め、放った。

勇者によって放たれた矢は、例え少女の物であっても絶大な威力を発揮し、それは現実世界で言うミサイルにも匹敵するのである。

その音速にも近い速度で放たれた光矢が、男の地面にて直撃した。

しかし、

どうつ、と轟音と共に地面を抉る力を持つ須美の弓矢に男は怯まない。

それどころか、足を止めることなく須美の方向へと進み出した。

（この人、恐怖心というものがないの……ッッ!?!）

地面を破壊するほどの弓矢を目の当たりにすれば、思わず足を止めてしまおうと考えていた須美。

だが、目の前の男は怯まず進む。徐々に近づく距離、須美との距離は20メートル程か。

射程距離はロングからミドルへ。

「くっ……!!」

即座に男に向けて二発目の矢を放つ。

しかし、当てる意志のない矢は鋭さだけを増して男の顔の真横を通り過ぎた。

徐々に矢と身体の距離を縮めさせていく。

それでも男は止まらない。

次で三発目。ここで男の歩みを止めさせるしかない。

しかし、これ以上男の身体の付近を狙うとなるとギリギリの部分、服や頬を掠める程の威嚇射撃を行うしかない、須美は悟った。

（こころで止めて見せるツツ）

再度気合を入れなおして、今度こそと弓矢を放つ。

光に彩られた蒼の軌跡を描いた矢は真つすぐに男へ向かい、その頬を掠めるように通過した。

矢が掠めた男の頬には出血は見当たらない、本当に触れたか触れない程度に、ソフトタツチの限界に挑んだ須美の磨きに磨かれた射撃技術の賜物だ。

並みの者ならば、今の一矢で生命の危機を感じて歩を止め、恐怖で尻もちすら着くはずだ。

その男が並みの男であつたならば。

「お嬢ちゃん」

確かに須美の矢は男の動きを止めた。

だが、その代わりに男から声が返ってくる。

「ちゃんと狙いな」

「え……？」

男に言われた須美は思わず息を呑んだ。

(私の矢が当てるつもりがないというのを悟ったというの？)

須美の矢は男を最初から狙っていたわけではない。

男に戦闘を仕掛ける前にメッセージを飛ばした仲間たちが、須美の元に駆けつけるまでの時間稼いだ。

そもそも、対人戦の経験が浅い須美が迷わずに人間を撃てる筈がないのである。

(それでも……私の意図を察知するにはあまりにも早すぎる……)

たったの三発の弓矢でそれを見抜いたというのか。

須美は思う、この男はかなりの手練れだと。

「……」

声に答えが無かったことに気にすることなく、男は再度、須美に向かって歩き始めた。その一步が大地を踏みしめるたびに、須美の胸がドクンと跳ねる。

予感する。

この男を近づかせてはいけない、と。
さすれば確実に死がやってくる、と。

「はああああああ——！！」

怒号に近い気迫を染み込ませた声を上げながら、須美が弓矢を連射する。
単発がダメならば速射の連射だ。

数に物を言わせて、男の動揺を今度こそ誘う。

須美は弓を連射を止めない。

指が耐えられる限界まで、彼女は弓を放ち続ける。

機関銃の如き圧倒的手数で迫る弓が男の周囲にこれまで以上に地面を破壊していく。

それでも男は止まることを知らない。

何度も頬を掠めても、

何度服を切り裂いていつても、

その巨軀は怯まず、恐れず、須美の方へ進み続ける。

止まらない。

本物の銃弾が来たって、この男は絶対に止まらないのではないか、そんなことを思った須美だった。

「はあ……っ！はあ……っ！」

「この辺くらいか……」

遂に指の限界から連射を止めた須美は肩で息をする状態であった。

その須美の疲労を知ってか知らずか、または関係ないのか、男が呟く。

男は自らの胸目掛けて親指で示すと、

「撃てよ」

この距離なら、

「外さねえハズだ……」

فقط、

「もしそれで仕留めれなかったら……分かってるな」

「~~~~~ツツツ」

死刑を告げるような男の言葉に、須美の肉体が硬直する。

須美と男の距離は10メートルも無い。5メートルくらいか。

撃てば必中の距離。数キロ先の敵を射抜くことが出来る鷲尾須美に余程の手違いが無ければ外さない距離。

だが、

(……敵であれど、撃つべきなの、私はツツ!!?)

眼前の男は紛うこと無き敵。この造反神を鎮める戦いに与する悪鬼だ。

しかし、人という人種である以上、彼らもまた須美が守護るべき国に住まう民。敵を倒すための神の力を守護るべき民に向けてなどあつていいはずがない。

男は対して、真つすぐに細い目で須美を見つめていた。

視線を逸らしたら確実に殺る為に距離を詰めてくる、と言わせんばかりの威圧感が須美の華奢な身体に叩きつけられる。

「う、うう……っ！ うあああああっっ!!」

絶叫。

引けども引けぬ覚悟で、須美の引いた弓矢が放たれた。

至近距離で放たれる光矢は瞬く間に男に直撃し、爆散し、辺り一帯を爆風が包み込む。

「あ、ああ……」

男の姿が見えなくなるほどに舞い上がった砂塵を前に、須美の身体が膝からがくりと崩れ落ちる。

敵であつても守るべき人に弓を引いた。

重症に、若しくは致命傷に至るほどの威力の矢を。

全てはお国の為に。

守るべき友と日常の為に。

人類守護を掲げる勇者が人を攻撃したという事実。
その相反する理念に、鷲尾須美の正義が揺らぎ、胸が痛んだ。

しかし、

「…………へえ」

煙の中から聞こえた、男の声。

「やれば出来るじゃねエか…………」

「…………なツ!!!」

ぬう、と男の声と共に煙から姿を現したのは、手。

疵に覆われ、元から厚かったであろう皮膚がモノを殴る事によって完璧な硬さを形成した厚手。

疵はあれど、須美の弓よって生まれた負傷が一つもないその男の手が須美の眼前に突

き出されている。

（す、素手で防いだというの……ツツ!!? 勇者の弓をツツ!?)

全力全開の須美の一撃を、男が素手で、しかも片手で防いだという事実には須美は激しく動揺する。

男が唯一受けたであろうダメージは手に残る微妙な焼け跡程度か。それすらも、男にとってはダメージの内に入らないのだろう。

そして遂に、

「……」

男が動く。鷺尾須美目指して。

山が動いたようだった。

不動の像が満を持して動いたようだった。

殺意と熱意を混ぜたような細目がぎらつく様に、その男の尊大な一步は思わず須美を後退させる圧がある。

「……ツツツ」

一步、また一步と。

男が須美へと近づきにつれて、須美もまた一步ずつ後ろへ。

だが、大の男と小学生の歩幅はあまりにも違いすぎる。必然的に須美が徐々に詰められていく形になった。

「あ……」

背にびたり、と張り付く感触。

須美の一回りも二回りも巨大な樹海の樹木がその背に聳え立っていた。

気づかないうちに後ろへ下がりがり続けた結果、須美は逃げ場を失ったのである。

「……………」

「あ、あう……………」

須美が見上げれば男が。無言で須美を見下ろしている。

目先に映る男の顔には無数の疵が。

それを見た須美は、

（づ）、極道……………この人は絶対に極道を征く男の人ツツ）

この平和な四国で今では絶滅危惧種である極道という人種に須美は畏れる。

かつて夜の街中を風を切って歩く尊大なその手のDVDを見た須美だったが、実物を目にして恐怖で震えた。

（わ、私……………どうなっちゃうのツツ!? 叩かれるツ!? あの手でツ!? 力いっぱいツ!? イタイツ!? その後はツ!? 身包み剥がされてツ!? 港に沈むツ!? 人生ツ 終わリツツ!?!）

過去に両親に内緒で拝見したその手のDVDでそういった展開を見てしまった須美がこれから自身に起こるであろう悲劇を予測する。

物の数秒で命を散らし、四国の海に沈められ、鷲尾須美の章が予想外の完結を迎えることを想像した。

「い、いや……っ、こないで、ください……い」

あの巨大な手で殴られたら、どんなに痛いのだろうか。

あの手で組み伏せられたら、何も抵抗できないのだろうか。

恐怖に涙を濡らして、身を小さくして自身を守るように身体を両の手で抱きしめ震える須美は端から見れば子犬のようであった。

「……」

「ひう……っ」

須美が恐怖の象徴としていた男の、太くて厚い皮を持つ手が顔の真横の樹木に押し当てられる。

ずしつ、と樹皮に沈み込む男の掌の圧に須美の身体がびくつと跳ねた。

（助けて……誰か、そのつち……銀！）

恐怖で声も出せない須美はせめて胸の内ですぐに友の名を叫ぶ。

同世代で辛い御役目を乗り越えてきた大切な友の名を。

「須美いいいいツツ!!!」

「わっしいいいいい!!!」

助けて。

その言葉に答える者が確かにいた。

彼女の、鷺尾須美にとってかけがえのない友たちが。

○

小学生である乃木園子と三ノ輪銀は現在絶賛垂直落下中だ。

樹木の真上から飛び降りて、その目標は真下に居る巨大な大男へ。

園子、銀という順に樹木を足場に走りながら降下していくという荒業は勇者としての身体能力と乃木園子による作戦ならではだ。

ましてや、大切な仲間の危機とあれば何が何でも助け出さなければならぬ。

須美が、チームの頑張り屋さんが泣いている。

わっしーが、心のどこかで助けてと叫んでいる。

乃木園子と三ノ輪銀にとって、それだけの理由があれば限界という境界を越え、無茶

を押し通すことが出来るのだ。

「いくよーミノさんー！」

「おうよー！」

乃木園子が槍を前に構えて先端を傘へ変形させる。

防御をするための武器を出して、脚力による加速と重力落下の加速を加えて園子のスピードは瞬間的に三ケタを超えた。

バーテックスの強力な水光線を防ぐことが出来るほど強固なこの楯で男に体当たりをかますのが園子の考えである。

彼女もまた、対人戦の経験が浅い勇者の一人だ。

だが友を助ける為に相手の骨の何本かを折る覚悟が出来ている。

チームを任されるリーダーとして一番大事なことを優先した結論だ。

「でやああああ!!」

超スピードの園子の突進が男の真上から押し掛かるように炸裂する。

普段のぼわあとした雰囲気、園子から想像もできないような気迫の籠った声が木霊した。

しかし刹那、園子は両腕から感じた激痛に顔を歪ませた。

園子が体当たりをした相手は確か人間だったはずだ。

だが槍を通して伝わってきた感触はなんだ。

ゴツ、という人間の柔らかい身体とはかけ離れた途轍もなく硬い何か。

園子は瞬時に巨大な岩を連想する。

鉄、チタン、炭素……あらゆる鉱物を隙間なく詰め込んで圧縮させたような人智を超えた硬度を持つ岩石を。

「くうあ……っ！」

余りにも硬いものを鉄の棒でブツ叩いたときのような感覚だ。
ビリビリと腕に力が入らなくなった園子の突進は崩れ、傘ごと身体が吹っ飛ばされる。

（アレは……拳？）

距離を強引に取らされる園子が明瞭になった視界で見たものは男の拳だった。

固められた右の拳。

しかし強烈な握力によって形成されたそれは血管が浮き出て、皮膚の色を変えてしま
うほどのもの。

そしてその拳は、単に無造作に突き出された程度の拳だった。

それはまるでじゃんけんでグーを繰り出すみたいで、それぐらいに弱弱い勢いで。

殴られたのではなく、ただ伸ばされた拳が勇者の突進を弾き飛ばしただけだ。

その事実には、園子は思う。

アレに殴られなくて、よかったと。
そして同時に、

「ミノさん！行って！」

自身の背後を負うように落下していた銀に合図を送った。

「うおおおおおおお!!」

樹海に響く少女の声。

三ノ輪 銀の大斧による一撃が炸裂した。

樹海を真つすぐに駆け降りる銀は園子の後ろで、最大攻撃による不意打ちを狙っていたのである。

振り下ろされた大斧は地面を容易く割り、轟音が鳴り響く。

「大丈夫か須美ッ！」

「ぎ、銀……」

地面を破壊した銀は砂煙舞う視界の中ですぐさま須美の場所まで駆け寄る。

須美は腰が抜けたのか、地面に座り込んでいた。

「つたく、無茶しすぎなんだよ須美は。ほら、いったん体制立て直すぞ、アタシに掴まれ——」

ぽかんとしている須美を起こすべく、銀が手を差し出す。

このまま周囲の視界を遮っている煙に紛れて、この場から離脱を図ろうとした銀であつたが、

「……」

「ツツ!! そう簡単にはいかないかツ!!」

大男が銀の眼前に立ちはだかつていたのを見て、状況は一変する。

先ほど振るつた大斧の一撃は銀が当てることを前提としていない物だったとはいえ、微動だにしないのは異常すぎないか。

「くそ、こうなったら……」

それでも銀は友の為に戦うことを恐れない。

目の前の男と交戦する覚悟を決めようとして、銀は大斧を再度手に持とうとする……
が、

「オメエ、あの時の……」

「え……？」

敵である男からの不意の一言に銀の斧を持っている手の動きが止まった。

○

花山薫は思わぬ再会に思わず動きを止めてしまっていた。

彼の瞳が捉えた一人の少女、赤い装束に大斧と、もしやとは思っていた花山は頬を緩ませる。

かつて、花山がこの似たような風景の場所で出会い、共に敵と戦った少女、三ノ輪銀だ。

「元気だったか？」

普段寡黙な花山の口調が少しばかり景気の良いものとなっている。

それほどに、花山は三ノ輪銀という少女を探していた。

あの時に負った怪我はどうなったとか、

友達も一緒に元気なのかとか、

花山にとって、あの戦いの後の事を聞いてみたい、積もる話がある訳なのだが。

「……？」

当の本人、三ノ輪 銀はというと、きよとんとした顔で花山の顔を見つめている。

「俺だ……ホラ、名刺の……」

「メイシ……?」

「花山だ」

「ハナ、ヤマ……?」

ひたすら疑問符ばかりを浮かべる銀に花山は違和感を覚える。

まるで、自分のことなど、最初から会ったことのないような、そんな反応。

「ねえミノさん、この人ミノさんの知り合い?」

いつの間にか槍を持っていた少女も駆け付けている。

銀はうーんと唸って、

「いや、銀さんも……流石にこういう強面の“オジサン”には縁がないというか……」

「……」

オジサン。

銀の容赦ない言葉が、花山の動きを停止させた。

花山は今年で19歳、まだ未成年である。

自身の顔立ちがいかに誤解される姿をしているのかをある程度理解していた花山。しかし、小学生に二度もオジサン扱いされる。

「うわ、なんか怒ってる？」

「あれれ〜？でも私には俯いているようにも見えないよ〜？」

「ぎ、銀！私たちと知らないところでこの人とイカガワシイことをツツ　　ゆ、勇者とある者が……不純よ！」

「ち、違うつて須美！ほんと、”こんなオジサン”は知らないつてば！」

それは全身に刀傷を負っても、銃弾を受けても、口の中で銃弾を爆発させられても動

じない花山に唯一深手を負わせるほどの威力を持っていた。

小学生の言葉とは、時として残酷なものである、と花山はこの歳で初めて思い知らされるのである。

「……」

「あ、動き出した」

花山は長い沈黙を破るように、ゆっくりと銀たちに背を向けて離れる様に歩き出した。

覚えてないのか?とか。

俺だぜ?花山だぜ?とか。

事の真相を聞こうとする以前に、

(……………オジサンかア)

後ろで佇む少女たちに見えないようなため息をつく花山に、そんな心の余裕は無く

……。

その後の事はあまり覚えていない、暫くすると周りがまた光始めて、気づくといつもの花山が知る現実へと帰ってきていたのだった。

○

く花山組事務所く

その当時の光景を、花山組構成員・田中KENはこう語っている。

いやア、ビックリしちゃいましたね、あの時は。

大将つたら事務所にいつの間に帰ってきたと思つたら、開口一番に……

「……酒だ」

つて、言うんすよ。珍しい事じゃないんすけどね、俺達ヤクザモンにとつちやあ酒飲むなんて。

でも、いつもと違つたんすよ。そん時の大将……。

事務所のソファに一人座つて、ぐいッて一口飲むとツスよ？

「……ふう」

一息ついて、また飲み始めるんすよ。

なんかため息みたいな、ちよつと落ち込んだみたいな、そんな感じだつたんす。

あの花山薫が、まるで『今日イチ悪いことがあつたから忘れよう』と、気を紛らわせようとして酒を飲む……考えられないツスね。

俺、思ったんすよ。この世界って、俺達が居た世界とは違って人類全体が健康体じゃないスか。

それこそ不自然なほどに。夜の街に行っても犯罪臭のするお店とか、ソレっばい雰囲気奴らがないんすよ。

オンナと風呂入るお店とか、ね。

いかに花山薫って言っても、一人の男なワケだし……予測するに女関連だっと思ったんす、だから——、

『大将も溜まってんすよ……欲求不満ってヤツっすよね？』

って、木崎さんに言ったらシコタマ打ん殴られたんす。

なんでか分かります？

○

——深夜、とある『公園』にて。

外灯が少ないその場所は、全体的に暗い印象だ。

僅かな明かりが照らしている部分からその半径数十メートルの範囲は薄暗く、公園の遊具が鮮明に分からないほどである。

どこか不気味さを漂わせる公園に、一人の少女が居た。

「……………」

西暦の勇者、郡千景は平常を保ちながらも警戒心を強め、目の前に現れた男に問いを投げかけていた。

一人の男がいる。

身長は170前後だろうか、油の乗った肌と歳相応の無精髭は齢を50ほどを予想させる。

現代社会では高齢、とまではいれないがそれなりに歳を食っているであろうにも関わらずに、

男の肉体は来ている服からでも分かる程に筋骨が隆々としている。

瞬時にして分かる、只者ではないというソレ。

異様な佇まいの男に、千景が息を呑んだ。

「某それがし——」

暗闇から這い出るように、足音すらも付かせないような歩みで近づく男は言う。

「本部もとべいぞう以蔵と申す者……」

「本部……？」

本部と名乗る男に、千景は聞き覚えのない名に首を傾げた。

それを見て本部はくつつつ、と込み上げてくる笑いを抑える様にスツ、と何かを取り出した。

外灯に照らされて、一際輝きを放つソレに千景は見覚えがある。同じ西暦の勇者、乃木若葉も使用している類のものだ。

銀の鋼に反射している日本刀とそれを構える本部の視線は千景を真つすぐに見据えていた。

「ワルいが……遊んでもらうぜ」

勇者、郡千景に公園最強の生物が迫る。

第二十五話く本部以蔵（公園）く

——夜の公園は不気味だ。暗くて、寒くて、どこか近寄り難い。

そんな言葉を誰かが言っていたのを思い出す。灯りの極端に少ない公園は人目につかず、犯罪が起こりやすい傾向にあるからだとか。

しかし、郡千景にとって夜の公園はさほど近寄り難い場所でも嫌いな場所ではなかった。

どちらかというと、好きなほうなのかもしれない。

自身を闇と称する千景にとって光もなく、静かな公園は喧噪とは程遠い心安らぐ場所となるからだ。闇の世界とは自分に合っていると言わんばかりに。

だからだろうか、普段人が寄り付かない夜の公園に戸惑うことなく足を踏み入れることが出来たのである。

それが間違ったことだと気づかないまま。

郡千景の精神状態は良好なモノであった。

足はしっかりと着いていて、視界は澄んでおり変に息づくということがない。

コンビニの帰り道に突如として敵と遭遇したことに多少の驚きはあったものの、最低の鼓動の高鳴り程度で、身体には余計な力が入っていない脱力している状態だ。

日頃の鍛錬と充実した生活がもたらしたと言えいいのか、地に足がついていて気力が充実している……ベストコンディションと言っても差し支えないだろう。

ならば千景はその澄んだ瞳で今しがた相対した敵を見据える。

「本部……聞いた事がない名前ね……」

「本部流柔術……その元締め、つて言えば分かるのかな……お嬢ちゃんみたいな年頃の女の子には」

「……柔術なのに、剣術を使うの？……あれ、そういえば」

日本刀を構える本部以蔵を名乗る男は不敵な笑みを崩さなかつた。

千景は隙を見せないように思考し、訓練中に高嶋友奈が口にしていた言葉を思い出す。

——知ってる、ぐんちゃん？剣術つて柔術から派生したんだよ！だから私とか結城ちゃんがいつか若葉ちゃんみたいに刀を使ってズバン！ズババン！つて敵をやつつける日が来るかもしれない！

「つまり、柔術家が剣術を使えないという道理はない、という事なのかしら……」

「当たってはいる——半分はね……」

ましてや男は自らを本部流柔術の元締めを名乗る者。ならば、それほどの力量を有していてもなんら疑問を抱くことはない。

ならば、と千景は戦い方を想像する。剣術相手ならば勇者部の中では若葉、夏凜と戦い慣れている方だ。

千景はスマホを手に取り、システムを起動させて勇者服へと変身する。

眩い光に包まれ、弾けると同時に彼岸花を思わせる赤の勇者服を身に纏った千景が飛び出した。

「ホウ……魔法使いかな？」

まるで未知の光景を目の当たりにしたという本部、しかし気を惹いたのも一瞬のこと。千景は有無を言わさず大鎌を本部に向けて見舞った。

「——ふッ」

空気を震わせる一閃が走る。

上段。

中斷。

下段。

命を刈り取る処刑人の如く、研ぎ澄まされた鋭利な鎌の刃が本部へと迫る。
対して本部は日本刀で応じる。

「シィッ!!」

上段を刃先で弾いて氣道を逸らし、
中段を引き下がると同時に刃を叩き、
下段をふわりと飛んで躲して見せた。

重力を感じさせない、羽のような動き。

「な——ッ!?!」

「粗い太刀筋だが……悪くねエ」

とても小太りの体形とは思えない跳躍。

空を切った鎌の太刀筋を選別し、千景を評価する本部は後方へ着地する。その表情には余裕があつた。

「鎌つてのは昔はただの農具……戦争で使われ始めたのも最初は敵を斬るためではなく、どちらかといえば敵を打ん殴つて倒す鈍器の役割が近かつた……、

鉄の重みで身体が逆に振られるツてくらの安定性に欠ける武器——」

「……何が言いたいの？」

「気を悪くしないで欲しいんだぜお嬢ちゃん、こんな扱うのが難しい武器を素早く振り回して、正確に相手を狙つてくる……並みの人間じゃ使いこなせねえ」

お嬢ちゃん、

「相当努力したんだなア」

「!?……そうよ!!」

本部が与える賞賛の言葉に対して、千景は肯定してみせた。勇者として認められることが、千景にとつての全てであった。

この世界に来る前から抱いていた自身に起きた不条理に反逆の意思を胸にして、必死で勇者としての戦果を挙げる為に千景なりの手を尽くしたのだ。

朝から晩まで鍛錬を重ねて、その合間にある休み時間を使って鎌を振り、手の皮が？けて血を流すまで。

千景は努力を惜しまなかった。

一戦一戦が勇者としての評価へと繋がり、自身への存在を肯定する。

しかし、それは負けてしまえば、死んでしまえばこれまでの努力は水泡と化し、無価値な自分へと戻ることを意味していた。

故に千景には慢心は無くとも、心には余裕は無い。

全ては勝利し、勝ち取ることだけという事だけが頭にあった。

千景がたん、と跳ぶ。

本部が構える。

互いの刃が肉薄する。

大鎌の一撃を本部が耐える形で剣戟が鳴り響く。

（へし折ってやるわ……その刀ッ）

鎌を振う力が一層強く籠められる。

千景の狙いは本部の日本刀へと定められた。大鎌の重量は斬ることを前提に考えられた日本刀を遥かに上回る。加えて日本刀は長く、薄い。

何度も打ち据えられては日本刀が折れることは目に見えている。

だから本部も、正面から刀で鎌を受けようとはしなかった。

最初から刀で鎌を小さく弾いては軌道を逸らして、最小限の回避を行っていたのがその証拠だ。

戦う武器が無くなってしまえば、圧倒的有利な状況になる。千景はそれを狙っていた。

一撃、二撃、三撃と鉄が鉄を叩く音が響き、その度に本部の日本刀が軋む。

そして五、六、七と斬撃を叩き込んでいくと遂に……、

「ツツツ!!?」

「折れたッ 勝機ツツ」

バキン、と日本刀の刀身が真ん中から折れたのを機に千景が更に踏み込んだ。

狙うは頭部。鈍器とも呼ばれた大鎌の鉄の重量に任せ一撃を与え、本部を気絶させることで千景が勝利を手にする——筈だった。

「ちいとマズったねエ……」

え?と、意図せずして千景の身体が浮く。

振り下ろした鎌をくぐるように踏み込んでいた本部が千景の伸びきった腕を掴んだのは一瞬の出来事。

「セイイイツツ」

そこから一本背負いの要領で千景が地面へと叩きつけられるのも一瞬の事だった。

「がッ……ぐ、あッ……！」

背中から地面に叩きつけられた衝撃で息が詰まり、千景は苦悶の表情を浮かべる。

土の地面でありながらそのダメージはかなりのモノだった。まるで自身の繰り出した攻撃をそのまま利用されたように倍の力で投げられたように全身に激痛が走る。

いつの間にか折れた刀を地面へと捨てて、投げへの動作へと切り替えていた。

ただの投げではない。何年、何十年と繰り返されたかのような無駄のない精錬された背負い投げだ。

その素早さたるや勇者として二年程鍛錬を積んでいた千景では見切ることは難しい。

千景は痛みを身体に得ながら、次第に湧き上がってくる感覚に恐怖を覚えた。

自分は何か、得体の知れない、とんでもない相手と戦っているのではないかと、と。そして千景はその予想が間違っていないかったことを後に思い知らされることになる。

「……やるねエお嬢ちゃん」

「~~~~ツツツ」

自然と目を見開いた視線の先、本部が見下ろしていた。

「あとほんの、ちょおおつと……お嬢ちゃんの一振りが早かったんなら俺の方が打ん殴られてた」

「くツ……、のオツツ!!」

意味ありげに人差し指と親指を使って表現してくる本部に、千景は地面に仰向いたまま投げられても決して離すことがなかった大鎌を振う。

狙うは機動力を担う足。

しかし、踏み込みも予備動作もなっていない大鎌を振うなど、いかに勇者として専用武器を自在に扱えるという補正があつたとしても、武闘家の本部からすればその動きは余りにも緩慢。

まるでステップを踏むかのように軽く飛んただけで千景の鎌は空を切る。

しかし、攻撃が当たらなかつたことは問題にはならない。

千景は地面から起き上がると即座に追撃に入ろうとする。

しかし——、またしても千景の動きは本部の奇怪な行動によつて停止せざるを得なくなつた。

「俺もそんなに余裕がないもんでね……そろそろ行かせてもらおうとするかなア」

本気、でね。

両の手には先ほど折られた刀の刀身と、半分となったもう片方の刀。腕をくん、と反るようにしてから前へと振うと同時に半分の刀身が手から離れ、風車の如く投げられる。

まるで忍者が投げる手裏剣だ。

ひゅん、と高速で回転する刃が千景の顔面目がけて飛来する。

初めて目にする攻撃に戸惑いながらも、千景は大鎌でその刀身を弾いて見せた。

「——ぐうッ!!」

攻撃を弾いて防いだはずの千景の表情が苦痛に歪む。

否、攻撃は防げてはいなかった。痛みがする足元へ視線を向ければ、千景の白い肌に赤い線が走りそこからツ、と液体が流れている。

本部が投げた刀身は一本だけではなかった。

一投目、千景が顔面へ迫る刀身に注意が向いた後、すぐさま二投目を放ったのだ。そ

れが千景の大腿部を切り裂いたのである。

「え……なんで、足から血が出て——」

しかし、2投目の刀身が投げられたことに気付いていない千景は自身の脚が負傷している理由が分からない。

さほど深くないにしろ、自分の身体から血が流れている事実には驚愕し、動きを止めた。

その視線誘導から生まれた一秒にも満たない時間は本部が開いた距離を消すには充分なモノだった。

「ほらっよ」

本部が迫り、いつの間にか手に握られていた鎖を千景の顔へと投げつける。

蜘蛛の巣のように広がった鎖が千景の顔を覆うように巻き付くと視界を奪った。

両の手で握っていた鎌の片手で鎖を取ろうとする動作を見逃さない本部は鎌をもつ片腕を掴むと、人間が手首を返すことのできる限界、その可動域まで振じる。

視界を塞がれた千景は突如として起こった激痛に抗うことも出来ずに思わず鎌を手放した。

「し、しまった——」

からん、と音を立てて落ちた鎌を探る千景だったが鎖が急に動き出し、急激に後方へと引つ張られた。

強引に、首に巻き付いた鎖を引く本部が千景を引き摺りながら移動する。

「あ……ぐう……ツツ」

気道が狭まり、息苦しさから身を振って抜け出そうとするが既に首を一周するように巻かれ、締め上げる鎖が千景の動きを阻害し、更に呼吸を辛くさせる。

本部に背中を合わせて、やがて背負われながら千景は人の背の肉のような柔らかさから無機質な硬さを持つ何かに変わったのを感じた

動きが止まった千景はやたらと眩しく感じる上へと目を向ける。
光を放つ電球が見えた。

（で、電柱……なんで）

「ツツ?!? ぐう、あああ……ツツ」

自分が電柱を背にしていることに気付いた千景だが、首の鎖が強烈に締め上げてくるのを感じ、思考を止めた。

「柔術家は剣術だけじゃない、武器全般に長けるんだぜお嬢ちゃん……俺は使えるモノはなんだって使うからよオ」

嘘ではない。

彼は本部以蔵、本部流柔術の開祖である彼は闘いにおいて、あらゆる武器を使用する。

剣だけではなく、それを納めている鞘で殴るし、折れた刀身を手裏剣のように投げた

りもする。

鎖だって、

煙幕だって、

石ころだって、

電柱だって、

あらゆるものを武器として扱う、環境利用闘法。

その気になればこの場所に存在する遊具さえも利用する。

ジャングルジムやその辺に生えている木も彼にとつては立派な武器だ。

武器の出所は無限にして扱いは変幻自在、それが本部以蔵である。

「ぐッ、ぐる、しい…っ!!」

「……安心しな、次第に楽になる」

千景の首を締め上げる鎖は緩むことがない。

まるで万力の如き力で氣道を狭めるそれは千景の意識を徐々に奪っていく。酸欠による失神が近いことを表わしていた。

（どうする!? 三好さんみたいにギリギリまで耐えて不意打ちツ!? でも本当に堕ちちやつたらツ!? 負けツ!? 救援、誰かに助けをツツ

スマホツツ 手が届かないツツ 鎖を引きちぎるツツ!? 敗北ツ 無価値な自分に戻るツ ダメツ 手が動かないツ —— みんなに見捨てられるツツ）

残された時間が少ない中で千景はあらゆる反撃の手段を脳内で模索する。

敗北がもたらす自身への不安と恐怖の合間に挟まれながら、あれこれと方法を導き出そうとして、敗北した自分を見捨てていく仲間の姿が脳裏を過った。

（……いやっ、それはいやっ）

千景の不安と恐怖が臨界に達し、爆発する。もう無価値な自分には戻らないと、勇者として戦果をあげるのだと誓ったのに。

自身を肯定させることが生き甲斐だったのに、それだけではないと教えてくれた他の時代の勇者たちと一緒に戦うと誓ったのに。

一度の敗北で誰かを蔑むような輩が勇者部にはいないことを千景は知っている。

しかし、幼少のころに何度も植え付けられた恐怖心が意識の底で残り続けて、その光景が幻想だと錯覚させる。

全身をこれまで以上に動かして、足で肘で本部の背を蹴りつけて脱出の機会を作り出そうと試みる。

しかし、全ては無駄であった。

人間の背にはもつとも筋肉が集中している。本部のような並ではない武闘家の鍛え抜かれた背筋に態勢の整っていない打撃は意味をなさなかった。

こすん、こすんと地味な肉を叩く音だけが虚しく響くだけであった。

(ごめん、なさい……みんな……高嶋、さん……)

ずるり、と千景の手が鎖から離れる。力なく腕が揺れては脱力したかのように全身が重くなったのを本部は感じた。意識を失ったのだろう。

「悪かったなお嬢ちゃん、大人気ねえことしちまつてよオ……勝負あり——」

その宣言をしようとした本部は青ざめた。文字通りだ。

本部の目の前に、千景がいたのだ。

「……」

「~~~~~ツツツツ!!??」

思わず自身の目を疑った本部は背に居る千景を見て、それが現実なのだと思いきらされることになる。

それは一人ではなかった。

大鎌を持った千景は六人いる。今自分の背にいる千景を含めれば七人だ。

七人の千景がその場に存在し、六人の千景が本部を取り囲むように大鎌を構えていた。

「なッ、なんじゃこりやアツツ!？」

思わず叫び、本部は困惑する。自分は平常のはずだと。

ドリアンのように幻覚を見せられているわけではない。かといって、この少女が六人に増えたと考えるのはどうなのか。

あり得るとするなら――、

「勇者……そうかい、そいつが精霊の力ってやつかッ」

仕入れている情報から、勇者は全員に戦いをサポートする精霊がいることは知っていた。

恐らく、その精霊の力を使って自身を分身、もしくは増殖させたのだろう。

「まづ……」

もし自分を囲んでいる千景が本物で、その大鎌の攻撃が通るものならば、勇者のように跳ぶ手段も持っていない本部にそれを避ける術はない。

「…負けない負けない負けない、絶対、戻らない、負けない負けない負けない」

背後で呪詛のように言葉を吐く千景に本部は寒気を覚える。

同時に六人の千景が動き出すと同時――。

チャキ、と六つの刃先がぎらついて本部目掛けて振り下ろされた。

「ツツツ」

無念。

と、本部が心の中で覚悟を決めた時。

千景の武器、大葉刈が本部に届くことは無かった。

刃が本部に刺さろうとした瞬間、鎌の刃は光となつて霧散していったのだ。

そして気づけば囲むようにいた六人の千景も、いつのまにか姿を消していたのである。

その場には勇者としての装束から普通の制服姿へと戻っていた千景だけが残っていた。

「いったい、何が起きたってんだ……」

鎖を外して電柱を背に崩れ落ちた千景の意識は完全に断たれていた。気絶してるだけである。

そして本部は知らない。知らないはずなのである。

郡千景のもつ、精霊のその能力を。

七人御先。

郡千景の持つ精霊、その能力は本物の自分を七人へと増やす。

そしてこの精霊の力を使用しているものは一人倒されてもすぐに増え、必ず七人に戻る。

倒し方は七人の千景を同時に倒すことだ。そうしない限り、七人の千景は永遠にその場に存在し続ける。

本来ならば同時に倒さなければ消えない七人御先が消失したのは何故か。

使用者である千景の勇者の力は神樹のもつデータベースとリンクしている。

しかし、本体である千景が気絶したことによって神樹とのリンクが切れてしまい、勇者システムは解除。同時に展開していた七人御先の力も自動的に消滅したのである。

本部以蔵の生来の「運」が勝利をもたらしたと言っても過言ではないだろう。だがこの戦いは「運」によって左右されただけの戦いだった。

もし千景が最後まで意識を保っていたならば、

もし七人御先の大鎌が本部を切り裂いていたならば、

「負けて、ただらうなア……」

恐ろしい事である。

これほどまでの力を持つ切り札を有していたことに本部は戦慄した。

一人の少女が持つには危険すぎる。あまりにも。

「神様も人が悪いぜエ……ガキにこんな事やらせやがつて——つて、人でもねえか」

幼き少女たちが命を懸けて戦わなければならないという非現実な状況に何も思わな
いほど、本部は馬鹿ではない。

だが神が人を頼らざるを得ない彼女たち、勇者の存在する世界を本部はとやかく言う
道理はない。

あらゆる不条理が蔓延る彼女たちの世界には、選択肢などなく、戦うことを強いられ
る。

そうしなければ世界が滅んでしまうから。

そうしなければ大切なモノが守れないから。

彼女たち勇者の存在を、本部は「勇ましい」と思った。しかし同時に「悲しい」とも
思った。

自分が彼女たちの親だとしたら、神々の為に、人類の為に戦う御役目を担った彼女た
ちを送り出せるだろうか。

愛する者もない、独り身の本部には考えを巡らすもその答えを出すことは出来なかった。

「フム……脈はある」

少女、郡千景は単純に気絶しているだけである。

腕の手首に手を当てて小さく鼓動を感じたのは彼女が死なず、生きている証拠だ。自身が与えた太ももの傷を清潔なガーゼと布で巻いて止血を施す。

少しばかり血が滲んだが、止血は完全になされている。大事に至ることは無いだろう。

ふう、と千景の容態が落ち着いたことに安堵の息を吐いた本部はその場から去ろうとして――、

「よオ……」

「~~~~~ツツツ
!!!??」

背後からの「聞きなれた」声に、条件反射で足を止めてしまった。

その声は耳にいただけで、本部の全身の筋肉を硬直させるほどに強張らせる。

「弱い物イジメはイケねえなア……」

優しく紡がれる言葉は、ねっとりどだが、はち切れんばかりの「圧力」を宿したものであった。

まるで大蛇の舌が背後から本部の背中を舐め上げているかのような、そんな圧力を感じる。

（アレ!?!ちよつとオ、これってもしかして———デジャヴツツツ!!!??）

深夜、公園で、そして背後から。

奇しくも本部は過去に同じシチュエーションで同じ人物と遭遇するという経験をしていた。

意を決した本部はぐるん、と振り返るとともに男の「見慣れた顔」をその目に映した。見慣れた顔、それはまさしく鬼であり、地上最強の生物——。

「なあ、本部エ……?」

「ゆ、勇次郎オオオオオオオオオオオオツツツ!!!」

悪魔のような笑みをギラつかせて現れた悪魔、範馬勇次郎へ本部は過去と同じ怒号を放っていた。

薄暗く、闇が濃くなる公園の男を外灯の光が照らしだし、野獣の如き白い歯を光らせながら勇次郎は告げる。

本部以蔵が想像もしえなかつた言葉を。

「はア——俺の女なんだぜ?」